

広島大学
心理学研究

第18号

Hiroshima Psychological Research

No.18

広島大学大学院教育学研究科
心理学講座

Department of Psychology, Graduate School of Education,
Hiroshima University

2018

目 次

【論 文】

1. 福井亜由美・岡本祐子 1
児童期の異文化接触に伴う民族アイデンティティの発達
—サードカルチャーキッズの日本人青年の分析—
2. 福井亜由美・岡本祐子 21
児童期の異文化接触に伴う日本人サードカルチャーキッズの民族アイデンティティの発達
プロセス
3. 神原広平・吉良悠吾・尾形明子 45
高校生の抑うつを長期的に予測する認知行動的要因の予備的検討
4. 岡本祐子・新田啓 55
大学生の仮想的有能感が援助要請スタイルに与える影響
5. 上野山莉加・岡本祐子 67
青年における境界例心性と母子イメージ及び内的対象像との関連
6. 三木あかね・中島健一郎 91
非意識的過程と意識的過程の関係についての検討
—評価者と対象の類似度に着目して—
7. 福留広大・森永康子 107
自尊感情の2因子と2種類の自己愛の関連性

8.	橋本淳也・渡邊洋一・宮谷真人・中尾敬	127
	ポジティブ記憶の無意図的想起と潜在的感情の関連	
9.	重松潤・尾形明子・伊藤義徳	135
	認知行動療法と「腑に落ちる理解」	
10.	松本美涼・藤原裕弥・尾形明子	149
	スピーチ場面における社交不安者の注意が不安に及ぼす影響	
11.	田中光・山根嵩史・中條和光	157
	レポート作成における読み手を意識した文章作成方略使用尺度の開発	
12.	廣瀬春香・服巻豊・尾形明子	175
	大学生の困難課題解決のための努力維持要因の検討	
	【資料】	
13.	森永康子・船田紗緒里・小川葵・野中りょう・矢吹圭・董星宇	189
	ポジティブ・ステレオタイプのもたらすネガティブな効果 —Siy & Cheryan (2016) の追試—	

児童期の異文化接触に伴う民族アイデンティティの発達

—サードカルチャーキッズの日本人青年の分析—

福井亜由美・岡本祐子

The effect of cross-cultural experience during school-age to ethnic identity development:
Analysis of Japanese Adult Third Culture Kids

Ayumi Fukui and Yuko Okamoto

The experience of transferring from one culture to another during childhood can represent a crisis of identity for some individuals. “Third Culture Kids” are children who grew up outside their parents’ culture during their developmental years, leading them to develop a third cultural perspective. Previous studies have reported that the experience of transferring to different culture is often accompanied by identity-related difficulties. Ethnic identity is an aspect of collective identity that plays a particularly important role among members of cultural minority groups. Stable ethnic identity can help members of cultural minorities form identities and maintain stable mental health. Family relationships also play an important role in identity. The current study had two main aims: (1) examining the relationships between ethnic identity, identity scale scores, general health questionnaire scores, and background factors, and (2) examining family relationships among people in Japan who experienced a cross-cultural transition during school age. The results revealed two important characteristics for adaptation and the development of identity: experiencing cross-cultural transition during early school age (6-12 years old) affect ethnic identity development as Japanese, and stable environment, including family relationships, and having a concept of ethnic identity from early childhood.

キーワード : ethnic identity, TCK, Japanese, school-age.

問 題

発達途上のうちに両親の国以外に滞在し、母国や滞在国のものとは異なる視点や文化を身につけた者をサードカルチャーキッズ (Third Culture Kids; Pollock & Van Reken, 1999 ; 以下 TCK) と呼ぶ。Erikson (1964) は、異文化へ移動する者に生じる心理的状态を「根こぎ感」と呼び、そのアイデンティティの感覚の脆弱性について述べている。一時的にせよ、掘って立つ大地を失い根無し草となることが基本的な安定感を揺るがすため (河合・藤縄, 1980), 母国と異なる文化へと移動することで行われる異文化接触は、幼児期の分離—個体化の過程で経験する喪失を再体験する可能性がある。

この体験から精神疾患様症状を表出した事例も報告されている（江淵，1982；延島，1963など）。

異文化への適応に成功すれば異文化適応となるが、失敗すればカルチャーショックとして異文化接触の体験がなされる。病的に扱われがちなカルチャーショック（Oberg, 1960）だが、Adler（1975）はカルチャーショックを新しい文化の学習と個人の人間の成長という視点から捉え、異文化理解だけでなく自己理解の深化とそれに基づく変容をもたらす学習経験と捉えた。Kim（1976）は異文化接触を「新しい文化を学習し、そこに適応していく過程はライフサイクルを再び始めるようなもの」であり、「誕生に始まり、各発達段階を得るという人生周期の収縮版」であると述べている。Morschauer & Chescheir（1982）も、留学や転勤などの移住者に対して、新しい土地に適応していくためのライフサイクルを繰り返すような教育治療的枠組みを示している。

日本は島国で、大多数が比較的安定した文化的・民族的な構造内でマジョリティのため、新しい文化に適応しにくいと言われている（中根，1972；近藤，1981）。フランスで11年間海外邦人を対象に見た精神科臨床の累計結果から、海外渡航自体が持つ心理面へのリスクが推察されている（鈴木・立見・太田，1997）。母国を離れて新たな文化に接触することでアイデンティティが危ぶまれる報告も多数なされている（Erikson, 1959；渋沢，1993など）。こうした問題を踏まえ、異文化間カウンセリングの必要性や（白土，2004）、多文化間メンタルヘルスの必要性が指摘されるなど（阿部，2001）、異文化接触者の心理的サポートが注目されている。異文化接触によって精神科を受診しているのは実勢の1/3程度であるという知見や（鈴木他，1997）、2016年に海外在留邦人が133万人を超えたことから（外務大臣領事局政策課，2017）、今後ますます需要が増えることが予測される。このことから、異文化接触者の精神的健康に関する研究は必要であると考えられる。

植松（2015）は異文化とアイデンティティの問題を、集団アイデンティティと個のアイデンティティの視点から考察することを提案し、文化的マイノリティ青年にとって重要な集団アイデンティティは民族アイデンティティであるとしている。Phinney（1992）が開発した多民族アイデンティティ尺度（Multigroup Ethnic Identity Measure；以下MEIM）を用いた研究から、民族アイデンティティと異文化適応は深い関連があることが明らかにされている（Mendelberg, 1986；Parham & Helms, 1985；Phinney, 1991；Phinney, Lochner, & Murphy, 1990；Yasui, Dorham, & Dishion, 2004；Phinney, Jacoby, & Silver, 2007；Yip & Fuligni, 2002；Lee & Yoo, 2004；Ong, Phinney, & Denis, 2006）。

文化間移動は子どもの発達課題の順序に影響を及ぼすと言われており（McDonald, 2010）、それにより困難を抱える可能性もあるという（Pollock & Van Reken, 1999）。特に児童期は、「集団内で自分を差別化してユニークな自分を表出するというよりは、集団との同一化を図りながら、個人のアイデンティティが構築される時期」（塘・廿日出・小澤・鈴木，2008）である。その様な時期に複数の文化、言語を習得することは、早くから一つの文化では適応できない現実があることに気づかされ（LaFromboise, Coleman, & Gerton, 1993）、自身を差別化してユニークな自分を表出する体験を思春期よりも早く行うこととなる（渋沢，1993）。また、社会的に良しとされる行動が、環境が変わることで変化し、自身の中の道徳が不安定となることも実験により示されている（LeTender, 2000）。

異文化接触者を考察する際に重要な概念として、文化的アイデンティティがある。これは、特定の環境に住む集団において共有されている多側面に渡る意味空間を内的に取り込み、自身の行動を

動機づけるものである(箕浦, 2003)。箕浦(2003)は、文化的アイデンティティを築く期間として9～15歳が最も重要であると推定しており、15歳以降に異文化接触を行っても、すぐに異国の文化文法に染まることはないという。必要に迫られて外見上の行動のみが変化することはあっても、情動や認知という深い部分は母文化に親しみを感じるのである。

文化的アイデンティティを保有することは心理的な幸福感に繋がることが報告されているが(LaFromboise et al., 1993)、多文化的環境で育った者は、所属する文化に関するアイデンティティを保有することに困難さを抱くことが指摘されている(Hogg & Mullin, 1999; Sussman, 2000, Vivero & Jenkins, 1999)。異文化接触は、新しい環境に馴染もうと文化変容に努めて新たなアイデンティティを構築することであり(Hogg & Mullin, 1999; Phinney, 1990; Ryder, Alden, & Paulhus, 2000)、移動する個人が一つの文化的アイデンティティを保有することは難しい(Sussman, 2000)。多文化的環境で育った者は多文化を内的に保有するため(Hoersting & Jenkins, 2011)、どの文化にも調和するようなアイデンティティを形成し(Benet-Martinez, 2000)、アイデンティティに組み込まれた複数文化(Hong, Morris, Chiu, & Benet-Martinez, 2000)を文脈に沿って視点を切り替えるため(Ryder et al., 2000)、どの文化を自己とするべきか混乱を示す場合もある(Vivero & Jenkins, 1999)。このような第3の文化を身につけたTCKは、どの文化に対しても、受け入れられている、所属していると感じられず、代々続く民族アイデンティティを伝えて適所(Erikson, 1959)を探し求めて葛藤する(山本, 1984)。このことから、文化的に混乱する可能性の高い複雑な背景を持つ青年にとって民族アイデンティティが重要になると考えられる。

TCKの背景は実に多様で、滞在国(朴, 2011)や、学校形態(江淵, 1983, 2002; 岩崎, 2008)を含む環境(山口, 2007)など、同じ帰国生というジャンルでも背景要因によって差別化が重要である(渋谷, 2000)。これらの点を踏まえ、本研究では、多文化的背景を持つ日本人TCKの民族アイデンティティに焦点を当てることとする。両親とも日本人で、国籍が日本のTCKのみを対象とするため、複数文化に関わりがあっても軸は日本となることが予測される。そこで、対象者の民族アイデンティティが、日本と滞在国との文化を経験したことでどのように揺さぶられ、築かれるのかを調査することを目的とする。

集団アイデンティティの獲得には家族との関係が重要である(橋本・西川・河野, 1991)。Jacobson(1964)は、集団アイデンティティの問題を有する青年に見られる特徴として、自己愛的な態度、情緒の不安定さ、その時々環境によって意見が流動的となるような価値観の非一貫性を報告している。こうした問題は、子供の二次的集団に所属することを親が妨害している場合が多いと考えられている(Jacobson, 1964; Phinney & Nakayama, 1991; Downie & Koestner, 2004)。Nathanson & Marcenko(1995)は、子どもが異文化接触の際に健康的に過ごすためには、家族が最も重要な役割を果たすことを報告している。渋谷(1993)は精神療法を必要とする帰国生の共通点として、文化的葛藤に加え、それぞれの発達段階の課題達成に必要な個人の内的資源と家族のサポートの欠如を挙げている。アメリカの異文化接触経験がある子どもや青年と、異文化接触経験のない子どもや青年の家族関係について調査した研究において、異文化接触のない群の方が家族仲が親密であったことが報告されている(Gerner, Perry, Moselle, & Archbold, 1992)。このことから、異文化接触が行われ

ている場合の家族関係は、そうでない家族と質が異なることが推察される。異文化接触者の精神的健康を保つためには家族等の環境サポートが必要不可欠であると考え、本研究でも家族がサポート源として機能しているか考慮することとする。

以上より、本研究は日本人がアイデンティティ確立前の児童期に異文化接触をした経験が個人の民族アイデンティティ発達にどう影響するか、彼らの背景要因ごとに検討することを目的とする。

研究 I

目的

本研究は、幼児期から思春期の間異文化接触を経験した日本人帰国生の民族アイデンティティ、アイデンティティ、精神的健康の関連性を検討することを目的とした。仮説として以下5つを設定した。(1) 海外生活体験がない者より、異文化に滞在していた者の方が民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高くなる、(2) 民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高い者ほどアイデンティティの達成度も高い。(3) 民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高い者ほど精神的健康の達成度が高い。また、滞在先での要因も重要な変数となることが予測されるため、(4) 日本から物理的に遠い環境にいた者ほど民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高い、そして (5) 長く海外に滞在していた者ほど民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高い。

方法

調査対象者 帰国生が多い私立中高一貫校の中学3年生以上と、帰国生が多い私立大学に通う学生、254名。国内群として、海外滞在歴のない、本人も両親も日本国籍を有している112名。帰国生群として、15歳までに1年以上の異文化接触経験があり、帰国後1年以上経過している124名。危機的体験後に出来事を内的に統合する「心の統合期間」(大塚, 1992)が1年以上必要であることから、民族アイデンティティについても整理する時間が一定期間必要であると予測し、異文化の滞在歴と帰国後の年数が共に1年以上である者を対象とした。また、アイデンティティ調査の多くが15歳以上を対象としていることから、15歳の学生が多く存在する中学3年生以上を対象とした。

質問紙 (1) MEIM (Multigroup Ethnic Identity Measure ; Phinney, 1992 ; Roberts, Phinney, Masse, Chen, Roberts, & Romero, 1999) を参考に邦訳された10項目4件法(植松, 2010)。(2) 多次元自我同一性尺度 (MEIS ; 谷, 2001) 20項目7件法。(3) General Health Questionnaire 12項目日本語版 (GHQ ; Goldberg, 1971 ; 中川・大坊, 1985)。(4) フェイスシートは回答者が本研究の対象者となるかを定めるべく以下の質問項目を設定した。年齢、性別、回答者の国籍、回答者両親の国籍、現在までの移動歴。そして、面接調査への参加可否について尋ねた。

私立中高一貫校では担任からホームルームにて質問紙を配布してもらい、後日回収したものを筆者に郵送してもらった。私立大学では授業時間内に筆者が配布、回収を行った。

調査時期 2018年5月1日～6月13日。

分析ソフト 分析ソフト HAD。データ管理と分析のため MacBook Air と、acerV246HL を使用した。

結果

各尺度の因子構造と信頼性を検討した。MEIM は 10 項目 ($CFI=.881$, $RMSEA=.106$, $AIC=136.435$, $BIC=203.419$), MEIS は 20 項目 ($CFI=.933$, $RMSEA=.083$, $AIC=458.752$, $BIC=718.447$), GHQ は 12 項目 ($CFI=.822$, $RMSEA=.107$, $AIC=230.854$, $BIC=273.063$) を採用することとした。

国内群より帰国生群の MEIM が高くなるという第 1 の仮説を検証するため、MEIM 合計点を目的変数に、帰国生群と国内群の対応のない t 検定を行った。その結果、 $t(248) = .722$ で有意差は見られなかった (Figure 1)。

帰国生群の MEIM 得点が高いほど、アイデンティティの達成度が低くなるという第 2 の仮説を検証するため、帰国生群の MEIM 合計点と MEIS 合計点の相関分析を実施した。結果、 $p < .10$ で有意傾向が示された。有意傾向が示されたことから、MEIM 合計点を従属変数に MEIS 合計点との回帰分析を実施した (Table 1)。結果、 $\beta = -.729$, $p < .05$, $R^2 = .023$ で、有意傾向が見受けられた。よって、仮説 2 を支持する可能性が示唆された。

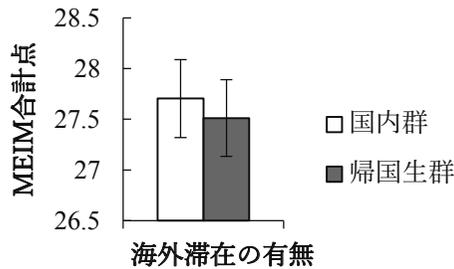


Figure 1. 国内群と帰国生群の MEIM 合計得点

Table 1

帰国生群の MEIM 合計点が MEIS 合計点に与える影響 (単回帰分析)

変数名	MEISsum
MEIMsum	-.151 +
R^2	.023 +

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

帰国生群の MEIM 得点が高いほど精神的健康も高くなるという第 3 の仮説を検証するため、MEIM 合計点と GHQ 合計点の相関分析を実施した。有意な結果は見られず、仮説 3 は支持されなかった。

背景要因によって MEIM 得点が変わるという第 4 の仮説を検証するため、MEIM 合計点と、滞在していた国、通っていた学校形態の相関分析を実施した。結果、有意な差は見られなかった。滞在期間によって MEIM 得点が変わるという第 5 の仮説を検証するため、MEIM 合計点と滞在年数、滞在時期との相関分析を実施した (Table 2)。滞在時期は 0-5 歳を [幼児期]、6-12 歳を [児童期]、13-

18歳を〔思春期〕とした。その結果、海外に長く住んでいた者ほどMEIM合計点が低くなり、特に〔児童期〕に長く海外滞在していた者ほどMEIM合計点が低くなることが示された。そこで、MEIM合計点を目的変数に、滞在年数と〔児童期〕の滞在年数の重回帰分析を実施した（Table 3）。結果、 $R^2=.056$ で、滞在年数は $\beta=-.177$, $p>.10$ であり、児童期は $\beta=-.193$, $p=.403$ で有意な結果は見受けられなかった。第4の仮説は支持されず、第5の仮説に関しては仮説と反対の結果が示された。

Table 2

帰国生群のMEIM合計点と滞在年数・滞在時期の相関分析

	MEIM合計点
滞在年数	-.225 *
幼児期	-.089
児童期	-.214 *
思春期	-.035

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 3

帰国生群のMEIM合計点が滞在年数と児童期滞在年数に与える影響（重回帰分析）

変数名	MEIMsum
滞在年数	-.148
児童期	-.107
R^2	.056 *

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考 察

海外滞在歴と民族アイデンティティの関係

国内群よりも帰国生群のMEIM得点が高くなるという第1の仮説を検証するため行ったt検定の結果（Figure 1）、有意な差は見られなかった。また、海外に長く滞在していた者ほどMEIM得点が高くなるという第4の仮説検証のために実施した相関分析の結果（Table 2）、海外に長く住むほどMEIM合計点が低くなるという仮説と逆の結果が示された。児童期は、集団との同一化を行う時期であり、その時期に海外へ滞在した者は、海外文化にて社会化を達成していた可能性が推察される（箕浦, 1980）。その結果、日本人としての民族アイデンティティが発達しにくかったことが予想される。実際、帰国後にカルチャーショックを経験した帰国生の事例も報告されており（小澤, 2000）、帰国生、あるいは外国人として日本人との差別化が行われた可能性が考えられる。

帰国生の民族アイデンティティとアイデンティティの関係

民族アイデンティティの確立度合いが高い者ほどアイデンティティも安定しているという第2の仮説を検討するために実施した、帰国生群のMEIM合計点とMEIS合計点の相関分析の結果（Table 1）、有意傾向が示された。重回帰分析からもMEIMがMEISに与える影響が示唆された。帰国生の

アイデンティティにとって民族アイデンティティは重要な要素である可能性が推察される。しかし、結果が有意傾向であったことから今後さらなる検討が必要である。

帰国生の民族アイデンティティと精神的健康の関係

民族アイデンティティの確立度が高い者ほど精神的健康も安定しているという第3の仮説を検討するために実施した、帰国生群のMEIM合計点とGHQ合計点の相関分析の結果、有意な結果は示されなかった。本研究の対象者は、海外滞在歴と帰国後の年数が共に1年以上の、両親が日本人の日本国籍を保有する日本人帰国生とした。そのため、帰国後の年数を統制しておらず、対象者の中には帰国後10年以上経過している者も含まれる。そのような対象者にとって、精神的健康の安定に民族アイデンティティはそれほど重要でないとも考えられる。

帰国生の民族アイデンティティと滞在先での要因との関係

第5の仮説を検討するため実施したMEIM合計点と滞在していた国や学校形態の相関分析の結果（Table 3）、相関は見られなかった。このことから、滞在していた国や学校形態そのものが民族アイデンティティに与える影響する可能性は示されなかった。

研究 I のまとめ

研究 I では、アイデンティティを構築する思春期以前に異文化接触した経験を持つ日本人帰国生を対象に民族アイデンティティに影響する要因を調べるべく、アイデンティティ、精神的健康、海外滞在の背景的要因との関連を数量的に検討した。その結果、児童期に海外滞在している場合は日本人としての民族アイデンティティが保有されにくいことが示された。日本人としての民族アイデンティティが構築されるためには、海外滞在時期が重要な要因となることが示された。児童期は社会化に重要な時期であり、そのような時期に海外へ渡ると滞在先で社会化がなされるためである。

今後の課題として、対象者の帰国後の年数を統制することが挙げられる。本研究では、帰国生のアイデンティティにとって民族アイデンティティが重要な要素となることも示唆されたが、あくまでも結果が有意傾向であった。また、先行研究にて関連が示された精神的健康との間に有意差が見られなかった。これは、帰国後1年しか経過していない者から10年以上経過している帰国生徒の差別化を行っていないことが影響していると考えられる。

研究 II

目的

研究 II では、民族アイデンティティと家族関係の良好さとの関連性について検討することを目的とした。マイノリティ青年が民族アイデンティティを獲得するためには親の存在が重要であり（Jacobson, 1964 ; Phinney & Nakayama, 1991）、子どもの二次的集団への所属を親が妨害することによりアイデンティティの問題が生じる事例も報告されている（Defontaine, 1991 ; 渋沢, 1993）。このことから、家族関係と対象者の民族アイデンティティには関連があると考え、家族関係が良好な者ほど民族アイデンティティの達成度が高いと予測した。渋沢（1993）に倣い、本研究ではKFDを用いて対象者の家族の関係性を検討した。

方 法

対象者 研究 I と同様の対象者 207 名。帰国生群 99 名，国内群 108 名。

質問紙 (1) MEIM (Phinney, 1992 ; Roberts et al., 1999) を参考に邦訳された 10 項目 4 件法 (植松, 2010), (2) MEIS (谷, 2001) 20 項目 7 件法, (3) GHQ (Goldberg, 1972 ; 中川・大坊, 1985), (4) 研究 I と同様のフェイスシート, (5) Kinetic-Family-Drawing (KFD: 動的家族描画法; Burns & Kaufman, 1970)。KFD は「あなたを含むあなたの家族全員が何かしているところを描いてください」と教示し，注意として「①棒人間ではない完全な人間を描いてください，②誰か (年齢も) 教えてください，③それぞれの人が何をしているところかも説明をお願いします，④鉛筆を使ってください。ペンなどで色は塗らないでください，※上手下手を見るものではありません。自由に描いてください」と記述した。そして，教示文を載せた紙とは別の白紙ページに KFD を描いてもらった。

調査時期 2018 年 5 月 1 日～6 月 13 日。研究 I と同時に配布を行った。

分析ソフト 分析ソフトとして HAD, データ管理と分析のため MacBook Air と acerV246HL を使用。

結 果

描画内容の検討

各描画における特徴を次の項目でまとめた。顔が描かれている成員が笑顔である [笑顔]，グッドイナフ人物画知能検査の得点を表す [グッドイナフ]，父親の描写に不穏な点がある [Fa 不穏]，母親の描写に不穏な点がある [Mo 不穏]，自分の描写に不穏な点がある [自分不穏]。なお，[笑顔] が多いほど得点は高くなる。グッドイナフ人物画知能検査は，得点が低くなるほど発達に遅れがあるという判断がなされる。本研究においても，グッドイナフ検査より逸脱している描画ほど [グッドイナフ] が低くなる。そして，不穏な点として，描画法においてマイナスであることが多いとされる項目の含まれた描写を採用した (後ろ向き，囲まれている，主な成員から著しく離れている，水回りにいる，刃物を持っている)。

MEIM, MEIS, GHQ の合計点，海外経験の有無と，先に述べた描画における特徴の相関を検討するべく相関分析を実施した (Table 4)。MEIM 合計点と [笑顔] に相関が見られた。MEIS 合計点とは [笑顔] に負の，[自分不穏] に正の有意差が示され，[Fa 不穏] に有意傾向が示された。GHQ 合計点とは [笑顔] と [自分不穏] に有意差が見られた。海外経験と [グッドイナフ] に有意差が示された。そして [Fa 不穏]，[Mo 不穏]，[自分不穏] との間に有意差が示された。

Table 4

KFD の特徴と各尺度との相関分析

	MEIM合計点	MEIS合計点	GHQ合計点	海外経験	Fa不穏	Mo不穏
笑顔	.197 **	-.168 *	-.172 *	.032		
グッドイナフ	.025	.060	.019	.146 *		
Fa不穏	-.050	.136 †	.068	.037		
Mo不穏	.004	.088	.073	.045	.469 **	
自分不穏	-.072	.172 *	.140 *	.019	.466 **	.352 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

海外滞在歴の合計年数、各発達段階における海外滞在年数、描画における特徴との相関分析を実施した。0-5歳 [幼児期]、6-12歳 [児童期]、13-18歳 [思春期] とした (Table 5)。[知能] と海外滞在歴合計との間に有意差が示され、[Mo不穩] と [児童期] の間に有意傾向が示された。

Table 5
KFD の特徴と海外滞在時期との相関分析

	笑顔	知能	Fa不穩	Mo不穩	自分不穩
海外滞在歴合計	-.006	.118 ⁺	.089	.102	.058
幼児期	.052	.105	.060	.045	.075
児童期	.011	.112	.059	.120 ⁺	.022
思春期	-.047	.028	.012	-.023	-.018

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

印象の分析

描画法は、同じような絵でも描画者の背景要因や、微妙な違いなどによって解釈が全く異なることがあるため (高橋・高橋, 1986), 描かれている内容だけでなく描画の印象も検討することとした。大和田・阪 (2007) の KFD 印象評定尺度 (34 項目 7 件法で, [安定・統合性], [活動・表出生], [親密生] の 3 因子) を用い, 筆者と心理臨床学コースに所属する院生 2 名で評定を行なった。

評定された 34 項目の因子構造と信頼性を検討し, [安定・統合性] 7 項目, [活動・表出生] 9 項目, [親密生] 10 項目が採用された (Appendix 4)。評定者別に α 係数を求めたところ, 十分な信頼性が確認された ([安定・統合性] .74~.86, [活動・表出生] .83~.90, [親密生] .87~.92)。

各項目の評定値は, 評定者 3 名による評定値の平均値とした。各因子の評定値は, 得点が高いほど [安定・統合性], [活動・表出生], [親密生] が高いことを示す。帰国生群と国内群の評定値に差が見られるか検討するため t 検定を実施した。結果, どの因子にも有意な差は見られなかった。

KFD 印象評定尺度の各因子の得点を投入して階層的クラスタ分析 (ウォード法) を実施した。デンドログラムを参考に, クラスタ数を 5 に設定したところ, 以下のクラスタが生成された (Figure 2)。見受けられる特徴から (Table 6), クラスタ 1 を [環境不安定群], クラスタ 2 を [全低群], クラスタ 3 を [平均群], クラスタ 4 を [安定群], クラスタ 5 を [全高群] と命名した。

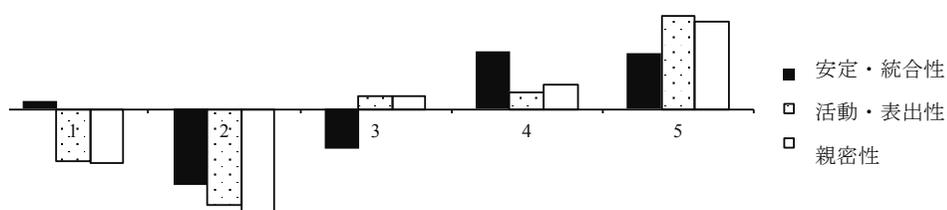


Figure 2. KFD 印象評定尺度の階層的クラスタ分析 (5 クラスタ)

Table 6
各クラスタの名前と特徴

クラスタの名前	推察される特徴
クラスタ1 環境不安定群	家族仲などの環境が不安定な中で、エネルギーは乏しいものの、コントロールする自我などの力は有していることが推察される。
クラスタ2 全低群	[安定・統合性]，[活動・表出性]，[親密性]の3因子とも低く、環境の不安定さや自我の不健康さが特徴であると考えられる。
クラスタ3 平均群	環境は比較的安定的であり、ややエネルギーに乏しい印象は受けるものの、比較的落ち着いたKFDを描く力を有している。
クラスタ4 安定群	[活動・表出性]，[親密性]が平均的，[安定・統合性]が高い。環境は安定的で、活発ではないが家族との交流もあると考えられる
クラスタ5 全高群	[安定・統合性]，[活動・表出性]，[親密性]の3因子とも高く、家族仲も安定しており、健康的な自我を有していると考えられる。

背景要因からクラスタごとの特徴が見られるかを検討するため、それぞれのクラスタに所属する帰国生群と国内群の数を検討した (Table 7)。結果、海外経験の有無による特徴は見られなかった。

Table 7
クラスタと海外経験の有無のクロス表

クラスタ	海外経験		合計 (人)
	国内群	帰国生群	
環境不安定群	14	14	28
全低群	12	17	29
平均群	36	30	66
安定群	30	26	56
全高群	12	16	28
合計	104	103	207

帰国生群に限り、何らかの特徴がクラスタごとに見られるか検討するべく、海外滞在歴を目的変数として分散分析を実施した (Figure 3)。結果、環境不安定群と全低群 ($p<.05$)、環境不安定群と安定群の間に有意差 ($p<.05$) が見られた。このことから、環境不安定群は海外滞在歴が長い帰国生が多く、全低群と安定群には海外滞在歴が比較的短い帰国生が分類されていることが考えられる。

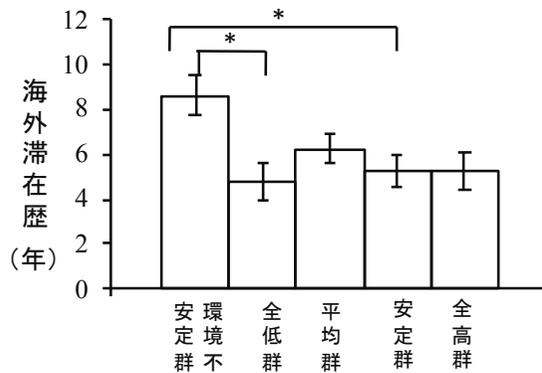


Figure 3. 帰国生群におけるクラスタと海外滞在歴の分散分析

滞在時期においてもクラスタ間で差が見られるか検討するため、各時期の滞在年数を目的変数として分散分析を実施した (Figure 4)。結果、幼児期と思春期の滞在歴で有意差は見られなかった。児童期の滞在歴では、環境不安定群と全低群、全低群と平均群の間で有意差が見られた ($p < 0.05$)。全低群に分類された帰国生は、環境不安定群と平均群よりも児童期の海外滞在歴が短いと考えられる。

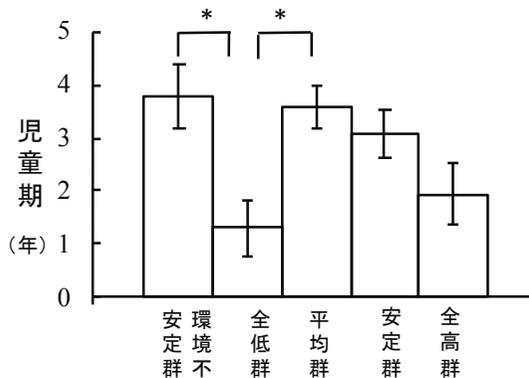


Figure 4. 帰国生群におけるクラスタと児童期の滞在年数の分散分析

各クラスタが民族アイデンティティ、アイデンティティ、精神的健康において特徴を示すか検討するべく、MEIM, MEIS, GHQ それぞれの平均点を目的変数に設定して分散分析を実施した。結果、MEIM 平均点と MEIS 平均点はどのクラスタにも有意差は見られなかった。しかし、GHQ 平均点においては環境不安定群と平均群、全低群と不安定群に有意差 ($p < 0.05$) が見られた。平均群に所属する帰国生は、環境不安定群と全低群に比べて有意に精神的健康が高いと考えられる (Figure 5)。

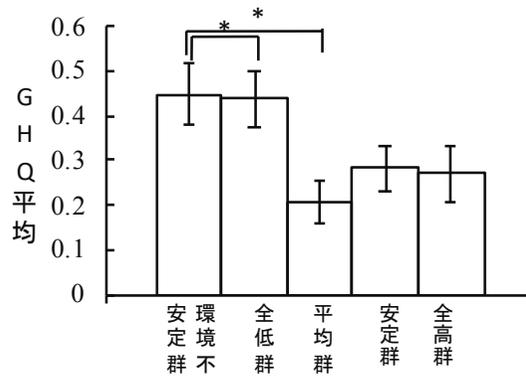


Figure 5. 帰国生群におけるクラスタと GHQ 平均点の分散分析

最後に、先に検討した描画内容の分析の結果によってクラスタの特徴が分かれるか検討するため、帰国生群のみを対象に相関分析を実施した (Table 8)。その結果、全低群において成員が [笑顔] である負の相関が有意に高かった ($p < .01$)。また、全高群において [笑顔] が正の相関で有意に高く ($p < .01$)、[Fa 不穏] の反応も有意に少ないことが示された ($p < .05$)。

Table 8

帰国生群における各クラスタと描画内容の相関分析

	笑顔	Fa不穏	Mo不穏	自分不穏
環境不安定群	-0.046	0.0757	0.0436	0.049
全低群	-.393 **	.102	-.007	.166
平均群	.004	-.120	.100	-.033
安定群	.127	-.112	-.178 +	-.189 +
全高群	.502 **	-.238 *	-.157	-.186 +

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

以上の結果から推察される各クラスタの帰国生群の特徴を Table 9 にまとめる。

Table 9

クラスタごとに想定される帰国生群の特徴

クラスタの特徴	推察される尺度的特徴
環境不安定群	<ul style="list-style-type: none"> ・家族仲などの環境が不安定な中で、エネルギーは乏しいものの、コントロールする自我などの力は有していることが推察される ・海外滞在歴が長い ・児童期の海外滞在歴が長い ・精神的健康度が低い
全低群	<ul style="list-style-type: none"> ・環境の不安定さや自我の不健康さが特徴であると考えられる ・海外滞在歴が短い ・児童期の海外滞在歴が短い ・精神的健康度が低い ・家族仲が悪い傾向
平均群	<ul style="list-style-type: none"> ・環境は比較的安定的で、ややエネルギーに乏しい印象は受けるものの、比較的落ち着いたKFDを描く力を有している ・児童期の海外滞在歴が長い ・精神的健康度が高い
安定群	<ul style="list-style-type: none"> ・環境は安定的で、活発ではないものの家族との交流もある ・海外滞在歴が短い
全高群	<ul style="list-style-type: none"> ・家族仲も安定しており、健康的な自我を有していると考えられる ・父親を含め、家族仲が良い傾向

考 察

研究Ⅱでは、主に家族関係の視点から KFD の特徴と背景要因との関連を検討した。

家族仲が民族アイデンティティと心の安定に及ぼす影響

描画内容と各尺度の相関分析の結果 (Table 4)、民族アイデンティティの達成度が高い者ほど描写されている成員が笑顔であることが多かった。Jacobson (1964) や Phinney & Nakayama (1991) にて、異文化接触を経験した子どもが二次的集団に適應できるかどうかは親との関係が重要であることが示されているが、本研究においても同様の結果が示された。家族関係が良好なほど民族アイデンティティが安定して構築されやすいと考える。また、同分析の結果、アイデンティティの達成度と精神的健康が高いほど [笑顔] の描画が多く、低いほど [自分不穩] が多かった ($p<.05$)。平田・比嘉 (2014) は家族満足度の高い群がポジティブな表情を多く描くことを報告しており、本研究でも同様の結果が反映されたと考える。安定的なアイデンティティ、精神的健康を有しているほど、家族仲が良く、その結果として民族アイデンティティが安定しやすくなることが予測される。

環境不安定群と平均群は、どちらも児童期の海外滞在歴が長い (Table 9)。しかし環境不安定群は

精神的健康が低く、平均群は精神的健康が高いことが示された (Figure 5)。KFD より推察される 2 群の大きな違いとして、家族成員間の交流の乏しさが挙げられる。環境不安定群の KFD では成員間の関わりが乏しく、平均群では比較的安定した交流が描かれていた。同様に、全低群と安定群はどちらも海外滞在歴が短いものの、描かれている KFD には大きな違いがあり、これは家族仲の違いによる影響を大きく受けていることが推察される。最も安定的な KFD を描いた全高群には、海外滞在歴、海外滞在時期に関する背景要因から推察できる特徴は見受けられなかったことから、様々な背景を持つ帰国生が分類されているのではないかと考えられる。以上より、海外滞在の有無、滞在時期、滞在年数に関わらず、心の安定には家族仲の良さが重要であることが示された。

各クラスと民族アイデンティティ、アイデンティティ、精神的健康の分散分析の結果、GHQ 平均点においてのみ有意差が示された (Figure 5)。これは、精神的健康が家族関係というアイデンティティ発達の土台と深く関連していることが影響していると考えられる。家族関係という三者関係以上の中で葛藤を十分に味わうことでその後のアイデンティティ発達に必要な側面が発見されるようになる (橋本他, 1999)。家族関係に問題を有している場合、集団アイデンティティを含め、様々な問題へと発展しうる。その家族関係という土台と最も関連が深い精神的健康が、今回の分散分析にて有意差が生じたものと考えられる。

児童期の海外滞在と母子の関係・家族との関係

描画内容と滞在時期の相関分析の結果 (Table 5)、有意傾向ではあったものの、[児童期] の海外滞在歴が長いほど [Mo 不穩] が多かった。研究 I より、[児童期] に長く海外へ滞在していた場合は日本人としての民族アイデンティティが確立しにくくなることが示された。母親が子どもの二次的集団への所属を妨害した事例 (Defontaine, 1991 ; 渋沢, 1993) や、新しい文化に適応しやすい時期が 15 歳までであるとした箕浦 (2003) から、両親は子どもより異文化適応が困難であると考えられる。箕浦 (1980) も「親は仮住まい、子は本住まい」と異国暮らしの捉え方が親子で異なることを表現している。夫婦間でも異文化接触に関する違いが報告されており、女性は男性と異なる特徴を持つことを示している (Piper & French, 2011)。本研究の対象者の母親は、夫の転勤について行っていることが多いことが推察される。酒井 (2013) は、母親や妻の抱く葛藤は夫や親族をはじめとして、周囲と共有されにくいことを報告している。父親は転勤後も会社という居場所があるが、母親は家族以外に知り合いのいないことが多い。このような背景要因が合間って、[児童期] に長く海外へ滞在していた場合ほど [Mo 不穩] が多く描かれたことが推察される。

[Fa 不穩], [Mo 不穩], [自分不穩] 間に相関が見られた (Table 5)。家族内で機能不全等のトラブルが生じた場合、家族全体に影響を及ぼすことが示唆された。特に異文化接触は、それまで滞在していた場所との関係性を喪失し、連続した関係が家族のみとなる場合が多い。家族外とのつながりが薄くなりやすい中で、トラブルが家族全体に影響を及ぼすことは容易に想像できるだろう。

海外滞在が発達段階に与える影響

描画内容と各尺度との相関分析の結果、国内群よりも帰国生の [グッドイナフ] が低く、帰国生群の発達の遅れが推察された (Table 4)。Erikson (1964) は異文化接触を危機であると説明しており、子どもの頃の文化間移動は発達段階に影響を及ぼすことも指摘されている (Pollock & Van Reken,

1999)。本結果からも、子どもの頃の異文化接触経験が発達に影響を及ぼす可能性が窺える。しかし、文化ごとの描画スキルが影響している可能性も考えられる。Freeman (1980) は、文化圏によって子どもが好んで描くパターンや形が異なることを報告している。進藤 (2013) は「通常の描画発達に要する前提条件は、ある程度の描画経験を持つことや他者の描画に接することが求められる」と述べている。日本は漫画やアニメが浸透しており、幼い頃から絵を描いて遊ぶ子どもが多いため、巧みな人物画を描く者が多い可能性が推察される。この点に関して、今後検討が必要であると考えられる。

研究Ⅱのまとめ

研究Ⅱでは、家族仲と民族アイデンティティとの関連について検討した。結果、異文化接触の長さや時期に関わらず、家族仲が良いほど民族アイデンティティは安定しやすく、アイデンティティと精神的健康も安定しやすくなることが示された。また、社会化に重要とされている児童期に長く海外へ異文化接触することで、新しい環境に馴染めない母親との関係性に不和が生じる可能性も示唆された。子どもだけでなく家族全体をサポートする大切さが示唆された。

総合考察

全体の考察

本研究は、思春期以前に1年以上海外へ滞在した経験を持つ帰国生を対象に、民族アイデンティティの視点から研究を行なった。量的調査を行なった研究Ⅰからは、2つの考察がなされた。第1に、児童期に異文化接触を行うと日本人としての民族アイデンティティが発達しにくくなることが示唆された。児童期とは、周りの同年代と同じであることに安心感を覚える時期であり、社会化に重要な時期である。そのような時期に長く海外へ住むことで、外国人としてのアイデンティティとなる糧が構築されやすいことがこの結果に影響していると考えられる。第2に、帰国生のアイデンティティ発達のために民族アイデンティティが重要な要因となることが示唆された。国籍が日本で、両親が日本人である以上、思春期以降にアイデンティティを達成していくためには日本人としての民族アイデンティティは切っても切り離せない側面なのであろう。

家族関係に関する視点から考察を行った研究Ⅱより、家族仲の良さが子どものアイデンティティ等の安定に重要であることが先行研究同様に示された。そのような家族においては、日本人としての民族アイデンティティも構築されやすくなると考えられる。しかし、児童期に長く海外へ滞在した帰国生は、母親との関係性が悪くなりやすいことも推察された。異文化に適応していく柔軟性は、大人よりも子どもの方が高い。父親の転勤により異文化接触が行われている場合、父親には会社に居場所があるが、母親は所属するコミュニティが家族しかない場合が多い。児童期に長く海外へ住むと外国人として社会化がなされやすいことが研究Ⅰより示されたが、新しい文化に馴染めない母親がそのような子どもをありのまま受け入れられないことは容易に想像がつく。そのような背景が影響してか、児童期に長く海外へ滞在している者は、母親を不穏に描写する傾向が高かった。

以上の結果から、日本においても先行研究と同様に、児童期という社会化に重要な時期に異文化接触という危機的な体験をする際は、適応的に成長するために家族や周囲のサポートを含む、安定した環境が重要となることが示された。

本研究で得られた知見は、児童期の子どもがいる家族が海外へ移動する場合、事前に心理教育を行う際に有用である。心理教育の案として、児童期の異文化接触がアイデンティティの混乱に繋がりがやすい体験であること、マイノリティ青年にとって民族アイデンティティが重要であることを伝え、両親は子どもが適応していくためにどうすれば良いかという視点から子どもをサポートすることが大切であると伝える。また、子どもより成人の適応に時間がかかることから、両親の苦労も弱い家族全体をサポートすることが大切であろう。

今後の課題

今後は対象者の帰国後の年数を統制する必要があると考える。帰国後の年数によって、日本に適応していく際の民族アイデンティティの重要性が異なることが考えられるためである。本研究では、帰国生のアイデンティティ発達に民族アイデンティティが重要となる可能性が示唆された。しかし、結果はあくまでも有意傾向であり、精神的健康度との関連も示されなかった。

引用文献

- 阿部 祐 (2001) . 多文化間メンタルヘルスの動向と実践 順天堂大学 スポーツ健康科学研究, 5, 1-7.
- Adler, P.S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 4, 13-23.
- Burns, R.C., & Kaufman, S.H. (1970). *Kinetic family drawings (K-F-D): An introduction to understanding children through kinetic drawings*. Runner/ Mazel.
- Defontaine, J. (1991). Awaiting identity. *Revue Francaise de Psychanalyse*, 55(6), 1771-1777.
- Downie, M., & Koestner, R. (2004, June). The centrality of heritage acceptance in the daily interactions of tricultural individuals. Paper presented at the 65th Annual Convention for the Canadian Psychological Association, St. John's, Newfoundland, Canada.
- 江淵一公 (1983) . 子供達の異文化接触 小林哲也(編著) 異文化に育つ子供たち 有斐閣選書 p.2-28
- 江淵一公 (2002) . バイカルチュラリズムの研究-異文化適応の比較民族誌- 九州大学出版会
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and Lifecycle*. New York: Norton. (小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子 (訳) (1973). 自我同一性-アイデンティティとライフサイクル- 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1964). *Insight and responsibility*. New York: Norton. (鐘幹八郎 (訳) (2018) 洞察と責任 [改訳版]: 精神分析の臨床と倫理 誠信書房)
- Freeman, N.H. (1980). *Strategies of representation in young children*. London: Academic Press.
- 外務大臣領事局政策課編 (2017) . 海外在留邦人数調査統計 平成 19 年度最新版 国立印刷局
- Gerner, M., Perry, F., Moselle, M.A., & Archbold, M. (1992). Characteristics of internationally mobile adolescents. *Journal of School Psychology*, 30, 197-214.
- Goldberg, D.P. (1972). *The Detection of Psychiatric Illness by Questionnaire*. London: Oxford University Press.
- 平田幹夫・比嘉紀枝 (2014) . 小学生の家族満足度と動的家族描画 (KFD) の検討 琉球大学教育学

- 部教育実践総合センター紀要, 21, 155-161.
- Hoersting, R.C., & Jenkins, S.R. (2011). No place to call home: Cultural homelessness, self-esteem and cross-cultural identities. *International Journal of Intercultural Relations*, 35(1), 17-30.
- Hogg, M.A., & Mullin, B.A. (1999). Joining groups to reduce uncertainty: Subjective uncertainty reduction and group identification. In D. Abrams, & M.A. Hogg (Eds.), *Social identity and social cognition* (pp.179-249). Oxford, UK: Blackwell.
- Hong, Y.Y., Morris, M.W., Chiu, C.Y., & Benet-Martinez, V. (2000). Multicultural minds: A dynamic constructivist approach to culture and cognition. *American Psychologist*, 7, 709-720.
- 岩崎未来 (2008) . インターナショナルスクール選択者の文化習得に関する一考察—シンガポールに暮らす日本人一時滞在者の事例を通して— 御茶ノ水女子大学グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」公募研究成果論文集, 57-63.
- Jacobson, E. (1964). *The self and The Object World*. New York: International Universities Press. (伊藤洗 (訳) . (1981) . 自己と対象世界—アイデンティティの起源とその展開— 現代精神分析双書 6, 小此木啓吾, 西園昌久監修, 誠信書房, 東京) .
- 河合隼雄・藤縄真理子 (1980) . 在外日本人の適応・不適応についての臨床心理学的調査 星野 命 (編) 現代のエスプリ 161:カルチャーショック 至文堂
- Kim, H.A. (1976). Transplantation of psychiatrists from foreign cultures. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis*, 4(1), 105-112.
- 近藤 祐 (1981) . カルチャー・ショックの心理—異文化と付き合うために— 大阪: 創元社.
- LaFromboise, T., Coleman, H., & Gerton, J. (1993). Psychological impact of biculturalism: Evidence and theory. *Psychological Bulletin*, 114, 395-412.
- Lee, R.M., & Yoo, H.C. (2004). Structure and measurement of ethnic identity for Asian American college students. *Journal of Counseling Psychology*, 51, 263-269.
- LeTender, G.K. (2000). *Learning to be adolescent: Growing up in U.S. and Japanese middle schools*. New Haven, CT: Yale University Press.
- McCaig, N.M. (1996). Understanding global nomads. In C. Smith (Ed.), *Strangers at home* (pp.99-120). New York: Aletheia Press.
- McDonald, K.E. (2010). Transculturals: Identifying the Invisible Minority. *Journal of Multicultural Counseling Development*, 38(1), 38-50.
- Mendelberg, H. (1986). Identity conflict in Mexican-American adolescents. *Adolescence*, 21, 215-222.
- 箕浦康子 (1980) . 親と子の異文化体験 サイコロジー, 11, 60-65.
- 箕浦康子 (2003) . 子供の異文化体験 増補改訂版. 新思索社.
- Morschauer, E.J., & Chescheir, M.W. (1982). Identity and community relocation. *Social Casework*, 63(9), 554-560.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985) . 日本語版 GHQ 精神健康度調査手引き 日本文化科学社.
- 中根千枝 (1972) . 適応の条件—日本的連続の思考— 東京: 講談社現代新書.

- Nathanson, J.Z., & Marcenko, M. (1995). Young adolescents & adjustment to the experience of relocating overseas. *International Journal of Intercultural Relations*, 19, 413-424.
- 延島信也 (1963) . 離人症症状を持つ一混血女子の精神療法的研究—特に national identity と identifications conflict の問題をめぐって— 精神分析研究, 10, 5-19.
- Oberg, K. (1960). Culture shock: Adjustment to new cultural environment. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.
- Ong, A.D., Phinney, J.S., & Denis, J. (2006). Competence under challenge: Exploring the protective influence of parental support and ethnic identity in Latino college students. *Journal of Adolescence*, 29, 961-979.
- 大塚芳子 (1992) . 帰国直後の不適応 臨床心理学体系第 10 卷. 安香 宏・小川健之・空井健三 (編) 金子書房, pp.139-152.
- 大和田攝子・阪 永子 (2007) . 動的家族がにおける被虐待児の描画特徴：印象評定を用いた分析 神戸松蔭女子学院大学研究紀要人文科学・自然科学篇, 48, 1-15.
- 小澤理恵子 (2000) . 異文化間移動に伴う青年期のアイデンティティの危機の内容の分析 日本教育心理学会総会発表論文集, 42, 26.
- Parham, T., & Helms, J. (1985). Relation of racial identity attitudes to self-actualization and affective states of Black students. *Journal of Counseling Psychology*, 32, 431-440.
- 朴 エスター (2011) . 韓国の帰国生の学校生活におけるストレスと滞在国による差異 人間文化創成科学論集, 14, 107-116.
- Phinney, J.S. (1990). Ethnic identity in adolescents and adults: review of research. *Psychological Bulletin*, 108, 499-514.
- Phinney, J.S. (1991). Ethnic identity and self-esteem: A review and integration. *Hispanic Journal of Behavioral Sciences*, 13, 193-208.
- Phinney, J.S. (1992). The multigroup ethnic identity measure: A new scale for use with diverse groups. *Journal of Adolescent Research*, 7, 156-176.
- Phinney, J.S., Jacoby, B., & Silver, C. (2007). Positive intergroup attitudes: The role of ethnic identity. *International Journal of Behavioral Development*, 31, 478-490.
- Phinney, J.S., Lochner, B., & Murphy, R. (1990). Ethnic identity development and psychological adjustment in adolescence. In A. Stiffman & L. Davis (Eds.), *Ethnic issues in adolescent mental health* (pp.53-72). Newbury Park, CA: Sage.
- Phinney, J.S., & Nakayama, S. (1991). *Parental influences on ethnic identity formation in minority adolescents*. Paper presented at the biennial meeting of the Society for Research in Child Development, Seattle, WA.
- Piper, N., & French, A. (2011). *Do Women Benefit from Migration?: An Editorial Introduction*. *Diversities*, 13(1), UNESCO.
- Pollock, D.C., & Van Reken, R. (1999). *Third culture kids: The experience of growing up among worlds*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Pollock, D.C., & Van Reken, R. (2001). *Third culture kids: The experience of growing up among worlds*.

- Yarmouth, ME: Nicholas Brealey/ Intercultural Press.
- Roberts, E.R., Phinney, J.S., Masse, L.C., Chen, Y.R., Roberts, C.R., & Romero, A. (1999). The Structure of ethnic identity of young adolescents from diverse ethnocultural groups. *Journal of Early Adolescence*, 19, 301-322.
- Ryder, A.G., Alden, L.E., & Paulhus, D.L. (2000). Is acculturation unidimensional or bidimensional? A head-to-head comparison in the prediction of personality, self-identity, and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 49-65.
- 酒井千絵 (2013) . 上海の多文化家族—中国人配偶者と上海で暮らす日本人女性を中心に— 関西大学社会学部紀要, 45(1), 47-72.
- 渋沢田鶴子 (1993) . 異文化とアイデンティティ—帰国子女の症例をとおして— 精神分析研究, 37(1), 114-120.
- 渋谷真樹 (2000) . マイノリティ集団内部の多様性と力関係—帰国子女教育学級に在籍する「帰国生」らしくない「帰国生」に着目して— 御茶ノ水女子大学ジェンダー教育センター年報, 3, 149-162.
- 進藤将敏 (2013) . 幼児における描画発達研究の概観と展望 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62(1), 217-234.
- 白土 悟 (2004) . 異文化間カウンセリングの今日的課題 異文化間教育, 20, 4-10.
- Sussman, N.M. (2000). The dynamic nature of cultural identity throughout cultural transitions: Why home is not so sweet. *Personality and Social Psychology Review*, 4, 355-373.
- 鈴木 満・立見康彦・太田博昭 (編) (1997) . 法人海外渡航者の精神保健対策—欧米地域を中心とした活動の記録— 東京: 信山社
- 高橋雅春・高橋依子 (1986) . 樹木画テスト 文教書院
- 谷 冬彦 (2001) . 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—教育心理学研究, 49, 265-273.
- 塘 利枝子・廿日出里見・小澤理恵子・鈴木一代 (2008) . 文化間移動とアイデンティティ形成—生涯発達の視点から (自主シンポジウム H6) — 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集 (pp.S144-145) .
- 植松晃子 (2008) . 異文化における心理的サポートについての理論的考察—新たなパラダイムの提案— お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学論業, 11, 175-182.
- 植松晃子 (2010) . 異文化環境における民族アイデンティティの役割—集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係— パーソナリティ研究, 19(1), 25-37.
- 植松晃子 (2015) . 異文化接触における民族アイデンティティの役割—自我アイデンティティとの関連から— 風間書房
- Vivero, V.N., & Jenkins, S.R. (1999). The existential hazards of the multicultural individual: Defining and understanding “cultural homelessness”. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 5, 6-26.
- 山口悠希子 (2007) . ドイツで育った日本人青年たちの日本語学習経験—海外に暮らしながら日本

語を学ぶ意味— 阪大日本語研究, 19, 129-159.

山本 力 (1984) . アイデンティティ理論との対話—Erikson における同一性概念の展望— 鐘 幹
八郎・山本 力・宮下 一博 (編著) アイデンティティ研究の展望I ナカニシヤ出版, pp.9-38.

Yasui, M., Durham, C.L., & Dishion, T.J. (2004). Ethnic identity and psychological adjustment: A validity
analysis for European American and African American Adolescents. *Journal of Adolescent Research, 19*,
807-825.

Yip, T., & Fuligni, A.J. (2002). Daily variation in ethnic identity, ethnic behaviors, and psychological well
being among American adolescents of Chinese descent. *Child Development, 73*, 1557-1572.

児童期の異文化接触に伴う日本人サードカルチャーキッズの 民族アイデンティティの発達プロセス

福井亜由美・岡本祐子

The process of ethnic identity development of Japanese Third Culture Kids
experienced cross-cultural transition during school-age

Ayumi Fukui and Yuko Okamoto

The experience of transferring from one culture to another during childhood can represent a crisis of identity for some individuals. “Third Culture Kids” are children who grew up outside their parents’ culture during their developmental years, leading them to develop a third cultural perspective. Previous studies have reported that the experience of transferring to different culture is often accompanied by identity-related difficulties. Ethnic identity is an aspect of collective identity that plays a particularly important role among members of cultural minority groups. Stable ethnic identity can help members of cultural minorities form identities and maintain stable mental health. Family relationships also play an important role in identity. The main aim of the current study is to discuss the developmental process of ethnic identity among people in Japan who experienced a cross-cultural transition during school age. The results revealed two important characteristics for adaptation and the development of identity: a stable environment, including family relationships, and having a concept of ethnic identity from early childhood. The current findings suggested that cross-cultural experience may affect the order of developmental stages. Since cross-cultural experience involves a difference between the self and others, children in ethnic minorities may differentiate themselves from other children before adolescence while living in a host culture, and may identify with other third culture kids after returning to their home culture.

Key words : ethnic identity, TCK, Japanese, school-age, developmental process.

問 題

発達途上に両親の国から離れて育ち、母国でも滞在国のものでもない文化や視点を身につけた者をサードカルチャーキッズ (Third Culture Kids; Pollock & Van Reken, 1999; 以下 TCK) と呼ぶ。このような経験をすることにより、複数言語を習得する、一文化を超えた広い視野が身に付くなど、多

くの利点が生じる。一方で、母国を離れることでアイデンティティが危ぶまれるなど(Erikson, 1959; 渋沢, 1993 など), リスクも推察されている(鈴木・立見・太田, 1997)。特に発達途上の文化間移動は、福井・岡本(2018)で詳しく述べたように、子どもの発達課題の順序に影響を及ぼすため(McDonald, 2010), TCKは困難を抱える可能性がある(Pollock & Van Reken, 1999)。特に児童期は、「集団との同一化を図りながら、個人のアイデンティティが構築される時期」(塘・廿日出・小澤・鈴木, 2008)である。その様な時期に複数の文化、言語を習得することは、早くから一つの文化では適応できない現実があることに気づかされ(LaFromboise, Coleman, & Gerton, 1993), 自身を差別化してユニークな自分を表出する体験を思春期よりも早く行うこととなる(渋沢, 1993)。また、内的道徳が不安定になることも示されている(LeTender, 2000)。こうした問題を踏まえ、異文化間カウンセリングの必要性や(白土, 2004), 多文化間メンタルヘルスの必要性が指摘されるなど(阿部, 2001), 異文化接触者の心理的サポートが注目されている。

異文化接触者を考察する際に重要な概念として、文化的アイデンティティがある。これは、特定の環境に住む集団において共有される多側面に渡る意味空間を内的に取り込み、自身の行動を動機づけるものである(箕浦, 2003)。文化的アイデンティティを保有することは心理的な幸福感に繋がるが(LaFromboise et al., 1993), 多文化的環境で育った者は、所属する文化に関するアイデンティティを保有することに困難さを抱くことが指摘されている(Hogg & Mullin, 1999 など)。異文化接触は、新しい環境に馴染もうと文化変容に努めて新たなアイデンティティを構築することであり(Ryder, Alden, & Paulhus, 2000 など), 移動する個人が一つの文化的アイデンティティを保有することは難しい(Sussman, 2000)。多文化的環境で育った者は多文化を内的に保有するため(Hoersting & Jenkins, 2011), どの文化にも調和するアイデンティティを形成し、アイデンティティに組み込まれた複数文化(Hong, Morris, Chiu, & Benet-Martinez, 2000)を文脈に沿って視点を切り替えるため(Ryder et al., 2000), どの文化を自己とするべきか混乱を示す場合もある(Vivero & Jenkins, 1999)。

植松(2008)は異文化とアイデンティティの問題を、集団アイデンティティと個のアイデンティティの視点から考察することを提案し、文化的マイノリティ青年にとって重要な集団アイデンティティは民族アイデンティティであると述べている。異文化接触などによって複数の文化的アイデンティティを保有したTCKは、どの文化に対しても所属していると感じられず、代々続く民族アイデンティティを伝って適所(Erikson, 1959)を探し求めて葛藤する(山本, 1984)。文化的に混乱する可能性の高い複雑な背景を持つ青年にとって民族アイデンティティが重要になると考えられる。

TCKの背景は実に多様で、同じ帰国生でも背景要因によって差別化が重要である(渋谷, 2000)。本研究では、多文化的背景を持つ日本人TCKの民族アイデンティティに焦点を当てる。両親とも日本人で、国籍が日本のTCKのみを対象とするため、複数文化に関わりがあっても主軸は日本となることが予測される。そこで、対象者の民族アイデンティティが、日本と滞在国との文化を経験したことでどのように揺さぶられ、築かれるのかを調査することを目的とする。

目 的

本研究は、アイデンティティが構築される前段階である児童期(塘他, 2008)に異文化接触を体

験した日本人 TCK が、自身の民族アイデンティティをどのように意識し、その意識される民族アイデンティティの変容プロセスを、学校形態などの背景要因ごとに検討することを目的とした。

日本人大学生に面接調査を行った植松（2009）は、多文化的背景を持つ人との社会的、文化的な差異や、外見的特徴の違いを実感したことで彼らの民族アイデンティティが顕在化したことを報告している。しかし、本研究の対象者は自文化の影響を強く受ける前に異文化接触していることが推察されるため、違いを意識するだけでは肯定的な感情を抱いて探索行動をするまでに至らないと考えた。児童期とは本来他者との違いに敏感になり始める時期であるため、自身の民族を肯定的に捉えるためには滞在先の環境が重要となることが推察される。多文化的な環境で成長した者は自分と異なる文化的背景を有する者に偏見なく接しやすいことが明らかにされており（Phinney, Jacoby, & Silver, 2007）、滞在先でそのような人と関わっていたかは、自民族を肯定的に捉えるために重要な要因となる。また、福井・岡本（2018）より家族のサポートも重要となることが考えられるため、調査では家族を含む周囲の関わりについても検討した。本研究の対象者は異文化接触を出国時と帰国時で2回経験している（Gullahorn & Gullahorn, 1963）。帰国時のインパクトも聴取することで、今後増加が予測される帰国生を心理的にサポートする際に有用な知見が得られると考えた。そのため、帰国前後の心境についても詳しく検討した。

方 法

対象者 両親とも日本人で、15歳までに海外滞在歴がある、日本国籍を有した15歳～24歳の16名（男性3名、女性13名）。危機的体験後に出来事を内的に統合する「心の統合期間」（大塚, 1992）が1年以上を必要とすることから、個人の民族アイデンティティについても整理する時間が一定期間必要であると予測し、異文化への滞在歴と帰国後の年数が共に1年以上である者を対象とした。

手続き 1時間～2時間半の半構造化面接を実施した。

質問項目 家族構成、文化間移動の経緯、移動時の感想、滞在先と家族のサポート源を尋ねた上で、植松（2008）を参考に以下を質問した。（1）自分が日本人であると意識したか、どういう場面で意識したか。（2）日本や日本人であることに愛着・誇りはあるか、具体的にどのようなものか。本研究の対象者は児童期に異文化接触しているため、上記質問を出国時と帰国時の両方で尋ねた。

調査時期 2018年6月13日～9月20日。

分析手続き 荒川・安田・サトウ（2012）を参考に、以下の手順で分析を行った。（1）逐語記録から、具体的出来事に関する考えや行動、周囲の環境、日本人としての愛着・誇りに関する語りを抽出し、意味のまとまりごとに切片化した。（2）切片化した語りに見出しをつけ、対象者ごとに時間経過に沿って並べた。（3）対象者間で類似した見出しをまとめ、ラベルを生成した。ラベル名は【 】で示す。（4）これらを異文化接触してからの時間軸に沿って位置付け、TEM図を作成した。

Table 1

面接対象者の性別，職業，滞在時期・滞在国内・学校

	性別	職業	滞在時期・滞在国内・学校
A	女性	社会人	12-14歳フィリピン（インターナショナルスクール）
B	女性	高校生	1-4歳イタリア
			7-10歳南アフリカ（現地校，日本人学校）
C	女性	高校生	生-2歳半，3-13歳アメリカ（現地校）
D	女性	高校生	生まれ-1歳ドイツ
			1-7歳トルコ（日本人小学校）
			13-16歳ベルギー（日本人学校，インターナショナルスクール）
E	女性	高校生	12-17歳ポーランド（インターナショナルスクール）
F	女性	社会人	12-17歳アメリカ（現地校）
G	女性	大学生	10-18歳フィリピン（インターナショナルスクール）
H	女性	大学生	4-10歳，14-15歳アメリカ
I	女性	社会人	13-18歳カナダ（現地校）
J	男性	大学生	2-8歳シンガポール（インターナショナルスクール）
			12-14歳イギリス（現地校）
K	女性	大学生	8-16歳アメリカ在住（現地校）
L	女性	大学生	12-18歳中国在住（インターナショナルスクール）
M	男性	大学生	6ヶ月-4歳ペルー
			12-15歳ブラジル（インターナショナルスクール）
P	女性	大学生	生まれ-2歳オーストラリア
			6-9歳マレーシア（日本人学校）
			17-18歳イギリス（日本人学校）
R	男性	大学生	14-18歳ニュージーランドに留学（現地校）
S	女性	大学生	7-15歳アメリカ（現地校）

結果

TEM 図作成にあたり，民族アイデンティティ達成度を等至点 EFP とした。民族アイデンティティ達成度として，【日本人としての民族アイデンティティ確立】，【日本人でも外国人でもない民族アイデンティティ確立】，【帰国生としての民族アイデンティティ確立・拡散】，【外国人としての民族アイデンティティ確立】を設定した。図中ではスペースの都合によりアイデンティティを ID と表記している。次に分岐点 BFP と必須通過点の設定を行った。プロセスが分岐する指標として，(1) 学校選び（【日本人学校】，【現地校】，【インターナショナルスクール】），(2) 自分が日本人だと意識したかどうか（【意識する】，【意識しない】），(3) 異文化に適応したか（【適応】，【不適応】），(4) 帰国後日本に適応したか（【適応】，【不適応】）を設定した。必須通過点として，分岐点 (1) の学校選びと，帰国を設定した。インターナショナルスクールは，以下インターと記述する。

Table 2

帰国生に共通のプロセスを示す TEM 図における用語の説明

用語	意味
適応	友達もでき、ストレスの少ない状態で学校に通学できていること
不適応	友達と呼べる人がおらず、ストレス負荷の高い状態で通学している、あるいは通学していない状態のこと
家族・周囲のサポート	話を聞いてくれる家族や、友人の存在、あるいは実際に困った時に具体的対応を取ってくれる環境
家族の考え	経済面や、物理的な要因を考慮した、親・きょうだいの価値観・考え方のこと
言語の能力	コミュニケーションが取りづらいレベルの言語獲得度

16名の対象者に共通した TEM 図の作成

ラベルを生成した際、次の用語は以下の意味にて用いることとした (Table 2)。【適応】とは、友達もできており、ストレスの少ない状態で学校に通学できている状態のことを表す。【不適応】とは、友達と呼べる人がいない状態で、ストレス負荷の高い状態で通学している、あるいは通学していない状態のことを表す。【周囲のサポート】には、話を聞いてくれる家族や友人の存在が見られる語りや、実際に困った時に具体的対応を取ってくれる環境に関する語りをまとめた。【家族の考え】は、親の価値観や考え方に影響を受けた語りをまとめたラベルである。経済面などの物理的な要因を考慮したものも含まれる。また、親だけでなく兄弟姉妹の影響も含まれる。【言語の能力】は、十分なコミュニケーションを取れないほど、英語ないし日本語の獲得度が低いことを示す。

対象者 16 名に共通したラベルをまとめた TEM 図は以下の通りである (Figure 1)。以下小見出しごとに経過を説明する。ラベルは【 】で表す。各ラベルににおける語りの例は Table 3 に示す。

Table 3

Figure 1 の TEM 図における各ラベルの語り

ラベル	語りの例
日本との環境差を発見する	「(海外は)メイドさんがいるから家事は一切しなかった」 「日本に比べてあまり勉強をしない」
自分の知ってる言語や物に囲まれて安心する	「(日本人学校は)思い通りにコミュニケーション取れるし考え方がすごい同じ」
自分が日本人(外国人)だと意識する	「私の名前って日本語でどう書くの? って言われて、やっぱり自分は日本人なんだなって思った」

Table 3 (続き)

自分が日本人だと意識しない	「日本人としての意識はなかった」、「日本への誇りとかはない。そんなに好きじゃないというか、考えないようにしてるだけかも」
	「(日本人だなと意識したことは) ないです。パスポートくらい。(外国では) 見た目はちょっと違うなと思いましたけど、考え方と喋り方はほぼ一緒なので特に違うなって思ったことはないですね」
日本人代表として見られる	「私が例えば相手に嫌なことをしたら日本人が嫌な奴って思われちゃう」
	「韓国は反日だから、自分は日本人だから嫌われちゃうんじゃないかとか、悪いことしなくても日本人だから嫌われているんじゃないかってすごい不安に思っていた」
周囲のサポート	「お互いに理解しよう、伝えようっていう気持ちがある学校だった」 「同じ学年の隣のクラスに日本人の子がいて、その子が通訳してくれてようやく先生に色々伝えることができた」
一時帰国の際に帰国生として扱われる	「(一時帰国時に) 帰国生として扱われることが嫌だった。『英語喋って』とか面倒くさくて喋らなかった」
日本人視点から他国籍の人を学ぶ・考える	「勉強に対しての考え方が違った。その時にやっぱり自分は日本人なんだなって思った」
国代表でなく、個人として自分を捉える	「前面に出てた日本人アイデンティティが、私は私が出てきた(上回ってきた)」
日本人としてやっていけないという感覚	「青春時代が全部あっちだったので出来上がっていたもの(自分)が日本でも保てるかわからないし、日本で通用するのかわからない」 「私は日本人としてやっていけないんじゃないかって切り捨てていた。でも日本人として生まれたから日本人の血とは離れられない。自分の中のアイデンティティと日本人として生まれた自分っていうアイデンティティがうまく混ざり合うのかなって」
日本的な行動を期待される	「(アメリカで) 日本から来たって普通にいうと『なんでそんなに英語できるの?』って突っ込まれる。やっぱり見た目が日本人だと、日本人っぽさを求められる」
周りの日本人から違いを指摘される	「(制服の丈を) 2年生とか3年生はそんな長さで着るものじゃない、と言われた」
自分と日本人の考え方や行動の違いを認識	「一緒にトイレに行く文化が理解できなかった」
カルチャーショック・戸惑い	「自分が思ったようには受け入れてもらえないって感じた」
自分の中の日本人と外国人を使い分ける	「日本人の自分だと『普通謝るでしょ』って思うけど、アメリカ人の自分としては『まあそういうもんでしょ』って思った」
自分を外国人と捉える	「海外にいるときは日本人って感じだったんですが、日本に帰ってきたら私は外国人っていう感覚を持った。生活も違ったし、受け入れ態勢っていうか人間関係も違ったし、 「それまで邦楽ばかり聴いていたのが洋楽を聴くようになったり、日本語の本を英訳してみたり、英語に携わりたくなった」
葛藤	「本当にごちゃ混ぜになってるなって感じ。自分はこうですっていうものがなくて、ホワホワしている」
自分を日本人・帰国生だと捉える	「もともと日本人っていう認識から個人になったのが、そこからもう一回帰国生っていう縛りに入ったイメージ。一つの所属を見つけた」

Table 3 (続き)

表面上の行動を変化させる	「(定期テスト前に)勉強するものなんだって」
積極的に人と関わらない	「(大学)4年間一人でいいやって。今までずっと天候を繰り返してその度に新しい友達ができ、大学に入ったらそれが面倒というか、そろそろ別にいいかなって」
相手と比べて自分を捉える	「環境に応じてすごい変わる人だと思う。日本の社会全体で考えたら自分はやっぱり日本人。他校の人と比べると心が外国人とまではいかないけど半分ちょっと違うよねっていう感じ。ただ今の学校の中で行くと自分は日本人だなんて思います」
日本人としての民族アイデンティティ確立	「インターにいた時に自分は日本人だっていう気持ちが強くなって、帰国して他の帰国生を見て、さらに自分は日本人らしいって思うようになった」
日本人でも外国人でもないアイデンティティ確立	「人と同じで痛くないっていう感覚がすごく芽生えて。自分は日本人だけど心は違っていたい」
帰国生としてのアイデンティティ確立・喪失	「日本人の中のマイノリティっていう意識」 「(帰国後)自分より英語ができる人が何百人もいてプライドがなくなった」
自分の中の日本人と外国人が近づいていく	「(以前は日本人とアメリカ人の自分が)極端に離れていた。アメリカ人の自分と日本人の自分を見ているような第三者の自分もいた」「今は、日本のことをアメリカ人としても見れるし、アメリカのことを日本人としても見れる微妙な立場にいる」
私は私、これが私	「違和感は感じたけど、人と違っていいんだなって思えるようになった。逆に英語できるし人よりも知識を持っているから役立つ。違うけどまあいいかなって思えるようになった」

異文化接触から適応・不適応となるまで

【異文化接触】から TEM 図を作成した。【異文化接触】し、滞在先と【日本との環境差を発見する】ことで、再度日本文化に触れた時に【自分の知ってる言語や物に囲まれて安心する】感覚を抱くようになる。この体験を経て、自分が日本人であると意識するようになる。対象者の中には、自分が現地の人とは異なる外国人であると認識する者もいたため、ラベルは【自分が日本人(外国人)だと意識する】と命名した。しかし中には、体験した違いが文化差によるものであると考えない者や、違う土地に引っ越すのだから違いがあるのは当然という認識を有していることから、【日本との環境差を発見】しても【自分が日本人だと意識しない】者もいた。前者は異文化接触時の年齢が大きく影響していることが推察され、後者は様々な要因が影響していると考えられる。

【異文化接触】した対象者は、すぐに【学校選び】を行うこととなる。今回は TEM 図作成のため、【異文化接触】後として時系列順にまとめたが、海外へ引っ越す前に学校を決めている者もいた。本研究の対象者は児童期に転校しているため、【学校選び】に【家族の考え】が大きく影響している。本面接の対象者には、【日本人学校】、【インターナショナルスクール(以下、インター)】、【現地校】という選択肢があり、その中から通う学校を選ばなければならない。【日本人学校】を選択した対象者は、学校にて【自分の知ってる言語や物に囲まれて安心する】体験を経るが、日本人学校に通う生徒は皆日本人である。混血児童が在籍する場合もあるが、ほとんどの場合自身を日本人として捉

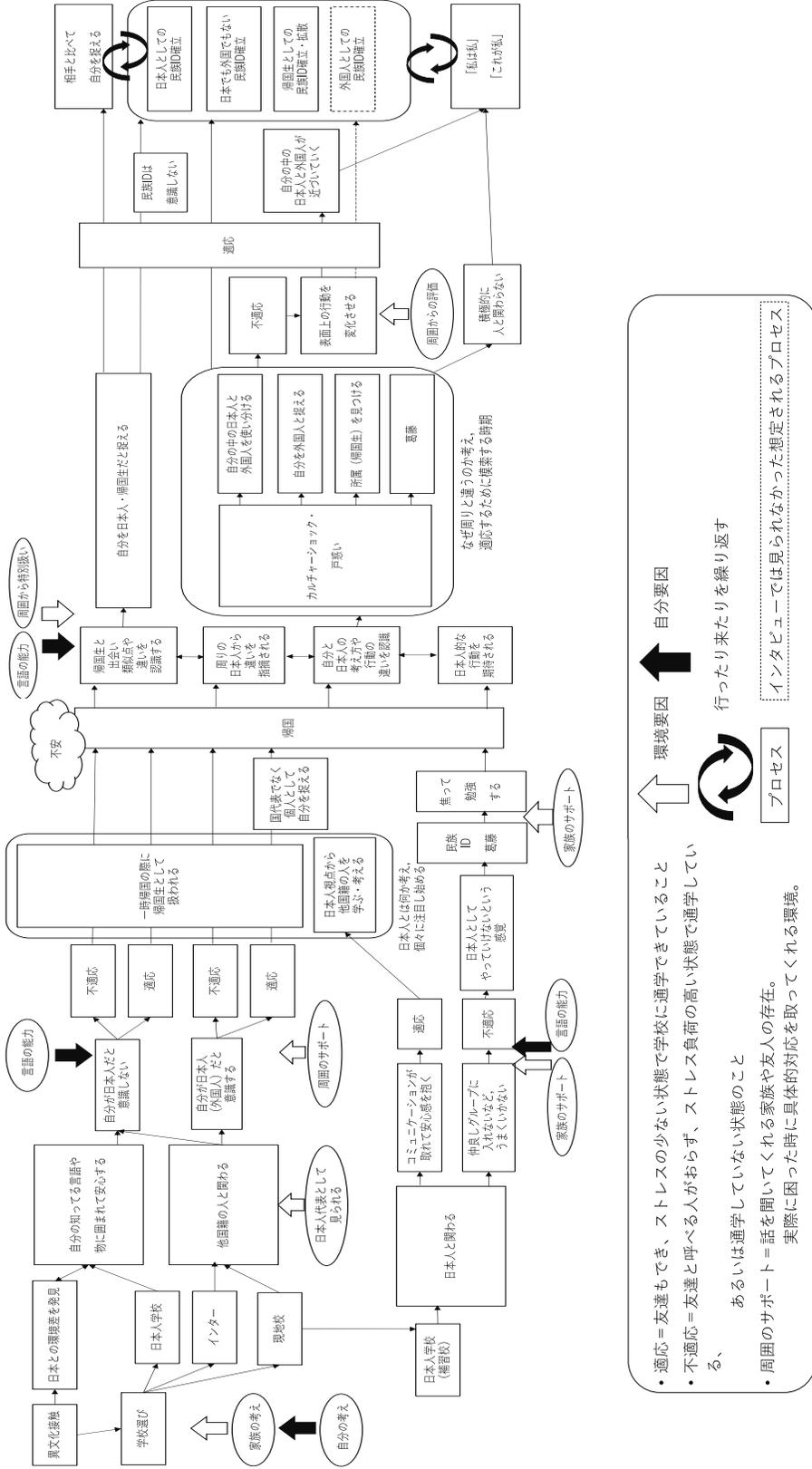


Figure 1. 帰国生が異文化接触から帰国後に民族アイデンティティを獲得する共通プロセス

えて文化化している。そのため、日本人学校に転校した者の多くは【自分が日本人だと意識しない】まま過ごす。【インター】、【現地校】を選択した者は、学校にて【他国籍の人と関わる】ため違いを体験し、【自分が日本人（外国人）だと意識する】。また、自分から意識するだけではなく、周囲から【日本人代表として見られる】ことによって自覚させられる場合もあった。しかし中には、現地の人と同一化することによって【自分が日本人だと意識しない】対象者も存在した。

学校への【適応】・【不適応】には、2つの要因が関連していることが窺えた。1つは【周囲のサポート】である。新しい環境に馴染めるよう周囲の協力が重要であることが示唆された。移動教室を教えてくれるクラスメイトや、わからないことを丁寧に教える先生が例としてあげられる。また【インター】、【現地校】を選択した場合、【言語の能力】が大きな要因となることが見受けられた。学校生活における主言語能力が不十分なまま転校すると、授業についていけず、わからないことを教えてもらうコミュニケーション能力も有していないため、孤独感を感じるといった発言が見られた。しかし、【言語の能力】によって【不適応】になりかけても、【周囲のサポート】によって【適応】していく対象者も見られ、英語が話せないため【不適応】になる、というわけではなかった。

【現地校】に通っていた対象者は、全員【補習校】に通っていた。補習校は、日本の政府が定めたカリキュラムを外国にいても受けられる制度を設けた塾のような学校である。【補習校】に在籍する多くの生徒は自身が日本人であることを自覚しており、必然的に【日本人と関わる】こととなる。現地校では言語の壁からコミュニケーションが思うように取れない対象者も、補習校では【コミュニケーションが取れて安心感を抱く】ため、補習校に【適応】していく。一方で、現地校に【適応】している者の多くは、補習校の【仲良しグループに入れられないなど、うまくいかない】ことが多い。そのため、【不適応】状態となることが見受けられた。補習校にて【不適応】となる要因の1つに【言語の能力】があげられる。日本語の方が苦手であると述べる対象者は、【補習校】の勉強についていくこと、同級生とコミュニケーションを取ることに困難を感じていた。そのような場合、【家族のサポート】が重要となることが示唆された。【補習校】の宿題を家族で協力して解く、あるいは愚痴を親に聞いてもらうなどにより【補習校】に通い続けることができた対象者もいた。一方で、家族から日本語能力が低いことを指摘され、より日本語への自信をなくして【補習校】へのネガティブ感情が高まる対象者も見られた。これらのことから、補習校に対して【不適応】となった場合は、日本文化を共有できる家族の肯定的なサポートが【適応】への重要な要因となることが窺えた。

一時帰国から本帰国するまでの海外滞在

海外滞在中、ほとんどの対象者が一時帰国を経験し、その際「英語喋れる？」などの質問を受ける経験をしていた。日本の友達から【一時帰国の際に帰国生として扱われる】ことで、日本人代表として過ごしてきた自分が、日本人からは特別扱いを受ける対象となる。多くの対象者はこの体験により、日本人とは違う自分を差別化するようになる。また、補習校に通っている場合、日本人視点から現地校の人について語る経験を経ることによって【日本人視点から他国籍の人を学ぶ・考える】ようになる。転校直後に感じた違和感を、同じ日本人海外生と共有することで整理していくのである。【一時帰国の際に帰国生として扱われる】ことと、【日本人視点から他国籍の人を学ぶ・考える】ことにより、国籍や文化差以外の部分にも注目していくようになっていく対象者が多かった。

そこで、この2ラベルを【日本人とは何か考え、個々に注目し始める】という大ラベルでまとめた。その後、【国代表でなく、個人として自分を捉える】ようになる対象者も見受けられた。しかしこの発話は児童期終盤で異文化接触している対象者から多く見受けられた。自分の現状をアイデンティティ視点から整理して考えるには、異文化接触時の年齢が影響していることが推察される。

一方、補習校にて不適応となった対象者は、【日本人としてやっていけないという感覚】を抱く。血筋やパスポートが日本人であるのに、そのような感覚を抱くことで【民族アイデンティティの葛藤】が生じる。その際、対象者から【家族のサポート】によって日本語能力を獲得していったことが語られた。ここでいう【家族のサポート】とは、あくまでも言語面に対してのみであり、情緒的サポートに関する発話は見られなかった。日本語を扱えるようになることで、徐々に【日本人としてやっていけないという感覚】が変化していったことが語られた。帰国が近づくと、彼らは【焦って勉強する】ようになり、帰国への準備をしていくこととなる。

帰国から適応・不適応となるまで

不安を感じながらも日本へ【帰国】する時期がやってくる。帰国後は周囲から【日本人的な行動を期待される】が、対象者はそれまでの行動様式で過ごすため、【周りの日本人から違いを指摘される】。また、周囲からの指摘だけでなく、自ら【自分と日本人の考え方や行動の違いを認識】する。一時帰国の時と同様に【周囲から特別扱い】を受けることや、【言語の能力】も影響して、自身を日本人と差別化して捉えることで【カルチャーショック・戸惑い】を受ける対象者が多かった。

【カルチャーショック・戸惑い】を受けた際、対象者は【なぜ周りと違うのか考え、適応するために模索する時期】に突入する。カルチャーショック後、各々が納得する民族アイデンティティを身につけていく発話が窺えた。【自分の中の日本人と外国人を使い分ける】パターンでは、どのような行動が日本文化に適しているのかを判断しながら行動様式を変えることにより、学校やアルバイト先で【適応】していくことが語られた。【自分を外国人として捉える】パターンでは、帰国するまでは自分が日本人だと考えていたにも関わらず、帰国後に日本人から受け入れてもらえない体験により、日本人との差別化を行う発話が見られた。【所属（帰国生）を見つける】パターンは、帰国後に他の帰国生と出会い、体験を共有することで居場所を感じられるようになっていく発話が見受けられた。外国では自身を日本人だと捉え、帰国後は日本人から同族として扱ってもらえないことにより、どちらでもない所属を見出すのである。また、どこにも居場所を見出せず【葛藤】し、自分とは違う存在を否定するパターンも面接において見受けられた。

【なぜ周りと違うのか考え、適応するために模索する時期】を経て、【適応】・【不適応】に分かれていく。【不適応】となった対象者は、しばらく経つと周囲の行動を観察して【表面上の行動を変化させる】。これは、周りに指摘された違いや、自分なりに考えて一見適応的にふるまおうとしている状態である。しかし、そのように過ごす中で【周囲からの評価】が変わり、友達ができるなどして葛藤なく過ごせるようになり、やがて【適応】していくプロセスが見られた。このような経過もあり、本研究の対象者は皆【適応】していったが、可能性のあるプロセスとして適応せずに民族アイデンティティを確立させていく場合も考えられる。Figure 1 では、点線でその可能性を示してある。

カルチャーショックを受けて一見不適応状態に陥ったように見えるが、対象者本人にとっては適

応的となっている行動も見受けられた。他者との違いに直面しないよう【積極的に人と関わらない】ことで自らを保つパターンである。帰国後、すぐに他の【帰国生と出会い、類似点や違いを認識する】ことで葛藤なく【自分を日本人・帰国生だと捉える】ことができる対象者もいた。その場合、周囲から違いを指摘されることも、葛藤することもなく、比較的素早く自分らしく適応的に過ごすことが可能となっていた。友人を作る努力をしない、一定の距離感以上に人と関わらないなどにより、直接直面化することなく緩やかに自分と他者との違いを認識して受け止めていくのである。

帰国後から、民族アイデンティティの確立まで

帰国後に【適応】すると、対象者は自分の民族アイデンティティについて考察を始める。【民族アイデンティティ】を意識しない者もいるが、このプロセスを辿っている対象者は、海外でも日本人に囲まれて過ごしていた場合や、帰国後すぐに他の帰国生と出会うことで葛藤なく自分の所属を確保できた場合が多い。ほとんどの対象者は【相手と比べて自分を捉える】ようになる。比べる相手によって自分の立ち位置が変わるのである。そのため、自分はどこにも所属しない中途半端な存在であると感じ、【日本でも外国でもない民族アイデンティティ確立】に至る。しかし、比較する相手が変わることで自身のアイデンティティは揺れ続け、落ち着くことはない。一方、同じような流れで帰国生としてのアイデンティティを確立する者もいる。これは先ほどと比べ、「帰国生」として最も居心地がいい」と感じる者に多く見られた。また、それまで有していた帰国生としてのアイデンティティを、帰国後に喪失する者もいた。これは、帰国後に日本人よりも英語ができることで【周囲から特別扱い】を受け、帰国生として英語ができるアイデンティティを有していたが、英語ができる他の帰国生と出会うことで自分の英語力に対する自信を喪失し、帰国生としてのアイデンティティが崩れるパターンである。これら2つはどちらも他の帰国生との出会いを介して生じるプロセスであることから、まとめて【帰国生としてのアイデンティティ確立・拡散】とラベルを生成した。今回の対象者にはいなかったが、日本人との差別化を行うことで【外国人としての民族アイデンティティ確立】が行われる可能性も考えられたため、Figure 1 では点線によりその可能性を示した。

海外滞在時に、自分の中で日本人としての視点と外国人としての視点をはっきり分かれている対象者もいた。例えば、同じ日本人を見るにしても、日本人の視点からだ「きっちりしていて良い」と感じるが、アメリカ人の視点からだ「細かいところまで気にして窮屈そう」というように、1つの物事に対して自分の中で相反する2つ以上の意見を持つ。そのような場合、帰国後にカルチャーショックを経験することや、青年期に突入していくことで【自分の中の日本人と外国人が近づいていく】という発話が見られた。そして、【私は私、これが私】というアイデンティティに至る。先に述べた【日本人でも外国人でもないアイデンティティ確立】と類似しているが、民族という視点を抜きにして発言していることから、本研究では異なるものとして扱い、ラベル生成を行なった。

先の【積極的に人と関わらない】パターンにおいても、同様に【私は私、これが私】という視点にたどり着く発話が見受けられた。これは、積極的に他民族と関わらないことで、民族アイデンティティに関する視点を有することなくアイデンティティを構築していることが考えられる。

【日本人としての民族アイデンティティ確立】、【日本人でも外国人でもないアイデンティティ確立】、【帰国生としてのアイデンティティ確立・拡散】、【外国人としての民族アイデンティティ確立】

は、どれも比べる相手によって流動的に変化することが考えられるため、大ラベルとしてまとめ、【相手と比べて自分を捉える】というラベルとを行ったり来たりを繰り返していくことが考えられる。また、【私は私、これが私】と発言した対象者も、面接場面で筆者が質問を重ねるうちに民族アイデンティティについて考える様子が見受けられたことから、このプロセスも同様に、民族アイデンティティの大ラベルと行ったり来たりを繰り返すことが推察される。

インターナショナルスクール・現地校に通った帰国生に共通した TEM 図の作成

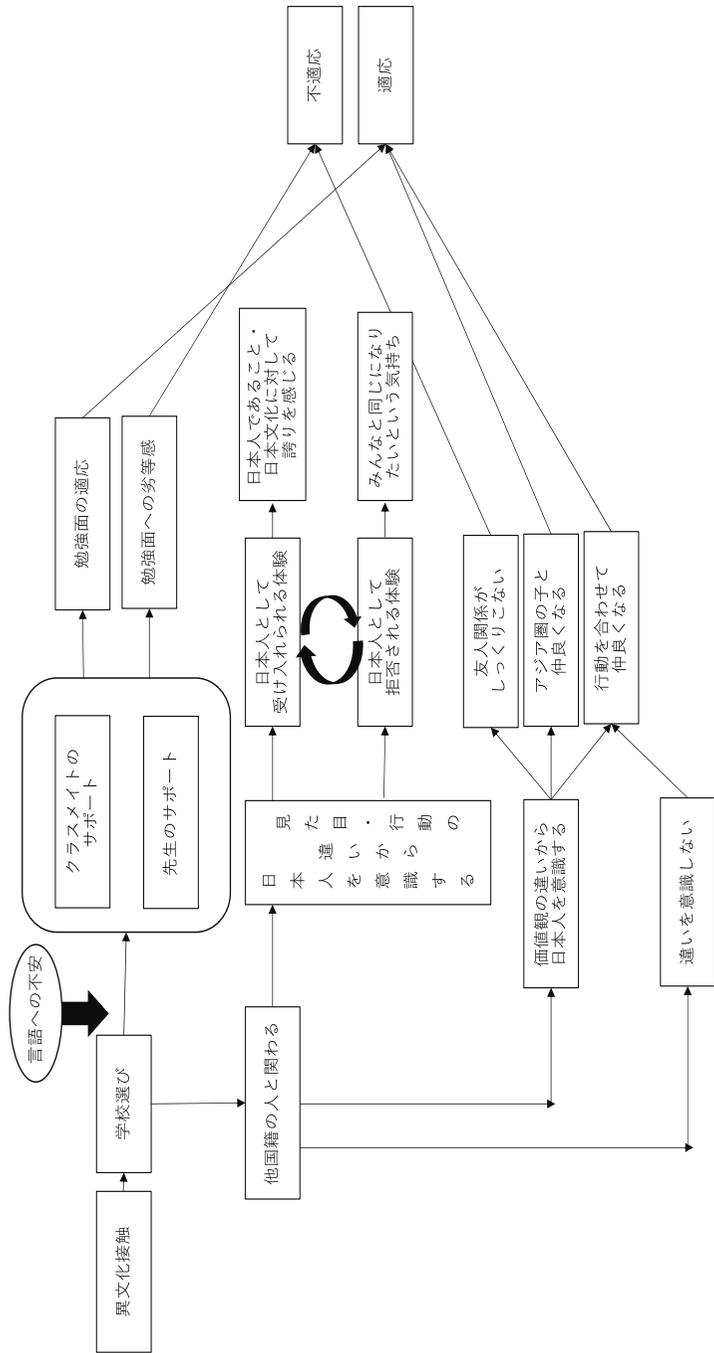
インターと現地校に通った者は、日本人学校に通った者よりも、民族アイデンティティ獲得に当たって複雑なプロセスを辿っていることが窺えた。そこで、インターと現地校に通った者の異文化接触から適応・不適応に至るまでの TEM 図を作成した (Figure 2)。そして、彼らの帰国後の民族アイデンティティの変化をまとめた TEM 図も作成した (Figure 3)。用語は次のように定義した (Table 4)。Figure 2 におけるラベルの語りの例を Table 5 に、Figure 3 の語りの例を Table 6 に示す。

Table 4

インターナショナルスクール・現地校に通う帰国生に共通する
プロセスを示す TEM 図における用語の説明

用語	意味
言語への不安	外国語に自信が持てず、不安を抱いている状態
サポート	授業や会話を理解できるよう説明する、援助を行うこと
勉強面の適応	外国語で行われる授業についていけて、知識を身につけることができる状態
勉強面への劣等感	言語のできなさによる勉強のできなさを痛感し、劣等感を抱いている状態
適応	友達もでき、ストレスの少ない状態で学校に通学できていること
不適応	友達と呼べる人がおらず、ストレス負荷の高い状態で通学している、あるいは通学していない状態のこと

【言語への不安】は、自分の外国語に対して自信が持てない状態を示す。日本語以外の言語を共通語とする学校へ入学する際、自分のコミュニケーション能力に自信が持てない対象者がほとんどであった。「サポート」とは、そのような言語に対して不安を感じている対象者に対して寄り添い、対象者が授業や会話を理解できるよう説明をする、援助を行うことなどを示す。【勉強面の適応】、【勉強面への劣等感】における「勉強面」とは、学業に関することのみを示すこととする。そのた



環境要因 ← 自分要因
 行ったり来たりを繰り返す
 プロセス (循環)

インタビューでは見られなかった想定されるプロセス

- 適応 = 友達もでき、ストレスの少ない状態で学校に通学できていること
- 不適応 = 友達と呼べる人がおらず、ストレス負荷の高い状態で通学している、
あるいは通学していない状態のこと
- 周囲のサポート = 話を聞いてくれる家族や友人の存在。
実際に困った時に具体的対応を取ってくれる環境。

Figure 2. インターナショナルスクール・現地校に通った帰国生の異文化にて適応・不適応に至るまでの TEM 図

め、友人関係などは含まない。【勉強面の適応】は授業についていけること、外国語による教育で知識を身につけていける状態であることを示す。【勉強面への劣等感】とは、勉強面の適応を達成できず、自分の言語のできなさ、勉強のできなさに劣等感を抱いている状態を示す。【適応】は、友達もでき、ストレスの少ない状態で学校に通学できていることであり、【不適応】は友達と呼べる人がおらず、ストレス負荷の高い状態で通学している、あるいは通学していない状態のことを示す。

インターナショナルスクール・現地校に通った帰国生の、異文化接触から適応・不適応に至るまでの TEM 図の作成

【異文化接触】を経て【学校選び】を行い、インター・現地校に転校する。その際【言語への不安】を抱えるが、【クラスメイトのサポート】や【先生のサポート】により、不安に変化が生じる。全くサポートのなかった者もいれば、手厚いサポートを得た者もいた。サポートにより、授業を理解できる、課題を提出できるなど【勉強面の適応】が可能となっていく。一方で、サポートが不十分であった対象者は【勉強面への劣等感】を抱きながら通学する様子が語られた。勉強面で適応できたかによってストレス負荷が変わり、【適応】ないし【不適応】というプロセスに分かれている。

【学校選び】を行いインター・現地校に転校すると、【他国籍の人と関わる】こととなる。その際、多くが「髪の毛」や「目の色」などの【見た目・行動の違いから日本人を意識する】こととなる。行動の違いは、文房具の交換こや、日本人と比べて自分の意見をはっきり言う、などが含まれる。その後、対象者も外見の違いから自分が日本人と扱われ、【日本人として受け入れられる体験】と【日本人として拒否される体験】を繰り返す。前者は、日本人であることを肯定的に捉えられることである。【日本人として拒否される体験】では、「俺は日本人が大嫌いだ」など、日本人であることから自身を否定される体験が語られた。【日本人として受け入れられる体験】と通じて、自分が【日本人であること・日本文化に対して誇りを感じる】ようになる。一方、【日本人として拒否される体験】を重ねると、【みんなと同じになりたいという気持ち】が生じることが示唆された。

見た目や行動だけでなく【価値観の違いから日本人を意識する】体験も語られた。価値観という目に見えない違いを認識した結果、対象者は【友人関係がしっくりこない者、文化的価値観が似ている【アジア圏の子と仲良くなる】者、価値観が異なる相手に【行動を合わせて仲良くなる】者に分かれた。【友人関係がしっくりこない】者は、親しくする友人ができずに【不適応】となる。【アジア圏の子と仲良くなる】者は、学校において所属するコミュニティを見つけ、【適応】的に日々を過ごす。【行動を合わせて仲良くなる】者も同様にコミュニティを見つけられたことから【適応】していく。また、価値観などの【違いを意識しない】者もいたが、彼らは違和感を感じることなく学校成員に【行動を合わせて仲良くなる】ことができおり、【適応】していったことが語られた。

インターナショナルスクール・現地校に通った帰国生の、帰国後から民族アイデンティティの確立に至る TEM 図の作成

インターと現地校に通った者の、帰国から民族アイデンティティの確立に至るまでに共通した発話は以下のようなものであった (Figure 3)。それぞれのラベルの語りの例は Table 6 に示す。

インターや現地校に通っていた対象者の多くは、【帰国】時に日本語【言語への不安】を有していた。これは、「勉強についていけるのかな」といった不安や、「専門的な用語とか政治の難しい言葉

Table 5

Figure 3 の各ラベルにおける語り

ラベル	語りの例
クラスメイトのサポート	「私が言ったことをちゃんと言葉にしてくれる」
先生のサポート	「みんなお世話したがる」
勉強面の適応	「先生も、誰かこの子のこと助けてくれない？って」
勉強面への劣等感	「相当辛かった。言語もわからないしなんのためにこの宿題をやってるのか、この宿題はなんの意味を持ってるのかわからないままとりあえず教科書読んで同じような箇所を写すとかやってた」
見た目・行動の違いから日本人を意識する	「サラサラした黒髪っていうのは日本人しかいなかった」
日本人として受け入れられる体験	「日本人ブランド。日本人っていうだけですごいクールじゃんってなった」、 「日本人っていうだけで得るものが多くて特別感を感じ始めた。日本人としての意識がポジティブな意識に変わっていった」
日本人として拒否される体験	「韓国人がいきなり『竹島は韓国のもだから』って言ってきた。すごい悲しくなった、胸がウツてなった」 「アジア人だから仲間はずれにされる、ご飯の時に椅子をずらされたり」
日本人であること・日本文化に対して誇りを感じる	「日本人であることに対して、その事実をすごく大切にしていた気がします」
みんなと同じになりたいという気持ち	「うちも土足で家になりたいとか、普通になりたいって思ってた」「みんな教会に行ったりして、うちはやっぱり違うんだって」
価値観の違いから日本人を意識する	「(外国人は) すごくしょうもないことで喧嘩する、独占欲みたいなものがあるんですかね」
友人関係がしっくりこない	「ふざけるのがすごい嫌だった、恥ずかしかったので、みんなでワイワイしている横で見ていた」
アジア圏の子と仲良くなる	「文化がちよっと似てるから過ごしやすかったのかなとは思いますが。靴を脱いだりお箸を使って食べるとか。ある程度似た部分が日常生活にお互いあってそれが過ごしやすかった部分はあるのかな」
違いを意識しない	「黒人とも白人とも仲良くしていた」

はまだ日本語でわからなかった」など、日本語で生活していくことに関する不安をまとめたラベルである。帰国後、彼らは【日本育ちの日本人と接触】をする。その後学校へ通い、【クラスメイトのサポート】や【先生のサポート】を経て、【勉強面の適応】に至る、あるいは【勉強面への劣等感】を抱えることとなる。これは、【異文化接触時】と同様のプロセスであることが推察される。

【日本育ちの日本人と接触】して、【周りの日本人から行動の違いを指摘される】経験をする。これは、日本育ちの日本人から【日本人的な行動を期待される】ために生じる体験であることも語られた。【周りの日本人から行動の違いを指摘される】ことと、【日本人的な行動を期待される】経験から、対象者は【自分と日本人の考え方や行動の違いを認識】するようになる。それまで日本人代表として過ごしていたのに、日本人との違いを認識することで、【カルチャーショック】を経験する。同時に、何名かの対象者は【日本人の自分と、外国人の自分など、複数の視点を持っていることを認識する】(発話例:「インターの子達を日本人として見て、日本人をアメリカ人として見ている自

分が、無意識のうちにいるなって気づく)。複数の視点を持っていることに気づいた後、【自分の中の日本人と外国人を使い分ける】ことによって日々を過ごす者は、【自分の中の日本人と外国人が近づいていく】感覚を得る。このプロセスを経た者の発話例として、長く日本に住むことで外国人の自分が薄れていく発言や(発話例:「日本人になってきてるのかな」)、中間地点へ両方の自分が寄っていく発言が語られた(発話例:「すっごく離れていたアメリカ人と日本人の自分が、ちょっとずつ近づいてきている」)。一方で、【日本人の自分と、外国人の自分など、複数の視点を持っていることを認識する】ことで【自分は日本人でも外国人でもないと考え、葛藤する】者もいた。しかし日本で過ごしていくうちに、徐々に【自分の中の日本人と外国人が近づいていく】ことも語られた。

先に述べたのは、【カルチャーショック】を経て自分に複数の視点があることを認識したパターンである。しかし中には、日本人と異なるという点から、【自分を外国人と捉える】対象者もいた。自分を外国人と捉えた者は、日本人との差別化を図る行動をとっている。【自分と日本人の考え方や行動の違いを認識】し、【周りと違うことに誇りを感じる】ようになるのである。

帰国後に【カルチャーショック】を経験しなかった者もいた。彼らは帰国後、比較的スムーズに適応し、【第2言語ができる自信】を持つようになる(発話例:「誰にも負けない何かがあるってすごい強い」)。そして、【周りと違うことに誇りを感じる】ようになる。

ここまで【日本育ちの日本人と接触】することで生じる心的変化プロセスを説明した。次に、【帰国生と出会い、類似点や違いを認識する】プロセスへと入る。本研究の対象者は皆、帰国生の多いコミュニティに所属した経験があり、自分以外の帰国生と出会った体験がある。【第2言語ができる自信】を抱いた者や、自分を帰国生として他の日本人から差別化した者は、自分よりも英語ができる帰国生と出会うことで、【第2言語への劣等感】を抱くようになる。多くの対象者に共通して、自分は「中途半端」な存在であることをほのめかす発言が多かった。そして、それまで築かれていた、あるいは築きかけられていた【帰国生としての民族アイデンティティが拡散】する。一方、他の帰国生と出会うことで自分が【一人じゃない安心感】を抱くという発言も見受けられた。それまで不適応気味だった者は、他の帰国生と出会い【所属(帰国生)を見つける】ことで、【帰国生としての民族アイデンティティを確立】する。Walters & Auto-Cuff (2009)も、同じ背景を持つTCKとの出会いがTCKのアイデンティティ発達に重要であると述べており、本研究でも同様の発話が見られた。

【日本人の自分と、外国人の自分など、複数の視点を持っていることを認識する】プロセスから、【自分の中の日本人と外国人が近づいていく】感覚を得て、【日本人でも外国人でもない民族アイデンティティを確立】する者が多かった(発話例:「日本人の中に小さくアメリカ人の自分がいるみたいな感覚」、「矛盾しているけど、矛盾しているのが自分なんだなって受け入れ始めている」)。

しかし、彼らの民族アイデンティティ発達はここで留まらない。帰国生としてのアイデンティティや、日本人でも外国人でもない民族アイデンティティを確立した後も、異なる背景要因を持つ者との接触により他のアイデンティティが顕在化する。【日本人・帰国生・外国人と比べて自分を捉える】

(発話例:「カナダにいた時はカナダ人ぼくないな自分って思うし、日本にいたら日本人ぼくないな自分って思う」)ことで、一度は落ち着いた民族アイデンティティが再度揺れる。葛藤し、【「私は私」、「これが私」】(発話例:「確かにパスポートは日本ってなってるけどでもだからって自分が日本人だ

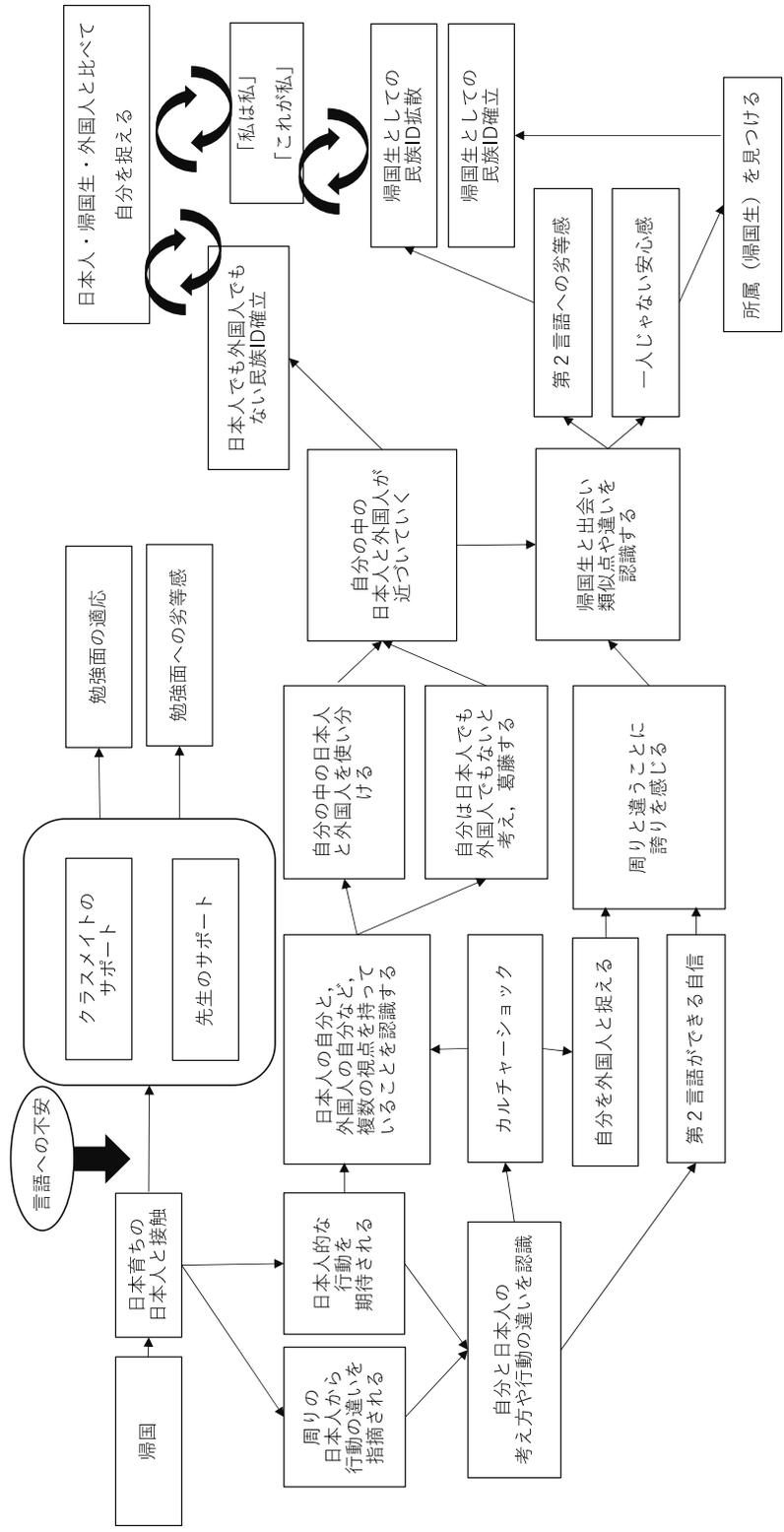


Figure 3. インターナショナルスクール・現地校に通った帰国生の、帰国後から民族アイデンティティ確立までの TEM 図

Table 6

Figure 3 の各ラベルにおける語り

ラベル	語りの例
言語への不安	「映画の感想を言い合うとかはできるようになったんですけど、専門的な用語とか政治の難しい言葉はまだ日本語ではわからなかった」
周りの日本人から行動の違いを指摘される	「喋る時に肩動いちゃったりとか。でもどんなことをしているのか私が教えて欲しい。すごく日本人のつもりなのに」
日本人的な行動を期待される	「ほとんど日本人として見られるし、日本人らしさを期待される」、「自分が持っていると思っていたアメリカ人の自分を否定された感じがして、腹立たしさと悲しさがあつた」
日本人の自分と、外国人の自分など、複数の視点を持っていることを認識する	「インターの子達を日本人として見て、日本人をアメリカ人として見ている自分が、無意識のうちにいるなって気づく」
自分の中の日本人と外国人を使い分ける	「自分の中で切り替えがある感じがした」 「帰国生以外の日本人を理解するのが大変だった。自分はすごい日本人だって思って直したものを、直した状態で日本に帰った。今度は逆にズバズバ言いすぎとか、思ったこと全部言っちゃうなって、自分めっちゃ帰国生っぽい大丈夫かなって思った」
自分は日本人でも外国人でもないと考え、葛藤する	「(自分の中の)日本人の視点から見るとアメリカ人は大雑把、なんでこうできないんだって思う。アメリカ人の視点から日本人を見るとめっちゃ息苦しいじゃんって思う。矛盾している」
自分の中の日本人と外国人が近づいていく	「日本人になってきているのかな」 「日本人としての自分も今としては受け入れ始めているのかな。すごく離れていたアメリカ人と日本人の自分が、ちょっとずつ近づいてきているような感じ。よくわからないけど、良い方向に行ってるのかなって感じた。極端に離れていたものが近づいてる、一つになろうとしている不思議な感じがある」
自分を外国人と捉える	「海外にいるときは私は日本人っていう感じだったんですけど、日本に帰ってきたら私は外国人っていう感覚を持った」、「とりあえず英語に触れたいって。日本語の本を英訳してみようとか、今思うとよくやったなって思うけど、英語の歌詞を日本語にしてみようとか」
周りとは違うことに誇りを感じる	「他の子とは違うってことに誇りを持っていたかもしれないです。私は日本人の中でもちょっと心は違うよっていう感じで痛かったような気がします」
第2言語ができる自信	「英語の授業で模範回答を期待されるんですけど、むしろそれが自信になった。誰にも負けない何かがあるってすごい強くなって思っ。誰に何を言われても、数学とか化学とか相変わらずできなくてやばくても英語できるし英語ではあなたに負けないからって」
第2言語への劣等感	「自分より英語ができる人が何百人もいてプライドがなくなった」
一人じゃない安心感	「ストレスがなくて楽しかった。お互いの気持ちかわかる、帰国生同士だと辛いこと楽しいこととかのあるあるがわかるので一緒にいて楽だった。めっちゃ同じ境遇の人がいて嬉しいなって」
帰国生としての民族アイデンティティ拡散	「自分は帰国生の中でも帰国生らしくない方だから、他の帰国生の人に話を聞いたほうがいいと思う」
帰国生としての民族アイデンティティ確立	「日本人とは心からバカ笑いたことがない。なんだか話が合わない。外国人ともそうで、同じ背景を共有できる帰国生が一番楽」
日本人でも外国人でもない民族アイデンティティ確立	「日本人の中に小さくアメリカ人の自分があるみたいな感覚」、「日本人が嫌とかアメリカ人が嫌とか否定的なものはない。矛盾しているけど、矛盾しているのが自分なんだなって受け入れ始めている」

Table 6 (続き)

日本人・帰国生・外国人と比べて自分を捉える	「カナダにいたときはすごく自分日本人だなんて思ってた。日本に帰ってきたら自分は100%日本人じゃないんだなって思った。血筋とか完全に日本人だけど、後天的なもの日本じゃない文化で育っているの、目の前にいる純日本人と自分は一緒じゃないなっていつも思っています。カナダにいたときはカナダ人っぽくない自分って思うし、日本にいたら日本人っぽくない自分って思う」
「私は私」, 「これが私」	「振り切るのは無理だなんて思うけど、それが私だからって思う。(日本か外国か) どっちかを消したらそれだけの時間をなかったことにする感じがする。どっちも受け入れてどっちもいいところだけとって生きていければいいかなと思う」
	「日本人なのか日本人じゃないのかって自分でも正直わからない。型にはまりたくないっていう思いがすごく出てしまって。確かにパスポートは日本ってなってるけどでもだからって自分が日本人だってすごく思わなくてもいい。そういう型に自分を入れてしまうと自分らしくなれなくなるんじゃないかって思って、大学に入ってから全く気にしなくなりました」

ってすごく思わなくてもいい)と自分の存在を納得しようとしても、新たな出会いにより揺れ続けるのである。Figure 3 では、このスパイラルを黒い矢印にて表している。

考 察

学校選びが児童期に異文化接触した者の民族アイデンティティ発達に与える影響

日本人学校に通った者は比較的定例的な発達を辿っていたことにに対し、インターと現地校に通った者はより複雑なプロセスを辿っていた。本研究の対象者は基本的に児童期に異文化接触し、思春期には日本へ帰国している者である。児童期に【日本人として拒否される体験】を経た者は【みんなと同じになりたいという気持ち】を抱いている (Figure 6)。これは児童期に異文化接触をしている者ならではの体験であると考えられる。児童期は集団との同一化を図ることで安心して発達していく時期であり、そのような時期に他との違いを受け入れることは、自身の同一性が危ぶまれかねない体験である。人種や、それまでに習得した行動などの見ただけで判断できる差や、価値観などの目に見えない違いなど、様々な差異を踏まえて環境に適応していかなければならない体験は、子どもにとって大変な危機であることが推察される。他者との同一化よりも先に、主に思春期の課題とされている他者との差別化を先に行う。のちに同一化できる TCK を見つけ、児童期の課題を辿り、自分が安心して所属できる集団を見つけるのである。

学校選びが思春期に帰国した者の民族アイデンティティ発達に与える影響

帰国後に日本育ちの日本人と比較して【周りとは違うことに誇りを感じる】者がいた。思春期は、自身を差別化してユニークな自分を出す時期であり、第2言語が喋れる、あるいは帰国生であるという揺るぎない差が、自信へとつながっていったことが推察される (Figure 8)。

環境が変わることによって自分の捉え方も同時に揺れ動くことが示された。自分という存在のバランスを取ろうとして、環境から離れた時に自分を外国人であると捉えたり、自分に焦点を当ててなぜ違いを感じたのか整理する体験が生じるのだと考える。自分が何者であるか、児童期というア

アイデンティティ構築前の段階に複数文化の視点を持ちうることは、1 つ以上の価値観を同時に保有することとなる。自身の中の道徳的視点が不安定になることも含め (LeTender, 2000), 成長期に異文化接触することによって自分という存在についてどの視点から捉えたら良いのかわからず、不安定となるのではないかと考えられる。

学校でのサポートが児童期に異文化接触した者の民族アイデンティティ発達に与える影響

異文化において日本人である自分を肯定的に受け入れられること、否定的に拒絶されることは、対象者の民族アイデンティティ発達に大きく影響していることが示された。肯定的に受け入れられた場合、日本人であることを誇りに思い、愛着などが芽生えやすくなる。一方、否定的に受け取られると、周りのみんなと同じになりたいという気持ちが生じて日本人である自分を否定的に捉えやすくなる可能性が示された。複数文化を成長期に体験している TCK の自己肯定感と集団アイデンティティについて調査した Downie, Mageau, & Liodden (2006) も、彼らが所属している民族について肯定的に評価されると彼ら自身が肯定的に受容されている感覚を抱くことを報告している。本研究の対象者も、日本人であることを肯定的に受け取られることで自分の民族性に誇りを抱き、探索的に日本人について調べるなどの行動が語られた。

外国語の喋れなさを勉強面や学校での生活面にてフォローしてくれるクラスメイトや先生の存在により、不適応になりかけても適応的に学校生活を過ごせるようになったという語りも見られた。日本人であるという事実を含め、自身を肯定的に受け入れてもらえる環境が、彼らが落ち着いて発達していくために重要であると考えられる。

家族のサポートが児童期に異文化接触した者の民族アイデンティティ発達に与える影響

多くの面接対象者は異文化接触の際に家族サポートに恵まれており、学校で問題が生じた際も家に帰って家族に抱えてもらうことで危機的体験を乗り越えていることが語られた。また、精神面だけでなく学業面に関しても家族のサポートが重要となることが示された。現地校に通う中で日本語に自信が持てなくなった面接対象者から、補習校の勉強を家族に教えてもらうというエピソードが語られた。帰国後に子どもが困らないよう、家族が協力してサポートすることはその後の適応に重要な要因となっていたことが考えられる。

一方で、家族から日本語能力が低いことを指摘され、より日本語への自信をなくした対象者もいた。外国で文化化した子どもに対し、家族からそのような否定的な関わりがあったならば、自身の日本人の部分に対して自信がなくなることは当然であると考えられる。家族成員は、子供の日本語能力、日本文化に対する理解力などを評価するのではなく、子どもが適応的に過ごすためには何をすれば良いのかサポートする姿勢を持つことが重要であろう。

発達の順序が入れ替わることについて

海外での体験によって発達課題の順序が入れ替わることが示唆された。海外にて日本人学校へ通った場合、比較的定例通りの発達段階を踏んでいることが面接にて語られた。一方で、インターや現地校に通った場合は、異なるプロセスを辿ることが示された。インターや現地校に通った者は、自分を差別化してユニークな自分を出す思春期的体験を、児童期の課題とされている所属する集団を見つけることよりも早く行っていたことが推察される。彼らはまず、集団への所属感が乏し

いままに、自身を差別化しているのである。日本人留学生を対象に研究した植松（2009）は、異文化とアイデンティティの問題を、集団アイデンティティと自我アイデンティティの相互補完作用（multi complementation; Erikson, 1959）の視点から考察することを提案している。集団アイデンティティとアイデンティティの関係について植松（2010）は、アイデンティティ概念の理論的背景である自我心理学に基づいて次のように説明している。「生まれた社会が持つ文化や歴史、理想など、ある集団が経験を組織化する枠組みで集団アイデンティティの働きによって、人は自分自身を社会的現実の中で適応的に運営していくことができるようになる。そして所属する集団における一成功例としての自分を感じ、またその集団の社会的現実の中で定義されている方向に成長しつつあるという生き生きとした現実感を伴う確信を持つことになる」。児童期と思春期の発達課題が入れ替わりやすい環境にて過ごすことは、危機的体験と捉えられるだろう。面接にて、インターや現地校に通った場合、適応的に過ごすためには周囲のサポートが大切であり、特に自身を肯定的に捉えて関わってくれる存在の重要性が語られた。そのような存在に支えられ、自分が何者であるかを安心して検討することが可能となるのである。

複数文化を体験した TCK の民族アイデンティティ統合について

対象者は帰国後に周りとは比べながら自身の民族アイデンティティについて検討することが示された（Figure 6）。これは、自身で捉えているアイデンティティと、他者視点からの自分にギャップが存在していることが影響していると考えられる。面接では、自分で思っているアイデンティティと、他者から見られるアイデンティティの違いに関する発話として【日本人的な行動を期待される】ことが挙げられた。Walters & Auton-Cuff (2009)も“自分が何者であるか”よりも“自分が何者ではないか”という視点から自分について語る TCK について言及している。McDonald (2010)が、彼らのマイノリティな状況や身につけたものが物理的に捉えられないことから、TCK は目に見えないマイノリティであると述べているように、見た目から TCK であることは他者に伝わらない。Schaetti (2000) は、TCK のアイデンティティのゴールに関する仮説として、自分のアイデンティティをあくまでも内的に統合していくこととしている。本研究でも、他者との比較では対象によってアイデンティティが揺れるため、自身が何者であるか内的に統合することが望ましいと考える。

内的に統合する際、重要となるのが他の TCK の存在であろう。面接においても【帰国生と出会い、類似点や違いを認識する】発話が多く見られた。同じ背景を共有する TCK との出会いが【一人じゃない安心感】につながり、アイデンティティ発達に影響を及ぼすことは、女性 TCK に面接調査を行なった Walters & Auton-Cuff (2009)の研究においても重要性が唱えられている。児童期の発達課題であると考えられる、安心して所属できる集団を見つけるこのステップは非常に大切であろう。

まとめ

本研究では面接調査によって、児童期に異文化接触した帰国生が日本人としての民族アイデンティティを発達させていくプロセスを検討した。その結果、滞在先の環境によって迎えるプロセスが異なること、日本人であることを周囲が肯定的に捉えることが民族アイデンティティの発達に重要であることが示された。本研究の対象者は社会的に適応している者ばかりであった。それでもなお、民族アイデンティティという潜在的な視点から考察すると、流動的で、不安定にも近い状態である

様子が語られた。異文化接触は危機的体験であり、特に児童期においてそのような体験がなされる場合、適応的に生きるためには周囲のサポートが必要不可欠となるだろう。

文化間移動の経験は、特に子どもの発達課題の順序に影響を及ぼし、それによって困難を抱える可能性も指摘されている (Pollock & Van Reken, 1999)。本研究では、海外にて日本人学校に通った者と、インターや現地校など日本人がマイノリティとなる学校に通った者とは異なる民族アイデンティティの発達プロセスを辿ることが示された。そのため、インターや現地校に通った者は、自分を差別化してユニークな自分を表出する思春期的体験を、児童期の課題とされている所属する集団を見つけることよりも早く行っていたことが推察される。

学校と家におけるサポートの有無は、子どもの適応にとって重要な要因となることが示された。コミュニケーションが取れない、あるいは勉強についていけないほど言語面に問題があるような状態であっても、そのままの子どもをありのまま受容し、適応していけるよう支援していく姿勢が重要である。そのような状態であることを否定的に評価する、あるいは拒絶することは、子ども達の発達、その後の適応という視点から考察すると望ましくない。しかし、日本は単一民族であることから、内と外に他者を分けて捉える特徴お有していることが推察される。マジョリティの日本人と異なる子どもに対して、保護者は様々な思いが巡るだろう。しかし、そのような関わり方をされたならば、子どもが受けるショックは計り知れない。

今後の課題

児童期の子どもがいる家族が海外へ移動する場合、事前に心理教育を行うことが有用である。心理教育としては、児童期の異文化接触がいかに関与したアイデンティティの混乱に陥りやすい体験であるかを踏まえ、マイノリティ青年にとって民族アイデンティティが重要であること、また、異文化接触によって滞在先の環境に文化化した子どもをありのまま受容し、子供が適応していくためにどうすれば良いかという視点からサポートすることが大切であることを伝える。そして、大人よりも子どもの方が比較的早く異文化へ適応する可能性が高いことから (箕浦, 2003), 両親の苦勞も労う。その上で、子どものルーツとなる日本についても肯定的に伝えられるよう、日本人代表として両親がふるまうことの大切さを示唆することも重要であろう。

今後の課題として、性差についての検討が必要である。女性の TCK を対象にインタビュー調査を行なった Walters & Auto-Cuff (2009) は、女性 TCK ならではのアイデンティティ発達を考察している。日本人を対象とした研究でも、同様に性別ならではの検討が重要である。

引用文献

- 阿部 祐 (2001) . 多文化間メンタルヘルスの動向と実践 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 5, 1-7.
- 荒川 歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) . 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- Downie, M., Mageau, G.A., & Liodden, R.K.T. (2006). On the Risk of Being a Cultural Chameleon: Variations in Collective Self-Esteem Across Social Interactions. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*,

12(3), 527-540.

- Erikson, E.H. (1959). *Identity and Lifecycle*. New York: Norton. (小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子 (訳) (1973). 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房)
- 福井亜由美・岡本祐子 (印刷中). 児童期の異文化接触に伴う民族アイデンティティの発達—サードカルチャーキッズの日本人青年の分析— 広島大学心理学研究, 18.
- Gullahorn, J.T., & Gullahorn, J.E. (1963). An extension of the U-curve hypothesis. *Journal of social issues*, 19(3), 33-47.
- Hoersting, R.C., & Jenkins, S.R. (2011). No place to call home: Cultural homelessness, self-esteem and cross-cultural identities. *International Journal of Intercultural Relations*, 35(1), 17-30.
- Hogg, M.A., & Mullin, B.A. (1999). Joining groups to reduce uncertainty: Subjective uncertainty reduction and group identification. In D. Abrams, & M.A. Hogg (Eds.), *Social identity and social cognition* (pp.179-249). Oxford, UK: Blackwell.
- Hong, Y.Y., Morris, M.W., Chiu, C.Y., & Benet-Martinez, V. (2000). Multicultural minds: A dynamic constructivist approach to culture and cognition. *American Psychologist*, 7, 709-720.
- LaFromboise, T., Coleman, H., & Gerton, J. (1993). Psychological impact of biculturalism: Evidence and theory. *Psychological Bulletin*, 114, 395-412.
- LeTender, G.K. (2000). *Learning to be adolescent: Growing up in U.S. and Japanese middle schools*. New Haven, CT: Yale University Press.
- McDonald, K.E. (2010). Transculturals: Identifying the invisible minority. *Journal of Multicultural Counseling Development*, 38(1), 38-50.
- 箕浦康子 (2003). 子供の異文化体験 増補改訂版. 新思索社.
- 大塚芳子 (1992). 帰国直後の不適応 臨床心理学体系第 10 巻. 安香 宏・小川健之・空井健三 (編) 金子書房, pp.139-152.
- Phinney, J.S., Jacoby, B., & Silver, C. (2007). Positive intergroup attitudes: The role of ethnic identity. *International Journal of Behavioral Development*, 31, 478-490.
- Pollock, D.C., & Van Reken, R. (1999). *Third culture kids: The experience of growing up among worlds*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Ryder, A.G., Alden, L.E., & Paulhus, D.L. (2000). Is acculturation unidimensional or bidimensional? A head-to-head comparison in the prediction of personality, self-identity, and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 49-65.
- Schaetti, B.F. (2000). Global nomad identity: Hypothesizing a developmental model. *Dissertation Abstracts International*, 61(10), 4169A.
- 渋沢田鶴子 (1993). 異文化とアイデンティティ—帰国子女の症例をとおして— 精神分析研究, 37(1), 114-120.
- 渋谷真樹 (2000). マイノリティ集団内部の多様性と力関係—帰国子女教育学級に在籍する「帰国生」らしくない「帰国生」に着目して— 御茶ノ水女子大学ジェンダー教育センター年報, 3, 149-

162.

白土 悟 (2004) . 異文化間カウンセリングの今日的課題 異文化間教育, 20, 4-10.

Sussman, N.M. (2000). The dynamic nature of cultural identity throughout cultural transitions: Why home is not so sweet. *Personality and Social Psychology Review*, 4, 355-373.

鈴木 満・立見康彦・太田博昭 (編) (1997) . 法人海外渡航者の精神保健対策—欧米地域を中心とした活動の記録— 東京: 信山社.

塘 利枝子・廿日出里見・小澤理恵子・鈴木一代 (2008) . 文化間移動とアイデンティティ形成—生涯発達の視点から(自主シンポジウム H6)— 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集 (pp.S144-145) .

植松晃子 (2008) . 異文化における心理的サポートについての理論的考察—新たなパラダイムの提案— お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学論業, 11, 175-182.

植松晃子 (2009) . 異文化における民族アイデンティティの顕在化—日本人留学生を対象とした縦断調査による質的検討— お茶の水女子大学グローバル CEO プログラム公募研究成果論文集 Proceeding (2007 年度第 2 集) , 4, 45-53.

植松晃子 (2010) . 異文化環境における民族アイデンティティの役割—集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係— パーソナリティ研究, 19(1), 25-37.

Vivero, V.N., & Jenkins, S.R. (1999). The existential hazards of the multicultural individual: Defining and understanding “cultural homelessness”. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 5, 6-26.

Walters, K.A., & Auton-Cuff, F.P. (2009). A story to tell: the identity development of women growing up as third culture kids. *Mental Health, Religion & Culture*, 12(7), 755-772.

山本 力 (1984) . アイデンティティ理論との対話—Erikson における同一性概念の展望— 鐘 幹 八郎・山本 力・宮下一博 (編著) アイデンティティ研究の展望I ナカニシヤ出版, pp.9-38.

高校生の抑うつを長期的に予測する 認知行動的要因の予備的検討

神原広平・吉良悠吾・尾形明子

A preliminary investigation of long-term cognitive-behavioral predictive factors of depression in high school students.

Kohei Kambara, Yugo Kira, and Akiko Ogata

Preventative interventions for depression in high school students are often targeted to cognitive-behavioral factors, such as maladaptive cogitation, inadequate social skills, or rumination. Although previous research has revealed that cognitive-behavioral factors are important for reducing depression, there is little evidence regarding the factors that most effectively predict increased depression in high school students. Therefore, we sought to identify the most predictable long-term cognitive-behavioral factors in depression by comparing these three factors. We conducted a 1-year two-wave longitudinal questionnaire survey with 51 high school students. The results revealed that only rumination predicted depression after 1 year, but the predictive effect was relatively small. Moreover, maladaptive cognition and social skills, which are usually targeted by prevention intervention, did not account for increased depression. The current findings suggest that it would be valuable for future studies to further clarify which factors affect depression among high school students.

キーワード : rumination, depression, adolescents, high school, longitudinal survey.

問 題

青年期は自立に向けて成長し新規的経験を数多く得る時期であると同時に、抑うつが高まりやすい時期でもある。抑うつとは、気分の強い落ちこみ、興味の減退、不眠や食欲不振といった抑うつ症状のことを指し(坂本・丹野・大野, 2005)、抑うつ症状が長期的に維持され日常生活に障害が生じる場合にうつ病と診断される(American Psychiatric Association, 2013, 高橋・大野監訳, 2014)。抑うつが維持されると、うつ病を罹患するリスクが上昇することが示されており(Wesselhoeft, Sorensen, Heiervang, & Bilenberg, 2013)、うつ病を発症した青年は、成人になってもうつ病を維持する傾向が強く、自殺企図のリスクを高めることが明らかになっている(Weissman et al. 1991)。

本邦の抑うつの疫学的研究は、我が国における青年期の抑うつの問題を示している。例えば、4,000

人を対象にした日本でのコホート調査では、青年期を含む18～34歳の若年層のうつ病の12カ月有病率が、他の年代と比較して、最も高いことが明らかになっている (Ishikawa, Kawakami, Kessler, & the World Mental Health Japan Survey Collaborators, 2016)。さらに、高校生の抑うつに関する縦断的調査では、抑うつが問題であった青年の割合は、複数の調査時点において、調査対象者の全体の20%以上であったことが明らかになっている (山口他, 2009)。以上より、青年の抑うつは重要な問題であり、その維持や悪化を防ぐ試みが必要と考えられる (Stice, Shaw, Bohon, Marti, & Rohde, 2009)。

従来の研究より、青年の抑うつには様々な要因が関係することが示されている。例えば、家族のうつ病患者の有無、虐待やいじめといった幼少期の心理社会的ストレスへの暴露 (Thapar, Collishaw, Pine, & Thapar, 2012)、急性ストレス (Mazurka, Wynne-Edwards, & Harkness, 2016; Rao, Hammen, & Poland, 2010) といった環境要因は抑うつの悪化を予測する。一方で、青年の抑うつ予防の心理学的介入では、対人関係のスキルや考え方の偏りなど、認知行動的な要因をターゲットとすることが多い (Stice et al., 2009)。その理由として、抑うつの予防介入では、環境などの変容の可能性が低い要因より、他者とのかわり方や考え方などの変容の可能性の高いものを介入のターゲットとしていることが考えられる (Thapar et al., 2012)。本研究では、抑うつを増加させる要因のなかでも、変容可能性が高く、かつ多くの予防研究でターゲットとされる認知行動的な要因に注目する。特に、青年の抑うつに対する効果的な予防介入のターゲットを同定することを本研究の目的とするため、すでに青年の抑うつに対する関連性が示されている、不適応的認知 (坂野, 1995)、社会的スキル (Nilsen, Karevold, Røysamb, Gustavson, & Mathiesen, 2013)、反すう (Abela & Hankin, 2011; Nolen-Hoeksema & Morrow, 1991; Ruscio et al., 2015) を取り上げる。

まず、不適応的認知とは、抑うつ者にみられるネガティブに偏った情報処理の仕方、あるいは思考パターンである (坂野, 1995)。例えば、強い不適応的認知がある個人は、1回のミスを過剰推定したり、原因を過度に自身に帰属したりする。不適応的認知をもつ青年は抑うつを長期的に維持する傾向があり (Marcotte, Lévesque, & Fortin, 2006)、強い抑うつを示す青年にみられる特徴でもある (Marton & Kutcher, 1995)。青年を対象とした不適応的認知と抑うつに関する質問紙調査では、不安や性別、年齢を統制したうえで、不適応的認知と抑うつに正の関連がみられている (Tairi, Adams, & Zilakis, 2016)。抑うつ予防的介入の実践研究としては、例えば、白石 (2005) は、大学生に対して不適応的認知に対する認知療法的介入を参考にした心理教育的プログラムを実施し、統制群と比較して、抑うつの低減効果があることを示している。

次に、社会的スキルとは、対人関係を良好に保つ技術である (佐藤・佐藤, 2006)。先行研究より、社会的スキルの低さは、将来のソーシャルサポートを低下させ抑うつを増加させることが示されている。例えば、12歳時点での社会的スキルの低さは、14歳時のソーシャルサポートを低減させ、16歳時の抑うつを強めることが示されている (Nilsen et al., 2013)。抑うつ予防的介入の実践研究としては、例えば、Rose, Hawes, & Hunt (2014) は、社会的な知覚や関係形成、主張などの社会的スキルの形成を狙った介入を青年に対して実施し、社会的スキルへの介入を含まないプログラムと比較して、社会的スキルへの介入に抑うつ予防効果がみられることを示している。

最後に、反すうとは、失敗などの出来事の意味や原因について抽象的に繰り返し考え込むことで

ある (Watkins & Nolen-Hoeksema, 2014)。反すうはストレスイベント後の抑うつを強めることが示されており (Abela & Hankin, 2011; Nolen-Hoeksema & Morrow, 1991; Ruscio et al., 2015), 青年においても, 1年後のうつ病の発症を予測することが示されている (Wilkinson, Croudace, & Goodyer, 2013)。抑うつ予防的介入の実践研究としては, 例えば, 堤 (2015) は, 反すうの代替行動を形成する介入を含んだ中高生への心理教育的プログラムを実施し, そのプログラムが抑うつ予防効果を示したことを明らかにしている。

以上のように, 抑うつを維持し悪化させる認知行動的要因として, 不適応的認知や社会的スキル, 反すうが考えられる。これまでの研究では, 認知行動的要因のそれぞれを個別に測定し, 抑うつへ与える影響を検討したものが多く (Abela & Hankin, 2011; Nilsen et al., 2013; Nolen-Hoeksema & Morrow, 1991), 複数の認知行動的要因を同時に測定し, それらの要因が抑うつに与える影響を検討した研究は少ない。複数の認知行動的要因を検討した研究としては, 伊藤・竹中・上里 (2005) は, 抑うつを予測する要因について1年間の調査を行い, 反すうと不適応的認知はともに1年後の大学生の抑うつを予測することを示している。また, 西川・松永・古谷 (2013) の研究では, 反すうが不適応的認知を媒介して大学生の抑うつを予測することを示している。

しかし, これまでの研究には, 本邦の高校生の長期的な抑うつに対する影響に関して複数の認知行動的要因を比較検討していないという問題がある。抑うつ予防介入は, 時間的制約もあり, 効率的な介入が求められる現状がある。例えば, 学校規模で抑うつ予防介入を実施する場合, カリキュラムの問題などから長期の介入実施の時間を確保することは難しいといえる。したがって, 青年の抑うつに最も影響する認知行動的要因に対して介入を行うことが必要である。そのために, 最も青年の抑うつ**の強さを予測し, かつ介入ターゲットになりうるリスク要因を明らかにする必要がある。**そこで本研究は, 青年における代表的な抑うつを予測する要因である, 不適応的認知, 社会的スキル, 反すうの3つの認知行動的要因を取り上げ, どの要因が最も抑うつに対する長期的な影響を示すかについてを検討する。しかしながら, 後述の通り, 本研究のサンプルはある高校に所属する高校生のみを用いており, 一般化可能性には限界があるため, 予備的な検討とする。

方 法

対象者

ある全日制高校に所属する高校生65名に対して2016年4月(以下, T1とする)と2017年3月(以下, T2とする)に質問紙調査を実施した。その2回のうち, どちらの回答もなかった生徒は14名(回答がないため性別等不明), T1のみ回答のあった生徒が7名(女性3名, 平均年齢15.5歳), T2のみ回答のあった生徒が0名, 2回とも回答のあった生徒が44名(女性27名, 平均年齢15.4歳)であった。

測定変数

(1) 抑うつ: 島・鹿野・北村・浅井 (1985) により作成された日本語版 Center for Epidemiologic Studies Depression Scale を使用した。この尺度は20項目で構成され(項目例: “普段は何でもないことが煩

わしい”), 各項目の心身の状態がどの程度続いているかについて, 0 (“1 週間で全くない, あったとしても 1 日”) から 3 (“週のうち 5 日以上”) の 4 件法で回答を求めた。得点が高いほど, 抑うつが強いことを示した。

(2) 不適応的認知: 岡安 (2009) によって作成された, 高校生用対人場面の不適応的認知尺度を使用した。高校生の抑うつに関する調査であり, 高校生を含む青年における抑うつ増減には対人的なストレスイベントが関連することが指摘されていること (Thapar et al., 2012) より, 本尺度を用いた。本尺度は 16 項目で構成されており (項目例: “自分がつまらない人間だと思われぬように, 無理して話をすべきだ”), 各項目の対人場面における不適応的認知を適用する程度について, 1 (“ほとんど当てはまらない”) から 4 (“かなり当てはまる”) の 4 件法で回答を求めた。得点が高いほど, 不適応的認知が強いことを示した。

(3) 社会的スキル: 吉良・尾形・上手 (2018) により作成された社会的スキル自己評定尺度短縮版を使用した。本尺度は 20 項目で構成されており (項目例: “相手とすぐに, うちとけられる”), 各項目の社会的スキルを日々用いる程度について, 1 (“ほとんど当てはまらない”) から 4 (“かなり当てはまる”) の 4 件法で回答を求めた。得点が高いほど, 社会的スキルが高いこと (正確には, 自身の社会的スキルについての自己評価が高いこと) を示した。

(4) 反すう: Hasegawa (2013) によって作成された日本語版 Ruminative Responses Scale を使用した。本尺度は, 抑うつ重症度を反映している 12 項目 (項目例: “自分がどれほど悲しみを感じているのか考える”) を除外して分析することが提案されており (Treyner, Gonzalez, & Nolen-Hoeksema, 2003), 日本語版においても同様の分析が行われている (Hasegawa, 2013)。また本尺度は, 抑うつ改善に向けた問題解決的反すうである “反省” と達成できていない状況についての消極的な反すうである “考え込み” の 2 因子が想定されており, 考え込みは抑うつと正の相関関係にあり, 反省は無相関関係であることが示されている (Treyner et al., 2003)。本研究では抑うつを強める要因の検討であるため, 考え込み因子の 5 項目を使用し (項目例: “「こんな事態を作り出してしまうような何かを, 自分ははしてしまっているのだろうか」と考える”), それらの項目の反すうを適用する程度について, 1 (“ほとんどなかった”) から 4 (“ほとんどいつもそうだった”) の 4 件法で回答を求めた。得点が高いほど, 反すう傾向が強いことを示した。

手続き

調査実施前に, 調査担当教員と質問紙の構成について議論を行い, 倫理的問題に配慮し, T1 と T2 に質問紙の配布および回収を行った。具体的には, 追跡については担当教員が設定した追跡番号を用いることで, 調査者がデータと対応する生徒を同定できないようにした。また, 調査への参加は任意であり回答の有無や内容が成績等に影響しないことを調査紙の表紙に明記し, 教員から口頭で説明をした。なお, 解析には HAD (清水, 2016) を使用した。

結 果

まず、T1 および T2 における基礎統計量および相関係数を Table 1 に示した。

Table 1. 基礎統計量および各変数の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 T1 抑うつ	—							19.65	9.86
2 T1 不適応的認知	.47 **	—						31.79	9.45
3 T1 社会的スキル	.02	.00	—					48.88	8.19
4 T1 反すう	.17	.29 *	.02	—				9.61	4.10
5 T2 抑うつ	.57 **	.49 **	-.02	.38 *	—			20.71	9.62
6 T2 不適応的認知	.39 *	.67 **	-.05	.27	.72 **	—		32.93	9.02
7 T2 社会的スキル	-.01	-.15	.52 **	-.06	-.22	-.22	—	48.04	7.73
8 T2 反すう	.34 *	.43 **	.02	.47 **	.52 **	.60 **	.17	9.74	3.63

Note:T1は1時点目の2016年4月、T2は2時点目の2017年3月を表す。

** $p < .01$, * $p < .05$

抑うつは1時点目と2時点目ともに20点付近の数値を示しており、本尺度における問題のある抑うつのカットオフ得点が20点であること (Vilagut, Forero, Barbaglia, & Alonso, 2016) を踏まえると、本調査の対象となった青年は、比較的高い抑うつを有している可能性があったといえる。

次に、T2の抑うつや認知行動的要因に対する不適応的認知、社会的スキル、反すうの影響を検討するために、重回帰分析を実施した (Table 2)。重回帰分析では、T1における抑うつと認知行動的要因の4変数を説明変数とし、T2の各変数を目的変数として投入した。

分析の結果、T1の抑うつはT2の抑うつを有意に予測していた ($\beta = .42$, 95% CI [.12, .72], $p < .01$)。また、T1の反すうは、有意傾向ではあるが、T2の抑うつを予測した ($\beta = .23$, 95% CI [-.01, .51], $p < .10$)。また、T1の不適応的認知は、有意傾向ではあるが、T2の反すうを予測した ($\beta = .30$, 95% CI [-.02, .30], $p < .10$)。

考 察

本研究は青年の長期的な抑うつを予測する認知行動的要因の同定を目的とし、認知行動的要因として社会的スキル、不適応的認知、そして反すうを取り上げ、1年間にわたる縦断的調査を実施した。その結果、認知行動的要因の中でも反すうが1年後の抑うつを予測する可能性を示したが、5%有意水準には至らず、解釈には注意が必要である。この結果は、先行研究の結果である、反すうや不適応的認知が抑うつを有意に予測する結果とは異なっていた (Abela & Hankin, 2011; 伊藤他, 2005; Nolen-Hoeksema, 2000)。

先行研究と本研究の相違の1つに、不適応的認知や社会的スキルといった青年の抑うつを予測す

Table2. T2の抑うつ、認知行動的要因に対するT1変数の重回帰分析

変数名	β	信頼区間 (2.5%)	信頼区間 (97.5%)
目的変数：T2 抑うつ			
T1 抑うつ	.42 **	.11	.71
T1 不適応的認知	.24	-.06	.53
T1 社会的スキル	-.04	-.29	.22
T1 反すう	.25 †	-.01	.51
R^2	.45 **		
目的変数：T2 社会的スキル			
T1 抑うつ	.07	-.26	.39
T1 不適応的認知	-.13	-.46	.19
T1 社会的スキル	.54 **	.25	.81
T1 反すう	-.04	-.32	.25
R^2	.32 **		
目的変数：T2 不適応的認知			
T1 抑うつ	.05	-.24	.34
T1 不適応的認知	.65 **	.35	.94
T1 社会的スキル	.02	-.23	.27
T1 反すう	.07	-.19	.34
R^2	.49 **		
目的変数：T2 反すう			
T1 抑うつ	.13	-.20	.45
T1 不適応的認知	.30 †	-.02	.62
T1 社会的スキル	.09	-.19	.36
T1 反すう	.39 **	.10	.68
R^2	.39 **		

Note: T1は1時点目の2016年4月, T2は2時点目の2017年3月を表す。

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$.

る認知行動的要因が統制されている点がある。例えば、反すうと抑うつに関連性を検討した伊藤他 (2005) においては、不適応的認知の統制は行われているが、抑うつや社会的スキルの統制は行われていなかった。また、1年後の抑うつに対する反すうの影響を検討した研究はみられるが (Nolen-Hoeksema, 2000), それらの研究において、不適応的認知や社会的スキルは統制されていない。本研究の結果より、ある認知行動的要因の1つによって、高校生の長期的な抑うつは予測できないことが示唆される。このように、認知行動的要因のある1つによって抑うつを予測できないことは、青年における抑うつ予防的介入では、ある1つの要因のみを取り上げるのではなく、いくつかの要因を取り上げる必要があることを示唆している。

また、本研究の結果より、不適応的認知が1年後の反すうを予測する可能性を示したが、5%有意水準を満たしていなかったため、解釈には注意が必要である。これまで、反すうと不適応的認知の関連については、西川他 (2013) の検討がある。彼らは、パス解析によって、反すうが不適応的認知を媒介して抑うつを予測することを示している。本研究の結果は、その西川他 (2013) の結果と異なったが、その要因として、本研究が1年にわたる縦断的調査であることが影響したと推測する。

例えば、試験などのパフォーマンスに対する自己否定的認知を持つ傾向があれば、1年間に否定的な思考を浮かべる機会が多くなり、その結果として反すうが増加する可能性が考えられる。

最後に、T1時点の抑うつは、T2時点の抑うつを有意に予測していることが明らかになった。このことは、4月時点で強い抑うつを示した生徒は、その後も抑うつを維持する傾向にあることを示唆している。抑うつが維持されることは、その後の学業など学校適応に障害をもたらすこと(Thapar et al., 2012)を踏まえても、抑うつに対する予防的な取り組みが必要であるといえる。

以上のように、本研究の結果では、ある特定の認知行動的要因が長期的な抑うつを予測しなかった。しかしながら、本研究の対象となったサンプルは高校1校のみであり、本邦の高校生全体にまで知見を適用することは難しい。したがって、今後は同様の研究を積み重ねることで、本研究の知見を一般化していくことが期待される。

引用文献

- Abela, J. R. Z., & Hankin, B. L. (2011). Rumination as a vulnerability factor to depression during the transition from early to middle adolescence: A multiwave longitudinal study. *Journal of Abnormal Psychology, 120*, 259-271.
- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.)*. Washington, DC: Author.
- (高橋三郎・大野 裕 (監訳) (2014) DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Hasegawa, A. (2013). Translation and internal validation of the Japanese version of the ruminative responses scale. *Psychological Reports, 112*, 716-726.
- Ishikawa, H., Kawakami, N., Kessler, R. C., & the World Mental Health Japan Survey Collaborators (2016). Lifetime and 12-month prevalence, severity and unmet need for treatment of common mental disorders in Japan: Results from the final dataset of World Mental Health Japan Survey. *Epidemiology and Psychiatric Sciences, 25*, 217-229.
- 伊藤 拓・竹中晃二・上里一郎 (2005). 抑うつ心理的要因の共通要素 ——完全主義、執着性格、非機能的態度とうつ状態の関連性におけるネガティブな反すうの位置づけ—— 教育心理学研究, 53, 162-171.
- 吉良悠吾・尾形明子・上手由香 (2018). 項目反応理論を用いた社会的スキル自己評定尺度短縮版の作成と青年への適用の検討 日本心理学会第82回大会発表論文集.
- Marcotte, D., Lévesque, N., & Fortin, L. (2006). Variations of cognitive distortions and school performance in depressed and non-depressed high school adolescents: A two-year longitudinal study. *Cognitive Therapy and Research, 30*, 211-225.
- Marton, P. & Kutcher, S. (1995). The prevalence of cognitive distortion in depressed adolescents. *Journal of Psychiatry & Neuroscience, 20*, 33-38.
- Mazurka, R., Wynne-Edwards, K.E., & Harkness, K.L. (2016). Stressful life events prior to depression onset

- and the cortisol response to stress in youth with first onset versus recurrent depression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 44, 1173-1184.
- Nilsen, W., Karevold, E., Røysamb, E., Gustavson, K., & Mathiesen, K. S. (2013). Social skills and depressive symptoms across adolescence: Social support as a mediator in girls versus boys. *Journal of Adolescence*, 36, 11-20.
- 西川大志・松永美希・古谷嘉一郎 (2013). 反すうが自動思考と抑うつに与える影響 心理学研究, 84, 461-457,
- Nolen-Hoeksema, S. (2000). The role of rumination in depressive disorders and mixed anxiety/depressive symptoms. *Journal of Abnormal Psychology*, 109, 504-511.
- Nolen-Hoeksema, S., & Morrow, J. (1991). A prospective study of depression and posttraumatic stress symptoms after a natural disaster: The 1989 Loma Prieta Earthquake. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 115-121.
- 岡安孝弘 (2009). 高校生の人対人関係場面における不適応の認知とストレス反応 明治大学心理社会学研究, 4, 27-36.
- Rao, U., Hammen, C.L., & Polam, R. E. (2010). Longitudinal course of adolescent depression: Neuroendocrine and psychosocial predictors. *Journal of The American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 49, 141-151.
- Rose, K., Hawes, D. J., & Hunt, C. J. (2014). Randomized controlled trial of a friendship skills intervention on adolescent depressive symptoms. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 82, 510-520.
- Ruscio, A. M., Gentes, E. L., Jones, J. D., Hallion, L. S., Coleman, E. S., & Swendsen, J. (2015). Rumination predicts heightened responding to stressful life events in major depressive disorder and generalized anxiety disorder. *Journal of Abnormal Psychology*, 124, 17-26.
- 坂本真士・丹野義彦・大野 裕 (2005). 抑うつの臨床心理学 東京大学出版会.
- 坂野雄二 (1995). 認知行動療法 日本評論社.
- 佐藤正二・佐藤容子 (2006). 学校における SST 実践ガイド ——子供の対人スキル指導—— 金剛出版.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 白石智子 (2005). 大学生の抑うつ傾向に対する心理的介入の実践研究 ——認知療法による抑うつ感軽減・予防プログラムの効果に関する一考察—— 教育心理学研究, 53, 252-262.
- Stice, E., Shaw, H., Bohon, C., Marti, C. N., & Rohde, P. (2009). A meta-analytic review of depression prevention programs for children and adolescents: Factors that predict magnitude of intervention effects. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 77, 486-503.
- Tairi, T., Adams, B., & Zilakis, N. (2016). Cognitive errors in Greek adolescents: The linkages between

- negative cognitive errors and anxious and depressive symptoms. *International Journal of Cognitive Therapy*, 9, 261-279.
- Thapar, A., Collishaw, S., Pine, D., & Thapar, A.K. (2012). Depression in adolescence. *The Lancet*, 379, 1056-1067.
- Treynor, W., Gonzalez, R., & Nolen-Hoeksema, S. (2003). Rumination reconsidered: A psychometric analysis. *Cognitive Therapy and Research*, 27, 247-259.
- 堤 亜美 (2015). 中学・高校生に対する抑うつ予防心理教育プログラムの効果の検討 教育心理学研究, 63, 323-337.
- Vilagut, G., Forero, C. G., Barbaglia, G., & Alonso, J. (2016). Screening for depression in the general population with the center for epidemiologic studies depression (CES-D): A systematic review with meta-analysis. *PLoS ONE*, 11, 1-18.
- Watkins, E. R., & Nolen-Hoeksema, S. (2014). A habit-goal framework of depressive rumination. *Journal of Abnormal Psychology*, 123, 24-34.
- Weissman, M. M., Wolk, S., Goldstein, R. B., Moreau, D., Adams, P., Greenwald, S., Kler, G.M., Ryan, N.D., Dahl, R.E., & Wickramaratne, P. (1999). Depressed adolescents grown up. *JAMA*, 281, 1707-1713.
- Wesselhoeft, R., Sorensen, M. J., Heiervang, E. R., & Bilenberg, N. (2013). Subthreshold depression in children and adolescents: A systematic review. *Journal of Affective Disorders*, 151, 7-22.
- Wilkinson, P. O., Croudace, T. J., & Goodyer, I. M. (2013). Rumination, anxiety, depressive symptoms and subsequent depression in adolescents at risk for psychopathology: A longitudinal cohort study. *BMC Psychiatry*, 13, 250-259.
- 山口祐子・山口日出彦・原井宏明・渡邊亜紀・田中恭子・庄野昌博・弟子丸元紀 (2009). 高校生における抑うつ群・推定うつ病有病率の3年間の縦断的研究 臨床精神医学, 38, 209-218.

大学生の仮想的有能感が援助要請スタイルに与える影響¹

岡本祐子・新田 啓

Effect of assumed-competence of college students on help-seeking style

Yuko Okamoto and Kei Nitta

Seeking help when necessary can be an appropriate problem-solving strategy. However, dependent help-seeking may cause interpersonal problems, and a consistent failure to ask for help may impair problem-solving. In addition, an individual's self-esteem and evaluation of the ability of others may influence help-seeking style. Thus, in the current study, we investigated the relationship between assumed-competence and help-seeking style, using the scale of help-seeking style (Nagai, 2013). A questionnaire survey was conducted with college students at national universities. Data for 282 respondents were analyzed. Hierarchical multiple regression analysis was used to identify individuals with a low assumed-competence adaptive style of help-seeking, and individuals with a high assumed-competence positive relation with help-seeking avoidance style. Individuals categorized as the unsure type also exhibited low self-esteem and assumed-competence. The results revealed that the help-seeking style of the unsure group exhibited a significant correlation with confidence in others. Specifically, we found a significant negative correlation between avoidance style and confidence in others. In contrast, we found a significant positive correlation between dependent style and confidence in others. Therefore, the current results suggested that relatively adaptable individuals tended to exhibit successful help-seeking, whereas unsure individuals were often unable to ask for help.

キーワード : help-seeking, assumed-competence, trust, adolescent

問 題

援助要請

個人が問題や悩みを抱えた場合、他者の力を借りて解決を試みることは、様々な場面で見られる

¹ 本稿は第二著者である新田啓の卒業論文を加筆修正したものである。本誌の投稿資格の関係で主任指導教員が筆頭著者となって公刊する。

行動である。このように個人が問題を抱え、自力で解決することが難しいとき、必要に応じて他者に援助を求めることは援助要請 (help-seeking) と呼ばれる。

特に、悩みの相談に注目した援助要請研究では、援助要請行動の頻度、援助要請の意思決定の程度である援助要請意図、援助することへの期待・不安・イメージをとらえる援助要請態度、援助要請意図と態度を包括する認知的枠組みとして捉えられる被援助志向性などの援助要請行動の実行に付随する要因とそれらに影響を与える内的・外的要因の関連を説明することを目的にしているものが多い。そして、それらの研究の多くは、援助要請行動が個人の適応にとって望ましいものであると想定しているため、援助要請を行うか行わないかの二極的な単一次元の尺度で測定された値の高低のみが問題とされている先行研究がほとんどである (永井, 2016)。

援助要請の実行までのプロセスによる分類

しかし、援助要請を測定する場合、その質についても考慮する必要がある。なぜなら、援助要請行動が不適切な頻度で行われることや、問題と自分の能力との査定が適当でないまま援助要請の意思決定を行うことは、問題への不適応的な対処となってしまう可能性が考えられるからである。質問紙調査によって、渡部・永井・桑原 (2014) は、援助要請意図はストレス反応に直接の影響を与えていないことを報告しており、脇本 (2008) も被援助志向性が実際の援助要請行動の回数に関連が見られないことを示している。このことから単一次元の尺度で測定される援助要請の意思決定に関わる要因の高低のみでは、実行される援助要請行動を予測することが困難である。よって、必要な援助要請と不必要な援助要請を弁別することを目的に、永井 (2013) は、援助要請の実行に至るまでの過程に注目し、援助要請をスタイルで分けて考えることを提案している。永井 (2013) は援助要請スタイル尺度を作成し、困難を抱えても自身での問題解決を試み、どうしても解決が困難な場合に援助を要請する傾向を持つ“援助要請自立型”、問題が深刻でなく、本来なら自分自身で取り組むことが可能でも、安易に援助を要請する傾向を持つ“援助要請過剰型”、問題の程度にかかわらず、一貫して援助を要請しない傾向を持つ“援助要請回避型”の3つのスタイルに分類した。そして、これらのスタイルは過去4週間の悩みの経験、及び援助要請行動との関連から実際の行動パターンと一致することが実証されている。援助要請スタイル尺度はスタイルの分類だけではなく、そのスタイルをどの程度志向するかという傾向を測定する尺度として扱うこともあり (永井, 2016)、本研究はそれに倣うものとする。

援助要請資源

援助要請の受け手となる援助者はフォーマルな援助資源となる専門家とインフォーマルな援助資源となる友人や家族等に分けることができる。大学生における主な援助要請の対象者は友人となっており、学生相談など専門家への援助はあまり求めないこと (興久田・太田・高木, 2011) 友人への被援助志向性は悩みの種類に関係なく、専門家への志向性より有意に高いことが示されている (木村・水野, 2004)。また、木村・梅垣・水野 (2014) は抑うつと自殺念慮のシナリオを提示した後、そのような状況に陥ったときに、援助要請の意図があるかどうかや実際に援助要請行動に移すかどうか

かを尋ねた実験の結果、友人や家族に援助を求めようとする学生は両ケースとも7割を超えたが、専門家への援助を考える割合は抑うつシナリオで14.6%、自殺念慮シナリオで21.2%と低い水準にとどまっている。フォーマルな援助資源とインフォーマルな援助資源では、与えられる援助の性質が異なる。しかし、対人関係や学業、進路選択などのストレスフルなライフイベントを経験することが予想される大学生(高比良, 1998)において、フォーマルな援助資源よりアクセスしやすい、インフォーマルな援助資源ですら利用を見送ることは将来的なリスクを生じるため、本研究ではインフォーマルな援助資源を利用することを求める援助要請について扱う。

援助要請と自尊感情

援助要請行動は自尊感情との関連を調査した研究が多く、特に2つの仮説に対する検討が多く行われている。永井(2010)によると、仮説の1つは、自尊感情の高い人ほど、その状態を維持するために援助要請を行わないようにする認知的一貫性仮説、もう一つは自尊感情の低い人は、そのわずかな自尊感情がさらに低下することを恐れるため援助要請を行わないとする傷つきやすさ仮説であることを述べている。しかし、本邦での検討では、援助要請と自尊感情に正の関連を報告するものが多いものの、いずれの研究も関連は弱く(e.g.木村・水野, 2004; 永井, 2010) 関連が示されなかった研究(水野・石隈・田村, 2006)も存在する。

これらの理由として、援助要請は自尊感情の高低のみでは説明ができないことが考えられる。脇本(2008)は、日誌法を用い、自尊感情の不安定性を測定することで、援助要請行動と自尊感情の関連を説明することを試みている。不安定性とは、短期間での自尊感情の変動のしやすさであり、高い不安定性は自己防衛反応の示しやすさとの関連が指摘されている。援助要請行動に対し自尊感情の不安定性の主効果は見られなかったが、自尊感情の高低と自尊感情の変動性には交互作用が見られ、高自尊・不安定群は高自尊・安定群より被援助志向性が低いなどの結果が示された。また、福沢・山口・先崎(2013)によると、自尊心が高く、自尊心が不安定な者は不適応な性質に結び付くとされていることが知見として示されている。このように、援助要請行動を導く要因として、自尊心を取り上げる場合には、その他の個人特性の影響を考慮に入れることが重要であると考えられる。

仮想的有能感

現代の若者像をとらえる概念として、速水・木野・高木(2004)によって提唱された“仮想的有能感”が挙げられる。仮想的有能感とは、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義されている(速水他, 2004)。仮想的有能感はHayamizu, Kino, Takagi & Tan(2004)によって作成されたAssumed Competence Scale second version 2(以降ACS-2)によって測定される。仮想的有能感そのものは無意識的なものであり、直接ではとらえにくいいため“他者軽視”の傾向を測定し、他者軽視の強さに対応するものとして仮想的有能感が存在すると考えられている(速水, 2012)。また、他者を低く評価していても、自身の有能さの感覚がポジティブ経験の豊富さによるものであれば、仮想的有能感の定義とそぐわない。この問題を解消するために、ACS-2と自尊感情尺度を併用し、有能感を4分類することが提案さ

れている。他者軽視と自尊感情の高低の組み合わせによって、他者軽視も自尊感情も高い場合は全能型、他者軽視の傾向が高く自尊感情が低い場合が仮想型、他者軽視が低く自尊感情が高い場合は自尊型、他者軽視と自尊感情がともに低い場合は萎縮型となる (Figure 1)。全能型は実際に自分に自信があるため他者を軽視しがちであると考えられ、仮想型は他者軽視を行うことによって根拠のない有能感を得ていると考えられる。また自尊型は自尊感情が高くても他者軽視を行わない人々であり、萎縮型は自らに自信がないように見える人々である。

仮想的有能感と援助要請の関連として、橋本 (2013) によれば、他者軽視傾向が高いほど友人や家族への援助要請意図は低くなることが示された。しかし、専門家への援助要請意図は他者軽視と自尊感情の交互作用が見られ、他者観が肯定的であれば自尊感情の低さが援助要請を抑制し、他者観が否定的であれば自尊感情の高さが援助要請を抑制するという結果となった。このことは専門家への援助要請を行うことに抵抗がないのは自尊感情が高く他者観も肯定的という比較的健康な人々であることを示唆している。

また、仮想的有能感と自尊心の変動性の関連の可能性として、速水 (2012) は他者軽視が自尊感情の不安定性から引き起こされることを述べている。つまり、仮想的有能感が高い者は、様々なイベントに対して自尊感情が揺らぎやすいため、他者軽視を行い、自尊感情を高め、維持しようとしていると考えられる。また、仮想的有能感が高い者は他者を軽視しているが、それは他者に注意が向いているからであって、他者に対する注意の多さが自尊感情を不安定にしているとも考えられる。つまり、仮想的有能感 (他者軽視) の高い人々は、揺らぎやすい自尊感情を維持するため、他者に自身の弱さを暴露することを拒む“援助要請回避型”の傾向が高くなると考えられる。また、仮想的有能感が低く比較的適応的な自立型の人々は、適切な援助要請を行うことができると考えられるため“援助要請自立型”の傾向が高くなると考えられる。

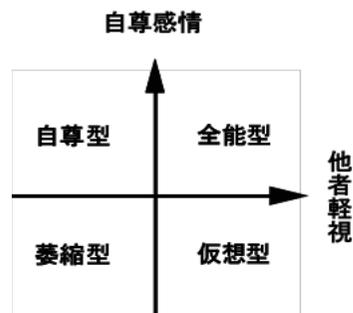


Figure 1. 有能感の4タイプ (速水, 2012)。

援助要請と信頼感

一方、仮想的有能感も自尊心も低い人々 (萎縮型) は、自信の無さに影響され回避的な援助要請スタイルをとるのか、それとも、自己の能力より他者の能力を頼りにし、繰り返し援助要請を求めてしまうのか、仮想的有能感の概念のみでは説明することが難しい。この場合、援助資源である他

者への信頼感によって、取りうる援助要請スタイルが異なるのではないかと考えた。天貝 (1995) によると信頼感とは、自分あるいは他人に対して抱く信頼できるという気持ちであり、自分自身の能力や他人の存在の一貫性についての確信である。また、安定した信頼感を持つ場合、他者をより支持的であると感じると述べている。よって、萎縮型の人々は、他者への信頼感が高いと援助要請を行いやすいと感じるのではないかと考えられる。

目 的

以上の問題点から本研究は、援助要請スタイルが仮想的有能感および信頼感によって説明されることを実証することを目的とした。本研究で扱う援助要請とは、援助要請スタイルの定義より「個人が問題を抱えた場合に他者に対して、自身の意思で相談を行うこと」とする。援助要請をスタイルの観点から捉えなおすことは、不適応的な援助要請行動を行う傾向を持つ個人への介入や援助に対する知見を提供すると考えられる。

よって、本研究では質問紙調査を行い、(a) 仮想的有能感 (他者軽視) の高い人々は、回避的な援助要請を行うこと、(b) 他者軽視が低く、自尊感情が高い自尊型の人々は自立的な援助要請を行うこと、(c) 他者軽視も自尊感情も低い萎縮型の人々は、他者への信頼感が高い場合に、適切な援助要請を行い、他者への信頼感が低ければ、回避的な援助要請を行うことを検証する。

方 法

対象者

国立大学の大学生 307 名を対象とし、質問紙を配布した。そのうち、欠損のあるデータを除く、282 名 (男性 138 名、女性 144 名；平均年齢 20.61 歳, SD=.81) を分析対象者とした。

手続き

調査は 2017 年 11 月から 12 月にかけて行われた。大学の講義後、対象者に一斉に質問紙を配布しその場で回収した。その際、調査は無記名式であり回答は任意であること、いつでも回答を中断できること、調査協力を拒否しても不利益が生じないことなどを口頭で伝えた。

質問紙の構成 ①援助要請スタイル尺度。永井 (2013) が作成した援助要請スタイル尺度を用いた。この尺度は下位因子である“援助要請自立型”、“援助要請過剰型”、“援助要請回避型”、それぞれ 4 項目ずつ、全 12 項目で構成されている。悩みや問題を抱えた場合の自分にどの程度あてはまるか、7 件法で回答を求めた。永井 (2013) や青柳 (2016) では、援助要請スタイルによる分類にこの尺度を用いており、ある下位因子の得点の合計が得点範囲の中央値以上で、かつ他の 2 つの下位因子得点より高い者をその下位因子群としていたが、本研究ではそのような分類を行わず、永井 (2016) に倣い、この尺度を援助要請スタイルの程度・傾向を測定するために用いた。②他者軽視 Hayamizu et al (2004) で作成された ACS-2 を用いた。世間一般の他者、もしくは、より身近な経験

の中での他者を想定した「自分の周りには気のきかない人が多い」、「他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる」、「話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い」、「知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い」等の 11 項目の質問に 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど、他者軽視の傾向が高いことを示す。③自尊感情尺度 山本・松井・山成 (1982) によって邦訳された Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を用いた。全 11 項目を 5 件法で回答を求めた。なお、②の ACS-2 と③の自尊感情尺度を用いて有能感の 4 タイプに分類する基準はそれぞれの得点の平均値とした。④信頼感尺度 天貝 (1995) で作成された信頼感尺度を用いた。全 24 項目で構成され、6 件法で回答を求めた。3 因子構造で下位因子に、“不信”、“自分への信頼”、“他人への信頼”が確認されている。⑤フェイス項目。年齢と性別の記入を求めた。

結 果

分析には、HAD Version16.03 (清水, 2016) を使用した。

援助要請スタイル尺度の因子分析

援助要請スタイル尺度について、3 因子構造となることを確かめるため確認的因子分析を行った。その結果、適合度が低かったため (CFI=.88, RMSEA=.12, GFI=.86, AGFI=.79) 探索的因子分析を行った。対角 SMC と MAP 平行分析の結果から因子数を 3 に設定した上で、最尤法、プロマックス回転を用いた。その結果得られた因子パターンを Table 1 に示す。各因子は先行研究 (永井, 2013 ; 青柳, 2016) で想定されている項目でまとまったため、第 1 因子を“援助要請過剰傾向”、第 2 因子を“援助要請回避傾向”、第 3 因子を“援助要請自立傾向”と命名した (以降それぞれ“過剰傾向”“回避傾向”“自立傾向”と呼ぶ)。 α 係数は順に .90, .86, .76 であったことから、十分な内的整合性が確認された。各下位因子項目の平均値を尺度得点とした。

信頼感尺度の因子分析

信頼感尺度について、3 因子構造となることを確かめるために確認的因子分析を行った。その結果から、因子負荷量が .40 以下であった項目 6, 13, 24 を削除し、再度因子分析を行った。しかし、モデルの適合度は低いままであったため (CFI=.88, RMSEA=.08, GFI=.86, AGFI=.82), 探索的因子分析を行った。対角 SMC と MAP 平行分析の結果から因子数を 3 に設定した上で、最尤法、プロマックス回転を用いた。その結果、共通性が .16 を下回った項目 6 と 13 を削除し、再度最尤法、プロマックス回転で探索的因子分析を行った。そして、得られた因子パターンを Table 2 に示す。Factor1 及び Factor2 は天貝 (1995) で示された因子パターンとは異なるが、天貝 (1997) では、参加者の年代によって項目が因子間を移動することが報告されており、またそれぞれの因子の構造上の定義と項目の意図に祖語は見られなかったため、Factor1 を“他者に対する信頼”、Factor2 を“自身に対する信頼”、Factor3 を“不信”と命名した。

Table 1
援助要請スタイル尺度の因子構造

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
援助要請過剰傾向 ($\alpha=.90, \omega=.91$)				
悩みを抱えたら、それがあまり深刻なものでなくても、相談する	.905	.032	-.040	.790
比較的ささいな悩みでも、相談する	.882	.056	-.017	.721
困ったことがあったら、割とすぐ相談する	.795	-.052	.063	.686
よく考えれば大したことないと思えるようなことでも、割りと相談する	.780	-.030	-.014	.641
援助要請回避傾向 ($\alpha=.86, \omega=.86$)				
悩みが自分では解決できないようなものでも、相談しない	.116	.865	.014	.627
悩みがどのようなものでも、最後まで自分一人ががんばる	.042	.796	.103	.561
悩みは最後まで、自分一人で抱える	-.064	.725	-.068	.618
悩みが深刻で、一人で解決できなくても、相談はしない	-.145	.700	.022	.632
援助要請自立傾向 ($\alpha=.76, \omega=.80$)				
相談より先に自分で試行錯誤し、いきづまったら相談する	-.104	.063	.814	.670
先に自分で、いろいろとやってみてから相談する	-.220	.077	.697	.554
少しづらくても、自分で悩みに向き合い、それでも無理だったら相談する	.221	.014	.642	.436
悩みが自分一人の力ではどうしようもなかった時は、相談する	.141	-.299	.528	.513
因子間相関	Factor2	-.651		
	Factor3	-.052	-.253	

Table 2
信頼感尺度の因子構造

項目	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
他者に対する信頼 ($\alpha=.83, \omega=.83$)				
一般的に、人間は信頼できるものだと思う。	.740	-.001	-.054	.592
状況が許せば、たいいて人間はお互い正直に、かつ誠実にかかわりあいたいと思っている。	.690	-.054	.112	.360
これまでに会ったほとんどの人は私によくしてくれた。	.652	-.150	-.045	.333
無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする。	.599	.287	.114	.606
私は私で、決して他人にはとってかわることのできない存在であると思う。	.572	.203	.134	.452
これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。	.523	.065	-.251	.543
私は現実に信頼できる特定の他人がいる。	.349	.202	.012	.259
自身に対する信頼 ($\alpha=.81, \omega=.81$)				
私は、自分自身を、ある程度は信頼できる。	-.029	.821	.001	.639
私は、自分自身が、信頼に値する人間だと思う。	.017	.716	-.102	.603
周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう。	-.094	.614	-.056	.328
私は自分の人生に対し、何とかやっていけそうな気がする。	.077	.579	.075	.370
私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信をもって	-.102	.564	.158	.214
私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う。	.257	.468	-.187	.617
自分自身について、今は実現していないことでも、いつかこうなるだろうと信じられるこ	.030	.427	.002	.201
不信 ($\alpha=.85, \omega=.86$)				
今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う	.157	-.010	.819	.564
今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである。	-.164	.083	.735	.633
所詮(しょせん)、周りは敵ばかりだと感じる。	-.113	-.035	.735	.669
過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている。	.069	.085	.732	.451
自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする。	.287	-.066	.723	.400
私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう。	-.040	-.096	.528	.359
気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。	-.121	.074	.446	.236
相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ。	-.245	.109	.441	.303
因子間相関	Factor2	.728		
	Factor3	-.532	-.410	

性別、援助要請スタイル、他者軽視、自尊感情、信頼感の関連

まず、性別を独立変数とし、援助要請スタイル(過剰・回避・自立傾向)を従属変数とした、対応のない t 検定を行った。その結果、過剰傾向は女性の方が男性より有意に高く ($t=5.33, df=280, p<.01$)、回避傾向は男性の方が女性より有意に高いこと ($t=3.20, df=280, p<.05$) が示された。自立傾

向には有意な性差は見られなかった ($t=17, df=280, p=.86$)。

次に、全分析対象者のデータを用いて各尺度得点の相関分析を行った。結果を Table 3 に示す。援助要請スタイルと仮想的有能感の関連については、過剰傾向と他者軽視の間に有意な負の相関が ($r=-.21, p<.01$) 示された。回避傾向と他者軽視では、正の相関が有意 ($r=.24, p<.01$) であり、さらに回避傾向は自尊感情と有意な負の相関が ($r=-.13, p<.05$) 示された。また、援助要請スタイルと信頼感との関連では、過剰傾向と他者に対する信頼で正の相関が有意 ($r=.25, p<.01$) であり、不信とは負の相関が有意に ($r=-.16, p<.01$) 示された。自立傾向は他者に対する信頼と正の相関が有意に ($r=.22, p<.01$) 示され。回避傾向は他者に対する信頼と有意な負の相関が ($r=-.33, p<.01$)、不信とは正の相関 ($r=.389, p<.01$) が示された。加えて、他者軽視と自尊感情には有意な相関は認められなかったため、仮想的有能感の4類型に分類しての分析が可能である。

Table 3
援助要請スタイル, 他者軽視, 自尊感情, 信頼感の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 援助要請過剰傾向	1.00							
2. 援助要請回避傾向	-0.57 **	1.00						
3. 援助要請自立傾向	0.00	-0.25 **	1.00					
4. 他者軽視	-0.20 **	0.24 **	-0.05	1.00				
5. 自尊感情	-0.05	-0.13 *	0.06	0.08	1.00			
6. 他者に対する信頼感	0.25 **	-0.32 **	0.22 **	-0.30 **	0.34 **	1.00		
7. 自身にむけられる信頼感	0.14 *	-0.26 **	0.28 **	-0.07	0.56 **	0.67 **	1.00	
8. 不信	-0.16 **	0.39 **	-0.02	0.40 **	-0.39 **	-0.45 **	-0.35 **	1.00

** $p < .01$, * $p < .05$

他者軽視と自尊感情の交互作用の検討

自尊感情と他者軽視の相対的影響および交互作用について検討するため、それらの中心化得点を説明変数、援助要請スタイルの各下位尺度得点を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。まず、Step1 に主効果の検討として自尊感情と他者軽視の中心化得点を投入した。次に、Step2 に自尊感情と他者軽視の交互作用項を投入した。結果を Table 4 に示す。

目的変数に過剰傾向を設定し、自尊感情と他者軽視の影響を検討した。他者軽視の主効果のみが有意であり ($\beta = -.43, p < .01$)、他者軽視の傾向が高いほど過剰な援助要請を行わない傾向にあることが示された。

目的変数に回避傾向を設定した場合、他者軽視 ($\beta = .52, p < .01$) と自尊感情 ($\beta = -.32, p < .01$) の効果がどちらも有意であり、他者軽視の傾向が高いほど回避傾向が高く、自尊感情が高いほど回避的な行動をとる傾向にあることが示された。

最後に、目的変数に自立傾向を設定し、自尊感情と他者軽視の影響を検討した。交互作用のみが有意であったため ($\beta = -.30, p < .05$)、単純傾斜の検定を行った。その結果、自尊感情が高い場合において、他者軽視と自立傾向に負の関連が認められた ($\beta = -.19, t = -2.39, p < .05$)。交互作用のパターンを Figure 2 に示す。

Table 4

交互作用項を含めた階層的重回帰分析の結果

	β			R^2
	他者軽視	自尊感情	交互作用	
自立傾向	-.110	.128	-.295 *	.028 *
過剰傾向	-.431 **	-.046	-.179	.048 **
回避傾向	.523 **	-.316 **	.232	.088 **

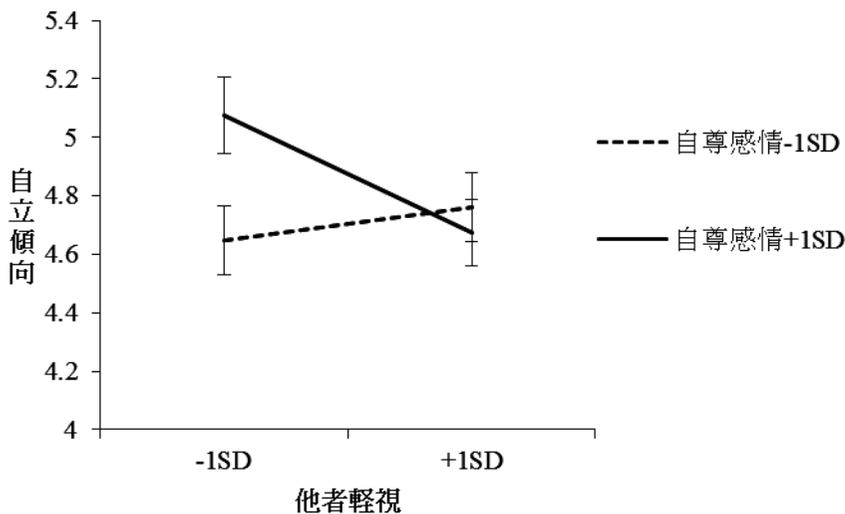
** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$ 

Figure 2. 他者軽視と自尊感情の自立傾向に対する交互作用(エラーバーは標準誤差)

萎縮型の援助要請スタイルと信頼感の関連

階層的重回帰分析の結果から他者軽視は過剰傾向とも回避傾向とも関連が示された。萎縮型の援助要請スタイルについての仮説の検証のため、自尊感情得点と他者軽視得点のどちらともが平均以下であった対象者を萎縮型群 ($n=68$) とし、分析を行った。結果は Table 5 に示した。信頼感尺度の下位因子得点と援助要請スタイル尺度の相関分析を行ったところ、過剰傾向と他者に対する信頼に、有意な正の相関 ($r = .34, p < .01$) が示された。また、回避傾向と他者に対する信頼感には、負の相関が ($r = -.40, p < .01$)、不信には、有意な正の相関が認められた ($r = .50, p < .01$)。自立傾向と信頼感には、有意な相関は示されなかった。

Table 5

萎縮型 ($n=68$) の援助要請スタイルと信頼感の相関

	1	2	3	4	5	6
1.他者に対する信頼	1.000					
2.自身に対する信頼	.501 **	1.000				
3.不信	-.355 **	-.134	1.000			
4.援助要請過剰傾向	.340 **	.281 *	-.211 +	1.000		
5.援助要請回避傾向	-.397 **	-.236 +	.503 **	-.666 **	1.000	
6.援助要請自立傾向	.061	.172	.164	-.054	-.011	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考 察

援助要請スタイル得点に性差がみられるか検討したところ、回避傾向と過剰傾向に有意な差が示された。それぞれの得点が、回避傾向においては、男性の方が女性より高く、過剰傾向においては、女性の方が高かった。これは感情を表出することや弱みを他者に見せること、他者に依存することを良しとしない伝統的性役割観が、援助要請の持つ性質に合致するものではないことが考えられている (Sears, Graham & Campbell, 2009)。男性は、自身の能力では解決が困難な悩みや問題が存在することを他者に伝えることになる援助要請を回避し、さらに過剰に他者に頼らないという選択を習慣的に行っていると推察される。

相関分析からは、他者軽視の傾向が高いほど回避傾向が高くなり、逆に過剰傾向は低くなること示された。橋本 (2013) の結果を支持するものであり、他者軽視は援助要請の生起を抑制していると推察される。

加えて、自尊感情と他者軽視の交互作用を検討するために、階層的重回帰分析を行ったところ、自立傾向に対して、他者軽視と自尊感情の交互作用が示された。さらに、自尊感情高群において他者軽視と自立傾向に負の関連が示された。このことから、自尊感情が高く、他者軽視も高い、“全能型”の有能感タイプの人々は自立的な援助要請を行わない傾向が強い。一方、自尊感情が高く、他者軽視が低い、“自尊型”の人々は仮説通り、自立的な援助要請を実行しやすいことが推察される。また、回避傾向は他者軽視と正の関連を持ち、過剰型は他者軽視と負の関連が認められた。他者軽視の側面を持つ人々は、援助要請をすることに回避的であり、他者を頼ることに対する困難さを抱えている可能性が示唆された。

萎縮型群の尺度得点を用いて相関分析から、萎縮型の援助要請が、信頼感の影響で変動するという仮説は一部支持されなかった。結果から、援助要請過剰傾向と他者に対する信頼感とで有意な正の相関が示され、援助要請回避傾向と他者に対する信頼に負の相関がみられた。このことは、他者に対する信頼感が萎縮型の個人において、援助要請スタイルの選択と重要な関係を持つことを示唆している。つまり、萎縮型の援助要請は、他者に対しての信頼感によって、援助要請スタイルの様相は大きく異なるが、いずれにしても適切な援助要請スタイルではない。そして、その結果、不適応的

な問題対処につながる可能性が推察される。

さらに、援助要請回避傾向と不信に正の相関が示された。不信因子の項目には、「今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う」や「今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである」などが含まれており、援助要請が回避的になってしまうのは、援助要請を行うことによって対人関係での不利益を被ることを想定するか、または過去に援助を要請した結果、裏切りやだまされた体験をしたことによって不信感が高まり、援助要請をしにくい状況に陥っていることが予測される。

本研究は、大学生における仮想的有能感が、援助要請スタイルに与える影響を検討した。今後は、これらの援助要請スタイルが実際の精神的健康と関連があるかを確かめる必要がある。また、対象者が大学生であるため、般化可能性を検証するためにより広範な年代に対して調査すること、援助資源の利用可能性や所属集団の性質などの環境要因を加えた検討が考えられる。さらに、より操作的な研究手法を用いて、因果関係について検討することによって、援助要請スタイルを獲得するプロセスを明らかにし、より有効な介入に役立てることが可能になるだろう。

引用文献

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- 天貝由美子 (1997). 成人期から老年期に渡る信頼感の発達 教育心理学研究, 45, 79-86.
- 青柳茉美 (2016). 大学生の信頼感と援助要請スタイル別ソーシャルサポートとの関連性 九州大学心理学研究, 17, 63-68.
- 橋本 剛 (2013). 援助要請と仮想的有能感の関連—援助要請を抑制するのは自尊感情か、他者軽視か— 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 153.
- 福沢 愛・山口 勲・先崎沙和 (2013). 自尊心のレベル・変動性と将来への肯定的な期待との関連—遠い将来への肯定的な期待が持つ脅威軽減機能について— パーソナリティ研究, 22, 117-130.
- 速水敏彦 (編) (2012). 仮想的有能感の心理学—他人を見下す若者を検証する— 北大路書房
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 1-7.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135.
- 木村真人・梅垣佑介・水野治久 (2014). 学生相談機関に対する大学生の援助要請行動のプロセスとその関連要因—抑うつと自殺念慮の問題に焦点をあてて— 教育心理学研究, 62, 173-186.
- 木村真人・水野治久 (2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて— カウンセリング研究, 37, 260-269.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 (2006). 中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究—学校心理学の視点から— カウンセリング研究, 39, 17-27.

- 永井暁行 (2016). 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連 教育心理学研究, 64, 199-211.
- 永井 智 (2010). 大学生における援助要請意図—主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因— 教育心理学研究, 58, 46-56.
- 永井 智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から— 教育心理学研究, 61, 44-55.
- Sears, H. A., Graham, J., & Campbell, A. (2009). Adolescent boys' intentions of seeking help from male friends and female friends. *Journal of Applied Developmental Psychology, 30*, 738-748.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 高比良美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12-24.
- 脇本竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 47, 160-168.
- 渡部雪子・永井 智・桑原千明 (2014). 大学生における援助要請の方法と適応との関連の検討 立正大学心理学研究年報, 5, 47-53.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 興久田巖・太田 仁・高木 修 (2011). 女子大学生の援助要請行動の領域、対象、頻度と大学生活不安および社会的スキルとの関連 関西大学社会学部紀要, 42, 105-116.

青年における境界例心性と母子イメージ及び 内的対象像との関連

上野山莉加・岡本祐子

Relationship among borderline personality traits, mother-and-child image, and internal object
in adolescence

Uenoyama Rika and Okamoto Yuko

Abstract: The current study examined the relationships between borderline personality traits, mother-and-child image and internal objects in adolescence. Questionnaires were distributed to 253 university students. In total, data from 227 participants were analyzed after excluding incomplete responses. The results revealed that, even among those who established stable mother-child relationships in early childhood and for whom “good subjects” were internalized, there was only a positive correlation with “concerns about disgust” or “connection desire”. In addition, there was a positive correlation between “bad subjects” as “relationship breaks” and “non-permanent objects” as “concerns about aversion,” “isolation”, and “connection desire”. These findings suggest that some young people desire to be hated and have connections with others. However, when characteristics such as breaking a relationship or feeling a vague sense of isolation are added, interpersonal relationships were found to be unstable, representing more borderline personality traits. In addition, we conducted interviews with 12 university students and examined how mother-child relationships in early childhood and internal objects influenced current borderline personality traits. The results revealed that, even for young participants with a stable mother-to-child relationship, youth-related characteristics and previous interpersonal relationships could affect borderline personality traits.

キーワード : adolescence, borderline personality traits, mother-and-child image, internal
object

問題と目的

青年期では、親から心理的に自立することが重要な課題である。Blos (1967) は、青年期を、親から心理的に自立し、個を確立していく「第二の分離-個体化期」と述べた。乳幼児期に未解決の分離

-個体化を巡る葛藤が再燃し、内的依存対象からの支持を失いやすい時期であると考えられている。大学生になると、一人暮らしを始めるものも多く、両親からの物理的離別にとどまらず、自分の生まれ育った場所からの社会的、心理的離別も必要となる。新たな環境の中で青年たちは、第二の分離-個体化過程を、さまざまな内的体験として経験していると考えられる。

境界例とは

境界例が青年期以降に好発しやすい疾患であることはよく知られている。Materson (1979) は、青年期境界例概念を提唱し、青年期における分離-個体化のあり方、特に対人距離のとり方が問題となる再接近期のあり方に注目している。乳幼児期の分離-個体化過程の第3段階である再接近期において、母親が安全基地として機能しない場合、後年に至って、対人関係における「再接近期」的ジレンマのテーマを再燃させることが多い (Mahler, Pine & Bergman, 1981)。

精神疾患の診断・統計マニュアル(DSM-5) (2014) によると、境界性パーソナリティ障害 (Borderline Personality Disorder:BPD) とは、対人関係、自己像、感情などの不安定性および著しい衝動性の広範な様式のことであると定義されている。具体的には、見捨てられることを避けようとするなりふりかまわない努力、不安定で激しい対人関係の様式、同一性の混乱、自己を傷つける可能性のある衝動性、自殺の行動、そぶり、脅し、または自傷行為の繰り返し、顕著な気分反応性による感情の不安定性、慢性的な空虚感、不適切で激しい怒り、または怒りの制御の困難といった9項目のうち5項目を満たす必要があるとされている。

境界例と青年期心性の類似点

このように境界例がパーソナリティ障害として把握される中で、境界例と青年期心性の類似点について、成田 (1987)、斎藤 (1990) は、自己同一性を巡る自己省察、自己拡散化、衝動統制の困難、行動化傾向、構造化された社会への抵抗といった観点から論じている。成田 (1987) は、両者の類似点として、移行的、中間的存在であること、幼児と大人を併存させていること、自己評価と他者評価が不安定でしばしば両極化することなどを挙げている。東山(1998)もまた、境界例の精神力動は青年期心性と関係していることを指摘しているが、その関連のために青年期危機の中に埋もれて境界例の症状が表面化しないことを懸念している。つまり、実際に境界例として現れている事例は一部に過ぎず、一般的な日常生活を送ることができている青年の中にも、境界例的な症状に悩まされている青年が存在することが考えられる。

このような境界例と青年期心性の類似点より、青年期においてみられる BPD 的な心的状態を境界例心性として捉える研究が多数報告されており、対人関係との関連を示した研究 (重松, 2005 ; 中西, 2010 ; 江上, 2011) や、両親をはじめとした家族との関連を示した研究 (古川・北山, 2004 ; 田村・井上, 2005 ; 大家, 2006 ; 江上, 2010 ; 松野・野末, 2015) などがある。これらの知見から、青年の境界例的な特徴への関心は低くないことが推察される。

境界例心性とは

安立 (1999) は、境界例心性について、「一般青年の境界例と類似した内的世界」と述べている。安立 (1999) 以降、着目される境界例心性には、臨床的な視点から捉える立場と、発達の視点から捉える立場があるとされている。江上 (2013) によると、臨床的視点では、境界例心性を「一般青年にみられるサブクリニカルなレベルの不安定な心理」と捉えられている。同様の視点で、古川・北山(2004)は、境界例心性を「社会的・文化的に逸脱しない範囲ではあるものの、対人関係・自己像・感情の不安定および空虚感・著しい衝動性などの人格的特徴」と定義している。また、発達の視点では、境界例心性を「非臨床群の青年に一過的に体験される境界例に類似した心性」と捉えられている。田村・井上 (2005) は、青年期における自己像の有り様や他者との関係の両面において葛藤的になりやすい「危機的」で混乱した不安定な状態を境界例心性と位置付けており、本研究でも、この位置づけを採用する。

境界例心性と両親をはじめとする家族との関連

本邦では、古川・北山 (2004) をはじめとして、境界例心性と家族との関連を検討した研究がいくつかある。大家 (2006) において、境界例心性と親子イメージとの関連が検討されているが、父親と母親を分けずに親子関係を扱っており、依存的もしくは両価的葛藤をもつ親子関係イメージが父親と母親両方に共通するものなのか、父親あるいは母親どちらかの特徴であるのかは判断することができない。子どもの発達において、子どもとの愛着形成や分離-個体化など母親との関係が強く影響するものが多いことから、本研究は母親との関係に限定し、青年の母子イメージを扱うこととする。

境界例心性と内的対象像

境界例及び境界例心性は、対人関係の不安定さが問題となる。対人関係の不安定さは、幼児期は親、青年期は友人・恋人、成人期には配偶者など、発達段階ごとに、「重要他者」は入れ替わるものの、同じパターンの対人的問題を繰り返すことが多い。

対人関係の不安定さを考えるにあたって、精神分析的な治療理論では、こうした対人関係を対象関係 (Object Relations) という概念で扱っている。対象関係とは、「対人場面における個人の態度や行動を規定する、精神内界における自己と対象 (他者) との関係性の表象」である。対象が目の前にいなくなっても相手が愛や慰めを与えてくれるというイメージを保てたり、対人場面で葛藤が生じても柔軟に内的対象の修正を行ったりすることが対人関係の安定につながる (馬場, 2002)。このような安定した内的対象像を確立するためには、幼児期の母子関係が重要となる。

井梅 (2011) は、幼児期、および現在の母親との関係性が対象関係に及ぼす影響について検討した。その結果、幼児期の安定的な母子関係は良好な対象関係に、拒否的およびアンビバレントな母子関係は、その逆の関連性がみられた。また重松 (2005) は、青年期における孤独感と境界例心性との関連および内的メカニズムを検討し、境界例心性が高いほど孤独感が高く、ひとりであられず、不安定な「永続しない対象」や迫害的な「悪い対象」を想起しやすいことを示した。

以上のことから、幼児期の母子関係のあり方が、青年の境界例心性や青年の抱く内的対象像に影響することが考えられる。幼児期の母子関係はそのまま現在の対象関係に影響を及ぼすわけではなく、その後の関係性において絶えず修正されながら形づくられていくこと(井梅, 2011)から、現在の母子イメージも青年の内的対象像に影響していると考えられる。よって、本研究では、青年における境界例心性と幼児期及び現在の母子イメージと内的対象像に着目する。

目的

以上のことから、本研究では、以下の3点を目的とする。①青年における境界例心性と母子イメージ及び内的対象像との関連を検討する(研究Ⅰ)、②母子画を用いて、母子イメージと境界例心性の高さにどのような関連があるかを検討する(研究Ⅱ)、③青年の母子関係や内的対象像がどのように現在の境界例心性の高さに影響するのかを質的に検討する(研究Ⅲ)。

研究Ⅰ

目的

青年における境界例心性と母子イメージ及び内的対象像との関連を数量的に検討する。

仮説

- (1) 幼児期の拒否的あるいはアンビバレントな母子関係は、青年の内的対象像の中で、「悪い対象」「永続しない対象」を介して、青年期の境界例心性の高さに影響する。
- (2) 幼児期の安定的な母子関係は、青年の内的対象像の中で「良い対象」を介して、青年期の境界例心性の低さに影響する。
- (3) 就学前の母子関係が拒否的あるいはアンビバレントであっても、現在の母子関係が良好であれば、境界例心性は高くない。

方法

調査対象者 国立A大学の大学生146名、私立B大学の大学生107名の計253名に質問紙を配布、回収した。著しく欠損値のあるデータ16部、30歳以上のデータ10部を除外し、最終的な分析対象者は227名であり(男性63名、女性162名、不明3名)、有効回答率は89.7%であった。平均年齢は、19.9歳、 $SD = 1.5$ であった。

手続き 個別自記入形式の質問紙調査であり、授業後に筆者または代理人によって集合調査形式で実施された。回答依頼時に、調査への参加は自由であること、途中で中断することも可能であること、データは統計的に処理され個人が特定されることはないことを、文書と口頭での説明で合意を得た。回答はいずれも無記名で行われた。実施時間は約10分であった。

質問紙の構成 (1) 田村・井上(2005)による対人関係における境界例心性尺度、全22項目、4件法。「嫌悪に対する概念」、「孤立感」、「関係断絶」、「つながり希求」の4因子構造からなる。(2) 酒井(2001)による就学前の母子関係イメージ尺度、全16項目、6件法。「就学前の安定的な母子関係」、「就学前の拒否的な母子関係」、「就学前のアンビバレントな母子関係」の3因子構造からなる。

(3) 北村・無藤 (2001) による現在の母子イメージ尺度, 全 26 項目, 5 件法。「母親との親密性」, 「母親との過剰な依存・接触」の 2 因子構造からなる。(4) 重松 (2005) による内的対象尺度, 全 24 項目, 7 件法。「良い対象」, 「悪い対象」, 「永続しない対象」の 3 因子構造からなる。(5) フェイス項目 (所属, 年齢, 性別, 現在母親と同居か別居か)。

分析方法 HAD を用いて, 分析を行った。

結果

対人関係における境界例心性尺度の因子構造の検討 まず, 境界例心性尺度について, 先行研究と同様に 4 因子構造となることを確かめるため, 確認的因子分析を行った。しかし, 欠損値が多く, 十分なパラメーターサイズではなかったため, 適合度を算出することができなかった。境界例心性尺度は, 得点が高いほど, 境界例心性の傾向が強くなるため, 平均値を代入してもそれぞれの調査対象者の傾向はそれほど変わらないと判断し, 欠損箇所それぞれの調査対象者の平均値を代入して, 再度確認的因子分析を行った。その結果, CFI = .877, RMSEA = .076 となり, 許容できる範囲の適合度であった。先行研究と同様に, 第 1 因子を【嫌悪に対する懸念】因子, 第 2 因子を【孤立感】因子, 第 3 因子を【関係断絶】因子, 第 4 因子を【つながり希求】因子とした。クロンバックの α 係数は, 第 1 因子から順に, .83, .87, .73, .85, ω 係数は, 第 1 因子から順に, .84, .87, .73, .85 となり, 十分な内的整合性が得られた。確認的因子分析の結果を Table 1 に示した。

Table 1
対人関係における境界例心性尺度・確認的因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
1. 【嫌悪に対する懸念】 (7項目), $\alpha=.83$, $\omega=.84$					
11. ちょっとしたしぐさからでも, 相手が自分を嫌っているかもしれないと思う。	.769	.000	.000	.000	.592
15. 相手が不機嫌だとその人から見捨てられたように思う。	.767	.000	.000	.000	.588
22. 相手が不機嫌だと, 自分が悪い気がする。	.705	.000	.000	.000	.498
17. 今は傍にいる人でもいつか自分から離れていくのではないかと感じる。	.691	.000	.000	.000	.477
1. 大切な人に対して, 相手が自分のことを嫌っていないか確かめずにはいられない。	.639	.000	.000	.000	.409
3. 好きな人や親しい人に対して, 批判したり違う意見を言ったりすると, いつでも自分が悪い気がする。	.472	.000	.000	.000	.223
14. 親しい人から何かを頼まれると, 自分には無理なことでもなかなか断れない。	.422	.000	.000	.000	.178
2. 【孤立感】 (4項目), $\alpha=.87$, $\omega=.87$					
18. とにかくひとりにはなりたくない。	.000	.845	.000	.000	.714
19. ひとりしていると, 心の中が空っぽな気がする。	.000	.818	.000	.000	.669
21. ひとりしていると, さみしさにうちのめされる気がする。	.000	.818	.000	.000	.669
10. ひとりしていると, 何も無い空間にとり残されたような気持ちになる。	.000	.710	.000	.000	.504
3. 【関係断絶】 (7項目), $\alpha=.73$, $\omega=.73$					
13. 私にとって, 人と長い親密に付き合い続けることは難しい。	.000	.000	.596	.000	.355
4. 自分のほうから人との関係を断ち切る (離れていく・別れる) ことが多い。	.000	.000	.596	.000	.355
7. 相手が不機嫌だと, その人のことを好きではいられない。	.000	.000	.579	.000	.335
5. 嫌になったらいつでも自分から離れられると思えるから人とつきあっていられる。	.000	.000	.531	.000	.282
8. 大切な相手から拒絶されるくらいならその前に自分から関係を断つ方がましだ。	.000	.000	.493	.000	.243
20. 完全に誰かに頼るか, まったく頼らないで一人でやっていくしかできない。	.000	.000	.453	.000	.205
2. 相手のことを親身になって考えてあげられるのは, その人が自分の目の前に存在しているときだけだ。	.000	.000	.438	.000	.192
4. 【つながり希求】 (4項目), $\alpha=.85$, $\omega=.85$					
12. 誰でもいいから誰か私の傍にいてほしい。	.000	.000	.000	.802	.643
9. 誰でもいいからいつも誰かとつながっていたい。	.000	.000	.000	.777	.604
6. 誰かと直接ふれあっていないと私は生きていけないんじゃないかと思う。	.000	.000	.000	.774	.598
16. 近くにいる誰かにいつも私のことを気にかけてほしい。	.000	.000	.000	.703	.494

境界例心性尺度得点の分類 境界例心性尺度得点の平均= 48 点, $SD = 11$ であった。平均から 11 点以上の者を高群 (59 点以上), 11 点以下の者を低群 (37 点以下) とした。その結果, 高群 44 名, 低群 41 名であった。

就学前の母子関係イメージ尺度の因子構造の検討 次に, 幼児期の母子関係イメージ尺度について, 先行研究と同様に 3 因子構造となることを確かめるため, 確認的因子分析を行った。その結果, $CFI = .863$, $RMSEA = .082$ となり, 許容できる範囲の適合度であった。先行研究と同様に, 第 1 因子を【就学前の安定的な母子関係】因子, 第 2 因子を【就学前の拒否的な母子関係】因子, 第 3 因子を【就学前のアンビバレントな母子関係】因子とした。クロンバックの α 係数は, 第 1 因子から順に, .82, .67, .70, ω 係数は, 第 1 因子から順に, .84, .69, .70 となり, 十分な内的整合性が得られた。確認的因子分析の結果を Table 2 に示した。

Table 2
就学前の母子関係イメージ尺度・確認的因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
1. 【就学前の安定的な母子関係】 (6項目), $\alpha=.82$, $\omega=.84$				
10. 母親と遊ぶのが楽しかった。	.791	.000	.000	.626
7. 私は母親のそばで安心感があった。	.789	.000	.000	.622
13. 母親と出かけるのがうれしかった。	.743	.000	.000	.552
1. 私は母親を好きだった。	.737	.000	.000	.543
16. 私はよく母親に, ほめられた。	.575	.000	.000	.331
4. 私は母親が何をしても, それに関心がなかった。*	-.362	.000	.000	.131
2. 【就学前の拒否的な母子関係】 (5項目), $\alpha=.67$, $\omega=.69$				
8. 私が泣いていても, 母親は関心がなかった。	.000	.700	.000	.491
11. 助けて欲しいときに, 母親は助けてくれないことがあった。	.000	.680	.000	.462
14. 私は母親の愛情がうすいと思ったことがあった。	.000	.650	.000	.422
5. いつか見捨てられるのではないかと思った。	.000	.557	.000	.310
2. 私は同じことをしても怒られたり, 怒られなかったりした。	.000	.207	.000	.043
3. 【就学前のアンビバレントな母子関係】 (5項目), $\alpha=.70$, $\omega=.70$				
3. 母親が出かける時には, むりやりついて行こうとした。	.000	.000	.653	.427
6. 母親がそばにいないと, 夜眠れなかった。	.000	.000	.653	.427
12. 何かあれば, 母親はすぐに来てくれると思っていた。	.000	.000	.536	.287
9. 幼稚園(保育園)に行っても, 母親のことを思い出してずっと泣いていたことがあった。	.000	.000	.506	.256
15. 親戚の家に遊びに行っても, 親がいないとこわかった。	.000	.000	.491	.241

*は逆転項目

現在の母子イメージ尺度の因子構造の検討 次に, 現在の母子イメージ尺度について, 先行研究と同様に 2 因子構造となることを確かめるため, 確認的因子分析を行った。その結果, $CFI = .666$, $RMSEA = .098$ となり, 適合度は不十分であった。ゆえに, 因子構造の検討のため, 最尤法及びプロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値が第 1 因子から順に, 5.989, 3.678, 1.914, 1.437, 1.300, 平行分析が第 1 因子から順に, 1.727, 1.598, 1.522, 1.446, 1.377 と推移していたため, 3 因子解が妥当であると判断した。そこで, 因子数を 3 に固定し, 再度因子分析を行った。因子負荷量が .35 以下となった項目 (7. 「私は自分のことよりも母親のことを優先する。」, 20. 「母親

に頼られたくない。）」を除外し、再度因子分析を行った。同様に、.35以下となった項目(14.「母親のことをあれこれ心配しすぎることはない。」、21.「母親のために自分を犠牲にすることはない。）」を除外し、再度因子分析を行った。第1因子は、先行研究で得られた結果と同様の因子のまとまりがみられたため、【母親との親密性】因子とした。第2因子は、先行研究で得られた結果とは異なっており、「母親に対して、穏やかな感情を持って接することができずに、ついイライラしてしまう。」「母親をうっとうしく感じる。」「理由もなく、母親に怒りを感じることもある。」など母親に対する嫌悪感や攻撃性が表れている項目の得点が低いことから、【母親に対する嫌悪感のなさ】因子と命名した。第3因子は、先行研究で得られた結果と同様の因子のまとまりがみられたため、【母親との過剰な依存・接触】因子とした。クロンバックの α 係数は、第1因子から順に、.85、.78、.77、 ω 係数は、第1因子から順に、.86、.80、.79となり、十分な内的整合性が得られた。因子分析の結果をTable 3に示した。

Table 3
現在の母子イメージ尺度の因子分析結果 (プロマックス回転・最尤法)

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
1. 【母親との親密性】(10項目), $\alpha=.85$, $\omega=.86$				
5. 母親は私のことを信頼してくれていると思う。	.849	-.083	-.089	.640
4. 非常に困ったときには、母親が話を聞いてくれると思う。	.825	-.210	.158	.614
1. 母親は私の感情を理解しようとしてくれていると思う。	.802	-.024	.022	.630
22. 母親がもっと自分のために時間を割いてくれても良いはずだと、母親に対して怒りを感じる。*	.532	-.019	-.206	.283
6. 母親は干渉しないが、いつも私のことを気にかけてくれる。	.501	.284	-.004	.479
23. 母親は私の期待を裏切ることが多い。*	.487	.229	-.122	.409
16. 母親は私に関心を示さない。*	.474	-.074	.007	.195
15. 自然に母親と温かい関係を保つことができる。	.441	.292	.200	.466
25. 母親のために何かしてあげることが、私にとって非常に重要なことである。	.378	.055	.279	.272
9. 母親との間には消しがたい壁がある。*	.370	.205	-.101	.262
2. 【母親に対する嫌悪感】(3項目), $\alpha=.78$, $\omega=.80$				
3. 母親に対して、穏やかな感情を持って接することができずに、ついイライラしてしまう。*	-.095	.804	-.006	.578
26. 母親をうっとうしく感じる。*	.109	.745	.087	.646
24. 理由もなく、母親に怒りを感じることもある。*	.333	.466	-.092	.499
3. 【母親との過剰な依存・接触】(9項目), $\alpha=.77$, $\omega=.79$				
18. 母親に反対されると自信がなくなる。	.046	.004	.717	.526
13. 母親に相談しないと自分のすげきことに自信を持ってない。	.116	-.096	.683	.515
19. 母親がいないと、私は何もできないだろう。	-.043	.017	.653	.417
11. 自分の思い通りに、母親がそばにいてくれないとイライラする。	-.169	.042	.500	.244
17. 母親から慰めを得られないと(母親が相談相手として頼りにならないと)腹を立てることがある。	-.038	-.277	.495	.362
2. 母親にあまりにも頼りすぎていると思う。	.094	.031	.467	.240
12. あれこれと母親の世話をせずにはいられない。	-.096	.043	.429	.175
8. 母親に守られていた子どもの頃に、もう一度戻ることができたらと思う。	-.195	.381	.418	.221
10. 母親が問題を抱えていることを知ると、自分の仕事に手がつかなくなる。	.068	.091	.402	.180

*は逆転項目

内的対象尺度の因子構造の検討 次に、内的対象尺度について、先行研究と同様に3因子構造となることを確かめるため、確認的因子分析を行った。その結果、CFI=.849、RMSEA=.083となり、許容できる範囲の適合度であった。先行研究と同様に、第1因子を【永続しない対象】因子、第2因子を【悪い対象】因子、第3因子を【良い対象】因子とした。クロンバックの α 係数は、第1因

子から順に、.90, .87, .74, ω 係数は、第1因子から順に、.90, .87, .74 となり、十分な内的整合性が得られた。確認的因子分析の結果を Table 4 に示した。

Table 4
内的対象尺度・確認的因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
1. 【永続しない対象】(10項目), $\alpha=.90$, $\omega=.90$				
10. 私一人が席を外すと、みんなが私の悪口を言っているような気がする。	.782	.000	.000	.611
23. 仲のよい人でも、次にどのような行動に出るのか予測がつかず不安だ。	.773	.000	.000	.597
17. 自分の意見を反対されると、その人は自分のことを悪く思っているような気がする。	.760	.000	.000	.578
16. 絶えず会っていないと、関係が切れてしまうような気がする。	.735	.000	.000	.541
11. しばらく連絡がないと、もうその人から嫌われてしまったのではないかと心配になる。	.725	.000	.000	.526
7. 今は親友であっても、この先けんかして別れることになるんじゃないかと心配になる。	.705	.000	.000	.497
1. 友人と久しぶりに会うとき、以前と同じように話ができるかどうか不安だ。	.683	.000	.000	.466
12. 手紙を出してもすぐに返事がこない、相手の気を悪くしたのではないかと心配になる。	.646	.000	.000	.417
2. 親しい人でも離れていると、その人が存在しているという確信がもてない。	.629	.000	.000	.396
22. 昔のことを考えると、いやな記憶ばかりよみがえる。	.534	.000	.000	.285
2. 【悪い対象】(8項目), $\alpha=.87$, $\omega=.87$				
20. 私は、親しい友人に対してもなんらかの疑いをもっている。	.000	.803	.000	.646
19. 人から優しくされても、つい疑ってしまう。	.000	.783	.000	.613
14. 仲のよい友人で会っても、私が成功すると心のどこかで妬むだろう。	.000	.776	.000	.602
21. ふと目があうと、その人が自分のことを快く思っていないように感じる。	.000	.708	.000	.501
13. 一緒にいるときと離れているときで、その人への態度が極端に変化してしまう。	.000	.665	.000	.442
15. 離れていると、その人のいやな面ばかり思い出してしまうことがある。	.000	.630	.000	.396
8. みんなと協力してなにかに取り組んでも、連帯感が湧かない。	.000	.514	.000	.264
4. 好きな人でさえ、憎くて憎くてしょうがないときがある。	.000	.497	.000	.247
3. 【良い対象】(6項目), $\alpha=.74$, $\omega=.74$				
18. 人からの自分に対する親切なお言葉や行動は心のなかに刻み込まれている。	.000	.000	.731	.535
6. 落ち込んだとき、誰か自分の味方になってくれそうな人のことを思い浮かべる。	.000	.000	.623	.388
5. どんなときでも誰かが自分を見守ってくれているような機がする。	.000	.000	.603	.364
24. 自分の大切な人が亡くなっても、その人は心のなかに生き続けていると感じる。	.000	.000	.579	.335
9. なにか決断するときに、「あの人がいたらどうするだろう」と考えることがある。	.000	.000	.456	.208
3. 親友が本当に私のことを心配してくれたことを、これまで片時も忘れたことはない。	.000	.000	.417	.173

各尺度における下位因子の相関分析 境界例心性尺度、就学前の母子関係イメージ尺度、現在の母子イメージ尺度、内的対象尺度の下位因子ごとの相関係数を算出した (Table 5)。その結果、「良い対象」は「嫌悪に対する懸念」($p<.01$)、「孤立感」($p<.05$)、「つながり希求」($p<.01$) と正の関連があることが示された。これは先行研究と異なる結果であった。また、現在の母親イメージにおいて、「母親との過剰な依存・接触」は、境界例心性尺度のどの下位因子とも正の関連があることが示された (いずれも $p<.01$)。

Table 5
各尺度における下位因子の相関分析結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1. 嫌悪に対する懸念	—												
2. 孤立感	.57**	—											
3. 関係断絶	.44**	.19**	—										
4. つながり希求	.64**	.75**	.24**	—									
5. 安定的な母子関係	.04	.02	.05	.11	—								
6. 拒否的な母子関係	.24**	.17*	.18**	.16*	-.36**	—							
7. アンビバレントな母子関係	.24**	.13*	.12+	.21**	.48**	.05	—						
8. 母親との親密性	.02	-.04	-.09	.02	.64**	-.49**	.27**	—					
9. 母親に対する嫌悪感のなさ	-.08	-.04	-.21**	-.11	.32**	-.28**	.13*	.57**	—				
10. 母親との過剰な依存・接触	.36**	.24**	.31**	.28**	.32**	.13+	.48**	.13*	-.05	—			
11. 永続しない対象	.72**	.49**	.40**	.50**	-.04	.38**	.26**	-.19**	-.21**	.46**	—		
12. 悪い対象	.51**	.32**	.54**	.33**	-.02	.33**	.16*	-.19**	-.28**	.35**	.79**	—	
13. 良い対象	.35**	.17*	.07	.32**	.35**	.00	.29**	.32**	.11+	.29**	.23**	.12+	—

**p<.01, *p<.05, +p<.10

性差の検討 性差の検定を行うために、境界例心性尺度について t 検定を行った。その結果、有意差は認められなかった ($t = .64, df = 222, n.s.$)。

幼児期の母子関係、内的対象像、境界例心性得点の関連 仮説 (1), (2) を検討するために、幼児期の母子関係、内的対象像、境界例心性得点において、SEM を行い、パス図を作成した (Figure 1)。この時、幼児期の母子関係と内的対象像の下位因子間に共分散を仮定した。CFI = .993, RMSEA = .051 となり、適合度は十分であった。幼児期の「拒否的な母子関係」、「アンビバレントな母子関係」は、「永続しない対象」を介して、境界例心性の高さと正の関連がみられたが、「悪い対象」と境界例心性の高さに関連はみられなかった。また、幼児期の「安定的な母子関係」は、「良い対象」を介して、境界例心性の高さと正の関連がみられた。以上から、仮説は一部支持された。

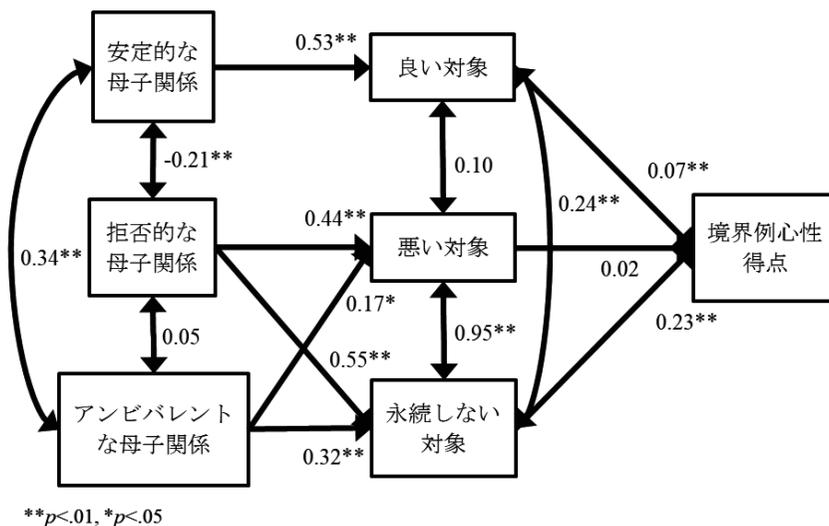


Figure 1. 幼児期の母子関係、内的対象像、境界例心性尺度との関連

幼児期の母子関係，内的対象像，境界例心性尺度の各下位因子との関連 次に，境界例心性尺度の下位因子ごとに SEM を行い，パス図を作成した (Figure 2)。この時，幼児期の母子関係と内的対象像，境界例心性尺度の各下位因子間に共分散を仮定した。CFI=1.000，RMSEA=.000 となり，適合度は十分であった。幼児期の「安定的な母子関係」は，「良い対象」を介して，「嫌悪に対する懸念」と「つながり希求」と正の関連があることが示され，仮説と異なる結果となった。また，幼児期の「拒否的な母子関係」，「アンビバレントな母子関係」は，「永続しない対象」を介して，「嫌悪に対する懸念」，「孤立感」，「つながり希求」と正の関連がみられた。一方で，「関係断絶」とは関連がみられなかった。また，幼児期の「拒否的な母子関係」，「アンビバレントな母子関係」は，「悪い対象」を介して，「嫌悪に対する懸念」と負の関連，「孤立感」と負の有意傾向，「関係断絶」と正の関連がみられた。一方で，「つながり希求」とは関連がみられなかった。

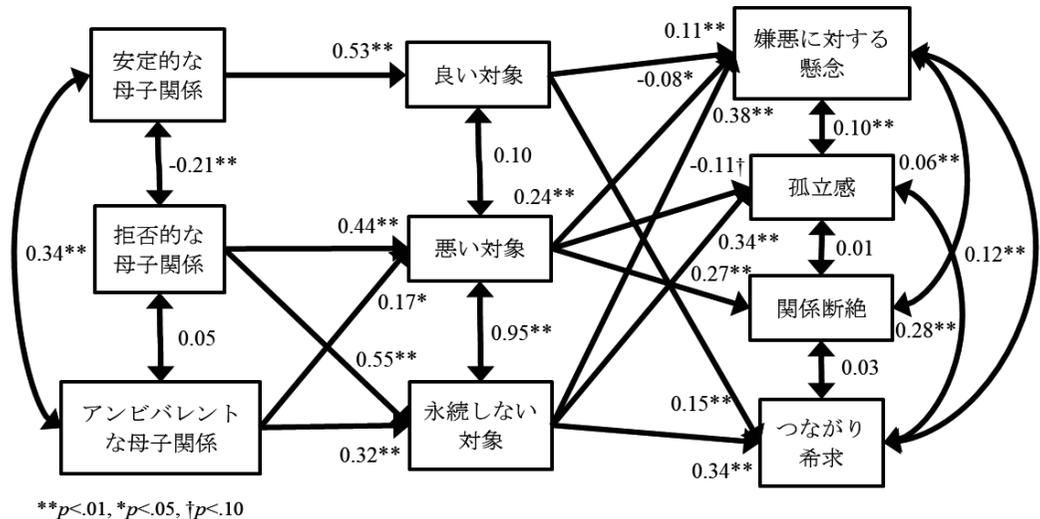


Figure 2. 幼児期の母子関係，内的対象像，境界例心性尺度の各下位因子との関連

幼児期の母子関係，現在の母子関係，境界例心性得点の関連 仮説 (3) を検討するために，幼児期の母子関係，現在の母子関係，境界例心性得点において，SEM を行い，パス図を作成した。CFI=.772，RMSEA=.238 となり，適合度は十分ではなかった。そのため，幼児期の母子関係，現在の母子関係，境界例心性尺度の下位因子ごとに SEM を行い，パス図を作成した (Figure 3)。この時，境界例心性尺度の各下位因子間に共分散を仮定した。CFI=.947，RMSEA=.117 となり，許容できる範囲の適合度であった。幼児期の「拒否的な母子関係」は，現在の「母親との親密性」と負の関連があるが，「母親との親密性」を介して，境界例心性尺度の各下位因子との関連はみられなかった。また，幼児期の「アンビバレントな母子関係」は，現在の「母親との親密性」と正の関連があるが，「母親との親密性」を介して，境界例心性尺度の各下位因子との関連はみられなかった。

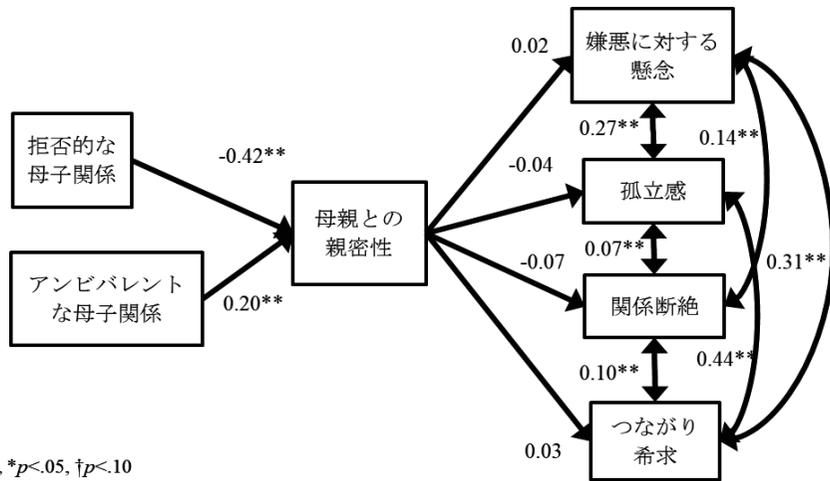


Figure 3. 幼児期の母子関係，現在の母子関係，境界例心性尺度の各下位因子との関連

考察

研究Iの目的は，青年における境界例心性と母子イメージ及び内的対象像との関連を数量的に検討することであった。

各尺度における下位因子の相関分析 境界例心性尺度，就学前の母子関係イメージ尺度，現在の母子イメージ尺度，内的対象尺度の下位因子ごとの相関係数を算出したところ，「良い対象」は「嫌悪に対する懸念」($p < .01$)，「孤立感」($p < .05$)，「つながり希求」($p < .01$)と正の関連があることが示された。これは先行研究(重松, 2005)と異なる結果であった。これらのことから，「良い対象」が内在化している者でも，対人関係において，嫌われることに対する不安や孤立感，人とのつながり欲求をある程度は感じており，青年期心性として理解することができると考えられる。

また，現在の母親イメージにおいて，「母親との過剰な依存・接触」は，境界例心性尺度のどの下位因子とも正の関連があることが示された(いずれも $p < .01$)。このことから，幼児期の母子関係だけでなく，現在の母子関係，特に母子ともに心理的に密着している関係も青年の境界例心性の高さに影響を及ぼすことが考えられる。

性差の検討 境界例心性尺度得点に性差はみられず，先行研究と異なる結果を示した。しかし，古川・北山(2004)や大家(2006)，江上(2010)など非臨床群を対象とした研究では，いずれも性差がみられなかった。境界例心性は青年期における一過性の事象であるが，発達の中で，病理水準が重くなり，将来的に境界例を発症する可能性が高くなるのが女子であると考えられる。よって，非臨床群では性差がみられなかったと推察される。

幼児期の母子関係，内的対象像，境界例心性との関連 仮説(1)は，幼児期の母子関係，内的対象像，境界例心性尺度全体をみると支持された。しかし，境界例心性尺度の下位因子ごとにパス図を作成すると，「永続しない対象」は，「嫌悪に対する懸念」，「孤立感」，「つながり希求」と正の関連がみられたが，「関係断絶」とは関連がみられなかった。また，「悪い対象」は，「嫌悪に対する懸

念」と負の関連、「孤立感」と負の有意傾向、「関係断絶」と正の関連がみられたが、「つながり希求」とは関連がみられなかった。永続しない内的対象像をもつ者は、孤立感を感じ、人とのつながり欲求を持ちながらも、嫌われることへの不安を抱いており、親しくなりたいが、相手にありのままをさらけ出すと嫌われてしまうかも知れないという葛藤状態にある。また、悪い内的対象像をもつ者は、嫌われる不安を抱く前に、自分から関係を断つといった特徴を持つ。仮説 (2) において、幼児期の「安定的な母子関係」は、「良い対象」を介して、「嫌悪に対する懸念」、「つながり希求」と正の関連がみられた。これは先行研究と異なる結果であり、仮説を支持しなかった。このことについて、一般青年の青年期心性として「嫌悪に対する懸念」、「つながり希求」が特徴としてあげられる。人とつながりたいが、嫌われることが恐いという考えは、対人関係、特に親密な関係の形成において、誰しもが感じるものである。よって、「安定的な母子関係」が内在化している者でも、親以外の親密な他者との関わりで、「嫌悪に対する懸念」や「つながり希求」を抱くことが考えられる。

以上のことから、それぞれの内的対象像によって、境界例心性の状態像が異なる可能性が示唆された。重松 (2005) は、境界例心性と「永続しない対象」、「悪い対象」との関連を述べ、境界例心性の特徴を有する青年の内的対象像は、「悪い対象」、「永続しない対象」であることを示した。本研究では、「悪い対象」、「永続しない対象」のパスを見ると、境界例心性尺度のすべての下位因子と関連がみられたことから、「嫌悪に対する懸念」、「孤立感」、「関係断絶」、「つながり希求」の4つの因子を持ち合わせていること、すべてを包括することによって、境界例心性につながるものが考えられる。「良い対象」と境界例心性尺度の「嫌悪に対する懸念」と「つながり希求」に正の関連がみられたが、これらは青年期心性として捉えることができ、「孤立感」、「関係断絶」の有無で、境界例心性か青年期心性かを区別できると考えられる。

幼児期の母子関係、現在の母子関係、境界例心性との関連 仮説 (3) は、支持されなかった。これは、現在の母親との関係性だけが境界例心性の高さに影響する可能性は低いこと、つまり、青年期は親から心理的に自立する時期であり、親よりも友人や恋人との関係性の影響が強いことによると考えられる。現在の母親との関係性が直接境界例心性の高さと関連があるとはいえない。母親との関係性だけでなく、友人や恋人など他の対人関係も考慮し、境界例心性の高さと関連を検討する必要があると考えられる。

研究II

問題

心理アセスメントや心理療法の場面において用いられる投影法の1つとして、母子画 (Mother and Child Drawings) が挙げられる。これは、Gillespie (1994) が考案した対象関係論を理論背景とする描画法であり、「お母さんと子どもを描いて下さい」という教示の下で実施される。

Gillespie (1994) は、母子画によって対象関係のなかの自己や早期の母子関係について知ることができ、さらに母子分離のレベルを測ることもできるとしている。また、母子画には描いた人の自己認知や他者の受け止め方、他者との関係様式が反映されると考え、自己の体験と重要な人物との関係を通しての体験の両方についてのメッセージを伝えるものとして検討できるとしている。

馬場 (2005) は、母子画を精神力動的な心理療法を前提にした心理アセスメントの手段として大いに期待できる技法であるとし、日本で最初に母子画の基礎的研究を行った。馬場 (2005) は、集めた母子画を分析した結果、母子画の基本的パターンとして、①母親像と子ども像が正面を向いて手をつないでいる絵、②母子像の表情はともに笑顔である絵という 2 つが見出された。

目的

母子画を用いて無意識に表れる母子イメージと境界例心性の高さの関連を検討する。

仮説

馬場 (2005) を参考に、境界例心性が高い対象者の描く母子画の特徴として、描かれる人物像が後ろ姿、または手をつなぐなどの身体接触がないこと、母子像の表情に笑顔がみられないことが考えられる。

方法

調査対象者 研究Iの質問紙で、研究IIへの協力を承諾した大学生 13 名 (男性 5 名、女性 8 名) であった。平均年齢 20.1 歳、 $SD=0.5$ 、境界例心性得点の平均は 54 点であった。

調査材料 A4 のケント紙 1 枚。2B の鉛筆。消しゴム。調査同意書。質問表。

手続き 最大 4 名の集合調査にて、馬場 (2005) の手続きに倣い、母子画を実施した。調査同意書に署名後、「お母さんと子どもの絵を描いて下さい」と教示し、自由に描いてもらった。描画終了後に、質問表を配布し、「親子は何をしているところですか?」、「子どもは何を考えていますか?」、「母親は何を考えていますか?」、「絵を描いてみての感想を教えてください」という質問に回答を依頼した。

結果

それぞれの対象者のプロフィールと母子画の特徴を Table 6 に示した。なお、研究IIIのプロフィールと対象者の ID は一致している。

Table 6
調査対象者のプロフィールと母子画の特徴

ID	年齢	性別	境界例心性得点	母子画の特徴				備考
				形態	サイズ	表情	身体接触	
A	20	男性	49	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	なし	
B	20	女性	51	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	
C	20	女性	61	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	境界例心性高群
D	20	男性	56	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	
E	20	女性	52	母正面, 子横	全身	母子共に非笑顔	なし	
F	20	女性	54	母子共に正面	顔のみ	母子共に笑顔	なし	
G	21	男性	32	母子共に後ろ姿	全身	母子共に非笑顔	あり	境界例心性低群
H	19	女性	55	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	
I	20	男性	59	母子共に後ろ姿	全身	母子共に非笑顔	あり	境界例心性高群
J	21	男性	67	母子共に正面	半身	母子共に笑顔	なし	境界例心性高群
K	20	女性	74	母子共に正面	全身	母子共に非笑顔	あり	境界例心性高群
L	20	女性	48	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	
M	20	女性	42	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	

Table 6 より、境界例心性高群の母子画の特徴として、「母子共に正面」、「後ろ姿」、「母子共に笑顔」、「非笑顔」、「身体接触あり」、「身体接触なし」がみられた。また、境界例心性低群の母子画に、「母子共に後ろ姿」、「母子共に非笑顔」がみられた。よって、仮説は支持されなかった。また、対象者数が少ないこともあり、境界例心性の高さと関連する母子画の特徴を述べることは困難であった。

考察

対象者が少なかったことから、境界例心性の高さと母子画の特徴を述べることは難しく、仮説は支持されない結果となった。境界例心性の高低に関わらず、母子が共に笑顔のあたたかい関わりの絵を描く者が多かった。このことから、調査対象者は非臨床群であり、基本的には安定した母子関係を有していたことが推察される。

研究III

目的

青年の母子関係や内的対象像がどのように現在の境界例心性の高さに影響するのかを質的に検討する。なお、青年期は母子関係だけではなくその他の対人関係も重要となってくるため、幅広い対人関係に着目して、境界例心性の高さに至るまでのプロセスを具体的に検討することを目的とする。

方法

調査対象者 研究IIの調査で、研究IIIへの協力を承諾した大学生 12 名 (男性 5 名、女性 7 名) であった。平均年齢 20.1 歳、境界例心性得点の平均 55 点であり、境界例心性高群が 4 名 (男性 2 名、女性 2 名)、境界例心性得点が平均 (研究Iの平均 48 点) 以上の対象者が 7 名 (男性 2 名、女性 5 名)、境界例心性低群が 1 名 (男性 1 名) であった。調査対象者のプロフィールを Table 7 に示した。

Table 7
面接調査対象者のプロフィール

ID	年齢	性別	親と同居/別居	境界例心性得点	備考
A	20	男性	別居	49	
B	20	女性	別居	51	
C	20	女性	別居	61	境界例心性高群
D	20	男性	別居	56	
E	20	女性	別居	52	
F	20	女性	別居	54	
G	21	男性	別居	32	境界例心性低群
H	19	女性	別居	55	
I	20	男性	別居	59	境界例心性高群
J	21	男性	別居	67	境界例心性高群
K	20	女性	別居	74	境界例心性高群
L	20	女性	同居	48	

手続き プライバシーに配慮した部屋で、個別に半構造化面接を行った。面接は1時間30分を要し、内容はすべて対象者の承諾を得て録音し、後日、逐語記録を作成した。

倫理的配慮 協力者の権利（面接調査への参加は自由であること、いつでも面接の中止を求めることができること等）、プライバシー保護について文書・口頭で説明し、承諾を得た。また、その上で面接結果を公表することの許可を得た。

面接内容 面接項目を Table 8 に示した。

Table 8
面接項目

①家族構成	家族の年齢，同居か別居か，出身地，帰省頻度
②母親との早期記憶	何才の時の記憶か，場所，周りの情景，その時の気持ち
③母子画について	実体験の場合→何才の時か，この時の気持ち，場面を選んだ理由 実体験でない場合→実体験を描かなかった理由，実体験を描くとしたらどんな場面を描くか
④幼児期の母子イメージ	母子イメージが変化することはあったか，変化の時期，理由
⑤現在一番親しい人について	関係性，親しくなり始めた時期，ありのままをさらけ出しているか，その人からの評価は気になるか，一緒にいるとどんな気持ちになるか，関わりの中での印象的なエピソード，その人に抱くイメージ
⑥これまでの対人関係について	幼児期，児童期，思春期，青年期の人に抱くイメージ，イメージが変化した時期，理由 どんな風にイメージが変わったか，その時の気持ち

分析方法 本研究は、ある程度の安定的な母子関係が基盤としてあるものの、現在の境界例心性の高さに影響する出来事や内的対象像の変容プロセスを分析することがねらいであるため、TEM (Trajectory Equifinality Model : 複数経路・等至点モデル) を採用した。安田・サトウ (2012) を参考に、以下の手順で分析を実施した。まず、①逐語録を作成し、幼児期の母子関係、現在の母子関係、これまでの対人関係、現在親密感のある人との関係についての語りをそれぞれ抽出し、意味のまとまりごとに切片化した。切片化された語りに見出しをつけ、対象者ごとに時間経過に沿って並べた。対象者間で類似した見出しをまとめ、カテゴリーを生成し、TEM 図を作成した。

結果

カテゴリー分類 カテゴリーの詳細については Table 9 に示した。なお Table 9 に示されたカテゴリーの具体的な逐語データについては、実際のデータを個人が特定されないように意味内容に注意を払いながら若干の加工を加えているものも含まれる。以下にカテゴリー分類から導き出された幼児期の母子イメージ及び内的対象像が、その後の対人関係を経て、境界例心性の特徴を有するに至るまでのプロセス (Figure 4) について具体的に説明をする (以下 TEM の概念に関連するものを【】、コアカテゴリーを《 》、サブカテゴリーを < > で示した)。

Table 9

TEM図のカテゴリーとカテゴリーの具体的な逐語記録

TEMの概念に関するもの	コアカテゴリー	サブカテゴリー	逐語記録	該当する対象者
早期記憶	positive		・幼稚園の送り迎え(A, J, L) ・母親との散歩(I)	A, I, J, L
	neutral		・母親と出かけた(B, H, K) ・母親と一緒に何かした(E, F)	B, E, F, H, K
	negative		・母親に怒られた(D)	D
幼児期の母子イメージ	positive/negative		・怖いけど、優しかった(D, J) ・厳しいけど、安心できる(C, F, H)	B, C, D, E, F, H, J, K
	positive		・あたたかい関係、安心できる(A, L) ・自分のことを分かってくれる(I)	A, I, L
対人関係上の出来事(P)	家族との関わり	悩み相談	・つらい気持ちを話す(F)	A, F, I, J, L
		自分を受け入れてくれる	・自分のことを分かってくれる(I)	A, I
		自分のことを思ってくれる	・自分のことが大事だった(H)	E, F, H
対人関係上の出来事(N)	家族との関わり	関係希薄	・共働きであり会う機会がない(D)	D
		気を遣う	・Moを心配させたくない(B) ・Moの忙しい様子を見て(I)	B, F, I
		機嫌をうかがう	・こういうことしたら怒るなかダメだ なって思う(C)	C, J
	友達との関わり	いじめ	・悪口を言われる(A), ・仲間外れ(K)	A, K
		トラブル	・関係性不良(E, H)	E, H, L
他者評価懸念			・こう言ったら嫌われる(A, C, I) ・こう言ったら傷つく(B, L) ・人の目や反応を気にする(J, L)	A, B, C, D, E, F, H, I, J, K
対人関係上の ストレスフルな 出来事			・小学校時代(A, B, C, J, K, L) ・中学校時代(F, I) ・高校時代以降(E, H)	A, B, C, E, F, H, I, J, K, L
希薄な対人関係	1人を好む		・関わりたくない, 1人が楽(B, K) ・どうせ私とは仲良くしたくない(F, H)	B, C, E, F, H, K
	広く浅く		・適当に仲良くする(A, L) ・荒波を立てたくない, 表面的(D, I)	A, D, I, J, L
学校での居場所感			・この人と行動していれば大丈夫(I) ・とりあえず一緒に過ごせる人を探す(L)	I, L
家族のサポート			・Moの支え(A, B) ・悩みを相談する(F, I, J, L, K)	A, B, F, I, J, K, L
家族との物理的距離			・今の距離感がちょうどよい(C, E, H)	C, E, H
母親のnegativeイメージの 改善			・1人の人間, 対等(C, F, J) ・自分のためだった(H, K)	B, C, E, F, H, J, K
親以外の依存対象の形成	良いイメージ	安心感	・安心する(A, C, D, H, K, L)	A, B, C, D, E, F, H, I, J, K, L
		信頼感	・信頼できる(D, J)	A, B, C, D, E, F, H, I, J, K, L
	悪いイメージ	見捨てられ不安	・離れていくのが怖い(C, F, J)	A, B, C, D, E, F, H, I, J, K, L
		嫌われることへの不安	・嫌われたらどうしよう(B, C, D, I, J)	F, H, I, J, K, L

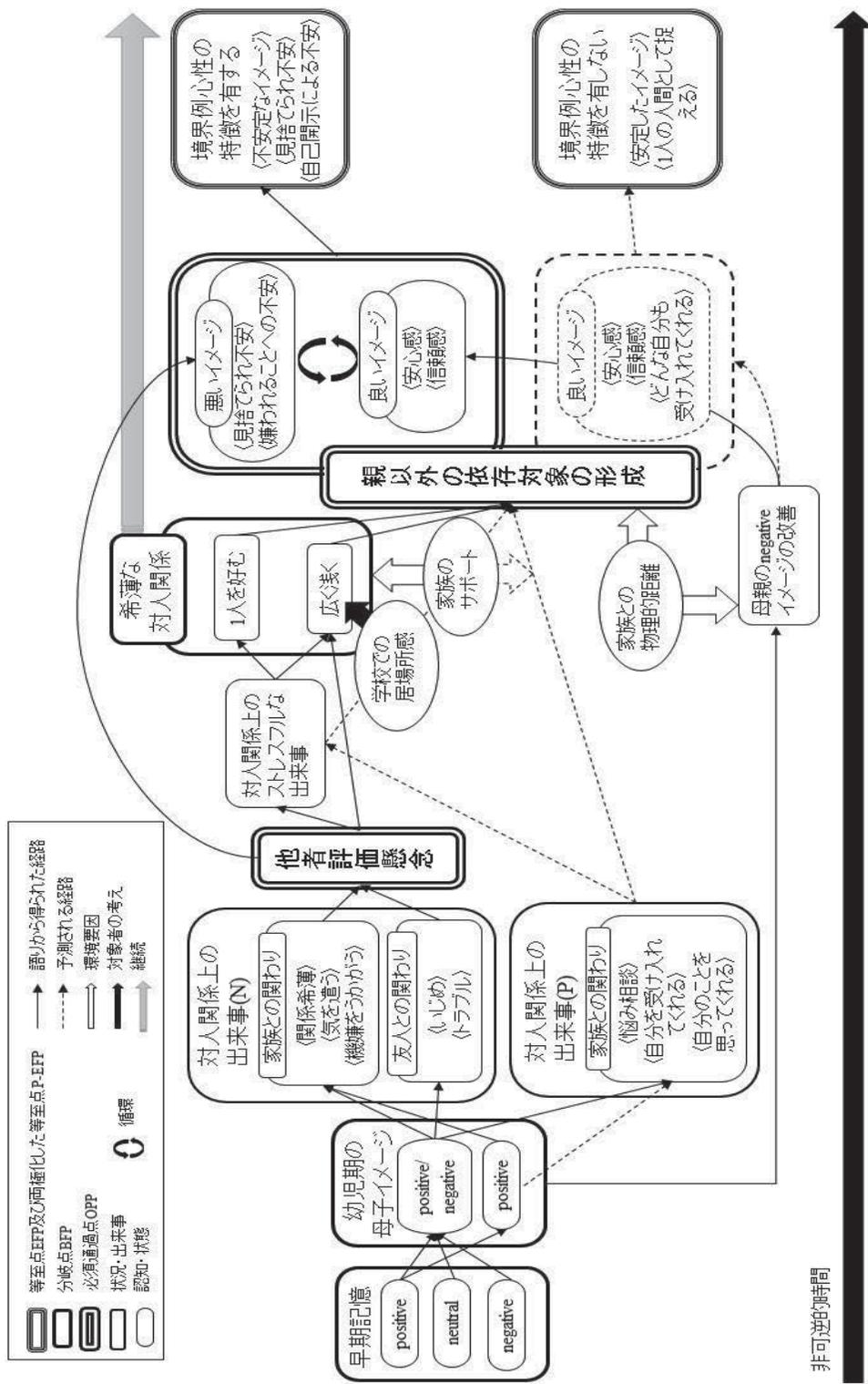


Figure4. 幼児期の母子イメージ及び内的対象像が、その後の対人関係を経て、境界例心性の特徴を有するに至るまでのプロセス図

TEM 図に関する全体的な説明 まず、TEM の概念と本研究における意味を Table 10 に示した。

Table 10
TEM概念と本研究における意味

TEM概念	本研究における意味
等至点：EFP (Equifinality Point)	境界例心性の特徴を有する
両極化した等至点：P-EFP (Polarized Equifinality Point)	境界例心性の特徴を有しない
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	① 早期記憶 ② 幼児期の母子イメージ ③ 対人関係上の出来事 ④ 希薄な対人関係
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	① 他者評価懸念 ② 親以外の依存対象の形成

Figure 4 は、非可逆的な時間の中で、幼児期の母子イメージ及び内的対象像が、その後の対人関係を経て、現在の境界例心性の特徴を有するに至るのかを表したプロセスを述べる。

まず、EFP である【境界例心性の特徴を有する】に至るまでのプロセスを説明する。母親との【早期記憶】が<positive>、<neutral>、<negative>に分かれ、<positive>な【早期記憶】は、<positive>、<positive/negative>な【幼児期の母子イメージ】に、<neutral>、<negative>な【早期記憶】は、<positive/negative>な【幼児期の母子イメージ】につながる。幼児期、児童期の《家族との関わり》は、ポジティブな経験もあるが、ネガティブな経験もある。家族や友人とのネガティブな出来事を経験することによって、他者との関係において【他者評価懸念】を抱くことにつながる。【他者評価懸念】を抱くことに加え、その後の対人関係上のストレスフルな出来事を経験することによって、《1人を好む》、《広く浅く》といった【希薄な対人関係】の形成に至る。この時、《広く浅く》の友人関係を築く心理的要因として【学校での居場所感】が大きく影響している。しかし、学校で【希薄な対人関係】であっても、家庭で居場所を感じるなど【家族のサポート】が重要となってくる。大学入学を機に下宿を始め、【家族との物理的距離】ができたことによって、幼児期に抱いていた母親に対するネガティブイメージが改善される。また、親からの物理的・心理的自立に伴って、【親以外の依存対象の形成】を行う。この時、家族以外の依存対象を形成するといった点で、児童期から抱き始めた【他者評価懸念】が顕著になり、《悪いイメージ》が現れる。しかし、比較的安定した母子関係で育ており、良い対象が内在化しているため、《良いイメージ》も持つことができている。よって、《良いイメージ》、《悪いイメージ》が循環しており、イメージが不安定なことから、【境界例心性の特徴を有する】に至る。

次に、P-EFP である【境界例心性の特徴を有しない】に至るまでのプロセスを説明する。母親と

の【早期記憶】が<positive>かつ、【幼児期の母子イメージ】も<positive>である。対人関係上の出来事、特に《家族との関わり》で、ポジティブな経験が積み重ねられ、【他者評価懸念】を抱かない。その後、【対人関係上のストレスフルな出来事】を経験したとしても、【家族のサポート】を受けたり、当事者が肯定的な意味づけを行ったりすることによって、人に対する全般的なイメージが変化することがなく、新たな依存対象を見つける。幼児期、児童期と良い対象が内在化されており、親以外の新たな依存対象に対しても、安定した<良いイメージ>を抱き、【境界例心性の特徴を有しない】に至る。

早期記憶 まず、対象者の語りから【早期記憶】を《positive》、《neutral》、《negative》に分類し、第一のBFPとした。【早期記憶】が《positive》とは、母親との記憶が“よく遊びにつれて行ってくれた”、“泣いている時に慰めてくれた”など情緒的な関わりを基に分類した。【早期記憶】が《neutral》とは、母親との関わりでの記憶であるが、語りの中で“嬉しかった”、“楽しかった”などの感情がみられなかったものを分類した。【早期記憶】が《negative》とは、“怒られた”など負の感情しか語られなかったものを分類した。

幼児期の母子イメージ 次に、【幼児期の母子イメージ】を、《positive/negative》、《positive》に分類し、第二のBFPとした。【幼児期の母子イメージ】が<positive/negative>とは、“怖かったけど、安心できる存在”、“優しくあったけど厳しい面もあった”など、基盤としてあたたかい関わりがあるが、怒られること、厳しくされることに対して、当時は納得のいかなさや恐怖感を抱いていたなど、2局面を持ち合わせる語りを基に分類していた。【幼児期の母子イメージ】が《positive》とは、“あたたかい”、“なんでも分かってくれる”といった語りを基に分類した。

対人関係上の出来事 次に、【対人関係上の出来事】を【対人関係上の出来事 (N)】と【対人関係上の出来事 (P)】に分類し、第三のBFPとし、どのような出来事を経て、【他者評価懸念】につながるかを示した。【対人関係上の出来事 (N)】と【対人関係上の出来事 (P)】は、同じ対象者の中に複数存在する経験であることから、上下に並べた。【対人関係上の出来事 (N)】は、《家族との関わり》、《友人との関わり》に分類した。まず、《家族との関わり》については、家族との関わりの中で、<関係希薄>さがうかがえたり、“母親を心配させたくない”、“こんなこと言ったら迷惑かも”など<気を遣う>こと“母親の機嫌をうかがいながら行動する”、“こういうことをしたら怒るかも”など<機嫌をうかがう>ことが【他者評価懸念】につながっていた。また、《友人との関わり》については、友人からの<トラブル>や、クラスでの<いじめ>の経験が【他者評価懸念】につながっていた。これらのような対人関係上の出来事を経験することで、“こういうことを言ったら嫌われてしまうかも”、“関係にひびを入れたくない”と、多くの対象者が他者にどう思われるかなどの評価を気にし、自己開示や自分のありのままをさらけ出すことに消極的になる様子がみられた。一方で、【対人関係上の出来事 (P)】は、《家族との関わり》のエピソードのみ語り得られた。《家族との関わり》のポジティブなエピソードとして、自分が困っている時、悩んでいる時に<悩み相談>をした、<自分のことを受け入れてくれる>、<自分のことを思ってくれる>といった経験をしたといった母親との関わりが多く語られた。

他者評価懸念 【他者評価懸念】は、OPPである。全ての対象者が児童期に、家族や友人との関

わりの中で、ネガティブな出来事を経験しており、そのネガティブな経験が“人にどう思われるか気になる”、“相手の顔色をうかがって行動する”などの【他者評価懸念】につながっている。《友人との関わり》はくいじめ、＜トラブル＞などネガティブな経験がほとんどであったが、《家族との関わり》、特に母親との関わりであるが、母親との関わりは、母親の様子を見てく気を遣う＞など、ネガティブな経験とは言いにくい経験もみられた。児童期の出来事によって形成された【他者評価懸念】が、親からの物理的・心理的自立に伴って、親以外の依存対象に抱く《悪いイメージ》につながっている。

対人関係上のストレスフルな経験 【対人関係上のストレスフルな経験】とは、上述した【対人関係上の出来事】とは別である。多くの対象者が【他者評価懸念】を抱いたあとに、いじめなどの友人関係においてネガティブな出来事を経験していた。

希薄な対人関係 次に、【希薄な対人関係】を《広く浅く》、《1人を好む》に分類し、第四のBFPとした。対象者の中には、【他者評価懸念】を抱いてから、【希薄な対人関係】に至るものと、【他者評価懸念】を抱いた上で、さらに《対人関係上のストレスフルな経験》をし、【希薄な対人関係】に至るものがいた。まず、《広く浅く》とは、他者から嫌われることを恐れ、“荒波を立てない”ような関係を築いたり、“特定の友人を作らない”などその場限りの人間関係を築いたりすることである。自分の悩みごとを話すことはできず、“親友って呼べる人はいない”などの語りもみられた。次に、＜1人好む＞とは、対人関係において、自分が傷ついたり、相手を傷つけたりすることを避けるために、消極的な人間関係をあらわしている。【希薄な対人関係】は、その後【親以外の依存対象の形成】に至っても、親密な関係性の人以外とは“当たり障りのない”、“荒波を立てない”関係は継続していたため、グラデーション矢印で継続を示した。

学校での居場所感 《広く浅く》の対人関係には、学校生活で1人になることへの恐れから、“一緒にいるだけ”、“この人といれば大丈夫(1人にならない)”など、【学校での居場所感】を重視する語りもみられた。

家族のサポート 【親以外の依存対象の形成】に至るまでに、学校での友人関係について相談する家族の存在が大きいことが、多くの対象者の語りでみられた。学校での対人関係がうまくいかなかった、家族が拠り所として機能している者が多かった。

家族との物理的距離 大学入学を機に下宿を始め、家族と物理的距離ができたことにより、“今の距離感がちょうどいい”と母親のnegativeイメージ改善につながる語りが多かったため、【母親のnegativeイメージ改善】と矢印をつないだ。

母親のnegativeイメージの改善 大学入学を機に【家族との物理的距離】ができたことにより、幼児期の母親との関わりを振り返り、当時の母親の厳しさを“今思うと自分のためだった”、と肯定的に意味づけしたり、“母親も人間なんだなと思った”など母親を1人の人間として捉え直し、現在良好な母子関係を築いている者が多かった。基盤として母親にpositiveなイメージを持っていること、幼児期の母親のnegativeイメージが改善したことにより、現在の親以外の依存対象の形成における《良いイメージ》を矢印でつないだ。

親以外の依存対象の形成 【親以外の依存対象の形成】はOPPである。【親以外の依存対象の形

成】について、出会いのきっかけは同じ学科がほとんどであり、授業などで一緒にいる機会が増え、仲良くなるパターンが主であった。一緒に過ごしていく中で、“どんなことでも肯定してくれる”、“ありのままを受け入れてくれる”など、相手に《信頼感》や《安心感》を抱くようになり、悩み事を相談したりと“自己開示ができる”ようになっていく。そういった《良いイメージ》を抱く一方で、仲良くなればなるほど、“自分のこういう部分を見せたら離れていくんじゃないか”などの＜見捨てられ不安＞や、“自分のありのままを見せると、嫌われてしまうかも”と＜嫌われることへの不安＞、また深い仲になったゆえの相手を＜傷つけることへの恐れ＞といった《悪いイメージ》を抱く。これらは、親密な相手との関わりの中で、行ったり来たりを繰り返しているため、黒矢印で循環を示した。

境界例心性の特徴を有する 【境界例心性の特徴を有する】はEFPである。＜安心感＞や＜信頼感＞を抱くなど《良いイメージ》を持っている一方で、＜見捨てられ不安＞や自己開示をすることによる＜嫌われることへの不安＞など《悪いイメージ》を持っている。それらのイメージは、親以外の依存対象との関わりの中で変わりうるため＜不安定なイメージ＞である。

境界例心性の特徴を有しない 【境界例心性の特徴を有しない】はP-EFPである。まず、【他者評価懸念】を抱くきっかけとなる【対人関係上の出来事】がないことが予想される。あるいは、【対人関係上のストレスフルな出来事】を経験したとしても、本人の特性が影響し、そのネガティブ経験を肯定的に受け止めるなどのプロセスを経て、親からの物理的・心理的自立に伴って、親以外の依存対象を見つけるが、児童期に【他者評価懸念】を抱くに至るネガティブな経験がないことから、＜安心感＞、＜信頼感＞に加えて、＜どんな自分も受け入れてくれる＞といった《良いイメージ》を抱く。親以外の依存対象との関わりの中で、ネガティブな経験をしたとしても、基盤が《良いイメージ》のため、イメージが分裂することはなく、＜安定したイメージ＞を持っている。また、自己像が安定していることが考えられ、依存対象に対しても＜1人の人間として捉える＞ことができている。

考察

分析の結果から、比較的安定した母子関係のもとで育った青年は、就学後の家族、特に母親との関わりや友人との関わりによって、他者評価懸念を抱く。友人との関わりは、トラブルやいじめなどネガティブなライフイベントになりうる出来事がほとんどであったが、家族との関わりはネガティブな出来事だけでなく、母親との日常的な関わりで生じる可能性が示唆された。これは、面接対象者の敏感さなどの特性も影響していることが考えられる。また、親以外の依存対象の形成において、ほとんどの対象者が大学で知り合った友人をあげていた。このことから、「第二の分離-個体化期」に伴って、これまで学校生活での対人関係が希薄で、友人関係を重視してこなかった者が、親以外の親密感を抱くことのできる依存対象を見つける作業を行っていることが考えられる。その際に、これまでの対人関係の中で生じた他者評価懸念が顕著になり、境界例的な特徴を提示しているのではないかと考えられる。

本研究の対象者は、母親とある程度安定した愛着を築いてきており、彼らにとって親は無条件で受け入れてくれる存在であり、見捨てられる不安を抱く必要がない。そのため、比較的親からの評

価値を気にしなくてもよい場に守られて育ってきたことがうかがえる。よって、親から心理的に自立するために、新たな依存対象を見つける際に、どのくらい自分をさらけ出したら嫌われないか、受け入れてもらえるかといった、見捨てられ不安や自己開示による不安を感じ、それらが境界例心性の様相を表していると考えられる。

総合考察

本研究の全体考察

研究Iから、内的対象像によって、境界例心性の状態像が異なることが示された。良い内的対象が内在化している者でも、嫌われることに対する不安や人とのつながり欲求を持っており、これらは青年期心性として理解することができると考えられる。一方で、悪い内的対象像や永続しない内的対象像を持っている者は、人とのつながり欲求はあるが、嫌われることに対する不安、見捨てられ不安を抱き、それらの不安が影響し、自ら関係を断ち、孤立感を抱くといった特徴を持っており、それらの特徴が合わさることで、境界例心性を理解することができると考えられる。以上のことから、嫌われることに対する不安や人とのつながり欲求は、一般青年も持ちうる特性であるが、そこに自ら関係を断つ、漠然とした孤立感を感じるといった特性が加わると、対人関係が不安定で、より境界例的な心的状態を表すことが示唆された。

また、研究IIIでは、安定的な母子関係の下で育った青年が、どのような対人関係を経て、現在境界例心性の特徴を有するに至るまでのプロセスを提示した。井梅 (2011) は、幼児期の母子関係はそのまま現在の対象関係に影響を及ぼすわけではなく、その後の関係性において絶えず修正されながら形づくられていくと述べているが、本研究では、その後の関係性がどのように変容し、内的対象像に影響を及ぼすか、また現在の境界例心性の高さに影響を及ぼすかを示唆した。具体的には、就学後の家族や友人との関わりにおいて他者評価懸念を抱くことがきっかけであると考えられる。他者評価懸念を抱くことによって、その後の対人関係のあり方に影響が及ぼされる。さらに、青年期における心理的自立に伴って、親以外の依存対象の形成を行う際に、他者評価懸念が顕著になり、境界例心性の特徴を有することが考えられる。

これまでの研究から、境界例を理解するために、幼児期の母子関係が重要とされてきた。本研究では、幼児期の母子関係だけでなく、その後の対人関係の影響も注目する必要があることを提示した。

本研究の限界と今後の展望

本研究の限界としては、研究II、研究IIIにおけるサンプル数の少なさが考えられる。よって、今後の展望としては、より多くの対象者で境界例心性の高さに関連する要因を検討する必要があると考えられる。また、本研究では、対人関係における境界例心性を取り扱っているため、衝動性や空虚感など他の境界例心性の特徴については検討されていない。よって、今後の展望として、境界例心性の特徴を包括して検討を行うことで、さらなる境界例心性の理解に努めたい。

引用文献

- 安立奈歩 (1999). 青年期の境界例心性に関する研究 心理臨床学研究, 17 (4), 354-365.
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC : American Psychiatric Association. (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕 (監訳) 染谷俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村 将・村井俊哉 (訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 馬場禮子 (2002). 改訂・境界例 ロールシャッハテストと心理療法 岩崎学術出版社
- 馬場史津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Blos, P. (1967). Second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 169-186.
- 江上奈美子 (2010). 大学生の境界例心性と親子間の家族機能認知の差異 心理臨床学研究, 28 (5), 654-664.
- 江上奈美子 (2011). 大学生における境界例心性がライフイベントおよび不快・快感情に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 20 (1), 21-31.
- 江上奈美子 (2013). 非臨床群の境界例心性に関する研究の概観 九州大学心理学研究, 14, 71-78.
- 古川奈美子・北山 修 (2004). 大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係性について 九州大学心理学研究, 5, 207-218.
- Gillespie, J. (1994). *The projective use of mother-and-child drawings*. New York : Brunner/Mazel. (松下恵美子・石川 元 (訳) (2001). 母子画の臨床応用—対象関係論と自己心理学— 金剛出版)
- 東山弘子 (1998). 学生相談にみる境界例 河合隼雄・成田善弘編 こころの科学, 36, 50-56.
- 井梅由美子 (2011). 青年期女子の母娘関係と対象関係 東京未来大学研究紀要, 4, 27-35.
- 北村琴美・無藤 隆 (2001). 成人の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理学研究, 12 (1), 46-57.
- 松野航大・野末武義 (2015). 大学生における家族コミュニケーションおよび両親の夫婦関係の認知と境界例心性の関連性 家族心理学研究, 29 (2), 114-127.
- Mahler, M.S., Pine, F., & Bergman, A. (高橋雅士・織田正美・浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化— 黎明書房)
- Masterson, J. F. (成田善弘・笠原 嘉 (訳)) (1979). 青年期境界例の治療 金剛出版
- 中西佳恵 (2010). 青年期の親密な二者関係における境界例的な心性について 心理臨床学研究, 27 (6), 653-663.
- 成田善弘 (1987). 青年期境界例 精神科治療学, 2 (3), 319-326.
- 大家聡樹 (2006). 青年期の親子関係イメージと境界例心性に関する研究 心理臨床学研究, 24 (1), 22-33.
- 斎藤久美子 (1990). 青年における「境界」心性の位相 金剛出版
- 斎藤久美子 (1993). セルフレギュレーションの発達と母子関係 精神分析研究, 31 (5), 261-273.

- 酒井 厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, 9 (2), 59-70.
- 重松晴美 (2005). 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究—境界例心性を通して— 心理臨床学研究, 22 (6), 659-664.
- 田村和子・井上果子 (2005). 青年期における境界例心性と養育態度の関連について—こころの健康, 20 (2), 73-87.
- 安田裕子・サトウタツヤ (2012). TEM でわかる人生の経路—質的研究の新展開— 誠信書房

非意識的過程と意識的過程の関係についての検討

—評価者と対象の類似度に着目して—

三木あかね・中島健一郎

Relationship between conscious and unconscious processes:
Subliminal mere exposure effects for targets in a negative social category are moderated
by similarity to self and stimulus

Akane Miki and Ken'ichiro Nakashima

The effects of subliminal mere exposure on the assessment of the “Otaku” (“geek” or “nerd”) category were found to be maximized when a handful of atypical members (non-Otaku) were grouped with several typical members (Otaku). We examined whether similarity to self and stimulus (i.e., self-reported Otaku tendencies) moderated the mere exposure effect in relation to an Otaku target. Participants reported the degree to which they regarded themselves as Otaku. Participants were then exposed to stimuli with different contact ratios (70% Otaku, 30% Otaku, 0% Otaku, and control) following the procedure described in a previous study (Kawakami and Yoshida, 2013). Participants then reported their subjective impressions of an Otaku target. Participants who self-identified as Otaku evaluated the target more negatively on the explicit measure when exposed to a stimulus that mixed Otaku and non-Otaku. These findings indicate that participants who self-identified as Otaku exhibited an aversion to in-group members (“dozoku keno”). These patterns suggest that subliminal mere exposure effects for targets are moderated by similarity to self and stimulus. The unconscious and conscious processes of interpersonal cognition are discussed.

キーワード : contact ratio, Otaku category, similarity, subliminal mere exposure effects

問 題

私たちは日常生活において、「○○さんは優しいから好き」や「△△さんは約束を守らないから嫌い」など、周囲の人々の好悪について、その他者との相互作用のあり方を参考にしたり、他の方法で得た情報を参考にしたりして判断している。それゆえに、特定の人に好意を寄せる理由や特定の人を避ける理由を経験に即して、言い換えれば主観的に説明できる。はたして、人の好悪判断は本

人が思っているように自覚的なものなのであろうか。閔下単純接触効果 (Kunst-Wilson & Zajonc, 1980), すなわち対象に接触していることに気付かない場合であっても、繰り返し接触することで、その対象への好意度が増加する現象を考えれば、必ずしも人の好悪判断は自覚的なものとは言えないだろう。このように、好悪判断をはじめ、人の思考や行動を主観的なプロセスのみで説明するには限界がある。社会的動物としてのヒトを理解していくためには、非意識的な過程の存在を前提とし、その仕組みを解き明かしていくことが重要になる。

ある対象に繰り返し接触することで、その対象への好意度が増加する現象のことを「単純接触効果」と呼ぶ (Zajonc, 1968)。新奇な刺激を繰り返し呈示し、それらの刺激に対する好意度評定を求めた結果、接触経験のない刺激よりも、接触経験のある刺激の方が好ましく評価されることが示されている (Bornstein, 1989)。さらに、Kunst-Wilson and Zajonc (1980) は、接触した刺激を再認できない状況下でも単純接触効果が生起することを明らかにしている。自ら接触したという意識が伴わない場合であっても、繰り返し接触することで好意度が増加することから、接触の非意識的影響が指摘されている (川上・吉田, 2013)。

本研究の目的は、閔下単純接触効果について、自己 (評価者) と他者 (対象カテゴリ) の類似度の観点から検討することである。具体的な検討点は以下の2つである。ひとつは、川上・吉田 (2013) の結果を踏まえて、閔下単純接触の主観指標に及ぼす影響を検討することである。この研究では、集団メンバーの典型性に焦点を当て、おたくに対する潜在的集団評価における閔下単純接触効果を検討した。その結果、多くの典型成員 (おたく) に少数の非典型成員 (非おたく) が組み込まれた刺激を呈示された場合に、閔下単純接触効果が最大になることが示された。しかし、私たちは日常生活の中で主観的に他人を判断することを考慮すれば、非意識的過程が行動を規定するとはいえ、意識的過程を無視するわけにはいかないだろう。言い換えれば、人間の行動は非意識的過程と主観的知覚 (意識的過程) の両方によって定義されるからこそ、印象の主観的指標における閔下単純接触効果を調べる必要がある。

もうひとつは、閔下単純接触効果に対する自己 (評価者) と他者 (対象カテゴリ) との類似度の影響について検討することである。いくつかの先行研究より、参加者のパーソナリティによって単純接触の効果が異なることが実証されている (レビュー: 川上, 2011)。中でも、Moreland & Zajonc (1982) は、単純接触効果と類似度の関連を検討している。繰り返しによる接触の結果として、評価者との類似度が高いと判断された刺激は、類似度が低い刺激よりも、対象カテゴリに対する印象評価においてより好意的かつ親しみやすいと評価された。このことから、対象カテゴリへの評価に対する閔下単純接触効果は、評価者と対象カテゴリの類似度に依存する可能性があり、効果は類似度が高い場合には高くなり、類似度が低い場合には弱くなると想定される。

以上より本研究では、おたくに焦点を当て、自己 (評価者) と他者 (対象カテゴリ) との類似度の観点から、閔下単純接触効果の潜在的・顕在的な好意度への影響を検討する。川上・吉田 (2013) や Moreland and Zajonc (1982) を踏まえると、自己 (評価者) と他者 (対象カテゴリ) の類似度の違い (i.e. 自分自身がおたくであるという自己評価) は閔下単純接触効果を緩和すると考えられる。川上・吉田 (2013) の研究では、典型 70% 条件、すなわち大多数の典型的なメンバー (おたく) の中に、少

しの非典型的なメンバー（非おたく）が組み込まれている条件を呈示された際に、おたくカテゴリに対して潜在的に最も好意的な評価をすることを示しているが、この結果について評価者を対象カテゴリとの類似度が高い者と類似度が低い者に分けて考えると、効果の強弱が異なってくるのが考えられるだろう。具体的には、おたくカテゴリで自己と他者の類似度が高い場合（つまり、自分自身をおたくだとみなしている参加者に典型 70%条件を呈示する場合）の方が、類似度が低い場合（自分自身をおたくだとみなしていない参加者に典型 70%条件を呈示する場合）よりも、おたくに対して好意的な評価をするであろう。

実験 1

川上・吉田 (2013) の研究では、典型 70%の接触割合で刺激を呈示した場合、対象カテゴリ（おたく）に対して非意識上の好意度が最も高くなるという結果が得られた。それでは、川上・吉田 (2013) と同様に接触割合を変えて繰り返し閾下呈示を行った場合、主観評定すなわち意識的過程の上での好意度ではどのような違いが生じるのだろうか。また、参加者（評価者）と刺激（接触割合）との類似度に着目した場合、対象カテゴリに対する閾下単純接触効果に違いが見られるのだろうか。

この点を明らかにするために、実験 1 では大学生を対象に、川上・吉田 (2013) の手続きに、意識的な好意度を測定するための主観評定（自己紹介文と特性形容詞尺度；林，1982）および参加者のおたく自認度を測定するためのおたく態度尺度（菊池，2000）を加えた実験室実験を実施する。

方法

参加者と実験デザイン 大学生 60 名（男性 28 名）に対して、接触割合 3（典型 70%条件，典型 30%条件，典型 0%条件）の 1 要因参加者間計画の実験を行った¹。各条件によっておたく写真（典型画像）と非おたく写真（非典型画像）の枚数の割合を変えて呈示した（e.g. 典型 70%条件：10 名の刺激人物写真のうち、7 名おたく写真，3 名非おたく写真）。

手続き パソコンによる判断課題（接触・測定）の実施および心理尺度への回答を求めた。パソコンによる判断課題（接触・測定）は川上・吉田 (2013) の手続きに準じて行った。判断課題終了後、質問紙への回答を求めた。

1. **パソコンによる判断課題** まず、接触フェイズでは、「この実験は、おたくに関する情報の処理の速さについて検討するものです。今からこちらのパソコンの画面中央におたくの画像が連続して短時間表示されます。一瞬しか表示されませんので、画面中央を注視するようにして下さい。」という教示の後、10 名の刺激人物を 1 セットとしたものを、黒色背景の画面上にランダムに 10 回呈示した。その際、典型 70%条件では、10 名の刺激画像のうち 7 名をおたく画像（典型画像）、残り 3 名を非おたく画像（非典型画像）のものを呈示した（Figure 1）。同様に、典型 30%条件では、10 名のうち 3 名をおたく画像、残り 7 名を非おたく画像のものを呈示した。典型 0%条件では、10 名す

¹ 時間的制約とそれに伴うサンプルサイズ・実験時間確保の問題で、実験 1 を実施する際に統制条件を設けることが難しかった。そのため、川上・吉田 (2013) の研究とは異なり、閾下単純接触の対象である「おたく」の画像を 1 枚も呈示しないという点で統制条件と共通する典型 0%条件を実験 1 では対照条件として設定した。

べて非おたく画像のものを呈示した。接触フェイズの具体的な試行内容としては、画面中央に1000msの注視点、16msのターゲット刺激、200msのマスク画像を順に呈示した。こうした試行を計100回続けた。試行間のインターバルは1000msであり、その間は画面には何も呈示しなかった。



Figure 1. おたく画像(左)と非おたく画像(右)の例

続く測定フェイズでは、閾下単純接触効果によるおたくカテゴリへの潜在的な好意度を測定するために、全ての参加者に対しておたく IAT を実施した。おたく IAT とは、潜在指標の1つである IAT (Implicit Association Test ;Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) のおたく ver.で、対象カテゴリ (「おたく」、「サラリーマン」) と属性 (「快」、「不快」) との連合の強度を測定するものである。

おたく IAT は全部で5つのブロックから構成されていた (Table 1)。いずれのブロックにおいても、パソコン画面中央部に刺激語が呈示され、参加者はその刺激語が画面上部の左右に対で表示されている対象カテゴリ (属性カテゴリ、あるいはその両方) の中でどれに該当するかを判断した。対応する回答キーを押すことで刺激語の分類を行い、正しいキーが押されるまでの反応時間を記録した。回答キーには、「E」と「I」を、次の課題に移るためのキーには「スペースキー」を使用した。

おたく IAT で呈示する刺激語として、川上・吉田 (2013) で使用された刺激語と同様のものを使用した。「おたく」を表す刺激語として「秋葉原」、「コスプレ」、「アニメ」、「フィギュア」、「ネットゲー」の5語を用いた。「サラリーマン」を「おたく」と対となる対象カテゴリとし、「サラリーマン」を表す刺激語 (ディストラクタ) として、「新宿」、「スーツ」、「ビジネス」、「ブランド」、「ドライブ」の5語を用いた。また、「快」を表す刺激語として、「良」、「美」、「好」、「嬉」、「優」の5語、「不快」を表す刺激語として、「悪」、「醜」、「嫌」、「悲」、「劣」の5語を用いた。

Table 1
おたく IAT の手続き

ブロック	試行数	左側のキー(E)で 反応する刺激	右側のキー(I)で 反応する刺激	
1	20	おたく	サラリーマン	練習
2	20	快	不快	練習
3	20	おたく+快	サラリーマン+不快	練習
	40	おたく+快	サラリーマン+不快	本番
4	20	不快	快	練習
	20	おたく+不快	サラリーマン+快	練習
5	20	おたく+不快	サラリーマン+快	練習
	40	おたく+不快	サラリーマン+快	本番

※組み合わせ課題を行う順番は、参加者ごとにカウンターバランスを取った

2. **他者への印象評定** 関下単純接触効果によるおたくカテゴリへの顕在的な好意度を測定するために、自己紹介場面に関する刺激文と林 (1982) の特性形容詞尺度 (下位因子: 活動性, 社会的望ましさ, 個人的親しみやすさ) を使用した。具体的には、「活動性」は意志の強さが一体となった次元、「社会的望ましさ」は尊敬・信頼の次元、「個人的親しみやすさ」は他者に対する好感・親和の次元を示す (林, 1979)。

他者への印象評定の手続きとしては、まず全ての参加者に刺激文を呈示した。刺激文は、ある心理学の実験に参加しているという場面であった。その実験は、初対面の人と共通の課題を行うというもので、お互いのことを知るために、数分間自己紹介をするというものであった。この自己紹介で参加者は、質問紙上の相手 (太郎あるいは友子) から名前や所属学部その他におたくであるということのカミングアウトされた。その後、特性形容詞尺度 (林, 1982) を用いて、刺激文に登場した他者 (太郎あるいは友子) の印象を「積極的な—消極的な」や「人のわるい—人のよい」など合計 20 項目に対して、7 段階 (SD 法) で評定するよう求めた。

3. **参加者のおたく度** 評価者と対象カテゴリとの類似度の観点において、参加者 (評価者) 自身がおたくであるか否かを調べるために、菊池 (2000) のおたく態度尺度 (下位因子: 趣味への没入, 社会的内向, 自己流の価値観, 孤独指向) を使用した。具体的には、「趣味への没入」は自分の趣味や関心事に熱中しすぎることや深い知識を持つこと、「社会的内向」は対人関係が苦手、あるいは限定されたものであることを示す (菊池, 2000)。また、「自己流の価値観」は、関心ごとやファッションが社会的な標準と合致しないこと、「孤独指向」はインドアの活動を好むことを示す (菊池, 2000)。

全ての参加者に、趣味への没入に関する 9 項目 (e.g. 趣味に対して何らかのこだわりがある)、社会的内向に関する 9 項目 (e.g. 他人と話すことは苦手である)、自己流に関する 4 項目 (e.g. 身だしなみに気をつかわない方である)、孤独指向に関する 4 項目 (e.g. マンガが好きである) の合計 26 項目に対して、5 件法 (1: 全くそうでない—5: かなりそうである) で回答を求めた。

4. **フェイスシートへの記入** 質問紙の最後に参加者の性別と年齢の記入を求めた。

5. **ディブリーフィング・チェック項目への記入** 全ての課題終了後に本来の実験目的について説明し、参加者が実験中にカバーストーリーに疑念を抱いたか、また真の実験目的に気づいたかを尋ねた。最後に同意書への記入および内省報告を求め、実験を終了した。

結 果

おたく IAT 得点の算出 おたく IAT 得点は、川上・吉田 (2010) の方法に加えて、川上先生との personal communication によって頂いた助言を参考に算出した。算出方法を Table 2 に示した。IAT 得点の値が大きいほど、「おたく」と「快」(「サラリーマン」と「不快」) の連合が、「サラリーマン」と「快」(「おたく」と「不快」) の連合よりも強いことを意味する。すなわち、IAT 得点が正の方向に大きいほど、「サラリーマン」よりも「おたく」に対して好意的評価を表す。おたく IAT の得点を Table 3 に示した。

Table 2
おたくIAT得点の算出方法

順番	手続き
準備段階	1 本試行において誤答が多かった参加者を除外するため、3ブロック・5ブロックの組み合わせ分類課題のうち、本試行の誤答率が30%を超える参加者は除外する。
	2 課題開始直後は反応時間が長くなりやすくなるため、3ブロック・5ブロックの組み合わせ分類課題のうち、本試行の最初の2試行はIAT得点の算出からは除外する。
	3 反応時間の短い、あるいは長い試行について反応時間の変換を行うため、参加者でブロックごとに平均値と標準偏差を算出し、平均値±2SDを境界値にして、ブロックごとに、平均値-2SDよりも反応時間が短い試行は平均値-2SDの値に、平均値+2SDよりも反応時間の長い試行は平均値+2SDの値に置き換える。
算出段階	4 参加者ごとに本試行の「おたく・快-サラリーマン・不快」ブロック38試行と、「おたく・不快-サラリーマン・快」ブロック38試行の平均反応時間を算出する。
	5 「おたく・快-サラリーマン・不快」ブロックと、「おたく・不快-サラリーマン・快」ブロックのそれぞれの平均反応時間から両ブロックを合わせた平均反応時間の差を取る。
	6 その差分を両ブロック合わせた平均反応時間で除し、基準化得点とする。
	7 「おたく・不快-サラリーマン・快」ブロックの基準化得点から、「おたく・快-サラリーマン・不快」ブロックの基準化得点を差し引いた値をIAT得点とする。

Table 3
実験1における各条件のおたくIAT得点の平均値とSD

	全体		見えなかった		見えた	
	平均IAT得点	SD	平均IAT得点	SD	平均IAT得点	SD
典型70%条件	-0.109	0.198	-0.245	0.153	-0.051	0.190
典型30%条件	-0.138	0.184	-0.233	0.251	-0.106	0.154
典型0%条件	-0.106	0.139	-0.091	0.164	-0.118	0.122

各尺度の α 係数算出および項目の選定 分析で使用する各尺度について、先行研究を参考に下位因子ごとに α 係数を算出した。 α 係数が低い場合は項目分析の結果に基づき、項目の選定をした。

1. 印象評定尺度 林 (1979) のバリマックス法による因子分析の結果を参考に、3 因子 (活動性、社会的望ましさ、個人的親しみやすさ) ごとに α 係数を算出した。その結果、活動性は 5 項目で $\alpha = .813$ であった。社会的望ましさは、「堂々とした (逆転項目)」, 「分別のある (逆転項目)」を削除した結果、2 項目で $\alpha = .645$ であった。個人的親しみやすさは 11 項目で $\alpha = .760$ であった。各因子についてそれぞれの平均値を算出し、尺度得点とした (以下; 活動性得点, 社会的望ましさ得点, 個人的親しみやすさ得点)。得点が高いほどそれぞれの傾向が高いことを表す。

2. おたく態度尺度 菊池 (2000) のバリマックス法による因子分析の結果を参考に、4 因子 (趣味への没入、社会的内向、自己流の価値観、孤独指向) ごとに α 係数を算出した。その結果、趣味への没入は 9 項目で $\alpha = .796$, 社会的内向は 9 項目で $\alpha = .674$ であった。自己流の価値観因子は、「自分が面白いと思うことは、社会的に評価されていないことが多い」を削除した結果、3 項目で $\alpha = .689$ であった。孤独指向因子は、「異性の友人が多い (逆転項目)」, 「部屋にこもるのは嫌いだ (逆転項

目)」を削除した結果、2項目で $\alpha = .728$ であった。各因子についてそれぞれの平均値を算出し、尺度得点とした(以下; 趣味への没入得点, 社会的内向得点, 自己流の価値観得点, 孤独指向得点)。得点が高いほどおたく態度が高い, すなわち自身のことをおたくだと自認している傾向が強いことを表す。各変数間の相関を Table 4 に示す。

Table 3
実験1における各変数間の相関

		1	2	3	4	5	6	7	8
潜在指標	1 おたくIAT ($M=-0.11, SD=0.17$)	1.000							
	2 活動性 ($M=5.27, SD=0.82$)	.061	1.000						
顕在指標 (特性形容詞尺度)	3 社会的望ましさ ($M=3.95, SD=0.87$)	-.237 ⁺	-.402 ^{**}	1.000					
	4 個人的親しみやすさ ($M=4.79, SD=0.57$)	.065	.488 ^{**}	-.017	1.000				
おたく態度尺度	5 趣味への没入 ($M=3.08, SD=0.65$)	.049	.186	-.106	.134	1.000			
	6 社会的内向 ($M=2.57, SD=0.54$)	.309 [*]	-.045	-.145	-.008	.074	1.000		
	7 自己流の価値観 ($M=2.71, SD=0.76$)	.210	-.046	-.263 [*]	.150	.107	.231 ⁺	1.000	
	8 孤独指向 ($M=3.32, SD=1.14$)	.107	.046	.043	.257 [*]	.461 ^{**}	.010	.273 [*]	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

類似度とおたく IAT 得点 (潜在的な好意度) の関連 関下単純接触効果による潜在的な好意度に、参加者 (評価者) と対象カテゴリーの類似度が影響を及ぼすか調べるため、おたく IAT の得点 (正の方向に大きいほど、おたく・自己に対して好意的評価) を目的変数として、接触割合 (典型 0%条件を基準としてダミーコード化した 2 変数) × 認識の有無 (見えなかった・見えた²) × おたく態度尺度の各因子の尺度得点 (趣味への没入得点・社会的内向得点・自己流の価値観得点・孤独指向得点) を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。この際、第 1 ステップでは各説明変数の主効果を投入し、第 2 ステップでは第 1 ステップの変数から構成される 1 次の交互作用項、第 3 ステップでは 2 次の交互作用項を回帰的に投入した。このモデルでの階層的重回帰分析をおたく態度尺度の下位因子ごとに行った。

なお、接触割合についてはダミーコード化した (該当する条件に所属する場合は 1、条件に所属しない場合は 0)。実験 1 では統制条件を設けていなかったため、統制条件の代わりにおたく写真を 1 枚も呈示されていない典型 0%を基準として、分析ではダミーコード化された典型 70%条件(70%

² 使用したパソコンのスペック上、ターゲット刺激を呈示できる最小時間は 1 フレーム 16ms までが限界であった。16ms での刺激呈示を関下呈示と設定することに妥当性はあるものの、参加者によってはターゲット刺激が見えたと認識するケースがあった。実験参加者本人が認識したか否かは、非意識のプロセスを考える上で大きな鍵となる。そこで実験 1 に関する分析では、チェック項目用紙への回答および内省報告にもとづき、「見えなかった (関下)」と「見えた (関上)」を区別することとした。具体的には、注視点とマスク画像の間に呈示されたターゲット刺激が見えたかという設問に対し、「見えた」に回答した参加者を「見えた群」、「見えなかった」に回答した参加者を「見えなかった群」とした。全 60 名の参加者の振り分けは、見えなかった群に 20 名、見えた群に 40 名となった。各条件での内訳については、典型 70%条件では見えなかった群が 6 名、見えた群が 14 名、典型 30%条件では見えなかった群が 5 名、見えた群が 15 名、典型 0%条件では見えなかった群が 9 名、見えた群が 11 名であった。

vs. 0%) とダミーコード化された典型 30%条件(30% vs. 0%) の 2 つを使用した。認識の有無については見えなかった場合が 1, 見えた場合が 2 と変数化した。

主たる結果として、おたく態度尺度が低い者に典型 70%条件を呈示すると、おたくに対して非好意的な評価を示すことが明らかになった。おたく IAT 得点を目的変数に、接触割合 (ダミーコード化)×認識の有無×趣味への没入得点を説明変数とする階層的重回帰分析を行った際に、典型 70%条件と趣味への没入得点の交互作用 ($\beta = .320, t(49) = 1.910, p < .10$) がそれぞれ有意傾向であった。単純傾斜の検定を行った結果、趣味への没入得点低群において、典型 70%条と典型 0%条件との間が有意傾向であった ($\beta = -.393, t(49) = -1.913, p < .10$; Figure 2)。参加者全員のおたく IAT 得点の平均値 ($M = -0.118$) を基準として考慮すると、趣味への没入得点低群において典型 70%条件の方が典型 0%条件よりもおたく IAT 得点が低かった。

類似度と印象評定得点 (顕在的な好意度) の関連 関下単純接触効果による顕在的な好意度に参加者 (評価者) と対象の類似度が影響を及ぼすか調べるため、印象評定の各因子の尺度得点 (活動性得点, 社会的望ましさ得点, 個人的親しみやすさ得点) を目的変数として、接触割合 (ダミーコード化した 2 変数)×認識の有無 (見えなかった・見えた)×おたく態度尺度の各因子の尺度得点 (趣味への没入得点・社会的内向得点・自己流得点・孤独指向得点) を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。

主たる結果として、典型 70%条件・典型 30%条件を呈示すると、おたく態度尺度が低い者はおたくに対して好意的な評価を示したのに対し、おたく態度尺度が高い者は非好意的な評価を示すことが明らかになった。社会的望ましさ得点を目的変数として、接触割合×認識の有無×社会的内向得点を説明変数とする階層的重回帰分析を行った結果、典型 70%条件と社会的内向得点の交互作用が有意であった ($\beta = -.547, t(50) = -4.410, p < .01$)。単純傾斜の検定を行った結果、社会的内向得点低群において典型 70%条件は典型 0%条件よりも社会的望ましさ得点が高かった ($\beta = .698, t(50) = 4.621, p < .01$)。一方、社会的内向得点高群において典型 70%条件は典型 0%条件よりも社会的望ましさ得点が低い傾向を示した ($\beta = -.345, t(50) = -1.702, p < .10$)。また、典型 70%条件において社会的内向高群は低群よりも社会的望ましさ得点が低かった ($\beta = -.935, t(50) = -3.965, p < .01$; Figure 3)。

また、目的変数を個人的親しみやすさ得点に変更した上で接触割合×認識の有無×社会的内向得点を説明変数とする階層的重回帰分析を行った結果、典型 30%条件と社会的内向得点の交互作用が有意であった ($\beta = -.399, t(50) = -3.178, p < .01$)。単純傾斜の検定を行った結果、社会的内向得点低群において典型 30%条件は典型 0%条件よりも個人的親しみやすさ得点が高い傾向を示した ($\beta = .290, t(50) = 1.933, p < .10$)。一方、社会的内向得点高群において典型 30%条件は典型 0%条件よりも個人的親しみやすさ得点が低かった ($\beta = -4.79, t(50) = -2.448, p < .05$)。また、典型 30%条件において社会的内向高群は低群よりも個人的親しみやすさ得点が低かった ($\beta = -.590, t(50) = -2.392, p < .05$; Figure 4)。

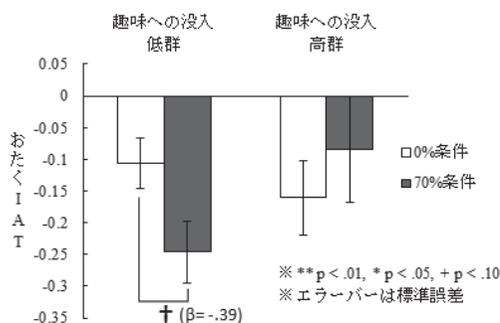


Figure 2. 典型70%条件×趣味への没入得点の交互作用

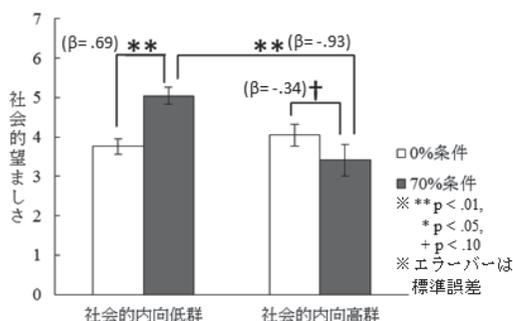


Figure 3. 典型70%条件×社会的内向得点の交互作用

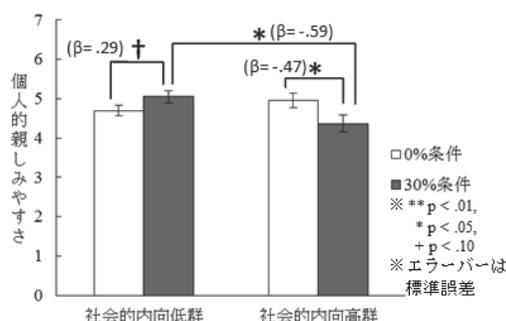


Figure 4. 典型30%条件×社会的内向得点の交互作用

実験 2

実験 1 の課題として、①統制群が未設定、②呈示刺激が見えたと報告した参加者が全体の 2/3 を占めた、③好意度等の従属変数の変化量を見ていないという方法論上の課題が挙げられる。そこで実験 2 では上記の課題を解決するための手続きを用いて再度検証した。

方法

参加者と実験デザイン 大学生 102 名 (分析対象者 88 名, 分析対象者のうち, 男性 47 名) に対して、接触割合 4 (典型 70%条件, 典型 30%条件, 典型 0%条件, 統制群(接触なし)) の 1 要因参加者間計画の実験を行った。実験 1 と同様に、各条件によってターゲット刺激となるおたく画像 (典型画像) と非おたく画像 (非典型画像) の枚数の割合を変えて呈示した (e.g. 典型 70%条件: 10 名の刺激画像のうち, 7 名おたく画像, 3 名非おたく画像)。統制条件では、おたく画像および非おたく画像の代わりに黒色画像を参加者に呈示した。

手続き 参加者を 1 名ずつ実験室に招き、個別実験を行った。実験の流れは以下の 3 点を除いて、実験 1 とほぼ同じであった。1 つ目は、パソコンによる判断課題を始める前に、おたく態度尺度およびフェイスシートへの回答を求めた点である。これらの回答を判断課題より前に求めた理由は、閾下単純接触操作や要求特性が尺度への回答に及ぼす影響を出来るだけ排除するためと、参加者の基本情報を把握するためであった。

2つ目は、閾下単純接触操作を行う接触フェイズの前に1回目のおたくIATを測定した点である。先述したように、実験1の課題として、閾下単純接触によって刺激対象への好意度が上がったかどうか、すなわち変化量を測定できていない点が挙げられる。その課題を解決するために、接触フェイズの前に参加者のベースラインとして1回目のおたくIATを測定した。なお、顕在指標についてはポストのみで測定した。顕在指標をプレ・ポストで測定した場合、プレ・ポスト間の時間が短いために、参加者によるプレの回答を基とした要求特性が生じてしまう可能性がある点(川上・吉田, 2010)や、5件法や7件法の尺度では変化量を測定するのが難しい点(尾崎, 2006)を考慮したためである。

3つ目は、ターゲット刺激の呈示時間を変更した点である。上述したように、実験1の課題のひとつとして、パソコンのスペックの問題で刺激が見えたと報告した参加者が過半数いたことが挙げられる。その課題を解決するために、実験2ではリフレッシュレートが60Hzのパソコンから100Hzのパソコン・モニターに変更した。これに伴い、ターゲット刺激の呈示時間を16msから10msに変更し、ターゲット刺激が参加者から閾上で認識されないようにした。

以下に、実験2の手続きを簡潔にまとめる。まず参加者におたく態度尺度およびフェイスシートに回答を求めた。その後、パソコンによる判断課題(プレ測定・接触・ポスト測定)を行った。測定フェイズではおたくへの潜在的集団評価を測定するためにおたくIATを使用した。判断課題終了後、質問紙に記述されている架空の他者への印象評定を求めた。

結 果

はじめに、実験1と同様の方法を用いて、実験2におけるプレとポストのおたくIAT得点を算出した(Table 5)。

Table 5
実験2における各条件のおたくIAT得点の平均値とSD

	プレおたくIAT		ポストおたくIAT	
	平均IAT得点	SD	平均IAT得点	SD
典型70%条件	-0.085	0.181	-0.055	0.161
典型30%条件	-0.037	0.186	-0.011	0.178
典型0%条件	-0.053	0.250	0.000	0.212
統制条件	-0.050	0.190	-0.076	0.185

各尺度の α 係数算出および項目の選定 実験1と同様に、分析で使用する各尺度について、先行研究を参考に下位因子ごとに α 係数を算出した。 α 係数が低い場合は項目分析の結果に基づき、 α 係数を低下させる項目の除外を行い、項目の選定をした。

1. **印象評定尺度** 林(1979)での因子構造を参考に、3因子(活動性、社会的望ましさ、個人的親しみやすさ)ごとに α 係数を算出した。その結果、活動性は5項目で $\alpha=.796$ であった。社会的望ましさは、「堂々とした(逆転項目)」、「分別のある(逆転項目)」を削除した結果、2項目で $\alpha=.577$ であった。個人的親しみやすさは、11項目で $\alpha=.787$ であった。各因子についてそれぞれの平均値を算出し、尺度得点とした(以下;活動性得点,社会的望ましさ得点,個人的親しみやすさ得点)。

高得点ほどそれぞれの傾向が高いことを表す。

2. おたく態度尺度 菊池 (2000) での因子構造を参考に、4 因子 (趣味への没入, 社会的内向, 自己流の価値観, 孤独指向) ごとに α 係数を算出した。その結果, 趣味への没入は 9 項目で $\alpha = .715$, 社会的内向は「世間的につまらないことでも仲間内で盛り上がる (逆転項目)」, 「自分の内面にかかわることをあまり話さない」を削除した結果, 7 項目で $\alpha = .669$ であった。自己流の価値観は, 「自分が面白いと思うことは, 社会的に評価されていないことが多い」を削除した結果, 3 項目で $\alpha = .731$ であった。孤独指向は, 「異性の友人が多い(逆転項目)」, 「部屋にこもるのは嫌いだ (逆転項目)」を削除した結果, 2 項目で $\alpha = .647$ であった。各因子についてそれぞれの平均値を算出し, 尺度得点とした (以下; 趣味への没入得点, 社会的内向得点, 自己流の価値観得点, 孤独指向得点)。いずれの場合も, 高得点ほどおたく態度が高い, すなわち自身のことをおたくだと自認している傾向が強いことを表す。各変数間の相関を Table 6 に示す。

Table 6
実験2における各変数間の相関

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
潜在指標	1 プレおたくIAT (M=0.05,SD=0.20)	1.000								
	2 ポストおたくIAT (M=0.03,SD=0.18)	.628 **	1.000							
顕在指標 (特性形容詞尺度)	3 活動性 (M=5.33,SD=0.75)	.034	.035	1.000						
	4 社会的望ましさ (M=3.79,SD=0.76)	-.021	-.072	-.228 *	1.000					
	5 個人的親しみやすさ (M=4.94,SD=0.55)	.125	.110	.612 **	.229 *	1.000				
おたく態度尺度	6 趣味への没入 (M=3.28,SD=0.61)	.125	.104	.048	.067	.172	1.000			
	7 社会的内向 (M=2.84,SD=0.62)	.141	.067	-.073	.075	-.004	.080	1.000		
	8 自己流の価値観 (M=3.11,SD=0.83)	.065	.039	.067	-.074	.024	-.017	.130	1.000	
	9 孤独指向 (M=3.79,SD=0.96)	.257 *	.272 *	.059	-.016	.061	.259 *	.004	.068	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

おたく IAT 得点 (潜在的な好意度) との関連 閾下単純接触効果に潜在的な好意度に参加者 (評価者) と対象カテゴリの類似度が関連するかを調べるため, ポストおたく IAT 得点を目的変数として, 接触割合 (統制条件を基準としてダミーコード化した 3 変数) × おたく態度尺度の各因子の尺度得点 (趣味への没入得点・社会的内向得点・自己流得点・孤独指向得点) を要因とする階層的重回帰分析を行った。

この際, 閾下単純接触によって刺激対象への好意度が上がったかどうかを検討するため, 参加者の刺激対象へのももとの好意度の高さを統制する目的で, プレおたく IAT 得点を統制変数として投入した。また, 実験 1 と同様に接触割合は該当する条件に所属する場合は 1, 条件に所属しない場合は 0 とダミーコード化した。加えて, 実験 2 では統制条件を基準として, 分析ではダミーコード化された典型 70% 条件 (70% vs. 統制) とダミーコード化された典型 30% 条件 (30% vs. 統制) とダミーコード化された典型 0% 条件 (0% vs. 統制) の 3 つを使用した。具体的な分析モデルとして, 第 1 ステップではプレおたく IAT 得点, 第 2 ステップでは, 各説明変数の主効果を投入した。また,

第3ステップでは第2ステップのプレおたく IAT 得点を除いた変数から構成される1次の交互作用項、第4ステップではプレおたく IAT 得点を除いた変数から構成される2次の交互作用項を回帰式に投入した。分析の結果、いずれの変数(プレおたく IAT 得点は除く)についても有意な主効果・交互作用は認められなかった。

印象評定得点(顕在的な好意度)との関連 関下単純接触効果による顕在的な好意度に参加者(評価者)と対象カテゴリの類似度が影響を及ぼすか調べるため、印象評定の各因子の尺度得点(活動性得点、社会的望ましさ得点、個人的親しみやすさ得点)を目的変数として、接触割合(ダミーコード化した3変数)×おたく態度尺度の各因子の尺度得点(趣味への没入得点・社会的内向得点・自己流得点・孤独指向得点)を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。具体的には、第1ステップでは各説明変数の主効果を投入し、第2ステップでは第1ステップの変数から構成される1次の交互作用項、第3ステップでは2次の交互作用項を回帰式に投入した。

主たる結果として、典型70%条件・典型30%条件を呈示すると、おたく態度尺度が高い者は非好意的な評価を示すことが明らかになった。活動性尺度得点を目的変数として、接触割合×趣味への没入得点を説明変数とする階層的重回帰分析を行った結果、典型30%条件と趣味への没入得点の交互作用($\beta = -0.374$, $t(80) = -1.878$, $p < .10$)が有意傾向で認められた。単純傾斜の検定を行った結果、趣味への没入得点高群において典型30%条件は統制条件よりも活動性得点が低かった($\beta = -.594$, $t(80) = -2.973$, $p < .01$; Figure 5)。

また、目的変数を個人的親しみやすさ得点に変更した上で、接触割合×自己流の価値観得点を説明変数とする階層的重回帰分析を行った結果、典型70%条件と自己流の価値観得点の交互作用が有意であった($\beta = -.410$, $t(80) = -2.435$, $p < .05$)。単純傾斜の検定を行った結果、自己流の価値観得点高群において典型70%条件は統制条件よりも個人的親しみやすさ得点が低かった($\beta = -.460$, $t(80) = -2.219$, $p < .05$)。また、典型70%条件において自己流の価値観得点高群は低群よりも個人的親しみやすさ得点が低い傾向を示した($\beta = -.692$, $t(80) = -1.921$, $p < .10$; Figure 6)。

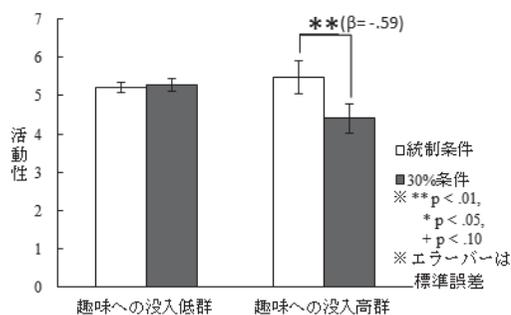


Figure 5. 典型30%条件×趣味への没入得点の交互作用

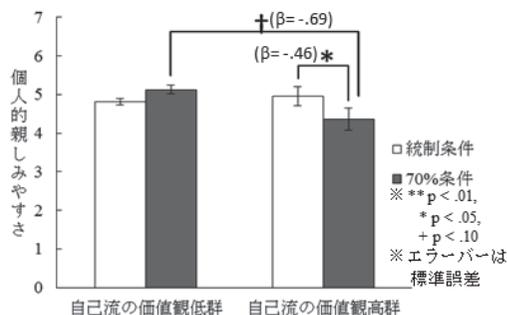


Figure 6. 典型70%条件×自己流の価値観得点の交互作用

総合考察

本研究の目的は、おたくに焦点を当て、自己(評価者)と他者(対象カテゴリ)との類似度の観点から、関下単純接触効果を調べることであった。具体的には、①顕在的な好意度の側面(主観指標)

においても、接触割合の違いによる閾下単純接触効果は見られるのかについて探索的に検討することと、②参加者のおたく度と刺激のおたく度(接触割合)の類似度の違いによって閾下単純接触効果に違いが見られるのかを検討することであった。

まず、おたく態度尺度が低い者に関しては、実験1・2を通して、潜在的な好意度・顕在的な好意度両方において一貫した結果は得られなかった。潜在的な好意度においては、目的変数で扱ったおたく IAT 得点の違い(実験1:ポスト得点, 実験2:プレ・ポスト得点の変化量), 顕在的な好意度においてはダミーコード化する際の統制条件の違い(実験1:典型0%条件, 実験2:統制条件)がある。そのため、おたく態度尺度が低い者の同じ測定指標間における非一貫した結果に関しては、今後追加検討が必要である。

しかし、潜在的な好意度は低いのに対し、顕在的な好意度間が高い(実験1)という潜在・顕在指標間の不整合に関しては、測定の質的な違いによる影響があるかもしれない。顕在指標では実験操作による影響が当事者の内省を経て言語化される必要があるのに対して、潜在指標では対象と属性との連合の変化という形で直接的に現れる(川上, 2011)。このことを踏まえると、実験1の結果から、他者への印象評定に関して非意識的過程と意識的過程が独立している可能性が示唆される。

おたく態度尺度が高い者の結果に関しては、実験1・2の結果から、同族嫌悪が生じた可能性があると考えられる。呈示画像は先行研究で画像としての適切さが確認されたものを使用した。刺激の持つ意味内容によっては、閾下単純接触効果が異なる(川上, 2011)ことも指摘されている。このことから、刺激自体の感情価を中立にしたとしても、参加者の捉え方によっては刺激の持つ意味内容がポジティブになったり、ネガティブになったりする可能性がある。また、自身のことをおたくだと認めながらも、「おたく」ということに対して不快感を持つこと(菊池, 2000)や「おたく」であることを隠している(田川, 2009)ことが指摘されていることから、おたく態度尺度が高い者はこのような傾向を持っている可能性がある。そのため、「典型的なおたくの外見イメージ」として確立されている本研究のおたく典型画像を多く呈示されて嫌悪感が生じた可能性も考えられる。ただし、本研究では、参加者にとってのおたくの意味合いや外見的なイメージを測定していないため、この点はあくまで解釈にとどまる。追加検討が必要であろう。

ま と め

最後に、本研究では、参加者の特性によって閾下単純接触効果に違いが見られることが明らかとなった。特に類似度が高い場合、対象を好ましいと思うか否かは参加者の特性による可能性があることが示唆された。これらの結果より、本研究は閾下単純接触効果研究における着眼点を増やし、その理解を助けるものと言え、その点において一定の理論的意義があると考えられる。今後の展開としては、参加者の他の特性や実際の他者とのコミュニケーション場面における行動について検討することが挙げられる。これにより非意識的な過程が及ぼす影響についてより詳細に理解することが出来るだろう。

謝 辞

大学院修了後も院生時代と変わらず終始丁寧かつ熱心にご指導をいただいた中島健一郎先生 (広島大学大学院 教育学研究科), 実験刺激や実験プログラムの提供および閾下単純接触効果研究を行う際の留意点などご支援くださった川上直秋先生 (島根大学 人間科学部)に記して感謝いたします。また, 本研究の一部は第 11 回ドリームチャレンジ賞 (H29) 研究費により行われました。重ねて感謝申し上げます。

引 用 文 献

- Bornstein, R. F. (1989). Exposure and affect: Overview and meta-analysis of research, 1968-1987. *Psychological Bulletin*, **106**, 265-289.
- Greenwald, A. G. McGhee, D. E., & Schwarz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- 林 文俊 (1979). 対人認知構造における個人差の測定(4)—INDSCAL モデルによる多次元解析的アプローチ 心理学研究, **50**, 211-218.
- 林 文俊 (1982). 対人認知構造における個人差の測定(8)—認知者の自己概念および欲求との関連について 実験社会心理学研究, **22**, 1-9.
- 川上 直秋 (2011). 閾下単純接触が潜在認知に及ぼす効果—刺激の多様性と接触の累積—. 筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻博士論文 (未公開).
- 川上 直秋・吉田 富二雄 (2010). 集団成員への閾下単純接触効果が集団間評価に及ぼす影響—IAT を用いて— 心理学研究, **81**, 364-372.
- 川上 直秋・吉田 富二雄 (2013). 閾下単純接触による潜在的集団評価の形成—異質性の無意識的認知— 認知科学, **20**, 318-329.
- 菊池 聡 (2000). 「おたく」ステレオタイプと社会的スキルに関する分析 信州大学入文科学論集 人間情報学科編, **34**, 63-77.
- Kunst-Wilson, W. R., & Zajonc, R. B. (1980). Affective discrimination of Stimuli that cannot be recognized. *Science*, **207**, 557-558.
- Moreland R. L., & Zajonc, R. B. (1982). Exposure effects in person perception: familiarity, similarity, and attraction. *Journal of Experimental Social Psychology*, **18**, 395-415.
- 尾崎 由佳 (2006). 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容. 実験社会心理学研究, **45**, 98-110.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.
- 田川 隆博 (2009). オタク分析の方向性 名古屋文理大学紀要, **No.9**, 73-80.
- Zajonc, R. B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 1-27.

付 記

本論文は、広島大学大学院教育学研究科心理学専攻に提出した平成 29 年度修士論文をもとに執筆したものである。本研究の一部は、日本社会心理学会第 57 回大会 (2016 年度) および中国四国心理学会第 72 回大会 (2016 年度) で発表した。しかし、上記の学会発表では執筆者の不手際により、誤った分析結果を発表していた。再分析した結果が 29 年度修士論文および本論文の結果になる。

自尊感情の 2 因子と 2 種類の自己愛の関連性

福留広大・森永康子

Cluster analysis of two factors of self-esteem and two types of narcissism in Japanese: How are unbalanced positive and negative aspects of self-esteem related to narcissism?

Koudai Fukudome and Yasuko Morinaga

The present study sought to reveal the relationship between two types of narcissism (grandiose and hypervigilant) and the positive and negative wording items (PSE and NSE) of Rosenberg's self-esteem scale (RSES). We conducted a series of clustering analyses using three datasets with a k-means++ clustering method. Each dataset included both RSES and one or two narcissism scales: (a) RSES and two types of narcissism scales ($N = 900$), (b) RSES and a grandiose narcissism scale ($N = 400$), and (c) RSES and a hypervigilant narcissism scale ($N = 600$). Based on the result of a preliminary cluster analysis performed on a RSES dataset extracted both from the three datasets mentioned above and other data sets ($N = 5,337$), we determined the number of clusters as five. The results of a cluster analysis of dataset (a) revealed that individuals who were in the "PSE-predominant self-evaluation cluster" (i.e., individuals who had high self-evaluation on the PSE items and low self-evaluation on the NSE items) exhibited a greater tendency for both grandiose and hypervigilant narcissism compared with those in the other four clusters. In contrast, individuals in the "NSE-predominant self-evaluation cluster" exhibited a reduced tendency for both grandiose and hypervigilant narcissism compared with those in the other clusters. Analyses of the other two datasets (b and c) revealed similar clusters to those in dataset (a). These results suggest that the relationship between self-esteem and narcissism can be better interpreted using a two-factor solution for RSES compared with using an average score of all items of the RSES.

キーワード : Self-esteem, Narcissism, Rosenberg self-esteem scale

問題と目的

本研究の目的は、Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg Self-Esteem Scale; RSES) を一般的に用いられる単因子構造として用いるのではなく、肯定的な評価と否定的な評価の 2 因子構造として考えることで、自尊感情と自己愛との関連性について新たな解釈を提案することにある。

自尊感情と自己愛

自尊感情と自己愛は概念的弁別性があるとされる一方で、データ上ある程度の関連性があることが問題となってきた。自尊感情と自己愛を測定する方法は基本的に心理尺度によるが、両尺度の関連を検討したメタ分析では、自尊感情と自己愛は $\rho = .36$ ($SD = .04$) の正の相関関係にあることが示されている (岡田, 2009)。高い相関ではないものの、関連性がないとは解釈できない結果と言えるだろう。特に問題とされるのは、高い自尊感情を持つ個人の好ましくない行動様式が指摘されており (Baumeister, Smart, & Boden, 1996)、自尊感情が高いことは、同じようにそのような行動の原因となる自己愛と、肯定的な自己評価が高いという意味において似ていると解釈される (中山, 2008) という点である。

ここで両概念について整理しておく。Rosenberg (1965) によると、自尊感情は自己に対する肯定的ないしは否定的な評価態度、であり、個人が自分に対して行う全般的な自己評価のことを指し示している。また、自尊感情が高いことは、とても良い (very good) という評価ではなく、これで十分 (good enough) という評価である。一方、自己愛という語は、誰もが持ち合わせている健全な範疇で自分を愛するという意味から、パーソナリティ障害として説明される不健全な意味のものまでを含む一般的なパーソナリティ傾向を指すと考えられるが、本稿では、高自尊感情者と自己愛者に共通して望ましくない心理特性を認めることについて議論するため、不健全な意味で自己愛という語を用いることにする。本稿で扱う自己愛者は所謂、ナルシストであり、「誇大性 (空想または行動における)、賞賛されたい欲求、共感の欠如の広範な様式」 (American Psychiatric Association, 2013 日本精神神経学会誌, 2014) を呈する者である。

自尊感情と自己愛の概念的弁別性は、他者との関係性において階層的視点を持つかどうか、という点にあると考えられる (Brummelman, Thomaes, & Sedikides, 2016)。上述したように、高い自尊感情をもつことは他者と比べて優れている必要はなく (Rosenberg, 1965)、単に自分に対して必要十分の評価を持っていることを意味するが、自己愛は他者と比較して自分が優れていると思っており、そのために、現実よりもはるかに高い、誇大な自己評価をする。

Brummelman et al. (2016) は、自己愛者が優越感を持つと同時に他者からの賞賛を求める理由として、彼らの優越感が、誰かが優れていれば誰かが劣っているというゼロサムゲーム状態のものであり、不安定なためであるとしている。柏瀬 (1989) は、臨床的に重要な点として誇大な自己の重要性の認識はしばしばその逆の無価値感にとって代わることを指摘している。また、市橋 (2015) によると、自己愛の「基本病理は『思い描いている自分』と『取柄のない自分』という2つの病理的な自己しか存在しない」、「『等身大の自分』の欠如」というように説明されている。こういった誇大性の裏に否定的自己像が隠れているという自己愛者の特徴は、多くの研究者の共通理解である (上地, 2004, p.29)。

2 種類の自己愛

自己愛者には「誇大性 (空想または行動における)、賞賛されたい欲求、共感の欠如」 (American Psychiatric Association, 2013 日本精神神経学会, 2014) がみられるが、その対人関係上の行動様式には異なる2種類があるとされる。2種類の自己愛は、周囲を気にかけず傷つきにくい無関心型

(oblivious) と、周囲を気にかけ傷つきやすい過敏型 (hypervigilant) である (Gabbard, 1994 館訳 1997)。より具体的には、無関心型自己愛は、他人の反応に気がつくことはなく、傲慢で攻撃的であり、自己に夢中であり、注目の中心であろうとする、といった行動傾向を持つ一方、過敏型自己愛は、他人の反応に過敏であり、抑制的で内気で自己消去的でさえあり、自己よりも他人に注目を向け、注目的となることを避ける、といった行動傾向を持つとされる (Gabbard, 1994 館訳 1997)。このように、両極端ともいえる行動様式を持ちながらも、この 2 種類の自己愛はどちらも自己評価の維持に執着する点において共通している (Gabbard, 1994 館訳 1997) とされ、自己愛の中心要素には、過度に肯定的な自己評価を維持しようとする (中山, 2011, p.57) という点を挙げるができる。また、Gabbard (1994 館訳 1997) は自己愛的な人物の多くは 2 種類の自己愛の特徴をあわせもつとしており、この観点からも自己愛の基本的性質に、過度に肯定的で傷つきにくい性質と過度に否定的で傷つきやすいという両極端な性質の併存が考えられる。

自尊感情の 2 因子

ここで自尊感情に関する議論に戻す。既に述べたように自尊感情の定義は自己に対する肯定的ないしは否定的な評価であるが、実際の RSES による測定では、肯定的か否定的かは一次元上で測定される。RSES は 5 項目の肯定的な項目と 5 項目の否定的項目 (逆転項目) によって構成されるが、普通、自尊感情得点と言った場合には逆転項目を逆転処理した上で、10 項目を単純加算する。この処理は RSES が一次元性を保った尺度であるとするならば当然のことであり、自尊感情得点が高ければ自己に肯定的で、自尊感情得点が低ければ自己に否定的と考えられる。

しかしながら、本来であれば単因子構造として使用されている RSES について、肯定的な項目群因子 (Positive Self-Esteem; PSE) と否定的な項目群因子 (Negative Self-Esteem; NSE) が得られる事例が度々報告されている (Boduszek, Hyland, Dhingra, & Mallett, 2013; Carmines & Zeller, 1979; Marsh, Scalas, & Nagengast, 2010; Michaelides, et al., 2016; Mullen, Gothe, & McAuley, 2013)。日本においても、探索的因子分析を用いた遠藤・井上・蘭 (1992) による報告に始まり、より高度なモデルを用いた共分散構造分析による報告 (福留・森永, 2018; 清水・吉田, 2008) や、中学生を中心的な関心にしつつ幅広い世代で多母集団の同時分析を行った報告 (福留他, 2017) が両因子の存在について言及している。これらの報告は、分析上 RSES に PSE と NSE を想定することが可能であることを示している。そしてこれらの点を考慮すれば、従来議論されてきた自尊感情と自己愛という関係性について、新たに、自尊感情の 2 因子と自己愛の関連性という視点で検討ができる。

NSE¹ については PSE に比べ心理尺度上の精神的健康との関連が強い傾向にあり (福留・森永, 2018; Lindwall et al., 2012)、ストレスの窓モデル (藤田・福留・古口・小林, 2018) におけるストレス防御因子とされている。

自尊感情の 2 因子と無関心型自己愛

自尊感情の 2 因子と無関心型の自己愛との関連については小塩 (1997) の報告が初出であると思われる。小塩 (1997) では、本研究の PSE に相当する因子と自己愛の関連が $r = .41$ 、NSE と (無関

¹ 本稿で NSE と表記した場合は、逆転処理を済ませた上での値を指し示している。つまり NSE が高いということは自尊感情が高いことを意味する。

心型の) 自己愛の関連が.25 であると報告しており, RSES の 2 因子と自己愛の関連には小さいながらも, 関連の差の存在が読み取れる。これについて, 福留・森永 (2018) は PSE と自己愛の関連は若年齢層 (15—22 歳) で $r = .414$, NSE と自己愛は $r = .046$ と報告している。

そもそも PSE が高いというのは, 質問項目によって提案された肯定的な自己像を受容する傾向が強いことであり, そのうちのいくらかの人が自己愛的で, 自己の重要性を誇大にないしは妄想的に捉えていることを, 測定上許容していると理解できる。つまり, PSE という項目は, 健全なレベルの肯定的自己像を持っている人と, 不適切に高いレベルの肯定的自己像を持っている人の両者に対して, 同程度の尺度得点を返す性質をもっている。一方, NSE が高いというのは質問紙項目によって提案された否定的な自己像を拒否する傾向が強いことである。直感的には, 自己愛的な人であれば NSE も当然のように高くなるだろう (否定的自己像を拒否する傾向が高い) と考えられるが, そう予想しない点が本研究における重要な点である。

質問紙によって提案された否定的な自己像は自己愛者に対して, 自己愛的でない人より批判的に働きかけ, それを受け入れてしまうという自己の不安定性, 矛盾を抱えているものであると予想する。NSE 項目は, 誇大性の裏に隠された自己の無価値観, 劣等感, 周囲を気かけ傷つきやすい過敏型といった性質を反映するだろう。ここで, これまでの議論を総合すれば, 「肯定的評価でもあり否定的評価でもある」といったアンビバレントな自己評価 (溝上, 1999) のタイプを想定しており, 溝上 (1999) では自尊感情の 2 因子が用いられたわけではないが, そういった自己評価の存在が既に指摘されている。本研究では, 自尊感情の 2 因子によるアンビバレントな自己評価と自己愛が関連することを予想し検討する。自己愛者にとって PSE 項目は, 「思い描いている自分」の受容を促すものであり, NSE 項目は「取柄のない自分」に対する自己卑下を反映するだろう。

もしそうであれば自己愛と NSE には負の相関関係が得られても良いが, 実際はそうではなく弱い正の相関 (小塩, 1997) あるいは有意でない正の相関 (福留・森永, 2018) が得られる。しかしながら, この相関関係の議論はあくまでも全体的な傾向であり, 自己愛者はそのうちの多数派ではないだろう。実際, 自己愛型パーソナリティ障害とされる人は, 非臨床サンプル中の 0—6.2% (Dhawan, Kunik, Oldham, & Coverdale, 2010), 0.96—6.18% (Trull, Jahng, Tomko, Wood, & Sher, 2010) もしくは 1%未満 (Torgersen, Kringlen, & Cramer, 2001) と考えられており, 自己愛的な人と呼べる人は相対的に少ないと思われる。したがって, 変数間の相関係数を明らかにしただけでは, その中に僅かに含まれる自己愛者の特徴は全体的な影響によって消えている可能性がある。したがって本研究では, 自己愛者の自己評価の様相として PSE が高く NSE が低いと想定し, クラスタ分析を行う。

次に, PSE と NSE がともに高い人はどのような人か考える。そのような人は自己評価に一貫性があり, 優越感から生まれる自己の無価値感も存在しない。NSE が高いことは自己愛的な評価様相と異なり, このような人を単に自己評価が高い人と言い表すことができると考えられる。

自尊感情の 2 因子と過敏型自己愛

ここまで無関心型の自己愛と自尊感情の 2 因子との関連を中心に議論してきたが, 過敏型の自己愛と自尊感情の 2 因子にはどのような関連が予想できるだろうか。過敏型の自己愛者とは, 周囲を気かけ傷つきやすい人のことである。したがって全体的な傾向としては, 過敏型の自己愛は否定

的な自己像が提案される NSE との負の関連が予想される。しかし、自己愛者の基本的病理がアンビバレントな自己評価にあるとするならば、過敏型の自己愛者についても、無関心型の自己愛者と同様に PSE が高く NSE が低いという状態が予想される。

以上の議論を踏まえ本研究では、RSES を 2 因子とした場合に想定される自尊感情のパターン(群)を想定した上で、2 種類の自己愛との関連を検討する。例えば、PSE と NSE がともに高い人或いは低い人、そして両者が中程度の高さの人の存在が考えられる。さらに、PSE が高く NSE が低い或いはその逆の人の存在を想定した上で、クラスター分析を行う。これによって、自尊感情の 2 因子の関係性から自己愛を説明できるかどうか検討することができる。

分析の方針

本稿では自尊感情尺度の因子分析に中心的な興味を置いていないので、因子構造に関するモデル比較を全て省略する。PSE は肯定的項目 5 項目の項目平均値、NSE は否定的項目のうち番号 8「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を除いた 4 項目の逆転処理済みの項目平均値、としてそれぞれ算出する。項目番号 8 は概念の定義上不適切な項目或いは因子負荷量が低いとされるためである(福留他, 2017; 福留・森永, 2018; 田中, 2006)。また、参考として挙げる SE (単因子構造とした場合の自尊感情)についても項目番号 8 を除いた 9 項目によって算出する。

分析手順を述べる。まず予備的分析として、自尊感情尺度を用いた複数のデータセットを用いてクラスター分析を行う。このことによって、サンプル数を十分に確保した上で、自尊感情尺度のみで類型化した場合の傾向がわかる。第二に、誇大性-過敏性自己愛尺度を用いて自尊感情の 2 因子との関連性をクラスター分析によって検討する(分析 1)。しかしながら、誇大性-過敏性自己愛尺度は、2 種類の自己愛について簡潔に測定するのに向いているが、それぞれの自己愛の下位因子まで詳細に検討することができない。そこで最後に、2 種類の自己愛についてそれぞれ別の尺度を用いて下位因子についてより詳細に検討を行う(分析 2a, 2b)。

予備的分析

ここでは自尊感情尺度のみについて、クラスター分析を行い PSE と NSE による自己評価の類型化について予備分析をおこなう。可能な限り大きなサンプルサイズでの分析を行い、自尊感情尺度単体で解釈可能なクラスターを抽出する。

方法

2014 年から 2018 年にかけて取得した以下のデータセットを用いてクラスター分析を行う。いずれも邦訳版ローゼンバーグ自尊感情尺度 10 項目 5 件法(山本・松井・山成, 1982, 清水(2001)を参照)が含まれた調査であり、当該部分について併合したものを分析する($N = 5337$)。選択肢は、あてはまらない、ややあてはまらない、どちらともいえない、ややあてはまる、あてはまる、であった。

データセットの説明² データ 1：中学生（ $N=430$ ），データ 2：大学生（ $N=177$ ），データ 3：ネット調査による日本全国の 18 歳—25 歳（ $N=400$ ）分析 2a において再使用，データ 4：ネット調査 15 歳—69 歳（ $N=2830$ ），データ 5：ネット調査 18 歳—25 歳（ $N=600$ ）分析 2b において再使用，データ 6：ネット調査 15 歳—69 歳（ $N=900$ ）分析 1 において再使用。

結果

RSES に 2 因子を仮定して確認的因子分析を行った結果，適合度は $\chi^2 = 1270.135$, $df = 26$, $p < .001$, CFI = .943, GFI = .945, RMSEA = .095 であったため，許容できる値であると判断した。また，PSE と NSE の共分散の標準化係数は .58 であった。単因子構造としての自尊感情（self-esteem; SE）を含んだ各変数の記述統計を Table 1 に示した。いずれの変数の平均も理論的中央値である 3 の周辺の値となった。また，NSE の尖度が負の値を示していることから，SE や PSE よりも分布の裾が広いことがわかる。

次に，RSES の 2 因子を用いてクラスター分析（kmeans++（Arthur & Vassilvitskii, 2007）を R 3.4.4（R Core Team, 2018）上でパッケージ LICORS 0.2.0（Goerg, 2013）を用いて実行）を行った結果，解釈可能な 5 クラスター（Figure 1）が得られた。縦軸は Z 得点である。クラスター 1 は PSE が低く NSE が高い群，クラスター 2 は PSE と NSE がともに低い群，クラスター 3 は PSE と NSE がともに高い群，クラスター 4 は PSE が高く NSE が低い群，クラスター 5 は PSE と NSE とともに中程度の群であった。各クラスターの人数はクラスター番号順に 370, 803, 1318, 797, 2049 であった。

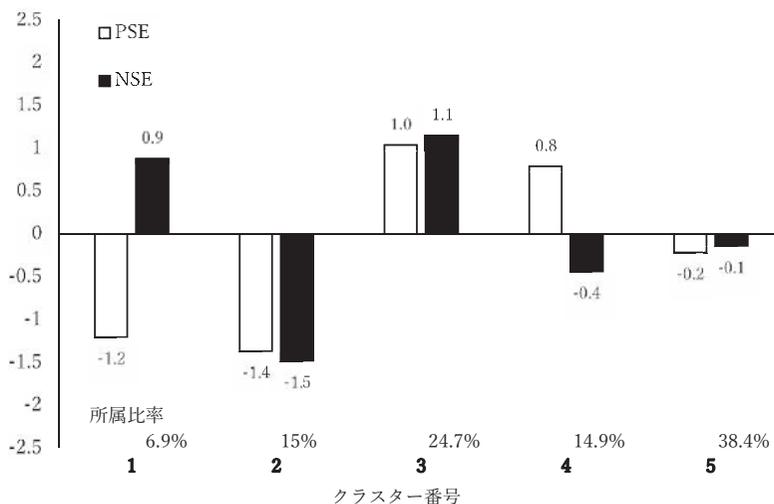


Figure 1. 予備的分析のクラスター分析結果

² 本論文ではインターネット調査によるデータ収集が行われているが，一貫して楽天リサーチ株式会社（現在：楽天インサイト）に第一著者が依頼した。これによって異なる質問紙調査間で同一参加者が参加できないよう，配信対象者から除外することができた。また，楽天リサーチ株式会社が一般社団法人日本マーケティング・リサーチ協会に所属し，プライバシーマークを取得している点を考慮して調査を依頼した。調査参加の承諾については調査会社の方法によって得，研究者は個人を特定できる情報取得を行っていない。

Table 1 RSESの記述統計

変数	N	平均	標準偏差	尖度	歪度
SE	5337	3.11	0.78	0.27	-0.17
PSE	5337	3.18	0.84	0.13	-0.26
NSE	5337	3.04	0.95	-0.26	-0.08

考 察

自尊感情の2側面、PSEとNSEについては、相関係数が高い場合も多く、本データセットにおいても、PSEとNSEの相関は中程度あったが、クラスター分析をした際には、解釈可能な5クラスターを得ることができると考えられる。これを踏まえれば、以降のデータ分析ではクラスター数を5に設定して分析することができるものと思われる。

分析 1

評価過敏性-誇大性自己愛尺度（中山・中谷，2006）を用いて自尊感情の2因子との関連を検討する。中山・中谷（2006）は、誇大性と評価過敏性により、自己愛を誇大型、混合型、過敏型、低自己愛群と類型化した。本尺度の誇大性と評価過敏性は2種類の自己愛（Gabbard, 1994 舘訳 1997）を測定するものであって、それぞれ無関心型と過敏型に相当する。本研究では自尊感情の2因子と2種類の自己愛を同時に分析し、自尊感情と自己愛の関連性について検討する。予備分析に基づき、クラスター数を5に指定して分析を実行する。本分析の予想は、PSEが高くNSEが低い群において2種類の自己愛が最も高いという結果である。

方 法

分析対象者 インターネット調査会社（楽天リサーチ）を通じ、調査に参加した15歳から69歳の900名（男性440名，女性460名）。平均年齢は36.78（SD = 16.09）であった。

調査時期 2018年2月実施。

質問項目 (a) 自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982，清水（2001）を参照）による10項目5件法を使用した。(b) 評価過敏性-誇大性自己愛尺度（中山・中谷，2006）による18項目5件法を使用した。この後に本研究で使用しない質問項目が続いていた。

結 果

RSESについて2因子を仮定した確認的因子分析を行った結果、適合度は $\chi^2 = 248.640$, $df = 26$, $p < .001$, CFI = .946, GFI = .937, RMSEA = .098, また、評価過敏性-誇大性自己愛尺度の確認的因子分析の結果、適合度は $\chi^2 = 914.963$, $df = 134$, $p < .001$, CFI = .895, GFI = .889, RMSEA = .081であり、それぞれ許容できる値と判断した。各変数の記述統計をTable 2に、各変数の相関係数をTable 3に示した。各変数の平均は、おおむね理論的中央値である3に近い値となった。NSEのみ尖度が負となっていることから、NSEの分布の裾は比較的軽いことが分かる。

Table 2 分析1, 各変数の記述統計

変数	N	平均	標準偏差	尖度	歪度
SE	900	3.06	0.72	0.33	-0.21
PSE	900	3.20	0.86	0.14	-0.33
NSE	900	3.03	0.99	-0.34	-0.06
誇大性	900	2.72	0.70	0.55	-0.23
評価過敏性	900	2.87	0.79	0.17	-0.07

Table 3 誇大性－評価過敏性自己愛尺度と自尊感情の相関係数

	SE	PSE	NSE	誇大性	評価過敏性
SE					
PSE	.83 **				
NSE	.87 **	.48 **			
誇大性	.54 **	.59 **	.35 **		
評価過敏性	-.47 **	-.23 **	-.55 **	.06	

注) * $p < .05$, ** $p < .01$

評価過敏性と誇大性の相関は有意でなかった。PSE と誇大性は.59 の相関がある一方で、NSE と誇大性は.35 の相関であった。PSE と評価過敏性は-.23 の相関である一方で、NSE と評価過敏性は-.55 の相関があった。SE と誇大性は.54 の相関、SE と評価過敏性は-.47 の相関があった。

クラスター分析の結果、クラスター1 は全て変数が中程度の値の群、クラスター2 は PSE と NSE の両方が中程度であるが、誇大性も評価過敏性も低い群、クラスター3 は PSE と NSE がともに高い群、クラスター4 は PSE と NSE、誇大性がともに低いが、評価過敏性が高い群、クラスター5 は PSE が高いが NSE が中程度であり、誇大性と評価過敏性の両方が高い群である。各クラスターの人数はクラスター番号順に、360, 127, 197, 141, 75 であった。

考 察

PSE と NSE の記述統計については予備的分析と似た傾向にあり、平均はおよそ理論的中央値である 3 であり、分布の裾は PSE よりも NSE の方が軽いことがわかった。中山・中谷 (2006) では、評価過敏性と誇大性の相関は $r = .14$ であったが、本研究では $r = .06$ であった。これは、中山・中谷 (2006) の因子分析で直行解が報告されていることから、想定された概念関係の通りであるという意味において望ましい結果であると思われる。相関係数からも、PSE は誇大性と、NSE は評価過敏性とより関連が強いことが示された。この結果も本研究の想定通りであるが、これはあくまでも全体的な傾向である。

変数間の相関関係は、予想された通り、PSE と誇大性の関連が NSE と誇大性よりも強い関連にあ

ることを示しており、また、NSEと評価過敏性の関連がPSEと評価過敏性よりも強い関連にあった。したがって、自尊感情の2因子は2種類の自己愛との関連において弁別性があるものと解釈され得る。さらに、SEと2種類の自己愛の相関よりも、PSEやNSEと2種類の自己愛の相関が、わずかではあるが相関係数が高いことから、サンプルの全体的な傾向を議論する上でも、自尊感情は自己愛との関連を検討する上では、2因子として解釈した方が良いと思われる。

クラスター分析の結果は、予備的分析で得られたほど顕著な傾向、すなわちPSEが高くNSEが低いクラスターやPSEが低くNSEが高いクラスターが明白に得られたとは言えないだろう。しかしながら、PSEとNSEのどちらがより高いか、というような両変数のバランスの問題は予備的分析の結果と似ている傾向にあり、クラスター2をNSE「優勢」群、クラスター5をPSE「優勢」群として命名することに、一定の妥当性があるものと考えられる。そしてNSE優勢群では誇大性と評価過敏性の両方が低い結果が得られており、PSE優勢群では誇大性と評価過敏性の両方が最も高い結果が得られている。興味深い点は、クラスター3のPSEとNSEがともに高い群の自己愛は、PSE優勢群に比べて決して高くはない点であり、評価過敏性においては低い値となっている。自尊感情を単因子構造とみなし得点化した場合においては自尊感情が高い人の中に自己愛傾向が高い人が含まれているという解釈が通常であるが、本研究におけるクラスター5については、自尊感情がそれほど高くはない人の中に自己愛が高い人が含まれているという解釈が可能である。

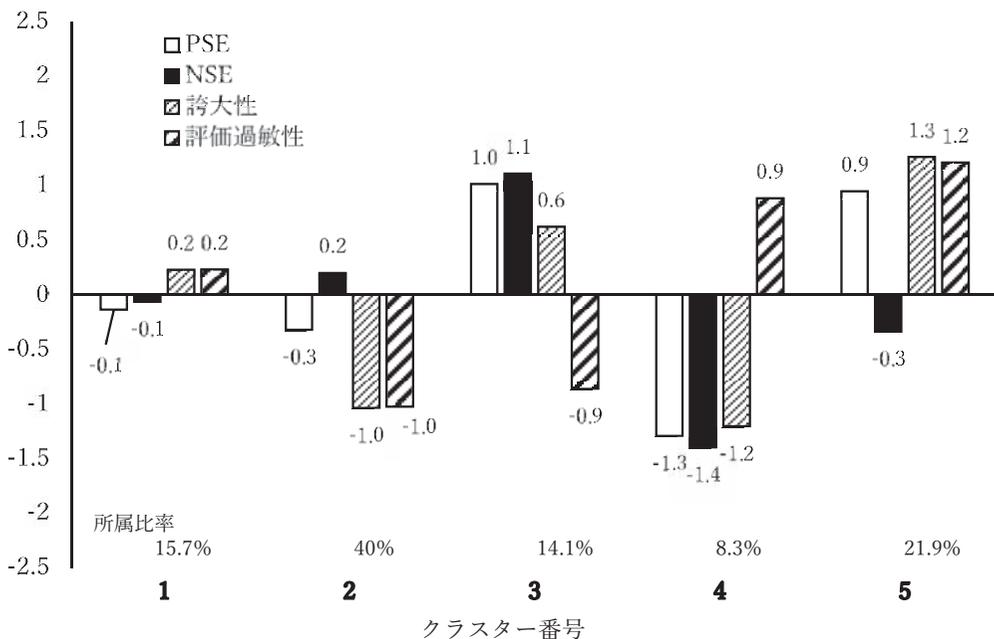


Figure 2. 分析1のクラスター分析結果

分析 2a

分析 1 では PSE と NSE のバランスが 2 種類の自己愛と関連する結果が得られた。それは NSE に比べて PSE 優勢な自己評価をもつ人は 2 種類の自己愛が高いと考えられる結果であった。

分析 1 で使用した中山・中谷 (2006) による尺度の問題点を挙げるならば、それは数ある自己愛の下位側面を要約していることであろう。そこで、分析 2a では NPI-35 (小西・大川・橋本, 2006) を用いて、無関心型の自己愛における下位尺度と自尊感情の 2 因子のクラスター分析を行う。そして分析 2b では過敏型に着目した分析を行う。

また、分析 1 の分析のみでは結果の再現性についても多少疑問が残る。分析 1 で選択された尺度や、2 種類の自己愛を同時に検討したことによって得られた結果であるとも考えられるためである。この意味においても分析 2a 及び 2b として検討を追加して検討する意義が認められると思われる。

研究 2a において予想される結果は、無関心型の自己愛は NSE よりも PSE と強い正の相関関係にあり、分析 1 のクラスター 5 に見るような PSE 優勢群において無関心型の自己愛が最も高いという結果である。

方 法

分析対象者 インターネット調査会社 (楽天リサーチ) を通じて調査に参加した日本全国の 18 歳から 25 歳の 400 名 (男性 200 名, 女性 200 名)。平均年齢は 22.82 歳 ($SD = 1.96$) であった。

調査時期 2016 年 3 月

質問項目 以下の質問項目を含んだ調査を実施した。(a) Rosenberg 自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982, 清水 (2001) を参照), (b) 自己愛人格傾向尺度 NPI-35 (小西・大川・橋本, 2006) を 5 件法で使用した。なお、選択肢の表現は自尊感情尺度と合わせ、あてはまらない、ややあてはまらない、どちらともいえない、ややあてはまる、あてはまる、とした。

結 果

RSES に 2 因子を仮定した場合の適合度は、 $\chi^2 = 74.297$, $df = 26$, $p < .001$, CFI = .969, GFI = .960, RMSEA = .068 であった。また、自己愛性人格傾向尺度 NPI-35 の結果は、 $\chi^2 = 1722.542$, $df = 550$, $p < .001$, CFI = .863, GFI = .779, RMSEA = .073 であった。NPI-35 について CFI, GFI が十分な値であるとは言い難いが、尺度の項目数が多く df が大きいことを考慮すれば許容できるものと判断した。

各変数の記述統計量は Table 4 に、相関係数は Table 5 に示した。RSRS の各変数の平均値はおよそ 3 であり、NSE は 2.87 と少し低めであるが、PSE よりも NSE の裾が軽いなど、基本的にはこれまでと似た傾向にあった。相関では PSE と自己愛の下位因子との関連が .40 から .60 であり、NSE と自己愛の .10 から .30 よりも高い相関が得られた。また、SE と自己愛の関連については .34 から .53 であった。

Table 4 RSESとNPI-35の下位因子の記述統計

変数	N	平均	標準偏差	尖度	歪度
SE	400	2.94	.81	.00	-.15
PSE	400	3.00	.88	-.22	-.18
NSE	400	2.87	1.00	-.50	-.02
誇大性	400	2.33	.89	.02	.45
身体賞賛	400	2.20	.99	-.18	.58
注目欲求	400	2.78	.82	.08	.12
主導性	400	2.49	.84	.07	.33
自己確信	400	2.93	.70	.84	.07

Table 5 NPI-35の下位因子とRSESの相関

	SE	PSE	NSE	誇大性	身体賞賛	注目欲求	主導性
SE							
PSE	.88 **						
NSE	.86 **	.51 **					
誇大性	.48 **	.53 **	.28 **				
身体賞賛	.34 **	.40 **	.18 **	.70 **			
注目欲求	.34 **	.47 **	.10 **	.72 **	.56 **		
主導性	.53 **	.60 **	.30 **	.85 **	.67 **	.74 **	
自己確信	.41 **	.54 **	.16 **	.65 **	.46 **	.58 **	.68 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

クラスター分析の結果 (Figure 3), クラスター1はPSEが高くNSEが中程度の群であり自己愛の下位因子が一様に高かった。クラスター2はPSEとNSEともに低いPSEの方がより低い群であり自己愛の下位因子が一様に低かった。クラスター3はPSEとNSEはともに中程度であるがやや低い群であり自己愛もやや低めであった。クラスター4はPSEとNSEが中程度の群であり自己愛の下位因子は中程度からやや高かった。クラスター5はPSEとNSEがともに高い群であり誇大性、身体賞賛注目欲求は中程度、主導性や自己確信がやや高い程度であった。それぞれの所属人数はクラスター番号順に、24, 69, 116, 119, 72であった。

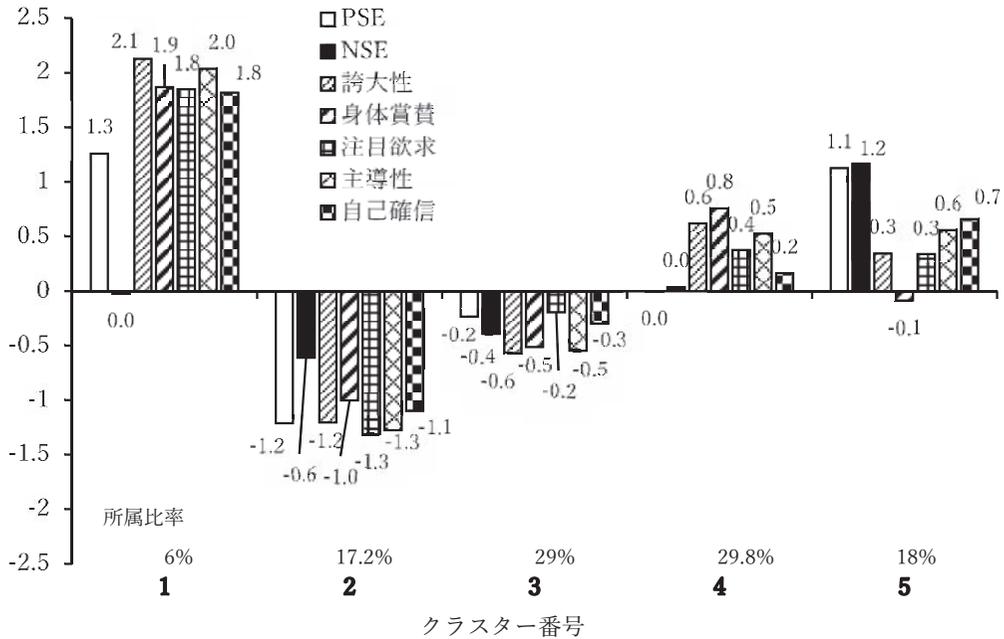


Figure 3. 分析 2a のクラスター分析結果

考 察

相関関係は、PSEの方がNSEよりも自己愛とより強く関連することが明らかになった。また、このPSEと自己愛の関連は、NSEと自己愛の関連よりも、全ての自己愛下位因子において高かった。しかし、これは全体的な傾向であるので、以下に述べるクラスター分析の結果が優先される。

クラスター分析の結果は予備的分析に見たようなPSEとNSEのバランスによる明快な群分けとはならなかった。特にクラスター3と4ではRSESにおいて大きな差があるとは解釈できない。しかしながら、分析1で述べたようにクラスター1はPSE優勢群、クラスター2はNSE優勢群、クラスター5はPSE・NSE高群という解釈は可能である。分析1と基本的な傾向は似ており、特に、PSEとNSEがともに高いクラスター5が、自己愛の下位因子が最も高い群とはならなかった点は注目できる。自己愛が最も高い群はPSE優勢群であるクラスター1である。これらの結果から、自己愛者はPSEとNSEのバランスが崩れPSEが高い状態にあると思われる。クラスター2や5から、NSEがPSEと同程度に高い、あるいはNSEがPSEよりも高い状態にある場合は、自己愛が高くない傾向にあると思われ、その意味において、NSEはPSEよりもより健全な自己評価の高さを測定している可能性があるものと思われる。

下位因子について言及できる点は、自尊感情（単因子）が高い群であるクラスター5において、身体賞賛が平均的ということである。つまり、特に身体賞賛の傾向については、そのほかの下位因子に比べて、自尊感情（単因子）が高い人に認められる傾向ではないと思われる。

分析 2b

ここでは、コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度（上地・宮下，2005；2009）を用いて、過敏型の自己愛における下位尺度と自尊感情の2因子のクラスター分析を行う。自己愛的脆弱性尺度（上地・宮下，2005）は主に過敏型の自己愛について測定する尺度であり、本研究では短縮版（上地・宮下，2009）を用いる。そもそも自尊感情と過敏型自己愛の相関は-.40 という報告があるが（小塩・中山・清水，2011）³，自尊感情の2因子と過敏型自己愛の関連については明らかでない。予想される結果は、最初に述べたように過敏型の自己愛は、PSEよりもNSEと強い負の相関関係にあり、分析1のクラスター5に見るようなPSE優勢群において最も過敏型自己愛が高いという結果である

方 法

対象者 インターネット調査会社（楽天リサーチ）を通じ、調査に参加した18歳から25歳の600名（男性300名，女性300名）。平均年齢は22.57歳（ $SD = 1.82$ ）であった。

調査時期 2017年1月実施。

質問項目 (a) 自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982，清水（2001）を参照）による10項目5件法を使用した。(b) 自己愛的脆弱性尺度短縮版（上地・宮下，2009）の20項目5件法を使用した。下位4因子に、承認・賞賛過敏性，自己顕示抑制，潜在的特権意識，自己緩和不全がある。このうち、自己緩和不全を除いた3因子について Gabbard（1994）の過敏型自己愛を測定していると見做すことができる（上地，2011）とされている。本稿の文脈上では自己緩和不全を削除して良いと思われるが、コフォートがこの点を自己愛問題の本質であると考えていた（上地，2011）ことから、削除せず尺度全体で分析する価値があると判断した。なお、この尺度の項目の提示順は参加者ごとにランダムにした。

結 果

RSESの適合度は2因子構造で $\chi^2 = 180.554$ ， $df = 26$ ， $p < .001$ ，CFI = .931，GFI = .931，RMSEA = .100，AIC = 218.554，であった。また、自己愛的脆弱性尺度においても、十分な適合度が得られた（ $\chi^2 = 447.099$ ， $df = 164$ ， $p < .001$ ，CFI = .955，GFI = .928，RMSEA = .054）。次に、各変数の記述統計をTable 6，相関係数をTable 7に示した。PSEは自己愛的脆弱性の下位因子のうち自己顕示抑制においてのみ有意な相関関係を示した。NSEは脆弱性の下位因子の全てにおいて、-.25から-.48の有意な負の相関関係にあった。SEは脆弱性の下位因子と-.10から-.32の負の相関関係にあった。

³ ただし、自尊感情尺度の訳が本稿のものと異なる。

Table 6 RSESと自己愛的脆弱性の記述統計

変数	N	平均	標準偏差	尖度	歪度
SE	600	3.00	0.74	0.50	0.01
PSE	600	3.08	0.85	0.05	-0.08
NSE	600	2.90	0.93	-0.17	0.05
承認・賞賛過敏性	600	2.95	0.88	-0.27	-0.04
自己顕示抑制	600	2.96	0.88	-0.11	0.00
潜在的特権意識	600	2.72	0.82	0.22	0.23
自己緩和不全	600	2.80	0.94	-0.35	0.11

Table 7 RSESと自己愛的脆弱性の下位因子の相関

	SE	PSE	NSE	承認賞賛	顕示抑制	潜在特権
SE						
PSE	.86 **					
NSE	.81 **	.40 **				
承認・賞賛過敏性	-.32 **	-.08	-.48 **			
自己顕示抑制	-.34 **	-.12 **	-.47 **	.71 **		
潜在的特権意識	-.11 **	.06	-.27 **	.68 **	.52 **	
自己緩和不全	-.10 *	.07	-.25 **	.71 **	.54 **	.64 **

注) 列の変数名は適宜省略している。

* $p < .05$, ** $p < .01$

クラスター分析の結果 (Figure 4), クラスター1はPSEとNSEがともに低い群であり自己顕示抑制がやや高く、潜在的特権意識と自己緩和不全がやや低い群であった。クラスター2は全変数中程度の群であった。クラスター3はPSEは中程度でNSEは低い群であり、自己愛的脆弱性の下位因子が全て高い群であった。クラスター4はPSEとNSEがともに高い群であり、承認・賞賛過敏性と自己顕示抑制がやや低い群であった。クラスター5はPSEは中程度であるがNSEがやや高く、自己愛的脆弱性の下位因子が全て低い群であった。各クラスターサイズは番号順に 78, 220, 97, 92, 113であった。

考 察

自尊感情と自己愛的脆弱性の相関関係は、自尊感情をPSEとNSEに分けることで、新たな発見があった。つまり、PSEよりもNSEの方が、自己愛的脆弱性と強い関連がある結果が得られ、その程度は従来用いられてきたSEよりも大きかったことである。したがって、自尊感情の2因子は自己愛的脆弱性との関連において弁別され得ることが明らかとなった。しかし、これは全体的な傾向であって、以降に述べるクラスター分析の結果が優先される。

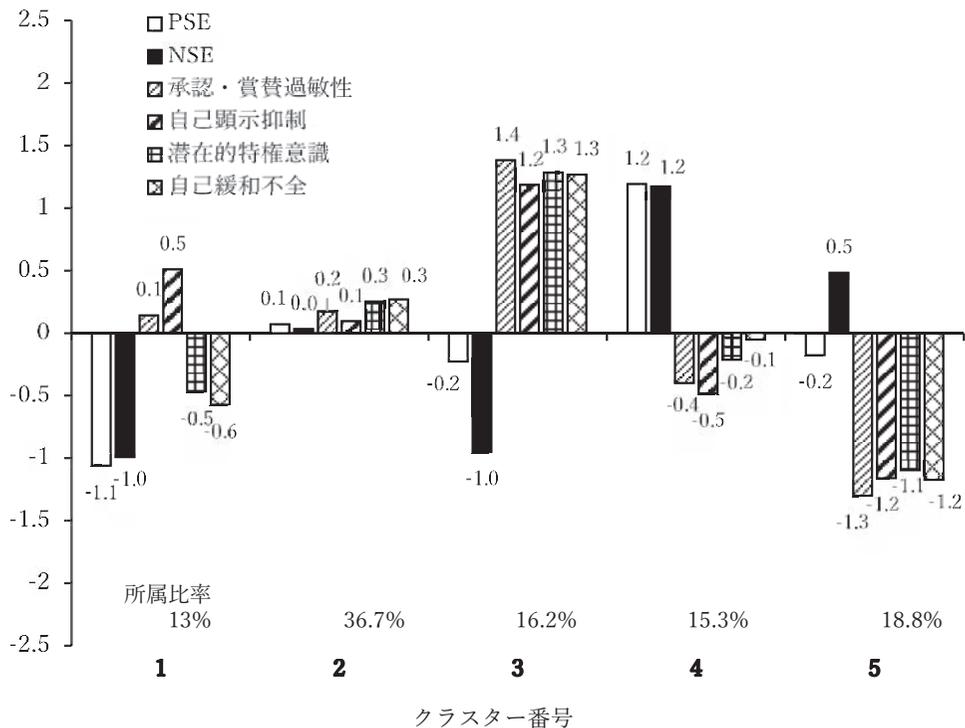


Figure 4. 分析 2b のクラスター分析結果

PSE と NSE がともに低い群（クラスター1）においては自己顕示抑制がやや高い程度で、潜在的特権意識と自己緩和不全についてはやや低かった。従来の自尊感情（単因子）の考え方では PSE と NSE がともに低い群で過敏型の自己愛が高いという結果も予想できるが、本分析の結果（クラスター1）はそれを支持する結果ではなかった。その一方で、PSE と NSE のバランスが悪く NSE よりも PSE の方が高い PSE 優勢群（クラスター3）で、最も過敏型の自己愛が高い結果が得られた。また、最も過敏型の自己愛が低いのは、PSE と NSE のバランスが悪く NSE が PSE よりも高い NSE 優勢群（クラスター5）であった。

以上のことから、過敏型の自己愛についても、PSE が NSE に比べて優勢な人において最も高い傾向にあり、その一方で PSE と NSE がともに低い人（或いは両方が高い人）において顕著な傾向が認められるというわけではなかった。この傾向は、自己愛の種類は異なるが分析 2a と同様であり、PSE 優勢型のアンビバレントな自己評価と自己愛が関連することを示すものであると思われる。

総合考察

自尊感情と自己愛傾向の関連は、変数間の相関関係の結果から考察した場合に、自尊感情を2因

子として解釈した方が良いことが明らかとなった。しかしながら、自尊感情と自己愛傾向の関連は単純な相関関係では十分には説明されない。なぜなら、自尊感情尺度に対してクラスター分析を行った場合に、PSEとNSEがアンバランスな個人が20—30%ほど存在することが明らかとなり、この点に着目することで自尊感情と自己愛の関連性について新たな説明を加えることが可能であったからである。特徴的な点としては、自尊感情をPSEとNSEの2側面を仮定した際に、この両者がともに高い群において最も自己愛が高いという結果が得られなかったことである。本研究は自尊感情尺度を単因子とした場合よりも、PSEとNSEの2因子として捉え、そのバランスに着目することで、安定的なパーソナリティである自己愛との関連を説明できる可能性を示している。

無関心型ないしは過敏型の自己愛が高い人の自己評価の様相というものは、肯定的なものと否定的なものでアンバランスな人、とりわけ、肯定的な自己像を受容する反応（PSE）が優位という意味で自己評価が高い。一方、否定的自己像を拒否する反応（NSE）が優位という意味で自己評価が高い人の自己愛傾向は低いと考えられる。また、PSEとNSEの両方が高いことは自己評価の一貫性の高さを意味しており、「単に自己評価が高い人」とも解釈できよう。あるいは、自己の実態に比べて良すぎるわけでも悪すぎるわけでもない「等身大の自分とその自己評価」を所有しているため自己愛者とは言えない、という説明も可能かもしれない。逆に、「単に自己評価が低い人」つまりPSEとNSEの両方が低い人は、分析2bの結果から、必ずしも過敏型自己愛の傾向が強くないことが示されており、2種類の自己愛の両側面においてPSEとNSEのバランスが重要な意味を持つ可能性を一貫して示唆しているものと思われる。ただし、本研究の結果は決して多くないデータセットから得られた傾向であって、本当に一貫した傾向が得られるかどうか今後も検討が必要である。また、本研究の限界として、質問紙法でアンビバレントな自己評価をした人は面接法においてもアンビバレントで自己愛的であると判定され得るのかどうか、あるいは実際に臨床群とされる確率はどの程度のものであるかといった検討をしていないことを挙げられる。

自尊感情は教育的目標としても使用される心理学的概念であるが、これを教育的目標とした場合には、自分の重要性を主張する尊大な人間を育成する可能性が懸念されているように思われる（例えば、国立教育政策研究所、2015）。この原因は、自尊感情と自己愛に相関が認められ共通の行動様式がみられたり、「自尊」感情について字義上の議論を行っていたりするためではないかと推察される。本稿における自尊感情の2側面の整理は、これらの議論に対して、自尊感情の議論は、ただ単純にその数値が高いか低いかに基づいて行われるべきでないことを提案しており、またその上で、これまで想定されていなかった数パーセントのタイプの人に着目することができる可能性を示唆しているものである。特に、NSEがPSEよりも優勢であることは、自己愛的でない人間像を想定する上で重要な点であると思われる。これに加えてNSEについては、藤田他（2017）によるストレスの窓モデルで明らかになっているように精神健康上重要な因子でもあることから、NSEが高いことは教育上好ましい傾向と理解することはできないだろうか。本研究の結果は、このような側面（NSE）に着目するような教育的取り組み、代表的には、川井・吉田・宮元・山中（2006）による「ネガティブな事象に対する自己否定的な認知への反駁の促進」の教育的重要性を傍証しているものと考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders fifth edition*, Arlington, VA: American Psychiatric Publishing.
- (米国精神医学会 日本精神神経学会 (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 高橋三郎・大野 裕 (監訳) 医学書院)
- Arthur, D. and S. Vassilvitskii (2007). k-means++: The advantages of careful seeding. In H. Gabow (Ed.), *Proceedings of the 18th Annual ACM-SIAM Symposium on Discrete Algorithms [SODA07]* (pp. 1027-1035). Philadelphia, PA: Society for Industrial and Applied Mathematics.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, *103*, 5-33. doi:10.1037/0033-295X.103.1.5
- Brummelman, E., Thomaes, S., & Sedikides, C. (2016). Separating narcissism from self-esteem. *Current Directions in Psychological Science*, *25*, 8-13. doi:10.1177/0963721415619737
- Boduszek, D., Hyland, P., Dhingra, K., & Mallett, J. (2013). The factor structure and composite reliability of the Rosenberg Self-Esteem Scale among ex-prisoners. *Personality and Individual Differences*, *55*, 877-881. doi:10.1016/j.paid.2013.07.014
- Carmines, E. G., & Zeller, R. A. (1979). *Reliability and validity assessment*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Dhawan, N., Kunik, M. E., Oldham, J., & Coverdale, J. (2010). Prevalence and treatment of narcissistic personality disorder in the community: A systematic review. *Comprehensive Psychiatry*, *51*, 333-339. doi:10.1016/j.comppsy.2009.09.003
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (1992). セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic Psychiatry in clinical Practice: The DSM-IV Edition*. Washington, DC: American Psychiatric Press.
- (ギャバード, G. O. 館 哲郎 (監訳) (1997). 精神力動的精神医学—その臨床実践 DSM-IV版 3 臨床編: II軸障害 岩崎学術出版社)
- Georg M. G. (2013). LICORS: Light cone reconstruction of states predictive state estimation from spatio-temporal data. <https://cran.r-project.org/web/packages/LICORS/>
- 藤田尚文・福留広大・古口高志・小林 渚 (2017). ストレスの窓モデル—防御因子が制御する窓によるストレス反応の加算 教育心理学研究, *65*, 12-25. doi:10.5926/jjep.65.12
- 福留広大・藤田尚文・戸谷彰宏・小林 渚・古川善也・森永康子 (2017). 中学生におけるローゼンバーグ自尊感情尺度の2側面—「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」 教育心理学研究, *65*, 183-196. doi:10.5926/jjep.65.183
- 福留広大・森永康子 (2018). 自己評価の尺度における肯定的項目群因子と否定的項目群因子に関する年齢別の分析—ローゼンバーグ自尊感情尺度と自己効力感尺度 教育心理学研究, *66*, 212-224.

doi:10.5926/jjep.66.212

- 市橋秀夫 (2015). 自己愛精神的構造に対する精神療法—自尊心の病理, 精神療法, 41, 322-326.
- 上地雄一郎 (2004). 自己愛の障害とその形成過程 上地雄一郎・宮下一博 (編) もろい青少年の心—自己愛の障害 発達臨床心理学的考察 北大路書房
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 80-91. doi:10.2132/personality.14.80
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291. doi:10.2132/personality.17.280
- 上地雄一郎 (2011). 自己愛の臨床と実証研究の間 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房
- 柏瀬宏隆 (1989). 自己愛パーソナリティー障害 青年心理, 73, 74-80.
- 川井栄治・吉田寿夫・宮元博章・山中一英 (2006). セルフ・エスティームの低下を防ぐための授業の効果に関する研究—ネガティブな事象に対する自己否定的な認知への反芻の促進 教育心理学研究, 54, 112-123. doi:10.5926/jjep1953.54.1_112
- 国立教育政策研究所 (2015). 「自尊感情」? それとも、「自己有用感」 生徒指導・進路指導研究センター (編) 生徒指導リーフ, 18. 2015年3月 Retrieved from <http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf> (2018年12月4日)
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 (2006). 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35) の作成の試み パーソナリティ研究, 14, 214-226. doi: 10.2132/personality.14.214
- Lindwall, M., Barkoukis, V., Grano, C., Lucidi, F., Raudsepp, L., Liukkonen, J., & Thøgersen-Ntoumani, C. (2012). Method effects: The problem with negatively versus positively keyed items. *Journal of Personality Assessment, 94*, 196-204. doi:10.1080/00223891.2011.645936
- Marsh, H. W., Scalas, L. F., & Nagengast, B. (2010). Longitudinal tests of competing factor structures for the Rosenberg Self-Esteem Scale: Traits, ephemeral artifacts, and stable response styles. *Psychological Assessment, 22*, 366-381. doi:10.1037/a0019225
- Michaelides, M. P., Zenger, M., Koutsogiorgi, C., Brähler, E., Stöbel-Richter, Y., & Berth, H. (2016). Personality correlates and gender invariance of wording effects in the German version of the Rosenberg Self-Esteem Scale. *Personality and Individual Differences, 97*, 13-18. doi:10.1016/j.paid.2016.03.011
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム 金子書房
- Mullen, S. P., Gothe, N. P., & McAuley, E. (2013). Evaluation of the Rosenberg Self-Esteem Scale in older adults. *Personality and Individual Differences, 54*, 153-157. doi:10.1016/j.paid.2012.08.009
- 中山留美子 (2008). 肯定的自己評価の諸側面—自尊感情と自己愛に関する研究の概観から 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 55, 105-125. doi:10.18999/nupsych.55.105
- 中山留美子 (2011). 自己愛の誇大性と過敏性 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究,

54, 188-198. doi: 10.5926/jjep1953.54.2_188

岡田 涼 (2009). 青年期における自己愛傾向と心理的健康—メタ分析による知見の統合— 発達心理学研究, 20, 428-436. doi: 10.11201/jjdp.20.428

小塩真司 (1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究—自尊感情, 社会的望ましさととの関連— 名古屋大学教育學部紀要 心理学, 44, 155-163.

小塩真司・中山留美子・清水健司 (2011). 2種類自己愛モデル統合の試み—3つのモデルの相互関係— 日本社会心理学会第52回大会発表論文集, 207.

R Core Team (2018). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.

Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press.

清水和秋・吉田昂平 (2008). Rosenberg 自尊感情尺度のモデル化—wording と項目配置の影響の検討— 関西大学社会学部紀要, 39, 69-97.

清水 裕 (2001). 自己評価・自尊感情 山本真理子 (編) 堀 洋道 (監修) 心理測定尺度集 1—人間の内面を探る— 自己・個人内過程 (pp.29-31) サイエンス社

田中道弘 (2006). Rosenberg の自尊心尺度の再検討 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 6, 135-139.

Torgersen, S., Kringlen, E., & Cramer, V. (2001). The prevalence of personality disorders in a community sample. *Archives of General Psychiatry*, 58, 590-596. doi:10.1001/archpsyc.58.6.590

Trull, T. J., Jahng, S., Tomko, R. L., Wood, P. K., & Sher, K. J. (2010). Revised NESARC personality disorder diagnoses: gender, prevalence, and comorbidity with substance dependence disorders. *Journal of Personality Disorders*, 24, 412-26. doi:10.1521/pedi.2010.24.4.412

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68. doi:10.5926/jjep1953.30.1_64

付 記

- 1) 本研究は JSPS 科研費 (JP16J03013) によって実現しました。ここに記して謝意を表します。
- 2) 調査に参加, 協力下さった皆様に御礼申し上げます。
- 3) 本論文で使用されたデータセットは, 分析 1 及び分析 2b の部分を除いて, 以下の論文で使用されたものを含む。いずれも第一著者が調査を主導したものであり, 本稿とは分析の観点が異なる。ただし, 方法の記述や尺度の確認的因子分析の結果, 信頼性, 記述統計に関する部分は完全に一致する部分がある。
 1. 藤田尚文・福留広大・古口高志・小林 渚 (2017). ストレスの窓モデル—防御因子が制御する窓によるストレス反応の加算, 教育心理学研究, 65, 12-25. doi:10.5926/jjep.65.12
 2. 福留広大・藤田尚文・戸谷彰宏・小林 渚・古川善也・森永康子 (2017). 中学生におけるローゼンバーク自尊感情尺度の2側面—「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」, 教育心理学研究, 65, 183-196. doi:10.5926/jjep.65.183
 3. 福留広大 (2017). ローゼンバーク自尊感情尺度の2側面に関する研究:「肯定的自己像の受容」

と自己愛, Well-being との関連, 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域), 66, 151-157. doi:10.15027/44817

4. 福留広大・森永康子 (2018). 自己評価的尺度における肯定的項目群因子と否定的項目群因子に関する年齢別の分析—ローゼンバーグ自尊感情尺度と自己効力感尺度— 教育心理学研究, 66, 212-224. doi:10.5926/jjep.66.212

ポジティブ記憶の無意図的想起と潜在的感情の関連

橋本 淳也・渡邊 洋一・宮谷 真人・中尾 敬

The relationship between involuntarily retrieved positive autobiographical memory and implicit mood

Junya Hashimoto, Yoichi Watanabe, Makoto Miyatani, and Takashi Nakao

Previous studies have reported that positive autobiographical memories are involuntarily retrieved on a daily basis and often accompany mood changes. Previous studies have used subjective report methods to measure the impact of involuntary retrieval on mood. However, subjective report methods are known to be easily distorted by social desirability and demand characteristics. To avoid this problem, we applied the measurement of implicit mood and examined the impact of involuntary positive memory on mood. Sixty-four participants participated in the experiment and 48 participants were included in the analyses. Participants carried out an easy task in which the retrieval cue was presented, to induce an involuntary positive memory. Participants were also asked to rate the mood of nonsense words in order to measure implicit mood before and after the task. The results demonstrated that the involuntary positive memory retrieval increased positive mood in participants who exhibited lower positive implicit mood before the involuntary memory retrieval. We experimentally demonstrated that involuntarily retrieved positive memories can improve implicit mood.

キーワード : involuntary autobiographical memory, positive memory, implicit mood

問 題

「家族と一緒に動物園に行った」のような過去に経験した個人的出来事の記憶を自伝的記憶という。自伝的記憶は、思い出そうという意図がないにもかかわらず、ふと思い出されることがある。このような想起は無意図的想起と呼ばれ、日常的に誰しもが経験する現象として研究が進められている (レビューとして, Berntsen, 2010)。無意図的想起に関する研究は、日誌法を中心に行われている。日誌法とは、参加者が報告用紙を所持しながら日常生活を過ごし、無意図的想起が生じたときにその報告用紙への回答を行うことで、想起内容や想起時の状況、想起された記憶の性質などを調査する方法である (雨宮, 2014)。日誌法を用いた研究により、無意図的想起は日常的にポジティブな記憶が想起されやすく、気分に対してポジティブな影響をもたらすことが示されている (Berntsen,

1996)。したがって、ポジティブ記憶の無意図的想起が気分及ぼす影響を詳細に検討することは、私たちの実生活に沿った記憶と感情の関連を明らかにすることにつながる。またポジティブ記憶の無意図的想起は抑うつ者の気分改善に役立つ可能性が示唆されていることから (Watson, Bernsten, Kuyken, & Watkins, 2012), 臨床的応用にもつながることが期待される。

このような自伝的記憶の無意図的想起による気分への影響は、これまで主観的評定によってのみ検討されてきた。例えば、Bernsten (1996) は参加者自身の気分について 5 件法の評定 (-2: 非常にネガティブ-2: 非常にポジティブ) によって気分状態を測定している。また Watson et al. (2012) では、気分への影響についてよい影響、悪い影響、影響なしという 3 つの選択肢から選ばせることで測定を行っている。しかし、このような主観的評定は社会的望ましさや要求特性などの影響によって回答が歪められてしまう可能性がある (及川・及川, 2010; Schell, Klein, & Babey, 1996)。すなわち、例えば、実際の気分状態にはかかわらず、ポジティブな記憶を想起したため、ポジティブな影響があったと回答しようといった回答者の意識的な回答の歪みが生じる可能性がある。

このような気分の主観的評定の問題に対処するために、自伝的記憶の無意図的想起以外の研究では、社会的望ましさや要求特性の影響を受けない潜在的な気分状態を測定する指標を用いた検討が行われている。Implicit Positive and Negative Affect Test (IPANAT; Quirin, Kazén, & Kuhl, 2009; 日本語版: 下田・大久保・小林・佐藤・北村, 2014) は、無意味つづり (例えば「SAFME」) が表す気分状態について「幸せな」などの感情語がどの程度当てはまるかを評定させることで、回答者の本来の気分状態を無意味つづりに反映させ、間接的に気分状態を測定する。IPANAT を用いた研究として、及川・及川 (2012) では、実験参加者にポジティブ、ニュートラル、ネガティブ気分のいずれかを喚起させた後、その気分を抑制するよう教示することによってどのような気分状態になるかを検討している。その結果、主観的評定 (日本語版 PANAS; 佐藤・安田, 2001) による顕在的な気分状態は、喚起された気分条件間での差が認められなかった一方で、潜在的な気分状態では喚起された気分条件間での差が認められている。このように、潜在的な気分状態を測定することで回答者本来の気分状態を測定することが可能となる。

そこで、本研究では日本語版 IPANAT を使用し、ポジティブな自伝的記憶の無意図的想起が潜在的な気分状態に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。また、記憶の想起が気分及ぼす影響は想起を行う前の気分状態によっても異なる可能性がある。例えば、想起前のポジティブ気分が高い者と低い者では、低い者のほうが大きな気分変化が生じやすいと考えられる。そこで本研究では想起前の気分状態も考慮した検討を行う。本研究の仮説は、想起前のポジティブ気分が低い者ほど、ポジティブ記憶の無意図的想起によって、ポジティブ気分が増加する (仮説 1), 想起前のネガティブ気分が高い者ほど、ポジティブ記憶の無意図的想起によって、ネガティブ気分が減少する (仮説 2) の 2 つである。また本研究の実施方法に関連して、上述したように、無意図的想起の研究方法は日誌法を中心に行われている。しかし、日誌法では無意図的想起時の状況を統制することが難しいため、想起以外の要因が気分状態に影響を及ぼす可能性がある。そこで本研究では、想起時の状況の統制が可能な実験法によって検討を行う。

方 法

実験参加者 大学生 64 名 (女性 44 名, 平均年齢 20.5 歳, $SD = 0.8$, 年齢未回答者 3 名) が実験に参加した。すべての実験参加者に対して, 実験はいつでも中断できること, 得られたデータは研究目的以外には使用せず, また個人が特定されることがないことを口頭および書面にて伝え, 書面による同意を得た。

実験刺激 雨宮・関口 (2006) を参照し, ポジティブ記憶の無意図的想起を誘発するための手がかり語として, 修学旅行を使用した。また実験事態への影響が少ないと考えられるニュートラルな感情価を持つフィラー語として荷台, 港湾, 上着, 分野, 係員を五島・太田 (2001) より選出した。

気分尺度 潜在的気分を測定するため, 日本語版 IPANAT (下田ら, 2014) を使用した。日本語版 IPANAT では, 6 種類のアルファベットの無意味つづり (「SAFME」, 「VIKES」, 「TUNBA」, 「TALEP」, 「BELNI」, 「SUKOV」) が表す気分について, 6 項目の感情語 (幸せな, 無力な, 元気な, 緊張した, 楽しい, 憂うつな) のそれぞれがどの程度当てはまるかを「1: 全くあてはまらない」から「4: とてもあてはまる」の 4 件法で評定することで, 潜在的気分が測定される。

質問紙 実験は冊子形式の質問紙を配布し行った。冊子の構成は以下の通りであった。1 ページ目では, 実験参加にあたる注意事項および年齢と性別の回答欄が記載され, 実験への参加を同意した場合のみ, 年齢と性別への回答を行うよう求めた。2 ページ目では, 本実験は単語が表す気分を評定する実験であるという教示と気分評定の練習のため, 「FILNU」という無意味つづりと 6 項目の感情語が記載されていた。

3 ページ目より実験の本題に関する内容であった。まず 3 ページ目では, 事前の気分評定 (事前ポジティブ気分, 事前ネガティブ気分) のため, 日本語 IPANAT が記載された。すなわち, 6 つの無意味つづりと, 各無意味つづりに対して 6 項目の感情語が印刷されていた。4 ページ目では, 無意図的想起誘発のための手がかり語 (修学旅行) と 5 つのフィラー語と共に, 各語に対して IPANAT における 6 つの感情語が記載されていた。6 つの感情語を記載した理由は, 単語が表す気分を評定するという課題を手がかり語およびフィラー語にも行わせることで, 無意図的想起誘発のためのフィラー課題としたためである。5 ページ目では, 事後気分評定 (事後ポジティブ気分, 事後ネガティブ気分) のため, 3 ページ目と同様日本語版 IPANAT が記載されていた。

6 ページ目および 7 ページ目には, 記憶想起に関する質問および内省報告に関する質問が記載されていた。質問項目は以下の通りであった。まず課題中での修学旅行に関する記憶想起の有無および鮮明度 について「0: 何も思い出さない」から「3: はっきり思い出した」の 4 件法で回答を求めた。このとき, 想起があったと報告した場合 (1-3 のいずれかと回答した場合) のみ, 想起した出来事についての時期, 場所, 内容 (いずれも自由記述), 現在の自身にとっての感情価 (1: 非常に不快である—7: 非常に快い) および重要度 (1: まったく重要でない—7: 非常に重要である), 思い出そうという意図の有無について回答を求めた。また想起した出来事の自由記述については, 参加者のプライバシー配慮のため, 記述したくない場合には「×」と記述するよう求めた。最後に, 本実験が記憶の実験であることに気づいていたかどうかについて, また 2 回の無意味つづりへの気分評定

(すなわち、IPANAT) に対して、2 回とも同じように回答しようという意図があったかどうかについて尋ねる項目が記載され、すべての参加者に回答するよう求めた。

手続き 実験は授業時間内に集団で行われ、質問紙を配布し実験を開始した。初めに書面による同意を得た後、実験の教示を行った。教示では、本実験は単語が表す気分に関する評定を行う実験であると教示し、記憶の実験であることは伝えなかった。また意味のある単語と意味のない単語が出てくること、直感的に回答を行うようにすることを教示した。その後、気分評定の練習を行い、以降は実験者の指示があるまでページをめくらないよう指示した。練習が終了すると、事前気分を評定するため、IPANAT の評定を開始した。すべての実験参加者が回答を終えたことを確認し、無意図的想起誘発課題を行った。すべての実験参加者が課題を終えたことを確認した後、事後気分の評定のため再度 IPANAT の評定を行った。すべての実験参加者が回答を終えたことを確認し、記憶想起に関する質問および内省報告に関する質問に移るよう指示をした。以降は実験参加者のペースで回答させ、回答が終わったら実験を終了した。実験にかかった時間はおよそ 15 分であった。

統計解析 分析には HAD16.012 (清水, 2016) を用いた。気分状態について算出するため、下田ら (2014) を参照し、IPANAT の得点化を行った。まず、各無意味つづりに対する 6 種類の感情語ごとの個人内平均値を算出し、感情語得点を算出した。続いて、算出された感情語得点をポジティブ (幸せな、元気な、楽しい)、ネガティブ (無力な、緊張した、憂うつな) 別に個人内平均値を算出し、それぞれポジティブ気分得点、ネガティブ気分得点とした。内的整合性について確認するため、信頼性係数 (Cronbach's α) を算出した結果、いずれの得点においても .80 以上であり、十分な値を示していた (事前ポジティブ気分: $\alpha = .91$; 事前ネガティブ気分: $\alpha = .80$; 事後ポジティブ気分: $\alpha = .90$; 事前ネガティブ気分: $\alpha = .85$)。また、想起前後での気分変化の指標として、事後気分得点から事前気分得点の値を引いた気分変化得点をポジティブ気分、ネガティブ気分それぞれについて算出した。

有効データについて、2 度の気分評定に対して同じように回答しようとしたと報告した 5 名、意図的な記憶の想起を行ったと報告した 5 名、想起した出来事に関する内容が未記入の場合や自身の経験ではない内容を報告した 4 名、および回答不備のあった 2 名の合計 16 名を分析から除外し、残りの 48 名を対象に分析を行った。48 名のうち、想起した出来事の感情価の評定において、5 以上 (すなわち、ポジティブな出来事) と評定した者をポジティブ想起あり、感情価の評定が 4 以下であった者ならびに記憶の想起が生じなかった者をポジティブ想起なし群にそれぞれ割り当てた (ポジティブ想起あり: 32 名、ポジティブ想起なし: 16 名)。

結 果

ポジティブ想起あり、なし各群の事前および事後のポジティブ気分、ネガティブ気分を Table1 に示した。想起前の気分状態がポジティブ記憶想起に及ぼす影響について検討するため、事前ポジティブ気分および事前ネガティブ気分を説明変数、ポジティブ想起の有無を目的変数としたロジスティック回帰分析を行った。その結果、事前ポジティブ気分および事前ネガティブ気分ともに、ポ

ジティブ想起の有無に対する有意な影響は見られなかった (事前ポジティブ気分: $OR = 1.48, p = .55$; 事前ネガティブ気分: $OR = 0.75, p = .73$)。

Table1

ポジティブ想起あり, なし各群における気分得点の平均値。()内は SD 。

	ポジティブ気分		ネガティブ気分	
	Pre	Post	Pre	Post
ポジティブ想起あり	2.06 (0.54)	2.11 (0.47)	1.83 (0.43)	1.77 (0.48)
ポジティブ想起なし	1.99 (0.41)	2.08 (0.53)	1.86 (0.48)	1.84 (0.43)

ポジティブ想起の有無と想起前の気分状態が想起後の気分状態に及ぼす影響について検討するため、ポジティブ想起の有無と事前気分状態、およびその交互作用を説明変数、気分変化得点を目的変数とした重回帰分析をポジティブ気分、ネガティブそれぞれについて行った。まずポジティブ気分について、ポジティブ想起の有無および事前ポジティブ気分の主効果はともに有意ではなかった (想起の有無: $\beta = -0.06, p = .26$; 事前気分: $\beta = -0.19, p = .67$)。一方で、ポジティブ想起の有無と事前気分状態の交互作用は有意傾向であった ($\beta = -0.30, p = .08$)。単純傾斜分析の結果、ポジティブ想起あり群において、事前ポジティブ気分の影響が有意であった ($\beta = -0.48, p = .003$; Figure 1)。またネガティブ気分については、事前ネガティブ気分の主効果が有意であった ($\beta = 0.33, p = .03$)。ポジティブ想起の有無の主効果 ($\beta = 0.08, p = .56$)、および交互作用は有意ではなかった ($\beta = -0.16, p = .28$)。

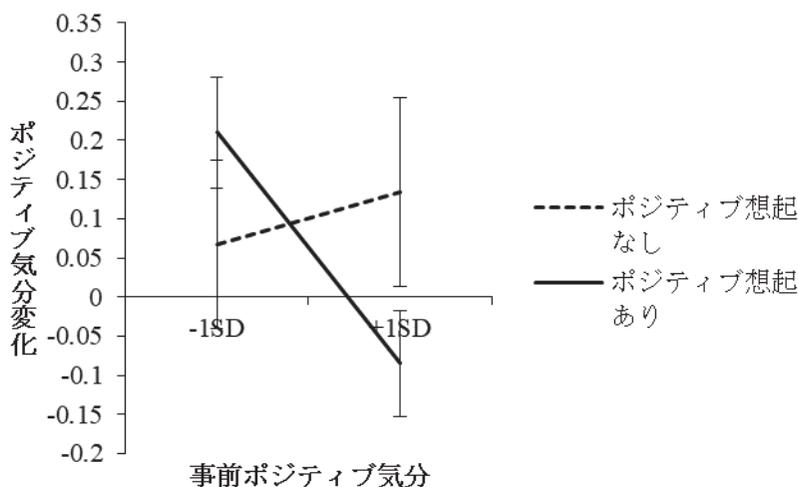


Figure 1. ポジティブ想起の有無と事前ポジティブ気分状態によるポジティブ気分変化への影響 (エラーバーは標準誤差)。

考 察

本研究の目的は、ポジティブな自伝的記憶の無意図的想起が潜在的な気分状態に及ぼす影響について明らかにすることであった。そこで、想起前のポジティブ気分が低い者ほど、ポジティブ記憶の無意図的想起によって、ポジティブ気分が増加する (仮説 1)、想起前のネガティブ気分が高い者ほど、ポジティブ記憶の無意図的想起によって、ネガティブ気分が減少する (仮説 2) という 2 つの仮説の検証を行った。実験の結果、想起前のポジティブ気分が低い者ほど、ポジティブ記憶を無意図的に想起することで、ポジティブ気分が高まった。また事前のネガティブ気分が高い者ほど、ポジティブ記憶を想起したかどうかにはかわからず、ネガティブ気分が減少した。このことから、仮説 1 は支持されたが、仮説 2 は不支持であった。

本研究の結果から、ポジティブ記憶の無意図的想起は潜在的な気分ポジティブな影響を与え、その影響は想起前の気分状態によって異なることが示された。このことから、従来の研究の問題点であった気分状態に対する回答の歪みという可能性を克服した場合であっても、ポジティブ記憶の無意図的想起は気分ポジティブな影響を与えることが明らかとなった。この結果は先行研究と一貫しており (e.g., Berntsen, 1996)、ポジティブ記憶の無意図的想起は気分をポジティブにすると考えられる。また、想起による気分への影響は事前の気分状態によって異なっていた。特に、想起前のポジティブ気分が低いほど、気分をポジティブにしていたことから、無意図的想起は気分の向上に寄与していると考えられる。ポジティブ記憶の想起は気分を改善することから (Josephson, Singer, & Salovey, 1996)、無意図的想起は潜在的なレベルで気分の改善をもたらしていることが示唆される。

また本研究においては、想起前のポジティブ気分によってポジティブ記憶の無意図的想起の有無への影響は見られなかった。無意図的想起においては、想起時の気分状態に対応した感情価を持つ記憶が想起されやすいという気分一致効果が生じることが示されている (Berntsen, 1996)。しかし、本研究においてはポジティブ気分、ネガティブ気分のいずれにおいてもポジティブ記憶の無意図的想起の生起には影響しなかったため、潜在的な気分状態は無意図的想起の生起に影響しない可能性がある。一方で、本研究ではポジティブ想起を誘発しやすい手がかり語を用いたため、気分状態によらずポジティブ記憶の想起が誘発された可能性もある。潜在的な気分状態が無意図的想起に及ぼす影響については、様々な感情価の記憶の想起を誘発する手がかり語を使用して検討を行う必要があるだろう。

本研究にはいくつかの限界点が挙げられる。第一にネガティブ気分の変化においては、ポジティブ想起の有無による違いが見られなかったことである。すなわち、事前のネガティブ気分が高いほど、ネガティブ気分が減少したという効果は無意図的想起によるものではなく、手がかり語の呈示そのものが気分に影響したなど、別の要因による可能性がある。今後の検討においては、手がかりの呈示の有無を操作するなどして、ポジティブ想起の有無の明確な区別を行い、気分への影響を検討する必要がある。第二の限界点は、主観的な気分評定との直接的な比較を行っていないことである。本研究では、潜在的指標のみで気分状態を測定したため、顕在的な気分状態との対応について

は明らかになっていない。そのため今後の研究において、顕在的な気分状態と潜在的な気分状態を共に測定し、両者の関係性を直接的に明らかにする必要があるろう。

本研究では、ポジティブ記憶の無意図的想起が潜在的な気分状態に及ぼす影響について検討を行った。その結果、ポジティブ記憶の無意図的想起は潜在的な気分ポジティブな影響をもたらし、その効果は想起前の気分状態によって異なることが明らかとなった。今後は顕在的な気分状態と潜在的な気分状態を直接比較することで、記憶と感情の関連についてさらに明らかにしていく必要があるだろう。

引用文献

- 雨宮 有里 (2014). 意図的想起と無意図的想起——自伝的記憶 関口貴裕・森田泰介・雨宮有里 (編) ふと浮かぶ記憶と思考の心理学——無意図的な心的活動の基礎と臨床—— (pp. 11-24) 北大路書房
- 雨宮 有里・関口 貴裕 (2006). 無意図的に想起された自伝的記憶の感情価に関する実験的検討 心理学研究, 77, 351-359.
- Berntsen, D. (1996). Involuntary autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, 10, 435-454.
- Berntsen, D. (2010). The Unbidden past: Involuntary autobiographical memories as a basic mode of remembering. *Current Directions in Psychological Science*, 19, 138-142.
<https://doi.org/10.1177/0963721410370301>
- 五島 史子・太田 信夫 (2001). 漢字二字熟語における感情価の調査 筑波心理学研究, 23, 45-52.
- Josephson, B. R., Singer, J. A., & Salovey, P. (1996). Mood regulation and memory: Repairing sad moods with happy memories. *Cognition & Emotion*, 10, 437-444. <https://doi.org/10.1080/026999396380222>
- 及川 晴・及川 昌典 (2010). 危機的状況での認知, 感情, 行動の変化——新型インフルエンザへの対応—— 心理学研究, 81, 420-425.
- 及川 晴・及川 昌典 (2012). 感情抑制が顕在モードと潜在モードに及ぼす影響 社会心理学研究, 28, 24-31.
- Quirin, M., Kazén, M., & Kuhl, J. (2009). When nonsense sounds happy or helpless: The implicit positive and negative affect test (IPANAT). *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 500-516.
<https://doi.org/10.1037/a0016063>
- 佐藤 徳・安田 朝子 (2001). 日本語版PANASの作成 性格心理学研究, 9, 138-139.
- Schell, T. L., Klein, S. B., & Babey, S. H. (1996). Testing a hierarchical model of self-knowledge. *Psychological Science*, 7, 170-173. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.1996.tb00351.x>
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 下田 俊介・大久保 暢俊・小林 麻衣・佐藤 重隆・北村秀哉 (2014). 日本語版IPANAT作成の試み 心理学研究, 85, 294-303. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.85.13212>

Watson, L. A., Berntsen, D., Kuyken, W., & Watkins, E. R. (2012). The characteristics of involuntary and voluntary autobiographical memories in depressed and never depressed individuals. *Consciousness and Cognition, 21*, 1382–1392. <https://doi.org/10.1016/j.concog.2012.06.016>

認知行動療法と「腑に落ちる理解」

重松 潤・尾形明子・伊藤義徳

Cognitive Behavior Therapy and “Total Conviction”

Jun Shigematsu, Akiko Ogata and Yoshinori Ito

The purposes of the present article are to explain an outline about cognitive behavior therapy (CBT) and “total conviction”. The effectiveness of CBT has been demonstrated by studies conducted in a number of countries. As a predecessor of CBT, cognitive therapy proposed the importance of examining cognitive factors such as “automatic thought” and “schemas”. CBT supposes that efficient treatment is accomplished by restructuring these constructs. However, there is confusion regarding the understanding of cognitive modification and the difficulty of accurately capturing cognitive modification in a clinical situation. Negative effects, such as worsening of the therapeutic relationship and the occurrence of anxiety and depression, have been reported in some cases where a cognitive approach was used with a patient. The current study suggests that some therapists use a perspective of “total conviction” to solve these problems. A previous study revealed that “total conviction” is a cognitive factor that can enable this behavior. However, previous studies of “total conviction” involve several limitations. Finally, we discuss the potential future directions of research on “total conviction”. We suggest that further study of “total conviction” may enable replication of the treatment process of CBT.

キーワード : Cognitive Behavior Therapy, Total Conviction, Cognitive approach, Cognitive restructuring

はじめに

本稿では、認知行動療法における認知的アプローチについて概説し、認知へのアプローチにおける中核要素を反映すると考えられる「腑に落ちる理解」に関する研究の動向を紹介する。さらに、「腑に落ちる理解」に関する研究が今後の認知行動療法の発展にどのように寄与するか考察する。

認知行動療法

数ある心理療法の中でも近年目覚ましい発展を遂げているもののひとつが、認知行動療法である。認知行動療法の効果を検討したメタ分析においては、その効果の頑健なエビデンスが主張されている (Hofman, Asnanni, Vonk, Sawyer, & Fang, 2012)。科学的エビデンスに基づいた認知行動療法は、

英米圏の国々をはじめとして世界の多くの地域の臨床心理学で活用が広まっている (Westbrook, Kennerley & Kirk, 2011 下山監訳 2012)。

認知行動療法は、行動理論 (学習理論) と認知理論という全く異なる二つの理論に基づく心理療法が、「エビデンスベースド」の旗の下に統合されてできた心理療法である。本稿では、特に認知理論に基づく認知療法に焦点を当てて論じたい。認知療法は、Beck が 1976 年に『認知療法 (Cognitive Therapy and Emotional Disorders)』を出版したことに始まる。認知療法は、「情緒的な混乱とその他の症状からクライアントを解き放つこと」を目的としており、クライアントに疾患に対する適切な対処法を学んでもらうことを促すアプローチである (Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979 坂野監訳 1992)。そして認知療法は、様々な精神病理学的障害 (例えば、うつ病, 不安, 恐怖症, 痛みの問題等) を治療する際に用いられる, 認知に焦点を当てたアプローチである (Beck et al, 1979 坂野監訳 1992)。Butler, Chapman, Forman, & Beck (2006) は、300 を超える効果研究と 16 のメタ分析を調査し、認知療法は単極性のうつ病や不安障害などに非常に効果があることを示した。また Beck & Dozois (2011) も、他の心理療法との比較から多くの精神疾患の治療において、認知療法の優位性があることを示している。

認知療法の特徴

認知療法は、ある状況下におけるクライアントの感情や行動は、その状況に対する意味づけ・解釈であるクライアントの認知によって規定されるという認知モデルを基礎としている (井上, 1992)。これは、認知の ABC 理論で解説される。この ABC 理論とは、感情や行動を賦活する刺激となるような出来事・状況 (Activating event) と、その出来事に対する評価・解釈・あるいは信念 (Beliefs), 最終的に出来事によってもたらされる感情・行動面の結果 (emotional and behavioral Consequences) という認知と感情・行動の関連性を主張する理論およびモデルである (井上, 1992)。臨床的な問題には、認知的な要因が大きく寄与していることが先行研究によって示されており (e.g., Meichenbaum, 1977), 認知療法では主に ABC の B, つまり認知に焦点を当てる。クライアントの「認知の歪み (考え方のクセ)」に焦点を当て、クライアントの非機能的・不適応的な思い込みを描写し、その妥当性を検証するために、様々な認知的ストラテジーが用いられる。

認知療法では、非機能的な認知を修正するために、感情的な反応に先立つ自動思考 (Automatic Thought) を扱いながら面接を進めていくところにその特長がある (Beck, 1976 大野訳 1990)。自動思考とは、自動的に意識に上る自然発生的解釈のことである (Beck, 1963; Beck, 1967)。特に抑うつ症状につながる認知のパターンとして、自己・経験・未来の領域に対する否定的な自動思考が仮定されている (Beck et al., 1979 坂野監訳 1992)。通常、このような思考は認識されないが、注意を向ければ自動思考は同定することができる。例えば、運転中にいつも焦ってしまい、運転が苦痛だと感じている人がいるとする。運転が苦手なのかといえばそうでもないし、運転歴も 10 年以上あるベテランである。そこで、なぜ運転がそんなに苦痛なのか、職場に向かう運転の最中の思考を注意深く観察してみると、「早くあの仕事終わらせないとまずい」「あれもやっていないじゃないか、早く着かなければ間に合わないかもしれない」など、運転の最中に、到着してからの仕事のことをあれ

これ思い出し、それによって焦りを生んでいることが明らかとなった。このような体験を通して、クライアントは考えが感情や行動に影響を及ぼしているという、認知療法の仮定である ABC 理論を実感することができると考えられる。

実際の面接場面では、このようなクライアントの話しを、感情や行動を賦活する刺激となる出来事・状況 (Activating event) (例えば、運転中に会社の上司からメールが届く)、その出来事に対する評価、解釈、あるいは信念 (Beliefs) (例えば、「早く終わらせないとまずい」、最終的に出来事によってもたらされる感情・行動面の結果 (emotional and behavioral Consequences) (例えば、焦りや不安) の ABC 理論の枠組みからクライアントの問題を理解することを基本とする (井上, 1992)。

認知的アプローチ—認知再構成法

認知療法では、クライアントの症状を改善するために、非機能的な認知の修正を試みるが、そこにおいてスキーマ (認知構造) の変容を意味する「認知再構成」 (Cognitive Restructuring)¹が生じることが重要視される (e.g., Beck & Freeman, 1990 井上監訳 1997)。

認知構造とは、一時的に行われる認知処理とは異なり、比較的安定した認知組織のことを指す (Beck, 1964)。これは、人の認知や行動の規則性を説明するために仮定された構成概念であり、Piaget (1984) のシエマ (schemas), Postman (1951) のカテゴリ (categories), Bruner, Goodnow, & Austin (1956) のコーディングシステム (coding systems) などがその例にあたる。認知療法では、認知構造を指す際、他の概念よりもよく知られ、用いられている Piaget のシエマ (英語でスキーマ) という用語を採用する。Beck の認知モデルにおけるスキーマは、その活性化によって、情報に対する選別、符号化、評価の各段階にバイアスをかける機能があることが仮定されている (Beck, 1964)。これは例えば、うつ病に罹患したことのある患者はうつ状態の時、ネガティブで自己批判的なスキーマが優勢になり、スキーマに一致したネガティブで自己批判的な情報を、優先的に処理するように方向づけられることを意味する。つまり、スキーマが活性化すると、自動的にスキーマに符合した情報処理が優先されることとなり、一方でその他の情報が十分に処理されなくなるのである。

スキーマによって生じる特定の誤った考えと不適応的な思い込みから脱却するために、認知再構成 (Cognitive Restructuring) が重要となる。Meichenbaum (1977) は、クライアントの認知再構成を引き起こすための技法をまとめて認知再構成法と呼び、臨床問題に応用した。この技法は、①問題に関連する出来事、考え、気持ちを観察する、②気持ちの変化に考えが大きく影響していることを理解する、③自分の考えの誤りや過剰さに気づき、現実に即した考えを検討する、④新しい考えを現実場面で実行してみる、といったプロセスで行なわれる (佐藤・佐藤・石川・佐藤・戸ヶ崎・尾形, 2013)。Beck (1976 大野訳 1990) は、認知再構成のメカニズムを「閉鎖的になったシステムに対して、新しい情報や異なった視点に繋がるシステムを開くことによって、治療の改善がみら

¹ “Cognitive Restructuring”は、一般的な定訳として「認知的再体制化 (Meichenbaum, 1977 根建監訳 1992)」、「認知の再構成 (Beck & Freeman, 1990 井上監訳 1997)」、「認知の再機構化 (Beck, 1976 大野訳 1990)」などの訳出がなされている。本稿では、複数の認知行動療法の指南書で「認知再構成 (法)」という用語が多く用いられている現状と、「認知再構成」という現象と「認知再構成法」という方法論の異同を強調するために、「認知再構成」という用語を用いる。

れるようになる」と述べている。すなわち、認知の再構成が生じると、閉鎖的な情報処理が開かれ、新しい情報や視点を検討できるようになるといった認知処理の変容が生じ、その結果として認知内容の修正も生じると考えられる。

認知再構成法が認知再構成法たりうる条件として、Clark (2013) は、「協力的経験主義 (Collaborative empiricism)」、「言語的介入 (Verbal interventions)」、「経験的な仮説検証 (Empirical hypothesis-testing)」の3つを挙げている。「言語的介入」は結果分析 (非適応的な信念を是認していくことによる、短期的・長期的なコストとベネフィットを調べる) や代替的概念の形成 (自己や、いくつかの個人的体験の側面をより適応的な概念に定式化する) などの技法を指す。「経験的な仮説検証」は、クライアント自身の経験に基づき、認知の再構成を行わなければならないという原則である。そして、カウンセリング場面においての基本であり、「言語的介入」と「経験的な仮説検証」の前提条件ともされるものが、認知療法の根本的なスタンスである「協力的経験主義」である。つまり、認知療法の基本的な関わり方にこそ認知再構成を促進する工夫が施されていると考えられる。

Kelly (1955) のパーソンコンストラクト理論の影響を受けた認知行動療法では、クライアントを「個人的科学者」とみなして接し、協力関係を重要視する。「個人的科学者」とは、セラピストの援助を得て、不適応な思考や信念の妥当性を検証したり、行動実験の結果からそれらを修正したりする、クライアントの姿を表す言葉である (Neenan & Dryden, 2004, 石垣・丹野監訳 2010)。Blackburn & Davidson (1995) は、カウンセリングでのイメージを、「2人の科学者 (セラピストとクライアント) が問題を定義し、その問題を定式化 (Case Formulation) した上で検証し、問題解決のために選択肢を発見 (Discovering) する共同研究」という言葉で表現している。これらの言葉から分かるように、認知行動療法を主軸に置いたカウンセリングでは、クライアント自身の能動的な態度が重要になる。Beck et al. (1979 坂野監訳 1992) もまた、こうしたクライアントとセラピストが相互に能動的に関わりながら問題の解決を目指す治療スタンスを指して、「協力的経験主義」と呼んだのである。協力的経験主義には、協働 (Collaboration) と経験主義 (Empiricism) という二つの要素が含まれる (Tee & Kazantzis, 2011)。治療的な協働は、クライアントに信念の同定や観察、そして評価することを促すための手段として、『Cognitive Therapy and Depression』(Beck et al., 1979 坂野監訳 1992) で初めて概説されている。ここで強調されたのは、セラピストは過度に何かを指摘したり教育したりすることはせず、クライアントが自己の認知を扱う際は、クライアントに気づきをもたらされるように振る舞うということである。認知療法家は、話題を誘導・焦点化したり、不明な点を明らかにしたりするという質問の基本的な機能を使用しながら (堀越, 2014)、クライアントを発見へと導く (Guided Discovery: 誘導的発見) ののである。さらに、明らかとなった思考や推論は、経験的に検証される機会を持つことになる。

なぜ、このように誘導的発見が強調されるのか。臨床場面において、セラピスト側がクライアントに考え方の間違っている点を教えるだけでは、まず症状は改善しない (野村, 1996)。セラピストとクライアントが協力的な関係の中で、クライアント自らに「発見」をしてもらい、不合理な認知を変容させることが重要なのである (根建・市井, 1996)。Westbrook et al. (2011 下山監訳 2012) は、クライアントが自分の考え方について振り返り、自ら適応的な考え方を導き出すならば、より

「納得」できるからであると述べている。どれだけ正しいことを他人から言われたとしても納得できないが、同じことを自ら体験的に理解したとき、初めて納得することは、誰しも経験があるだろう。自身で納得してこそ、新しい情報や視点が受け入れられるのである。

認知へのアプローチに関する問題

認知療法の効果の核と想定される認知の再構成であるが、技法としての認知再構成法は一定の効果が示されている一方、その介入の効果量は中程度のまま停滞しており(Rounsaville, Carroll & Onken, 2001)、認知再構成法が適応されたケースの中では時に治療関係の悪化や、不安や抑うつ等の喚起等の有害事象が報告されることもある。これらの問題を引き起こしている主な原因として、本稿では以下の二つを取りあげる。

まず、「認知再構成法を用いると認知が再構成される」という誤解である。この誤解は、認知再構成法の誕生の経緯に由来するものである。認知行動療法の現在の在り方が形作られたのは、Donald Meichenbaum の功績によるところが大きい。彼は、彼が考案した Stress Inoculation Training (ストレス免疫訓練, Meichenbaum, 1977) (以下 SIT と略記) の中で、クライアントの問題にあつらえて技法を組み合わせる、パッケージ療法の手法を提案した。さらに、認知的技法と行動的技法を理論から切り離し、治療という一つの目的のために統合する Cognitive Behavior Modification という考え方も提唱しており (Meichenbaum, 1985 上里監訳 1989)、これが今日の認知行動療法の原型となっている。SIT を提案するにあたり、Meichenbaum (1977) は、当時まだあまりなじみのなかった認知を扱うアプローチを行動的技法と同等の選択肢として位置づけるため、認知内容の修正を図る認知的な技法の一群をまとめ、これを認知再構成法 (Cognitive Restructuring Techniques) と命名した。これにより、認知的アプローチが「わかりやすく」なり、広く臨床場面で用いられるようになったという点で、その功績は大きい。しかし、こうして命名したことが、認知再構成法を適用しさえすれば認知再構成が達成される、といった誤解を招く一因となった。認知再構成は本来、クライアント中で生じる変化を意味する言葉であるにも関わらず、認知再構成自体の研究はなかなか蓄積されず、手段に過ぎない認知再構成法の効果の測定や介入手続きの開発ばかりが進められている現状があると考えられる。

認知へのアプローチが機能的に働かないもう一つの理由として、「認知の修正」に対する理解の多様化、が考えられる。実際に Shigematsu & Ogata (2018) は、認知行動療法を行うセラピストの認知変容に関するコンセンサスは低いことを明らかにしている。このような現象が生じている原因として、方法論的な議論が進む一方、認知が「どのように」「何がきっかけで」変容するのかについての一致した学術的な見解がないため、従来の認知再構成法のパッケージに認知の変容の生起プロセスが反映されていないことが考えられる。従来、認知療法の効果のメカニズムは、認知の内容に修正が起こることによってもたらされると信じられてきた (Beck, 1995 伊藤他訳, 2004)。これまでの認知療法の前提を支えていたのは、抑うつスキーマの程度を測定する Dysfunctional Attitude Scale (DAS) (Weissmann & Beck, 1978) による研究の蓄積である (e.g. Eaves & Rush, 1984)。この尺度は、典型的な抑うつスキーマを表す文章に対して同意する程度を尋ねることにより、抑うつスキーマの

程度を測定するものであり、いわゆる価値観（スキーマ）の内容に焦点を当てた質問紙尺度である。しかしながら、この質問紙を用いた多くの研究によって、その仮説を覆す結果がもたらされている。例えば、うつ病が再発するのは、表面の症状が改善してもスキーマが改善していないから生じると考えられるが、実際には、うつ病が再発する人とならない人の治療後の DAS 得点に差は見られない（Ingram, Miranda, & Segal, 1998）。また、一旦治療を終えて DAS 得点が低下した人でも、ネガティブな音楽を聞かせるだけで DAS 得点が抑うつ時と同等の値まで上昇する（e.g. Hamilton & Abramson, 1983）。この様に、スキーマの変容という考え方だけでは、認知療法の効果は説明しえないことが明らかとなってきたのである。

このような混乱の中、Teasdale らは認知の内容ではなく、その処理の仕方を問題にした情報処理理論を展開し（Teasdale, 1999）、認知療法の効果のメカニズムは「認知内容の修正」ではなく、「認知処理の仕方の変容」であることを明らかにした（Teasdale & Barnard, 1993; Teasdale, Segal, & Williams, 1995; Teasdale, 1999; Teasdale, Moore, Hayhurst, Pope, Williams, & Segal, 2002）。このメカニズムの理解の仕方の転換は、一見すると認知療法の作用機序と、第3世代の認知行動療法の作用機序が全く異なることを強調しているように見える。しかし、そもそもの認知療法の考え方として「認知内容の修正」がすべてであったわけではない。Kovacs & Beck (1978) は、精神病理の認知は内容だけでなく、広義の物であると述べている。認知とは、思考内容と思考過程の両方を指す広義の用語である。彼らによると、対象を知覚して処理する方法、記憶や回想のメカニズムおよび内容、問題解決の姿勢と方略はすべて認知の側面である。つまり、認知には、知ることの過程と、知ることの産物が含まれるのである。この定義に従えば、認知療法でアプローチする「認知」とは、「認知内容」のみならず、「認知処理」も含まれることとなる。元来、Beck が視野に収めていた認知療法の射程は、近年理解されているよりも広がったのである。マインドフルネスアプローチに対しても Beck は、距離を置き、再考し、脱中心化するという認知療法の一連の3つの主な方略について、マインドフルネスアプローチとの類似性を示している（Beck, 2005）。Papageorgiou & Wells (2003) などの注意訓練のパッケージの治療効果等も踏まえ、Beck はこれらの第3世代のアプローチに対し、「認知モデルの枠内で適切に生み出されたもの」と述べている（Beck, 2005）。

このように、認知療法について理解するには、Beck の理論のみならず近年の認知へのアプローチに関する理論についても十分に理解をする必要がある。しかし、認知療法に関する様々な知見は、認知療法の使用ユーザーへの混乱を招いており（Wills, 2009 大野監訳 2016）、認知の変容が一体どのようなものなのか解釈が分かっている現状がある（Shigematsu & Ogata, 2018）。このような混乱を避けるために、実際の臨床場面での認知へのアプローチは、何が起きて、何が功を奏しているのか、改めて考え直す必要がある。しかし、既存の認知変容の解釈のみでは上述のような混乱が避けられないことも考えられるため、新たな視点をもって捉え直す必要があると考えられる。

「腑に落ちる理解」の重要性

それでは、認知の変容をどのように検討すればよいのか。この問題を解決する手掛かりとして、「腑に落ちる理解」に関する研究が参考になる。

「腑に落ちる理解」は認知処理の観点から、「情報が個体に入力された後に起き、情報から導き出される行動の生起頻度を上げる認知的操作」と定義される（重松・伊藤・神谷・平仲・木甲斐・尾形, 2017）。以下に、「腑に落ちる理解」の例を挙げる。「Aさんは深刻な悩み事を抱えていたが、相談できそうな友人達は忙しそうだったため、相談をしなかった。Aさんは周りに心配をかけないようにできるだけ明るく振舞い、辛いときは独りになっていた。そのような日が続いたあるとき、友人から『Aさん大丈夫？独りで抱え込まないで、悩み事があるなら相談してきたらいいよ。』と言葉をかけられ、友人に悩み事を相談することが、Aさんの悩みの解決、ひいては友人の心配を解消することに『ハッ』と気がついた。その後、Aさんは友人に悩み事を打ち明けるようになった。」この例では、「友人に悩み事を打ち明けると、Aさんの悩みと友人の心配を解消する」という問題解決へ向かう情報が提示され、その瞬間「腑に落ちる理解」が生じ、「友人に悩み事を打ち明ける」という行動レパートリーの生起頻度が上昇していると考えられる。「腑に落ちる理解」は、『ハッ』という「気づき」が伴うことが多く、そこには身体的な感覚が伴うことが強調され、Aha体験や洞察との類似性が示唆されている（唐木, 2014）。

この概念は、情報に対する「頭での理解」との対比を示した概念でもある（伊藤・長嶺, 2009）。「頭での理解」は「情報に対する知的な理解はあるが、心的作用によって情報が導き出される行動の生起頻度が上昇しない認知的状態」と定義する。「腑に落ちる理解」や「頭での理解」に関する類似した概念も、これまで経験的に言及されている。Epstein（1998）は「論理的」・「経験的」処理システムと称し、Teasedale（1996）は「命題的」「含意的」意味システムを示唆しており、これらは認知的な処理システムが異なるという臨床的見解から、「頭と心」の葛藤を説明している。例えば「頭ではやめるべきだとわかっているけど、心では続けるべきではないかと感じるんです」といった反応である（Wills, 2009 大野監訳 2016）。

「腑に落ちる理解」の視点から、「洞察を得る」といった臨床心理学的現象を説明すると、現実の「今ここ」で入力されている環境からの情報や刺激が、過去経験に基づいて形成された既存の情報ネットワークと結びつき（新たなノードの形成・強化）、個人のネットワークの中で「処理できる形」で保存される、という情報処理理論で説明できると考えられる。この点を鑑みると、カウンセリングは既存の学習歴や情報と現在の情報のノードの形成を行っていると考えられ、メタファー（e.g., Hayes & Strosahl, 2004 谷・坂本 訳 2014）はその形成過程を支持する機能をもつと考えられる。このような環境への適応は、Piagetの認知発達理論（Piaget, 1970 中垣監訳, 2007）からも考察できる。Piaget（1970 中垣監訳, 2007）によるとスキーマの変容と獲得とは同化と調節により生じるとされる。既存のスキーマを活用して適応的な行動を生起することを同化、自身のスキーマに新しい概念を取り入れて修正するのが調節と考えられ、この場合スキーマの変容とは、調節を生じさせることと言える。いくら新規の情報が入力されても、同化で処理されている場合、スキーマは変容しえないと考えられるが、知的処理の多くのは同化の促進であり、調節は促されていないと考えられる。新しい視点や概念を取り入れるために、既成概念と切り離された「発見」が必要となり、カウンセリングによって「調節」が生起するレベルの理解を「腑に落ちる理解」と言えると考えられる。

「腑に落ちる理解」に関する研究

「腑に落ちる理解」の研究は、伊藤・長嶺（2009）の研究に端を発する。伊藤・長嶺（2009）は認知的再評価のプロセスに注目し、情報に対する「理解」の質の違いによって、認知的再評価の効果が異なることを検討した。この研究では、情報に対して論理的・意味的に理解しただけの「頭だけで理解した」再評価と、体験的に心から理解した「腑に落ちて理解した」再評価の2つに分け、それぞれの再評価によって情報提示後の行動に及ぼす影響を検討している。具体的には、ネガティブな情動を喚起させる課題として、痛みを耐えながら可能な限り冷水に手を入れ続ける Cold-Pressor 課題（以下 CP 課題）を2回行い、1回目と2回目の CP 課題の間に、信憑性のある嘘の情報（冷水に手を入れることによってもたらされる恩恵についての情報）を提示することによって、行動や情動に違いが生じるか検討するものであった。実験の結果、「頭だけで理解」した者と比較して、「腑に落ちる理解」をした者は行動変容が促進され入水時間が延長し、また冷水によるネガティブ情動も低減することが示された。これは、同じ内容の情報を提示しても、その後の認知処理の仕方によって行動や感情反応に違いが生じるということを示している。さらに、「腑に落ちる理解」と「頭だけでの理解」では、その後の結果に明確に違いが生まれるということを示した点で、「腑に落ちる理解」に着目することの意義が示された。

永田・久貝・伊藤（2011）は、心理療法に関する心理教育や体験的なエクササイズが、その効果としての苦痛耐性時間に及ぼす影響を検討した。彼らは、伊藤・長嶺（2009）の実験手続きを踏襲し、偽の情報の代わりに、心理臨床場面で新たにクライアントに提示される情報のアナログとして、マインドフルネスの原理を用いた。マインドフルネスに基づく心理教育は、ネガティブ情動との付き合い方を変え、結果としてネガティブ情動を低減させることが示されている（Arch & Craske, 2006; 伊藤・園田, 2008）。さらに、この原理を言葉のみで伝える「心理教育群」と、体験的エクササイズも併せて行なう「心理教育+マインドフルネストレーニング群（MT 群）」を設定し、マインドフルネスの効果が反映されると考えられる苦痛耐性時間の遅延に及ぼす影響を検討した。その結果、単に言葉で原理を伝えるよりも、体験的エクササイズも行なった MT 群の方が腑に落ちる理解をする者が多く、さらに腑に落ちる理解をした者は、実際に苦痛耐性時間を延長することが示された。体験的なエクササイズは協力的経験主義における経験主義の要素であり、実際に体験を通すことによって、納得して新たな情報を受け入れやすくなったと考えられる。

久貝（2012）の研究では、「腑に落ちる理解」を促進する要因に焦点を当て、個人の認知的柔軟性が「腑に落ちる理解」を促進するか検討した。具体的には、伊藤・長嶺（2009）の研究を踏襲し、認知的柔軟性の高低が苦痛耐性時間に影響を及ぼすが否かを検証した。その結果、認知的柔軟性の高低に関わらず「腑に落ちる理解」をしたことを参加者全員が報告することになるが、「腑に落ちる理解」をすればするほど、CP 課題で生起する不快感覚が少なからず減少することが示された。これはまさにクライアントに納得を導くことの重要性を示唆するものである。

伊藤・長嶺（2009）、永田他（2011）、久貝（2012）の研究では、「腑に落ちる理解」の測定方法がいずれも異なり、また十分な妥当性が示されていない。この点を解決するために、唐木（2014）は「腑に落ちる理解」の客観指標の作成を試みた。唐木らは、健常大学生を対象に「腑に落ちる理

解」をした体験を聴取し、その際の認知・行動・身体感覚・感情面での変化に関する情報を聴取し、「腑に落ちる理解」反応チェックリストを作成した。唐木らはこのチェックリストを認知療法・認知行動療法に精通するセラピストに、実際の臨床現場の中で認知再構成を意図したセッションにおいて使用してもらいセラピストの主観的な認知再構成の効果を予測することが示された。

また、重松他（2017）は、唐木（2014）で作成されたチェックリストを踏まえて、一般大学生を対象に、問題解決過程における新たな解決方略に対する「腑に落ちる理解」の機能を、実験的研究と縦断的な質問紙調査を用いて検討し、「腑に落ちる理解」が問題解決過程において機能的に作用し、かつ問題に直面した後の精神的健康を促進する可能性があることを示した。

上述した「腑に落ちる理解」に関する一連の研究から、「腑に落ちる理解」が認知変容・行動変容において重要な要因であることが示唆される。

「腑に落ちる理解」の測定方法と課題

「腑に落ちる理解」は、定義的に行動の生起の観察をもって客観的には「腑に落ちた」と判断される部分が多いが、実際の臨床現場では、カウンセリング場面の、その場で「腑に落ちる理解」が得られたかどうかという視点が重要視されるだろう。しかし、「腑に落ちる理解」は、対人的なバイアスのかかる場面で「わかった」という言語表出で判断できない。先行研究においても、「腑に落ちる理解」をしたかどうかを判断する方法に共通するのは、ある情報が「腑に落ちた」かどうか、実験者の望む結果に偏らせることなく、協力者から如何にして本音を引き出すかという点であった。

伊藤・長嶺（2009）では「腑に落ちる理解」を判断する方法としてカジュアルトークセッション法を採用した。これは課題終了後、実験終了の偽の教示をして実際に終了した雰囲気を使い、コーヒーなどを提供しながらだけた場を作った上で、実際のところは実験中の情報は嘘であったことを明かした上で、「ぶっちゃけ」信じていたかどうか、本音を尋ねるというものだった。しかしながらこの方法では、判断が実験者の主観に委ねられるため、判断の信頼性に欠点があった。この点を踏まえて永田他（2011）の研究では、より信頼性の高い本音を探る手続きとして、信頼できる他者なら本音を打ち明けやすいだろうという前提のもと、「信頼他者法」を採用した。これは、実験の参加者を、実験者が用意した「サクラ」に連れてきて貰う。そして、実験終了後に、サクラは実験者に対して実験の感想を尋ねるふりをして「腑に落ちる理解」が生じていたかどうかを引き出す質問を投げかけ（例えば、「ぶっちゃけその話信じてた？」など）、その回答に基づいて「腑に落ちる理解」の程度を判断する方法であった。サクラには参加者の本音の聞き出し方や判断の仕方について事前にトレーニングを行って信頼性を高める工夫がなされていたが、実験後、実験協力者の判断に関する信頼性を測定したところ、十分なものではなかった。そこで、久貝（2012）ではさらに妥当性の高い方法として、教員アンケート法を採用した。この方法では、実験の目的とは異なるカバーストーリーを用意して、実験で提示された情報への納得度を実験者の指導教員が、こっそりアンケートの形で聴取するというものであった。カバーストーリーは、実験者の指導教員が「自身の指導のあり方を検討するため、実験者の実験態度について参加者の意見を教えてほしい（回答は実験者には内密なので）」と依頼するものであった。予備実験によって、カジュアルトークで尋ねるよりも

より本音が引き出せることが確認されていた。しかしながらこの方法でも教員という権威のある者から問われることで、より従順な回答に偏った可能性も否定できず、さらに検討する必要性があると言及されている。

これらを踏まえ、唐木（2014）は「腑に落ちる理解」の客観指標を作成した。唐木（2014）で作成されたチェックリストは、「腑に落ちる理解」を測定する唯一の客観的指標で、かつ「腑に落ちる理解」の認知・行動・身体感覚・感情面の項目から成り立っていることもあり、教示文を変えて主観的な質問紙として用いた研究もある（例：重松他，2017）。しかし、この測度にも問題点がある。1 つは、チェックリスト開発時のインタビュー調査の対象が健常大学生の主観的な情報によるもののみであったことである。2 つ目の問題点として、チェックリストの妥当性・信頼性を、実際のセラピストの主観的な認知再構成の効果をアウトカムとし、チェックリストの点数を説明変数としたアウトカムへの予測率で担保しているため、その妥当性・信頼性が高いとは言えないことが挙げられる。今後は「腑に落ちる理解」を捉える妥当性の高い客観的指標の作成することによって、治療者が患者の「腑に落ちる理解」の生起を測定でき、介入が適切に進んでいるか確認することが可能となると考えられる。

「腑に落ちる理解」のもつ可能性

「腑に落ちる理解」に関する一連の研究から、「腑に落ちる理解」は、認知再構成で目指される認知構造の切り替わりと一致した現象と考えられ（玉榮・伊藤，2016）、「腑に落ちる理解」という視点で認知変容に関する新たな臨床的示唆がもたらしている。

本稿で言及した、認知変容の重要な要因と考えられる「腑に落ちる理解」は、認知変容のプロセスを説明するきっかけとして有効である（玉榮・伊藤，2016）。近年、心理療法のプロセスに言及する研究は盛んに行われており、認知行動療法においては、突然の治療効果が観察されることを示す Sudden Gain (e.g., Durland, Wyszynski & Chu., 2018) が注目されている。また、認知療法において、過去のイベント、生じているイベント、まさに起ころうとしているイベントに対する誤った解釈やそれを修正することができる気づきなどの全般的なメタ認知的な気づきを表す「認知的洞察」(Beck et al. 2004)といった概念への注目が集まり、研究が積み重ねられている (e.g., Van Camp, Sabbe & Oldenburg., 2017)。

これらの概念が注目される背景には、認知的アプローチによる効果の再現性が低いことに対する危機感が窺える。実際に、認知再構成法は、経験、トレーニング、異なる心理療法的アプローチなど異なるレベルで広く使用されている一方、セラピストの経験の差によって、技法の遣い方に差があることが示されている (Cebrián & Elvia, 2017)。また、認知行動療法全体としても、近年その利用が注目されているオンラインでの施術について、オンライン上では3分の1程度の患者にしか効果がないという RCT の結果が示されている (Watkins, Newbold, Tester-Jones, Javaid, Cadman, Collinsm Graham & Mostazir., 2016)。認知行動療法は本当にゴールドスタンダードな心理療法なのか疑問を呈する知見も少なくない (e.g., Leichsenring & Steinert., 2017)。

「腑に落ちる理解」は、Sudden Gain や認知的洞察といった概念よりも、よりカウンセリング場面

での「今ここ」での現象を捉える概念であると考えられる。「腑に落ちる理解」という具体的な現象を扱うことにより、認知的アプローチが適切に行われているか、カウンセリング場面においてリアルタイムで判断が可能になり、結果として認知的アプローチの効果の再現性を担保することにつながるだろう。

本邦において、2019年初めての公認心理師が誕生し、今後、認知行動療法施術者の大幅な増加が予測される。その中で「腑に落ちる理解」に関する研究が、認知行動療法の効果の維持・向上に寄与することが期待される。

引用文献

- Arch, J. J., & Craske, M. G. (2006). Mechanisms of mindfulness: Emotion regulation following a focused breathing induction. *Behaviour research and therapy*, 44(12), 1849-1858.
- Beck, A. T. & Warman, D.M. (2004). Cognitive insight: theory and assessment. X. Amador, A. David (Eds.), *Insight and Psychosis: Awareness of Illness in Schizophrenia and Related Disorders (2nd edition)*, Oxford University Press, New York pp. 79-87
- Beck, A. T. (1963). Thinking and depression: I. Idiosyncratic content and cognitive distortions. *Archives of general psychiatry*, 9(4), 324.
- Beck, A. T. (1964). Thinking and depression: II. Theory and therapy. *Archives of general psychiatry*, 10(6), 561-571.
- Beck, A. T. (1967). *Depression: Clinical, experimental, and theoretical aspects*. University of Pennsylvania Press.
- Beck, A. T. (1976). *Cognitive therapy and the emotional disorders*. Penguin. (ベック, A. T. 大野 裕 (訳) (1990). 認知療法——精神療法の新しい発展—— 岩崎学術出版社)
- Beck, A. T. (2005). Buddhism and cognitive therapy. www.beckinstitute.org, Spring 2005, *Cognitive Therapy Today*, 10, 1. Spring 2012.
- Beck, A. T. (2005). The current state of cognitive therapy : A 40-year retrospective. *Archives of General Psychiatry*, 62(2). 935-959.
- Beck, A. T., & Dozois, D. J. (2011). Cognitive therapy: current status and future directions. *Annual review of medicine*, 62, 397-409.
- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979). *Cognitive therapy of depression*. New York: Guilford Press. (ベック, A. T., ラッシュ, A. J., ショウ, B. F., & エメリイ, G. 坂野 雄二 (監訳) (1992). うつ病の認知療法 岩崎学術出版社)
- Beck, J. S. (1995). *Cognitive Therapy: Basics and Beyond*, New York: Guilford Press. (ベック, J. S. 伊藤 絵美・神村 栄一・藤澤 大介 (訳) (2004). 認知療法実践ガイド・基礎から応用まで——ジュディス・ベックの認知療法テキスト—— 星和書店)
- Blackburn, I. M., & Davidzon, K. (1995). *Cognitive Therapy for Depression and Anxiety (amended)*. Oxford: Blackwell Scientific Publications.

- Bruner, A. T., Goodnow, J. J., & Austin, G. A. (1963). *A Study of Thinking*, New York : John Wiley & Sons, Inc.
- Butler, A. C., Chapman, J. E., Forman, E. M., & Beck, A. T. (2006). The empirical status of cognitive-behavioral therapy: a review of meta-analyses. *Clinical psychology review*, 26(1), 17-31.
- Cebrián, R.P., & Elvira, A.C., (2017). Applying cognitive restructuring in therapy: The clinical reality in Spain. *Psychotherapy Research*. 29, 198-212.
- Clark, D. A. (2013). Cognitive Restructuring. In Hofmann, S.G. (Ed.), *The Wiley Handbook of Cognitive Behavioral therapy*, John Wiley & Sons, Inc.
- Durland, P. H., Wyszynski, C.M., & Chu, B.C. (2018). Predictors and Outcomes of Sudden Gains and Sudden Regressions in Cognitive Behavioral Therapy for Youth Anxiety. *Behavior Therapy*, 49, 823-835.
- Eaves, G., & Rush, A. J. (1984). Cognitive patterns in symptomatic and remitted unipolar major depression. *Journal of abnormal psychology*, 93(1), 31.
- Epstein, S. (1998). Constructive thinking : *The key to emotional intelligence*. Westport, CT : Praeger.
- Hamilton E, Abramson L. (1983). Cognitive patterns and major depressive disorder: A longitudinal study in a hospital setting. *Journal of Abnormal Psychology*. 92.173–184.
- Hayes, S. C., & Strosahl, K. D. (2004). *A Practical Guide to Acceptance and Commitment Therapy*. Netherlands: Plenum Publishers. (ヘイズ, S. C., & ストローサル, K. D. (編著) 谷 晋二・坂本 律 (訳) (2014). *アクセプタンス&コミットメント・セラピー 実践ガイド——ACT理論導入の臨床場面別アプローチ——* 明石書店)
- Hofmann, S.G., Asnaani, A., Vonk, I.J.J., Sawyer, A.T. and Fang, A. (2012) The Efficacy of Cognitive Behavioral Therapy: A Review of Meta-Analyses. *Cognitive Therapy and Research*, 36, 427-440.
- 堀越 勝 (2014). 問う。「ソクラテス式問答法」 *精神療法*, 6(40), 804-810.
- Ingram, R. E., & Hollon, S. D. (1986). Cognitive therapy for depression from an information processing perspective. In R. E. Ingram (Ed). *Information processing approaches to clinical psychology*. Orlando, FL: Academic Press. 261-280.
- 井上 和臣 (2006). *認知療法への招待* (改訂 4 版) 金芳堂
- 伊藤義徳・園田千里 (2008). マインドフルネスのメカニズム——creative hopelessness を媒介変数として—— *日本行動療法学会第 34 回大会発表論文集*, 470-471
- 伊藤 義徳・長嶺 祐樹 (2009). 認知的再評価再考「わかるんだけど、なんだかなあ・・・」 *第 35 回日本行動療法学会大会発表論文集*, 210-211
- 唐木 瞬也 (2014). 認知再構成を客観的に捉える基準の作成——「腑に落ちる理解」研究に基づく検討—— *琉球大学教育学部研究科修士論文* (未刊行)
- 唐木 瞬也・伊藤義徳 (2018). 認知再構成のプロセスに関する研究～「腑に落ちる理解」についてのインタビュー調査～ *日本認知・行動療法学会第 44 回大会発表論文集* 438-439
- Kelly, G. A. (1955). *The psychology of personal constructs*. 2 vols. London: Routledge.

- Kovacs, M., & Beck, A. T. (1978). Maladaptive cognitive structures in depression. *American Journal of Psychiatry*, 135, 525-533.
- 久貝 このみ (2012). 「腑に落ちる理解」における認知的柔軟性の役割 琉球大学教育学部研究科修士論文 (未刊行)
- Leichsenring F, Steinert C. (2017). Is cognitive behavioral therapy the gold standard for psychotherapy? The need for plurality in treatment and research. *JAMA* 318(14):1323-1324.
- Meichenbaum, D. (1977). Cognitive behaviour modification. *Cognitive Behaviour Therapy*, 6(4), 185-192.
- Meichenbaum, D. (1985). *Stress Inoculation Training*, Pergamon Press. (マイケンバウム D. 上里一郎 (監訳) (1989) ストレス免疫訓練-認知行動療法の手引き- 岩崎学術出版社)
- 永田 祐矢・久貝 このみ・伊藤 義徳 (2011). マインドフルネストレーニングが苦痛耐性時間に及ぼす影響——心理教育とエクササイズへの「納得」の影響を重視して—— 第 37 回日本行動療法学会大会発表論文集, 460-461
- 根建 金男・市井 雅哉 (1996). ストレス性障害に対する認知行動療法——ストレス免疫訓練—— 大野裕・小谷津孝明 (編) 認知療法ハンドブック (下巻) 星和書店.
- Neenan, M., & Dryden, W. (2004). *Cognitive Therapy Key Points & Techniques*. Routledge. (ニーナン, M. & ドライデン, W. 石垣 琢磨・丹野 義彦 (監訳) (2010). 認知行動療法 100 のポイント 金剛出版)
- 野村 総一郎 (1996). うつ病の認知療法 大野 裕・小谷津 孝明 (編) 認知療法ハンドブック (下巻) 星和書店.
- Papageorgiou, C., & Wells, A. (2003). *Depressive ruminations*. Chichester, UK. John Wiley & Sons.
- Piaget, J. (1984). *The Moral Judgment of the Child*. : The Free Press.
- Postman, L. (1951). *Toward a General Theory of Cognition*, :*Social Psychology at the Crossroads*, New York : Harper & Brothers
- Rounsaville, B. J., Carroll, K. M., & Onken, L. S. (2001). A Stage Model of Behavioral Therapies Research: Getting Started and Moving on From Stage I, *Clinical Psychology*. 2.133-142.
- 佐藤 正二・佐藤 容子・石川 信一・佐藤 寛・戸ヶ崎 泰子・尾形 明子 (2013). 学校でできる認知行動療法——子どもの抑うつ予防プログラム 小学校編—— 日本評論社
- 重松 潤・伊藤義徳・神谷信輝・平仲 唯・木甲斐智紀・尾形明子 (2017). 「行き詰まり感」が問題解決過程における解決方略に対する「腑に落ちる理解」と Willingness に及ぼす影響 ストレス科学研究, 32, 63 - 70.
- Shigematsu, J., & Ogata, A. (2018). What is “cognitive change”? Interviews with Cognitive Behavior Therapy psychologists in Japan. *Association for Behavioral and Cognitive Therapies 52nd Annual Convention*, 435.
- 玉榮伸康・伊藤義徳 (2016). 認知療法における認知再構成のプロセスの研究 日本認知・行動療法学会第 42 回大会発表論文集, 412-413.
- Teasdale, J. D. (1999) . Emotional processing, three modes of mind and the prevention of relapse of

- depression. *Behaviour Research and Therapy*, 37, 37-77.
- Teasdale, J. D., & Barnard, P. J. (1993). Essays in cognitive psychology. *Affect, cognition, and change: Re-modelling depressive thought*. Hillsdale, NJ, England: Lawrence Erlbaum Associates.
- Teasdale, J. D., (1996). Clinically relevant theory : *Integrating clinical insight into cognitive science*. In P. M. Salkovskis (Ed.), *Frontiers of cognitive therapy* (pp. 26-47). New York : Guilford Press.
- Teasdale, J. D., Moore, R. G., Hayhurst, H., Pope, M., & Segal, Z. V. (2002). Metacognitive Awareness and Prevention of Relapse in Depression: Empirical Evidence. *Consulting and Clinical Psychology*, 70(2), 275-287.
- Teasdale, J. D., Segal, Z. V., & Williams, J. M. G., (1995). How does cognitive therapy prevent relapse and why should attentional control (mindfulness) training help? *Behaviour Research and Therapy*, 13, 225-239.
- Tee, J., & Kazantzis, N. (2011). Collaborative empiricism in cognitive therapy: A definition and theory for the relationship construct. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 18(1), 47-61.
- Van Camp, L.S, Sabbe, B.G Oldenburg, J.F., (2017). Cognitive insight: A systematic review. *Clinical Psychology Review*.55, 12-24.
- Watkins, E. Newbold, A. Tester-Jones, M. Javaid, M. Cadman, J. Collins, L.M. Graham, J. Mostazir, M. (2016). Implementing multifactorial psychotherapy research in online virtual environments (IMPROVE-2): study protocol for a phase III trial of the MOST randomized component selection method for internet cognitive-behavioural therapy for depression. *BMC Psychiatry*, 16 (1) ,345.
- Weissman, A. N., & Beck, A. T. (1978). Development and validation of the Dysfunctional Attitude Scale: A preliminary investigation. <https://eric.ed.gov/?id=ED167619>
- Westbrook, D., Kennerley, H., & Kirk, J. (2011). *An introduction to Cognitive Behaviour Therapy Skills and Applications (2nd ed.)*. London: Sage Publications. (ウェストブルック, D., ケナリー, H., & カーク, J. 下山 晴彦 (監訳) (2012). 認知行動療法臨床ガイド 金剛出版)
- Wills, F. (2009). *Beck's Cognitive Therapy*. Routledge. (ウィルス, F. 大野裕 (監訳) 坂本律 (訳) (2016). ベックの認知療法 明石書店)

スピーチ場面における社交不安者の注意が不安に及ぼす影響

松本 美涼・藤原 裕弥・尾形 明子

The influence of attentional bias of social anxiety on anxiety in public speaking situations

Misuzu Matsumoto and Yuya Fujihara and Akiko Ogata

The current study sought to investigate the relationship between the focus of attention and state anxiety during a public speaking situation involving social anxiety. In a preliminary investigation, undergraduate students responded to a questionnaire based on the Two-dimensional Social Phobic Tendency and Narcissistic Personality Scale-Short version (TENS-S). A previous study using the TENS-S suggested that social anxiety could be divided into two subtypes (high anthropophobic tendency and high narcissistic personality, or high anthropophobic tendency and low narcissistic personality). The high anthropophobic tendency and high narcissistic personality group (HH group) was predicted to exhibit increased anxiety with self-focused attention and other-focused attention. The high anthropophobic tendency and low narcissistic personality group (HL group) was predicted to exhibit increased anxiety with other-focused attention. After screening, 30 undergraduate students were divided into one of three groups based on their questionnaire scores; HH group (n = 8), HL group (n = 9), and low social anxiety group (n = 12). Participants were asked to undertake a speech task to increase state anxiety. Following the speech task, participants rated the direction of changes in attention and the level of state anxiety. The results indicated that self-focused attention and other-focused attention were facilitated in public speaking situations.

キーワード : social anxiety, self-focused attention, other-focused attention, narcissistic personality

問 題

学校や職場において、人前で話す機会が多い。そのような時に、聴衆の反応、特に表情やしぐさが気になったり、手が震えているような気がしたり、顔が赤くなっているような気がして不安になることがあるだろう。このような、社会的場面で感じる不安は、社交不安と呼ばれ、“他者によって注視されるかもしれない社会的状況に関する著明または強烈的な恐怖または不安”と定義される (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。これまで、社交不安者の情報処理に着目した研究が多く行われ、社交不安者は、社会的場面に対する解釈の歪みや注意の偏りが特徴的

であることが指摘されている。

社交不安者の注意の偏りは、自己注目と他者注目の観点から説明されてきた。自己注目とは、心臓がドキドキしているなど自身の身体感覚や、他者からどのように自分自身が見えているのか他者の視点から自分自身を観察することに注意を割いている状態ある。一方で、他者注目は、他者のしぐさや表情などに否定的な反応を検出することに注意を割いている状態である。そして、Rapee & Heimberg (1997) と Clark & Wells (1995) は社交不安者と注意の偏りに関係性について以下のように指摘している。まず、Rapee & Heimberg (1997) は、社交不安者は、社会的場面に直面した時、自己注目と他者注目が生じている状態となり、不安が生じるとしている。一方で、Clark & Wells (1995) は、社交不安者が社会的状況に直面した時、自己注目が生じている状態となり、不安が生じるとし、他者注目は重視していない。Clark & Wells (1995) と Rapee & Heimberg (1997) は、社交不安者の自己注目に重きを置いている点は共通している。しかし、Rapee & Heimberg (1997) は、社交不安者の不安は、自己注目に加えて、他者注目によって不安が生じることを想定しているという点で Clark & Wells (1995) と異なる。

Perowne & Mansell (2002) と河崎・高島・岩永 (2009) は、両者の主張の矛盾に着目し、他者が存在する現実に近い社会的場面を用いて、社交不安者の注意の偏りについて検討している。Perowne & Mansell (2002) は、実験参加者に複数の評価者の前でスピーチを行うことを求め、評価者が行ったうなずきや首を傾げるなどの動作にどの程度気づいたかによって、スピーチ中の他者注目の程度を測定した。また、The Focus of Attention Questionnaire (FAQ; Woody, 1996) を測定し、スピーチ中の自己注目の程度を測定した。その結果、ネガティブな動作の検出に関しては、社交不安者と低社交不安者に差が認められなかったが、スピーチ中の自己注目に関しては、社交不安者が低社交不安者よりも自己注目状態であった。このことから、自己注目によって不安が生じるとする Clark & Wells (1995) を支持している。河崎他 (2009) も、同様の手法を用いて、スピーチ中の社交不安者の注意の偏りについて検討を行った。その結果、スピーチ場面において、社交不安者は低社交不安者よりも高い自己注目を示した一方で、両者ともに評価者の中性的な動作より評価者のネガティブな動作を多く検出していた。この結果は、自己注目と他者注目によって不安が生じるとする Rapee & Heimberg (1997) を支持しているといえる。このように、社交不安者の注意の傾きについて実験的に検討した研究でも、Rapee & Heimberg (1997) のモデルと Clark & Wells (1995) のモデルのいずれが支持されるかは決着していない。

このような社交不安者における注意の偏りの不一致が認められる原因として、本研究では社交不安者のサブタイプに注目する。清水・川邊・海塚 (2007) は、対人恐怖心性と自己愛傾向の高低の組み合わせによって、誇大特性優位型 (以下、誇大型)・誇大 - 過敏特性両貧型 (以下、両貧型)・誇大 - 過敏特性両向型 (以下、両向型)・過敏特性優位型 (以下、過敏型)・中間型の5つのサブタイプを考案し、社交不安者を自己愛傾向が高い両向型と自己愛傾向が低い過敏型の2つのサブタイプに分類している。対人恐怖症は、社会的評価への懸念によって特徴づけられ、社交不安症の診断基準を満たしており、その人が他の人たちを不快にさせているという恐怖と関連する症状群である (American Psychiatric Association, 2014)。岡野 (1998) は、日本では、社交不安と対人恐怖はほぼ同概

念であると解釈している。そこで、本研究においても社交不安と対人恐怖は同概念として扱う。

清水・川邊・海塚 (2008) は、両向型と過敏型は心理的ストレス反応が全般的に高く、中間型は平均的、誇大型と両貧型が全体的に低く、サブタイプによってストレス反応の重症度が異なることを明らかにしている。また、清水・岡村 (2010) は、両向型と過敏型は、社交不安者に特徴的であるネガティブな反すう、統制不能、不合理な信念、自己関連づけといった認知特性に違いはないことを明らかにしている。このように、各サブタイプのストレス反応や認知特性の違いについて明らかになっているが、社交場面における注意の偏りに着目した研究はない。サブタイプによって、注意の偏りに違いがみられれば、Clark & Wells (1995) の主張と Rapee & Heimberg (1997) の主張は矛盾するものではなく、社交不安者のサブタイプによる違いを反映したものであるということを示すことが可能になる。また、近年、自己注目を修正することを目的とした注意シフトトレーニングや外的な脅威刺激に対する注意の偏りを修正することを目的とした注意バイアス修正トレーニングが考案されており(吉永・清水, 2016; Amir, Weber, Beard, Bomyea & Taylor, 2008), 社交不安症の治療においても注意の偏りに注目が集まっている。本研究によって、社交不安者と注意の偏りの関係についてさらに精緻に検討することで、それらのトレーニングの効果の向上などに寄与することが可能であると考えられる。

先行研究において、両向型のように強い対人恐怖と自己愛を持つ者は、治療中、治療者の反応に気にしやすいことや(岡田, 2003), 自分が傷つく可能性を察知すると、回避による自己防衛を行うこと(上地・宮下, 2004) が指摘されている。このことから、他者との交流において、他者の反応に対して敏感に反応するためもしくは自分が傷つくような反応や事象を察知するために、他者注目を行っている可能性がある。すなわち Rapee & Heimberg (1997) のモデルで予想されるタイプの社会不安者であると考えられる。一方、過敏型のように強い対人恐怖のみを持つ者は、自己の内面に対する関心が高いこと(岡田, 1993) が指摘されており、他者との相互作用場面において、自己注目を行っている可能性がある。これは Clark & Wells (1995) のモデルによる予想されるタイプの社会不安者である可能性がある。

これまで、社会的場面における社交不安者の注意の偏りについて検討した研究では、他者のしぐさなどを検出するように求める教示が結果に影響を与えた可能性がある。河崎他 (2009) と Perowne & Mansell (2002) は、評価者が存在するスピーチ場面において評価者が表出するしぐさの検出量を他者注目の指標として用いている。しかし、Clark & McManus (2002) は、外的情報を検出するように求められた場合に社交不安者は他者の脅威的なしぐさなど外的な脅威情報を検出しやすくなることを指摘している。そのため、河崎他 (2009) は、評価者のしぐさなどを検出するように求めた教示によって他者注目が促進されてしまった可能性を指摘している。そこで本研究は、そのような教示を行わずに他者注目を測定するために、他者注目が生じる場面と生じない場面でスピーチを行う。具体的には、評価者がスピーチを評価している動画の呈示の有無によって、スピーチ中の評価者を観察可能な場面(観察可能条件)と観察不可能な場面(観察不可能条件)を設定する。観察可能条件では、他者注目を行うことができるが、観察不可能条件では、他者注目を行うことができない。これら2つの条件間のスピーチ中の不安を比較することで、スピーチ中の他者注目と不安の関連性に

ついて、外的情報を検出するような教示を行わずに検討することが可能であると考えられる。

そこで、本研究は、社交不安者のサブタイプによって社会的場面の注意の偏りが異なるかどうかを検討することを目的とする。本研究の仮説として以下の4つを挙げる。

1. 両向型および過敏型は、低社交不安群よりもスピーチ中の自己注目が高い。
2. 両向型は、過敏型と低社交不安群よりもスピーチ中の他者注目が高い。
3. 過敏型は、観察可能条件でも観察不可能条件でも、低社交不安群よりもスピーチ中の状態不安が高い。
4. 両向型は、観察可能条件において、低社交不安群よりもスピーチ中の状態不安が高い。

方法

実験参加者 女子大学生 237 名 (平均年齢 18.97 歳 SD = 0.78) に対して対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデル尺度短縮版 (清水・川邊・海塚, 2006) への回答を求めた。清水他 (2007) を参考に各々の尺度合計得点の平均値から $\pm 0.5SD$ の範囲を中間型とし、尺度合計得点の高低で過敏型、誇大型、両向型、両貧型の 5 サブタイプに分類した。分類基準を Table 1 に示した。中間型を除く、過敏型、誇大型、両向型、両貧型に分類され、かつ実験参加の同意を得られた者の中から 40 名を実験参加者とした。実験に不備のあった 12 名を除き、過敏型 9 名、両向型 8 名、低社交不安群(誇大型・両貧型)12 名を分析対象者とした。

Table 1
対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデル尺度短縮版による分類基準

サブタイプ	分類基準
過敏特性優位型	対人恐怖心性領域が 36.75 点以上であり、同時に自己愛傾向領域が 31.96 点以下で、なおかつ中間型ではないもの
誇大特性優位型	対人恐怖心性領域が 36.75 点以下であり、同時に自己愛傾向領域が 31.96 点以上で、なおかつ中間型ではないもの
中間型	対人恐怖心性領域が 32 点から 42 点の範囲にあり、同時に自己愛傾向領域が 27 点から 37 点の範囲にあるもの
誇大 - 過敏特性両向型	対人恐怖心性領域が 36.75 点以上であり、同時に自己愛傾向領域が 31.96 点以上で、なおかつ中間型ではないもの
誇大 - 過敏特性両貧型	対人恐怖心性領域が 36.75 点以下であり、同時に自己愛傾向領域が 31.96 点以下で、なおかつ中間型ではないもの

実験デザイン サブタイプ (過敏型・両向型・低社交不安群) を参加者間要因、スピーチ状況 (観察可能・観察不可能) を参加者内要因とする 2 要因計画とした。

スピーチ課題 状態不安を喚起するために「評価者 4 名が隣室に待機しており、スピーチの様子が生体カメラを通して、評価者に中継されると教示し、1 分間のスピーチを行うことを求めた。実際に評価者は存在しなかった。スピーチテーマは、河崎他 (2009) と望月 (2015) を参考に自己関連度が高いと考えられる「学生時代一番頑張ったこと」と「友人には知られていない私の以外な一面について」とし、スピーチテーマを提示したのち、2 分間のスピーチの内容を考える時間を設けた。その際、「白い紙にメモを取りながらスピーチの内容を考えることができるが、スピーチを行う際

はこの紙を見ることはできない」と教示した。その後、1分間のスピーチを行うことを求めた。

評価者映像 4名の女性モデルが“うなずき”“顔を横に向ける”といった動作を表出した映像を作成し、観察可能条件において、モニタに呈示した。映像は、モニタを4分割し、4人の評価者の姿が同時に映し出されるように編集を行った。

測度 スピーチ中の注意の偏りを測定するために、The Focus of Attention Questionnaire (FAQ; Woody, 1996) を日本語に翻訳して使用した。本尺度は、「自分がどのくらい不安を感じているのかが気になった」など自己の身体感覚などへの注意を測定する自己注目に関する項目が5項目、「評価者の様子や服装が気になった」など他者の表情やしぐさなどへの注意を測定する他者注目に関する項目が5項目の計10項目からなり、それぞれの項目に対して、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の5件法で回答を求めた。

スピーチ課題による主観的不安反応の高まりを測定するために、State-Trait Anxiety Inventory 日本語版(清水・今栄, 1981) の A - State を使用した。本尺度は20項目からなり、それぞれの項目に対して、「全くそうでない」から「全くそうである」の4件法で回答を求めた。スピーチ課題による客観的不安反応の高まりを測定するために、皮膚電気反応(以下、GSR)と心電図の測定を行った。GSRは、電極を非利き手側の第2指・第3指掌面に装着し、心電図は、電極を非利き手側の手首と両足首に装着する第Ⅲ誘導により測定を行った。これらの測度は、実験中連続的に測定され、心電図は、測定した心電図からRR間隔を算出した。状態不安が高まると、安静状態と比較して、GSRは増加し、RR間隔は短くなる。GSRとRR間隔は、ベース(3分間)、観察可能条件でのスピーチ(1分間)、観察不可能条件でのスピーチ(1分間)の3つの測定区間をすべて30秒ごとに区切り、各測定区間の測定開始後30秒間の平均値を用いた。

装置 参加者がスピーチ課題を行っている様子の録画するために、SONY製ビデオカメラFDR-AX100を使用した。しかし、実際に録画は行わなかった。SONY製カラーテレビKJ-48w700cとSONY製パーソナルコンピュータSVT131A11NをHDMIケーブルで接続し、評価者がスピーチを評価している様子を録画した映像を呈示した。GSRと心電図の測定には、ADInstruments製生理アンプPowerLab PL 3508を用いて、サンプリング周波数100kHzで測定を行った。GSRと心電図の分析は、LENOVO製パーソナルコンピュータG50-80上でADInstruments製解析ソフトLabChartを用いて行った。

手続き 281cm×207cm×218cmのシールドルーム内で個別に実験を実施した。実験参加者が入室後、モニタの120cm前に着席させ、実験についての説明を行い、実験参加の同意を得た。その後、GSRと心電図の測定のための電極を装着した。GSRと心電図の数値が落ち着いたことが確認されたのち、ベースの状態不安を測定するために、GSRと心電図の測定(3分間)とA-Stateに回答を求めた。その後、モニタに事前に作成した評価者がスピーチを評価している様子の映像が呈示される観察可能条件と呈示されない観察不可能条件において、スピーチ課題を行った。各条件の順序は、カウンターバランスを取り、参加者間でランダムになるようにした。各スピーチ終了後、A-Stateに回答を求めた。観察可能条件では、A-Stateに加えて、FAQにも回答を求めた。最後に、必要最低限のディブリーフィングを行った。

分析 注意の偏り得点については、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）の1要因の分散分析を行い、不安反応得点については、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）×条件（観察可能・観察不可能）の2要因分散分析を行った。

倫理的配慮 実験開始前に、実験の目的や個人情報保護について口頭および書面にて説明を行った。また、実験参加者に「実験は途中で辞めることができること」を伝え、参加が強制ではないことを伝えた。

結果

スピーチ中の注意の偏りの検討

サブタイプによってスピーチ中の注意の偏りが異なるのか検討するため、観察可能条件の他者注目得点と自己注目得点の平均得点に対して、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）の1要因分散分析を行った。その結果を Figure 1 に示す。分析の結果、自己注目得点においても他者注目得点においてもサブタイプによって違いは認められなかった ($F(2,25) = .43, ns$; $F(2,25) = 1.35, ns$)。

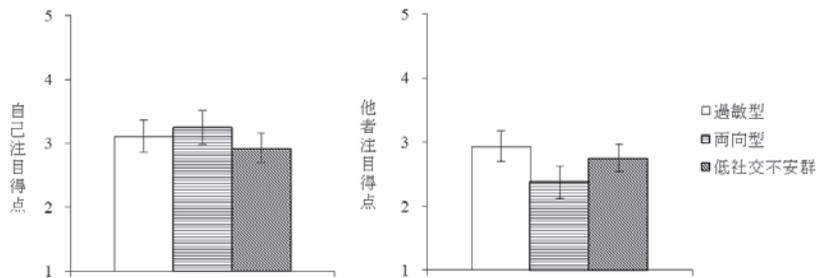


Figure 1. 観察可能条件における自己注目得点と他者注目得点（エラーバーは標準誤差）。

スピーチ中の状態不安の検討

まず、観察可能条件および観察不可能条件において、サブタイプによって主観的不安反応の高まりが異なるのか検討するため、観察可能条件と観察不可能条件の A - State の平均得点に対して、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）×条件（観察可能・観察不可能）の2要因分散分析を行った。分析の結果を Figure 2 に示す。分析の結果、まず、A - State の平均得点について、条件の主効果が認められ ($F(2,50) = 22.48, p < .01$)、ベースよりも観察可能条件、ベースよりも観察不可能条件、観察不可能条件よりも観察可能条件において主観的不安反応が高かった ($ps < .05$)。

次に、観察可能条件および観察不可能条件において、サブタイプによって客観的不安反応の高まりが異なるのか検討するため、観察可能条件と観察不可能条件の GSR と RR 間隔の平均値に対して、サブタイプ（過敏型・両向型・低社交不安群）×条件（観察可能・観察不可能）の2要因分散分析を行った。分析の結果を Figure 2 に示す。分析の結果、GSR の平均値と RR 間隔の平均値において、条件の主効果が認められ ($F(2,50) = 84.72, p < .01$; $F(2,50) = 106.82, p < .01$)、ベースよりも観察可能条件、ベースよりも観察不可能条件、観察不可能条件よりも観察可能条件において GSR が増加し、RR 間隔が短かった ($ps < .05$)。

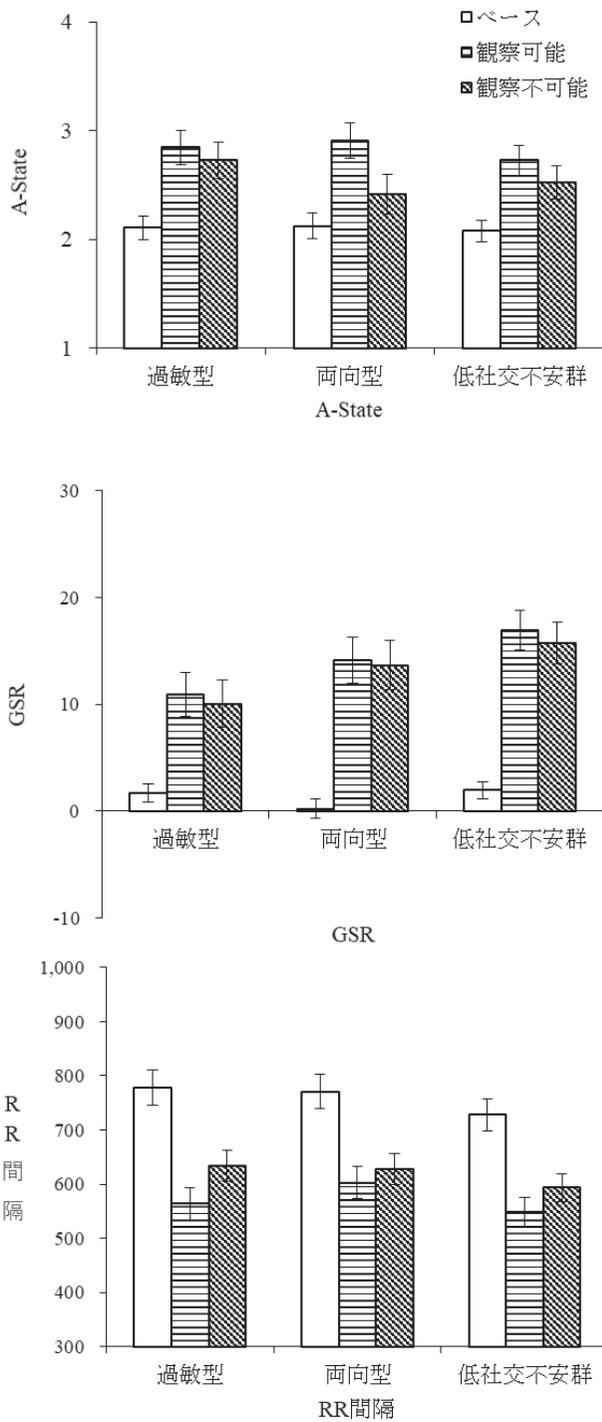


Figure 2. スピーチ中の主観的不安反応と客観的不安反応 (エラーバーは標準誤差)。

考 察

本研究の目的は、社交不安者のサブタイプによって社会的場面の注意の偏りが異なるかどうかを検討することであった。本研究の結果より、スピーチ場面における注意の偏りに社交不安のサブタイプによる違いはなかった。スピーチ場面における主観的不安反応と客観的不安反応は、他者を観察することができないスピーチ場面より他者を観察することができるスピーチ場面のほうが高かったが、社交不安のサブタイプによる違いはなかった。サブタイプによって、社会的場面の注意の偏りが異なると予想されたが、社交場面における注意の偏りに社交不安のサブタイプによる違いは認められなかった。

本研究の結果から、社交不安者は社会的場面に直面した時、社交不安者は、社交不安者は、心拍数の高まりなど自身の身体感覚や他者からどのように自分自身が見えているのか他者の視点から自分自身を観察することに注意を向けるのと同時に、他者のしぐさや表情などに否定的な反応にも注意を向けており、自己注目と他者注目状態になる可能性がある。社交不安者は、低社交不安者と同程度の生理的反応が生じていたとしても、生理的反応を実際に生じているよりも過剰に認知することで生理的反応自体が脅威刺激となり、不安が維持することや(金井, 2008)、肯定的とも否定的ともとれる他者に行動をより否定的に解釈すること(金井・笹川・陳・嶋田・坂野, 2007)が指摘されており、生理的反応や他者の表情といった情報が、より脅威的に判断されることによって、不安が高められると考えられる。

自己注目のみが生じると予想された過敏型は、社会的場面において、両向型と同様に自己注目と他者注目が生じていた。辻(1993)は、注意を1つの対象に集中しつづけることは困難であり、注意は切りかわるものであると述べている。そのため、過敏型は、注意の1つの対象に集中しつづけることが困難であるという注意の特徴によって、自己注目と他者注目が生じている可能性がある。しかし、自分を有能であると認識しているといった特徴を持つ両向型にとっては、評価者のしぐさや表情といった他者注目を行うことで得られる情報は脅威的な情報であり、そのような脅威的な情報を得ることによって不安が生じていると考えられる。対して、人から注目されたいという欲求が少なく、自己に対する肯定的な感覚の低さから自分自身に対して不安を感じたり、他者に対して緊張している状態である過敏型(清水・海塚, 2002)にとって、評価者のしぐさや表情といった情報は、脅威的な情報ではない可能性がある。そのため、過敏型は、他者注目状態になるが、他者注目に得られた情報によって不安が高まらない可能性がある。このように、サブタイプごとに注意を向けた対象から得られる情報が持つ意味は異なる可能性があり、過敏型では自己注目と他者注目が生じるものの、不安に関連しているのは自己注目によって得られる情報のみである可能性がある。そのため、社交不安者のサブタイプごとに対象から得られた情報と不安の関係性について検討を行う必要がある。

また、本実験の結果から、社会的状況における注意は一定ではなく切り替わる能性があることが明らかとなった。そのため、自己注目と他者注目の指標として、注意の切り替わりを測定することができる指標を測定する必要がある。富田(2018)は、社交不安者のスピーチ課題中の脳活動や視線の動きを用いて、自己注目と他者注目を測定することができる客観的な指標の開発している。脳

活動や視線の動きは継時的に測定可能な指標であるため、社会的状況における社交不安者の注意の切り替わりを測定することが可能である可能性がある。今後は、社会的状況において、脳活動や視線の動きなど経時的に測定可能な指標を用いて、社交的状況における社交不安者の注意の偏りと不安の関係性について継時的に検討する必要があると考えられる。

社交不安症への治療効果が示されている認知行動療法では、自己注目を軽減することを目的とし、自己に向いている注意を外部に向ける練習を行う注意シフトトレーニングが取り入れられている(吉永・清水, 2016)。社交不安症が改善すると、自己注目が減少することが示されており(Hofmann, 2000)、社交不安症の治療には、注意シフトトレーニングを行い、自己注目を減少させることが有効である可能性がある。また、Amir, Weber, Beard, Bomyea & Taylor (2008) は、社交不安者に対して他者の怒り顔といった外的な脅威刺激に対して引き付けられる注意を修正することを目的とする注意バイアス修正トレーニングを行わせ、外的な脅威刺激に対して引き付けられる注意および社交不安が減少することを明らかにしている。そのため、社交不安症の治療では、注意バイアス修正トレーニングを行い、外的な脅威刺激に対して引き付けられる注意を修正することも有効である可能性がある。これまで、この2つのトレーニングは別々に効果が検討されることが多かった。しかし、本実験で得られたように、社交不安者は社会的場面に直面した時、自己注目と他者注目を切り替えているのであれば、自己注目と他者注目の両方を減少させることが効果的である可能性がある。そのため、今後は、注意シフトトレーニングと注意バイアス修正トレーニングを組み合わせを行った場合の治療効果などの検討が求められる。

引用文献

American Psychiatric Association(2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association.

(アメリカ精神医学会 高橋 三郎・大野 裕(監訳)(2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)

Amir, N., Weber, G., Beard, C., Bomyea, J., & Taylor, C. T. (2008). The effect of a single-session attention modification program on response to a public-speaking challenge in socially anxious individuals. *Journal of abnormal psychology, 117*(4), 860.

Clark, D. M., & McManus, F. (2002). Information processing in social phobia. *Biological psychiatry, 51*(1), 92-100.

Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. (Heimberg, R. G., Liebowitz, M. R., & Hope, D. A. et al. (Eds), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*, New York: Guilford press.)

Hofmann, S. G. (2000). Self-focused attention before and after treatment of social phobia. *Behaviour research and Therapy, 38*(7), 717-725.

上地 雄一郎・宮下 一博 (2004). もろい青少年の心——自己愛の障害—— 北大路書房

金井嘉宏 (2008). 社会不安障害患者の生理的反応に対する認知の歪みに関する研究 風間書房

- 金井 嘉宏・笹川 智子・陳 峻雲・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2007). 社会不安障害傾向者と対人恐怖症傾向者における他者のあいまいな行動に対する解釈バイアス 行動療法研究, 33(2), 97-110.
- 河崎 千枝・高島 佳奈・岩永 誠 (2009). 社会的場面とその予期における対人不安者の注意処理 行動療法研究, 35(3), 205-216.
- 望月 聡 (2015). 自己開示的スピーチ課題における社交不安者の心理的反応と生理的反応 筑波大学心理学研究, 49, 67-75.
- 岡田 暁宜 (2003). 過敏な自己愛者に対する精神分析的精神療法: 逆転移の視点から 精神分析研究, 47(4), 476-48.
- 岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4(2), 162-170.
- 岡野 憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析 対人恐怖から差別論まで 岩崎学術出版社
- Perowne, S., & Mansell, W. (2002). Social anxiety, self-focused attention, and the discrimination of negative, neutral and positive audience members by their non-verbal behaviours. *Behavioural and cognitive Psychotherapy*, 30(1), 11-23.
- Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour research and therapy*, 35(8), 741-756.
- 清水 秀美・今栄 国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29(4), 348-353.
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎 (2006). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデル尺度における短縮版作成の試み パーソナリティ研究, 15(1), 67-70.
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, 78(1), 9-16.
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎 (2008). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, 16(3), 350-362.
- 清水 健司・岡村 寿代 (2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける認知特性の検討 教育心理学研究, 58(1), 23-33.
- 清水 健司・海塚 敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50(1), 54-64.
- 富田 望 (2018). 社交不安における自己注目と注意バイアスの統一的理解 早稲田大学審査学位論文 (未公刊)
- 辻 平治郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房
- Woody, S. R. (1996). Effects of focus of attention on anxiety levels and social performance of individuals with social phobia. *Journal of abnormal psychology*, 105(1), 61.
- 吉永 尚紀・清水 栄司 (2016). 社交不安障害(社交不安症)の認知行動療法マニュアル(治療者用) 不安症研究, 7, 42-93.

レポート作成における読み手を意識した 文章作成方略使用尺度の開発

田中 光・山根 嵩史・中條 和光

Developing a scale to assess the use of report writing strategies based on audience awareness

Hikaru Tanaka, Takashi Yamane, Kazumitsu Chujo

A scale for assessing report writing strategies based on audience awareness was developed and validated. In a pilot study, we collected strategies and techniques used for improving the understanding of reports through free descriptions of participants (N = 29). Then, we conducted a questionnaire survey with undergraduate participants (N = 156) using the strategies identified in the pilot study. Exploratory factor analysis of their responses indicated seven factors: "Checking the logical structure and context", "Checking expressions and grammatical errors", "Checking by others", "Checking the format", "Simplifying sentences", "Writing attractive sentences for readers", and "Proofreading". To assess the validity of the scale, we examined if the scale identified differences in use of strategies between participants. Participants were classified into high and low score groups based on their characteristics such as the frequency of writing reports and self-efficacy of report writing. Results indicated that Checking the logical structure and context and Writing sentences attractive for readers were significantly higher in the high compared to the low group. Also, participants were classified into high and low score groups based on their experience in report writing such as the frequency of feedback from teachers and peer reviews by students. Results indicated that Checking by others and Checking the format in the high group were significantly higher than in the low group. These findings suggest that the scale is effective for identifying the usage of report writing strategies based on audience awareness.

キーワード: active learning, academic writing, report writing, audience awareness, first year experience

問 題

本研究では、大学生を対象に、授業等で課されるレポート作成における、読み手を意識した文章作成方略の使用尺度を開発する。また、開発された尺度を用いて、レポートを書く頻度やレポート作成に関する自己効力感、授業におけるレポートに関する教師からのフィードバック頻度・ピアレビューの頻度について、読み手を意識した文章作成方略使用との関係を調べ、構成した尺度の妥当性を検討する。

近年、日本の学校教育ではアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が進められている。小学校指導要領（平成 29 年告示）解説総則編（第 1 章総説、改訂の経緯及び基本方針）及び中学校指導要領（平成 29 年告示）解説総則編（第 1 章総説、改訂の経緯及び基本方針）では、「主体的・対話的で深い学び」の実現のためにアクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善の推進が求められるとされている。

Bonwell & Eison (1991) はアクティブ・ラーニングを「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと」と定義し、能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化が伴うとしている。このような視点から、アクティブ・ラーニングによる授業改善を進める上では、書くことや発表することなどによって、自らの思考・判断のプロセスや結果を表現することが重視されている。

また、今回の学習指導要領の改定では、国語科を中心として文章を書く活動が重要視されている。例えば、中学校指導要領（平成 29 年告示）解説国語編（第 1 学年）では、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成することを目標として、「本や資料から文章や図表などを引用して説明、記録するなど、事実やそれを基に考えたことを書く活動」が挙げられている。

大学教育においても、学生の多様化を背景として多くの大学で初年次教育が導入される中、レポートの書き方の指導が行われるようになってきている。文部科学省（2017）の平成 27 年の調査によると 661 もの大学（日本の国公立大学の 89%）においてレポート・論文の書き方などの文章作法の指導が行われている。高等学校においても、大学における論文・レポート指導の必要性の高まりから、国語科において、論理的な文章を書く資質・能力の育成について、「現代の国語」や「論理国語」の科目を中心に、充実が図られているとされている（高校指導要領（平成 30 年告示）解説国語編 第 1 章総説、第 2 節国語科改訂の趣旨及び要点）。今後、大学教育にとどまらず、中学校、高等学校においても学生、生徒によるレポート作成やその指導の機会は増加すると考えられる。

中等教育や大学教育の変化を踏まえ、授業においてレポートを書く頻度を増やすばかりでなく、レポートの質を高めるための指導方法の改善、あるいはレポート作成方法の指導自体を目的とする授業やその指導方法の改善が必要であろう。今回の学習指導要領の改定では、思考力や表現力の育成を目指した文章作成指導の活動の一つとして、文章を書く際の読み手に対する意識を向上させることが挙げられている。例えば、高校指導要領（平成 30 年告示）解説国語編において、新設された共通必修科目である「現代の国語」では、「読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫する」という活動が挙げられている。また、選択科目である「国語表現」では、「読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書か

れているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりする」という活動が挙げられている。これらの活動は、文章作成において読み手を意識して文章を書くことの重要性を指摘するものであると言えるだろう。

授業などで課される論文やレポート作成における文章作成プロセスについては、多くの書籍が出版されているが（例えば、白井・高橋, 2008, 桑田・江竜・押木・勝亦・松田, 2013）、心理学的な観点からの実証的な検討は十分になされていない。そこで本研究では、文章作成の指導方法の基礎的な研究として、心理学的方法によってその産出プロセスについて検討する。

文章作成と読み手意識との関係について、Sato & Matsushima (2006) は、他者に幾何学図形を説明する文章を作成するときに、読み手を意識させる教示を与えることで、メタ的な説明や理解を補助するような説明が多くなり、伝達効率の高い説明文が作成できることを示している。この理由については、意見などを受け手へ伝えるメカニズムやその理論的枠組みを扱っているコミュニケーション研究が参考となる（例えば、中條, 1999）。Sato & Matsushima (2006) の知見は、Figure 1 の言語的コミュニケーション過程のモデルにおいて、どのように説明されるだろうか。書かれた文章や音声言語を媒介とする伝達場面では、送り手から受け手に送られるのは文字や音の並びである。文章の読み手は、書き手から発信された文字列を言葉として理解することから始めなければならない。さらに、それらの言葉を介して書き手から伝えられたメッセージを理解しなければならない。そのためには、書き手と読み手とが言語に関する規則や語彙、状況に応じた言語使用の規則や一般的知識、伝達の目的などを共有していることが必要となる。その際に、書き手と読み手の双方がそれぞれ相手に関するモデルを持っていることが効率的な伝達に必要であると考えられている（Winograd, 1981）。書き手が読み手のモデル（想定された読み手）を持つことによって、例えば、教師が児童に説明する時には抽象的な言葉よりも発達に応じた具体的な言葉を選択するというように、相手に応じて言葉づかいを変えたり、相手の予備知識を推し量って適当な付加的説明を行ったりすることが可能となる。同様に読み手もまた書き手のモデルを持っていることにより、受け取った言葉を書き手の立場に立って適切に解釈することが可能となる。抽象的な幾何学図形を言葉だけで相手に伝達しようとするとき、Figure 1 から、一方的に図形の説明を行うだけではなく自分の中に読み手モデ

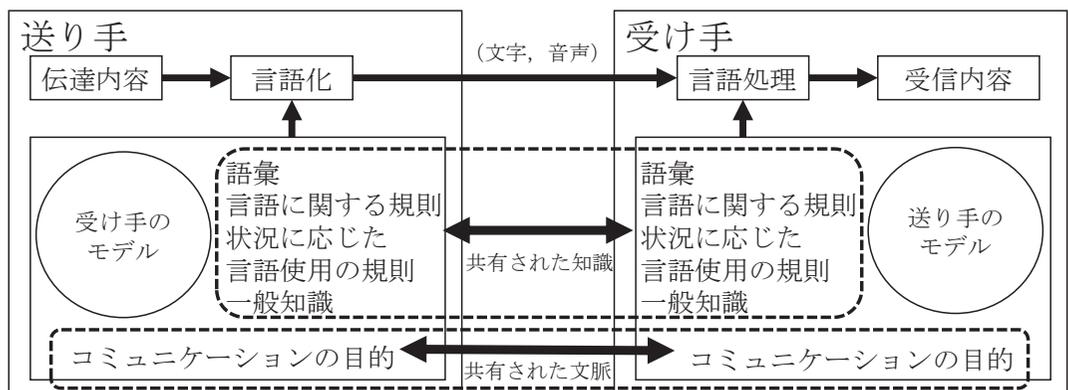


Figure 1. 通信系のモデルに基づく言語的コミュニケーション過程のモデル(中條, 1999 を改変)。

ルを構築し、それとの模擬的な対話等を行い、相手の理解を促すための指示や理解状態をモニターする質問のようなメタ説明を加えることによって、伝達効率のよい文章が生成されると考えられる。

Figure 1 における受け手のモデルやそれとの模擬的対話のように、文章作成において書き手が読み手に配慮することは、読み手意識 (audience awareness) と呼ばれている。岸・辻・榎山 (2014) は、説明文を書く際の読み手意識の構造を検討し、読み手意識が「説明意識」、「書き手の実践」、「メタ理解」、「工夫実践」によって構成されているとし、それらが説明文の作成の質に影響を与える可能性を示唆している。レポートの作成もまた文字を媒体とする書き手と読み手のコミュニケーションであると捉えるならば、受け手である読み手を想定することで理解しやすい文章となり、効率的な伝達が可能となると考えられる。そこで、本研究ではレポート作成における、読み手を意識した文章作成方略の構造を検討する。

本研究では、大学のレポート作成における、読み手を意識した文章作成方略の使用尺度を開発する。まず、読み手を意識した文章作成方略を収集するための予備調査を行う。予備調査では、レポート作成において熟達していると考えられる大学院生を対象に、レポート課題における読み手を意識した文章作成方略を自由記述で回答させる。岸他 (2014) では説明文の方略を収集する予備調査によって得られた回答を意識的な側面と、行動的な側面に分けて分類を行っている。そこで本研究では、2つの側面 (意識的側面として読み手への配慮、行動的な側面として読み手のための工夫) について方略の収集を行う。収集された文章作成方略は山田・近藤・畠岡・篠崎・中條 (2010) と同様に KJ 法を用いて分類整理し方略リストを作成する。方略リストの主要な分類と岸他 (2014) によって見出された読み手意識の構造、白井・高橋 (2008) や桑田他 (2013) によって紹介されている論文やレポート作成の際の注意点を考慮し、レポート作成における文章作成方略についての質問紙を作成する。この質問紙を用いて文章作成中の行動について評定を求め、岸他 (2014) や山田他 (2010) と同様に因子分析を行い、尺度を開発する。

Roen & Willey (1988) は書き手に、文章を書く段階、または推敲する段階で読み手を意識させる質問を与え、書き手が読み手意識を持つことによる文章の質の向上は、文章を書く段階 (執筆段階) よりも文章を見直す段階 (推敲段階) のほうが大きいことを示した。これは、執筆段階が何を書くかを考えながら読み手を意識しなければならないために認知負荷の高い状況にあるのに対し、推敲段階では読み手の視点から読むことに集中できるため、より読み手意識が機能するためだと考えられる。また、田中・山根・有馬・中條 (2016) では、レポート作成において想定する読み手が執筆段階と推敲段階で異なることを示している。つまり、読み手意識は執筆段階と執筆段階で異なる可能性がある。そのため本研究では、執筆段階と推敲段階とを分けた検討をおこなう。

本研究では構成した尺度の妥当性を検討するために、書き手の特性やレポート作成に関して受けた指導の経験の差異による方略使用の違いを、この尺度を用いることで記述できるかどうか確認する。Bereiter & Scardamalia (1987) は文章作成において、熟達者と非熟達者では産出過程が異なるとしている。また、崎濱 (2002) ではこのことに関連して、説明文産出において自己効力感によって使用される方略が異なることを示している。したがって、レポート課題においてもレポートを書く頻度やレポート作成に関する自己効力感の差異によって使用される方略が異なると考えられる。そ

ここで本研究では、レポートを書く頻度とレポートを書くことの自信（自己効力感）を参加者に回答させ、それらの高低で参加者を2群に分けて、尺度の評定値を比較する。また、先行研究（例えば、Traxler & Gernsbacher, 1992, 1993 ; 大濱・佐藤, 2016）は、説明文産出においてフィードバックや書き手どうしの共同学習が文章作成方略や文章の質を高めるとしている。このことから、レポート作成場面において教師から与えられるフィードバックや学生どうしで互いにレポートを評価しあうこと（以下、ピアレビューとする）が、文章作成方略に影響を与えると考えられる。そこで本研究では、レポート課題における教師からのフィードバックの頻度やピアレビューの頻度によって、参加者を高低2群に分けて尺度の評定値を比較する。本研究で構成した尺度に妥当性があれば、書き手の特性やレポート作成に関して受けた指導の経験の差異による方略使用の違いを記述できると考えられる。

方 法

予備調査

調査参加者 教育学研究科において心理学を専攻する大学院生 29 名（平均年齢 24.61, $SD=2.97$ ）を対象とした。予備調査の時期と参加者は、田中他（2016）と同じであった。

手続き 予備調査は質問紙を用いて留置調査を行った。質問紙の教示では、大学の授業等で、レポートが課されたときのことを想定させ、レポートを書く段階（以下、執筆段階とする）と書いたレポートを見直す段階（以下、推敲段階とする）のそれぞれにおいて回答を求めた。質問内容は、読み手にとってわかりやすいレポートを書くためにどのようなことに注意しているか（読み手に対する配慮）、読み手にとってわかりやすいレポートにするためにどのような工夫を行っているか（読み手のため工夫）を、それぞれ箇条書きで回答させた。

結果 予備調査の結果、執筆段階における読み手に対する配慮では 72 件、読み手のための工夫では 66 件、推敲段階における読み手に対する配慮では 80 件、読み手のための工夫では 54 件の回答が得られた。得られた回答に対し、調査の実施者が KJ 法で分類したところ執筆段階における読み手に対する配慮では 10 カテゴリ、読み手のための工夫では 13 カテゴリ、推敲段階において読み手に対する配慮では 12 カテゴリ、読み手のための工夫では 12 カテゴリが見出された（付録 1）。KJ 法によって見出されたカテゴリの中から、5 件以上の回答が挙げられたカテゴリを質問紙の項目として採用した。読み手への配慮と読み手のための工夫について項目やカテゴリの重複が多く見られたため、統合することとした。その結果、14 カテゴリが採用された。また、質問項目について、岸他（2014）から 1 カテゴリ（興味・関心を引く）、白井・高橋（2008）と桑田他（2013）から 1 カテゴリ（レポート形式を整える）を採用した。質問項目は読み調査の回答と岸他（2014）、白井・高橋（2008）、桑田他（2013）をもとに、各カテゴリから 3 項目作成した。そのため、質問紙は 16 カテゴリ 48 項目で構成された（付録 2）。

レポート作成における文章作成方略使用尺の開発

実験参加者 教育学部の学生 202 名（平均年齢 20.73, $SD=.97$, 1 年生 24 名, 2 年生 1 名, 3 年生 133 名, 4 年生 6 名, 学年無記入 38 名）を対象とした。調査の時期と参加者は、田中他（2016）と

同じであった。

手続き 質問紙を用いて集合調査を行った。質問紙には教示として、大学の授業などレポートを書く課題が出された時のことを思い返し、レポートを書くとき（執筆段階）と、レポートを見直すとき（推敲段階）についてそれぞれ回答するように記述された。各段階では、読み手にとってわかりやすいレポートにするために、どのようなことに注意や工夫をしてレポートを書いているか（レポート作成における文章作成方略使用）について回答させた。回答は、どの程度当てはまるかを「1: まったく当てはまらない」—「3: どちらでもない」—「5: かなり当てはまる」の5件法で行わせた。その後、授業などでよくレポートを書くことがあるか（レポートを書く頻度）と、レポートを書くことに自信があるか（自己効力感）についても同様に5件法で回答させた。また、レポート課題について教師からのフィードバックの頻度に関する4項目（「添削されたレポートが返却される」、「レポートの評価が示される」、「レポートについて1対1の指導がある」、「提出されたレポートの中から良い例や悪い例が示される」）と、ピアレビューの頻度についての3項目（「レポートについて学生が互いに評価を行う」、「他の学生が提出したレポートについてコメントする」、「レポートの内容や書き方について、学生どうしで議論を行う」）について、「1: まったくない」—「3: 半分程度ある」—「5: 毎回ある」の5件法で回答させた。制限時間は設けなかった。

結 果

レポート作成における文章作成方略使用尺度の構成 因子分析は回答に不備のない156名（平均年齢20.67, $SD=99$, 1年生23名, 3年生114名, 4年生5名, 学年無記入14名）を対象とした。各項目の評定値に対して、執筆段階と推敲段階の回答を合わせ、探索的因子分析（最尤法, 斜交回転）を行った。因子の抽出については堀（2004）を参考に、並行分析, MAP, BICを用いた。読み手への配慮と工夫について、並行分析では9因子, MAP法では7因子, BIC法で7因子が抽出された。このうち最も解釈可能性のあった7因子を採用した。各因子負荷量が.35以下の項目を除外し、34項目に対する因子分析を行い最終的な因子パターンとした（Table 1）。7因子構造に対し、確認的因子分析を行った結果、適合度は許容される値を示した（ $RMSEA=.07$, $CFI=.86$, $TLI=.84$, $SRMR=.07$ ）。

第1因子について、「全体の論理の展開に注意する」、「論の展開をわかりやすくする」などの項目の負荷が高かったことから、論理・文章の構成と命名した。第2因子は、「文法的に不適切な表現を避ける」、「誤変換をしないようにする」などの項目の負荷が高かったことから、表記や表現の確認と命名した。第3因子は「他の人に読んでもらい、違和感がないかチェックしてもらう」、「他の人に見てもらってコメントをもらう」などの項目の負荷が高かったことから、他者によるチェックと命名した。第4因子は「図表でまとめられるところは、図表にする」、「その分野のレポートマニュアルを参照する」などの項目の負荷が高かったことから、図表・レポート形式の確認と命名した。第5因子は「文を冗長にしない」、「一文が長くなりすぎないようにする」などの項目の負荷が高かったことから、簡潔化と命名した。第6因子は「読み手が興味を持つように心がける」、「読み手の関心を引くような文章を書く」などの項目の負荷が高かったことから、関心を引く配慮と命名した。第7因子は、「時間を空けて読み返す」、「数回読み返す」などの項目の負荷が高かったことから、読

み返しと命名した。

Table 1

探索的因子分析によって見出されたレポート作成における文章作成方略

因子名	尺度項目	1	2	3	4	5	6	7	共通性
論理・文章の構成 ($\alpha=.84$)	全体の論理の展開に注意する。	0.83	-0.13	-0.08	-0.05	0.03	-0.04	0.05	0.54
	論の展開を分かりやすくする。	0.77	-0.05	0.03	-0.18	-0.02	0.08	0.02	0.52
	レポートの命題やテーマを明確に述べる。	0.74	-0.26	-0.03	0.11	0.06	-0.01	-0.08	0.38
	論理を一貫させる。	0.63	0.02	0.04	-0.05	0.05	-0.04	-0.13	0.36
	文章構成に注意する。	0.62	0.16	-0.01	0.04	-0.11	0.04	0.01	0.54
	説明不足にならないように丁寧に説明する。	0.52	0.09	0.08	0.04	-0.08	0.05	0.13	0.48
	主語と述語を対応させる。	0.43	0.21	0.16	-0.08	0.17	0.02	-0.14	0.43
専門用語の定義を明確にする。	0.40	-0.01	0.12	0.28	-0.03	-0.03	-0.06	0.33	
表記や表現の確認 ($\alpha=.82$)	文法的に不適切な表現を避ける。	-0.14	0.93	0.06	-0.11	0.10	0.04	-0.10	0.68
	誤変換をしないようにする。	-0.08	0.83	-0.08	0.03	-0.07	-0.15	0.06	0.55
	誤字脱字を見つける。	0.02	0.67	0.06	-0.09	-0.12	-0.08	0.16	0.45
	句読点の位置が適切か確認する。	-0.07	0.62	-0.03	0.11	0.04	0.13	-0.03	0.46
	言葉のニュアンスが伝えたい内容とずれないようにする。	0.08	0.56	0.00	0.00	0.08	0.08	-0.02	0.46
	レポートの種類と形式が対応しているか確認する。	0.07	0.44	0.12	-0.01	-0.06	-0.02	-0.14	0.19
	重要な情報が省略されていないか確認する。	0.25	0.38	-0.15	0.18	-0.14	0.00	0.19	0.47
他者によるチェック ($\alpha=.94$)	他の人に読んでもらい、違和感がないかチェックしてもらう。	0.03	-0.01	0.99	-0.02	-0.04	-0.03	0.00	0.93
	他の人に見てもらってコメントをもらう。	0.02	0.06	0.97	-0.05	-0.09	-0.08	0.06	0.88
	友人や先生に読んでもらう。	-0.08	-0.07	0.81	0.04	0.08	0.03	0.07	0.74
図表・レポート形式の確認 ($\alpha=.71$)	図表でまとめられるところは、図表にする。	-0.02	-0.08	-0.17	0.80	0.03	0.01	0.13	0.55
	その分野のレポートのマニュアルを参照する。	-0.12	0.00	0.08	0.73	-0.05	-0.07	-0.17	0.46
	似たようなレポートを参考にする。	-0.04	-0.13	0.13	0.53	-0.05	0.08	-0.03	0.33
	図表と文章の対応を確認する。	0.00	0.12	-0.06	0.52	0.09	-0.10	0.05	0.34
	同じ意味を表す言葉はなるべく統一する。	0.00	0.12	0.05	0.40	0.18	0.01	-0.12	0.28
簡潔化 ($\alpha=.82$)	文を冗長にしない。	0.00	-0.03	-0.07	0.04	0.96	0.00	-0.03	0.87
	一文が長くなりすぎないようにする。	0.13	0.06	-0.02	-0.11	0.64	0.02	0.06	0.54
	簡潔に書くようにする。	-0.03	0.22	0.04	0.03	0.55	-0.01	0.13	0.55
関心を引く配慮 ($\alpha=.74$)	読み手が興味を持つように心がける。	0.05	-0.01	-0.06	-0.03	-0.02	0.90	-0.06	0.76
	読み手の関心をひくような文章を書く。	0.00	-0.05	-0.05	-0.03	0.03	0.83	0.03	0.66
	レポートの独自性をアピールする。	-0.01	0.12	0.08	0.08	-0.13	0.42	-0.04	0.25
読み返し ($\alpha=.73$)	時間を空けて読み返す。	-0.12	0.05	0.08	-0.03	0.00	0.03	0.78	0.63
	数回読み返す。	0.14	-0.05	0.02	0.01	0.00	-0.11	0.74	0.57
	プリントアウトして声に出して読む。	-0.10	-0.22	0.21	0.14	0.08	0.12	0.41	0.36
	読み手の視点に立って文章を読み返す。	0.20	0.21	-0.08	-0.02	-0.03	0.06	0.41	0.43
	寄与率	0.10	0.10	0.08	0.06	0.06	0.05	0.06	
	因子間相関	1	0.71	0.23	0.43	0.48	0.44	0.42	
		2		0.18	0.44	0.47	0.33	0.42	
		3			0.52	0.24	0.38	0.42	
		4				0.25	0.36	0.35	
		5					0.22	0.32	
		6						0.43	

したがって、因子分析によって、「論理・文章の構成」、「表記や表現の確認」、「他者によるチェック」、「図表・レポート形式の確認」、「簡潔化」、「関心を引く配慮」、「読み返し」の7因子が見出された。

参加者特性による文章作成方略の違い レポート作成頻度の平均評定値は4.00、標準偏差は1.07であった。参加者をレポート作成頻度によって、低群（37名：平均-1SD）、高群（63名：平均+1SD）が最高評定値の5を超えていたため、最高評定値をつけたものを上位群とした）に分け、因子ごとの平均評定値を算出した（Figure 2）。それぞれの因子に対し2（低群・高群）×2（執筆段階・推敲段階）の分散分析を行った。その結果、「論理・文章の構成」において高群の方が低群よりも高いことに有意傾向が見られ（ $F(1, 98) = 3.38, MSe = .51, p < .10, \eta_p^2 = .03$ ）、執筆段階より推敲段階の方が有意に高いことが示された（ $F(1, 98) = 4.60, MSe = .07, p < .05, \eta_p^2 = .05$ ）。また、「関心を引く配慮」において執筆段階よりも推敲段階の方が高いことに有意傾向が見られた（ $F(1, 98) = 3.72, MSe = .21, p < .10, \eta_p^2 = .04$ ）。

レポート作成の自己効力感の平均値は2.38、標準偏差は0.93であった。レポート作成に対する自己効力感を低群（23名：平均-1SD）、高群（24名：平均+1SD）に分けて、因子ごとの平均評定値を算出した（Figure 3）。それぞれの因子に対し2（低群・高群）×2（執筆段階・推敲段階）の分散分析を行った。その結果、「論理・文章の構成」において高群の方が低群よりも高いことに有意傾向が見られ（ $F(1, 45) = 2.85, MSe = .58, p < .10, \eta_p^2 = .06$ ）、執筆段階より推敲段階の方が有意に高いことが示された（ $F(1, 45) = 7.59, MSe = .10, p < .01, \eta_p^2 = .14$ ）。「図表・レポート形式の確認」においては、交互作用に有意傾向が見られた（ $F(1, 45) = 3.11, MSe = .18, p < .10, \eta_p^2 = .06$ ）。そこで、単純主効果の検定を行ったところ、推敲段階において、高群よりも低群の方が高いことに有意傾向が見られた（ $F(1, 45) = 4.00, MSe = .77, p < .10, \eta_p^2 = .08$ ）。また、「関心を引く配慮」において、高群の方が低群よりも有意に高く（ $F(1, 45) = 6.86, MSe = 1.80, p < .05, \eta_p^2 = .13$ ）、執筆段階よりも推敲段階の方が有意に高かった（ $F(1, 98) = 6.92, MSe = .20, p < .05, \eta_p^2 = .13$ ）。

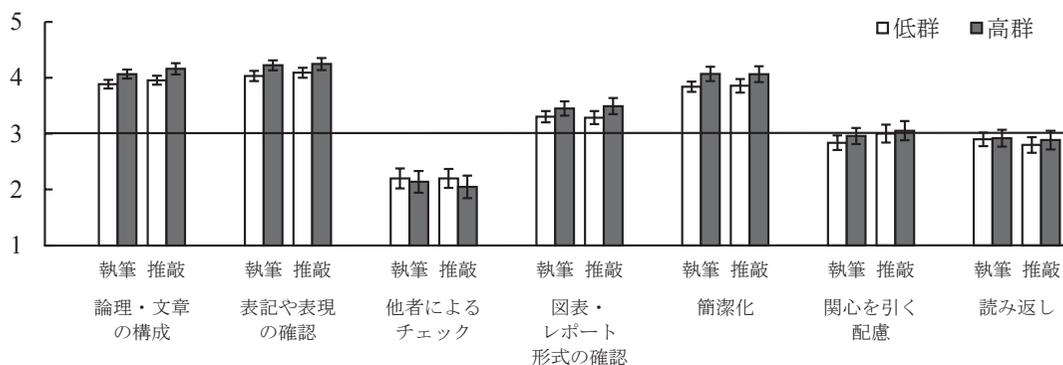


Figure 2. レポート作成頻度による読み手を意識した文章作成方略の使用の差異（誤差線は平均値の標準誤差）。

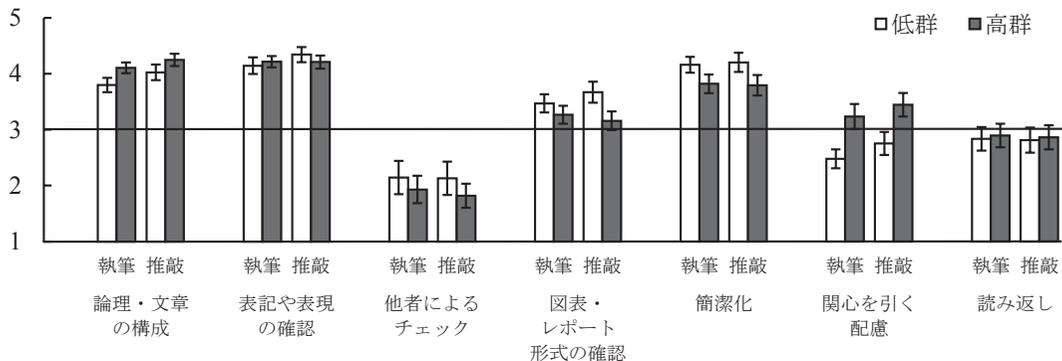


Figure 3. レポート作成に関する自己効力感による読み手を意識した文章作成方略の使用の差 (誤差線は平均値の標準誤差)。

フィードバックの頻度の差異による方略使用の違い 教師からのフィードバックの頻度に関する4項目の平均評定値は2.02、標準偏差は0.76であった。参加者をレポート作成頻度によって、低群(31名:平均-1SD)、高群(24名:平均+1SD)に分け、因子ごとの平均評定値を算出した(Figure 4)。それぞれの因子に対し2(低群・高群)×2(執筆段階・推敲段階)の分散分析を行った。その結果、「論理・文章の構成」において、執筆段階より推敲段階の方が有意に高いことが示された($F(1, 53) = 4.65, MSe = .11, p < .05, \eta_p^2 = .08$)。「他者によるチェック」については、高群の方が低群よりも有意に高かった($F(1, 53) = 21.37, MSe = 2.28, p < .01, \eta_p^2 = .29$)。また、「図表・レポート形式の確認」においても高群の方が低群よりも有意に高かった($F(1, 53) = 12.99, MSe = 1.11, p < .01, \eta_p^2 = .20$)。「関心を引く配慮」においては、執筆段階よりも推敲段階の方が有意に高かった。($F(1, 53) = 9.09, MSe = .30, p < .01, \eta_p^2 = .15$)。

ピアレビューの頻度についての3項目の平均評定値は2.04、標準偏差は1.21であった。レポート作成に対する自己効力感を低群(55名:平均-1SDが最低評定値の1を下回っていたため、最低評定値であったものを低群とした)、高群(31名:平均+1SD)に分けて、因子ごとの平均評定値を算出した(Figure 5)。それぞれの因子に対し2(低群・高群)×2(執筆段階・推敲段階)の分散分析を行った。その結果、「論理・文章の構成」において、執筆段階より推敲段階の方が有意に高いことが示された($F(1, 84) = 18.24, MSe = .06, p < .01, \eta_p^2 = .18$)。「表記や表現の確認」については、執筆段階より推敲段階の方が高いことに有意傾向が見られた($F(1, 84) = 3.61, MSe = .09, p < .10, \eta_p^2 = .04$)。「他者によるチェック」においては、高群の方が低群よりも高いことに有意傾向が見られた($F(1, 84) = 3.21, MSe = 2.34, p < .10, \eta_p^2 = .04$)。「図表・レポート形式の確認」においては、高群が低群よりも有意に高かった($F(1, 84) = 10.20, MSe = 1.21, p < .01, \eta_p^2 = .11$)。「関心を引く配慮」においては、執筆段階よりも推敲段階の方が有意に高かった。($F(1, 84) = 7.89, MSe = .18, p < .01, \eta_p^2 = .09$)。「読み返し」については、執筆段階よりも推敲段階の方が有意に低いことに有意傾向が見られた($F(1, 84) = 2.87, MSe = .10, p < .10, \eta_p^2 = .03$)。

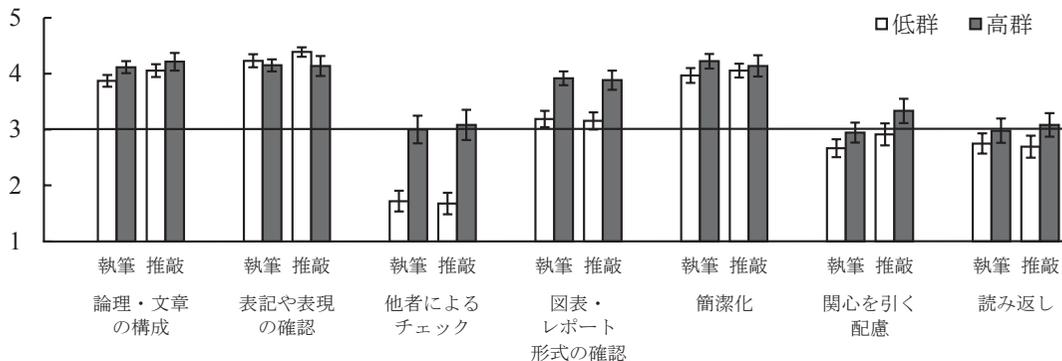


Figure 4. 教師からのフィードバックの頻度によるレポート作成頻度による読み手を意識した文章作成方略の使用の差異（誤差線は平均値の標準誤差）。

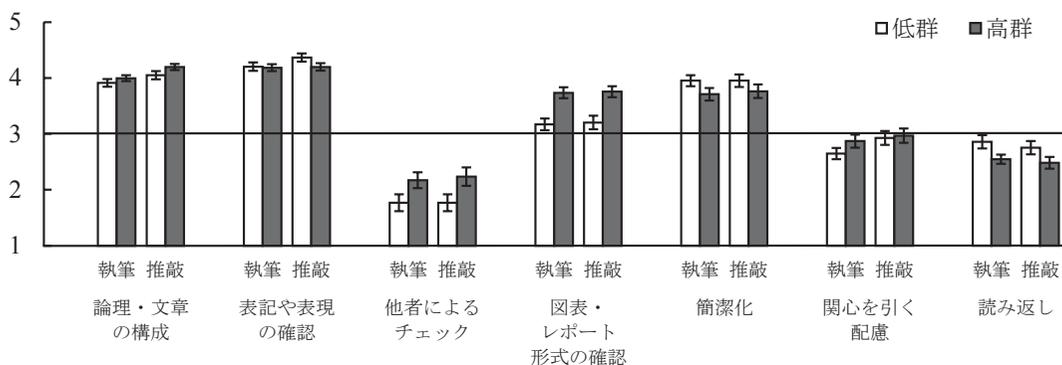


Figure 5. ピアレビューの頻度による読み手を意識した文章作成方略の使用の差異（誤差線は平均値の標準誤差）。

考 察

本研究の目的は、授業等で課されるレポート作成における、読み手を意識した文章作成方略の使用尺度を開発することであった。本研究では、レポート作成における読み手を意識した文章作成方略に関する質問紙を作成し、その回答に対し探索的因子分析を行って尺度を開発した。

探索的因子分析の結果、「論理・文章の構成」、「表記や表現の確認」、「他者によるチェック」、「図表・レポート形式の確認」、「簡潔化」、「関心を引く配慮」、「読み返し」の7因子が見出された。この因子に見られる方略は、山田他（2010）の説明文における方略と類似している。山田他（2010）は、説明文を作成させた後に質問紙による調査を行い因子分析の結果から、説明文の方略として、「表記・表現の容易性」、「流れやまとまりに対する配慮」、「読み手の興味・関心への配慮」、「具体性」、「説明すべきものの成功呈示」を見出している。これらの方略と、本研究で見いだされた方略を比較すると、「論理・文章の構成」、「表記や表現の確認」、「関心を引く配慮」といった方略が対応しているといえよう。このことから、レポート作成における文章作成方略においても説明文と類似

した方略が使用されている可能性があるといえるだろう。一方で、「他者によるチェック」や「図表・レポート形式の確認」については山田他（2010）の見出した方略と類似しているものは見られなかった。このことから、この2つの方略はレポート作成に特有の方略であると推測される。そのため、レポート作成指導としては、この2つの方略について、注意をしなければならないといえるだろう。

参加者特性による文章作成方略の差異 レポートを書く頻度や自己効力感の高低で群分けし方略の違いについて検討したところ、頻度については論理・文章の構成において有意傾向が見られるのみであった。一方、自己効力感では論理・文章の構成に有意傾向が見られるだけでなく関心を引く配慮にも高低群で差が見られた。この2つの方略は頻度の高低群の検討、自己効力感の高低群の検討のどちらでも、執筆段階と推敲段階での評定値の違いが見られている。Roan & Willey (1988) は、読み手は推敲段階でより大きく文章の質を向上させるとしており、崎濱（2002）は自己効力感が高いほど有効な方略を使用する可能性を示唆していることから、この2つの方略は特に文章の質に影響を及ぼしている可能性がある。また、自己効力感においては専門的表現の確認において推敲段階で高低群の差に有意傾向がみられた。このことについて、高群の評定値の方が低群よりも低いことから、文章作成の熟達度が高いために、推敲段階で改めてそれらの確認をする必要がなくなることで生じた差であると考えられる。このように、本尺度ではレポートを書く頻度や自己効力感の高低で方略の差が見られたことから、書き手の特性の差異による方略使用の違いを記述できる尺度であるといえるだろう。

フィードバックの頻度の差異による方略使用の違い レポート課題において教師からのフィードバック頻度やピアレビューの頻度による方略の違いを検討したところ、教師からのフィードバック頻度については、協力の依頼に有意傾向がみられ、専門的表現の確認に有意差が見られた。このことについて、Traxler & Gernsbacher (1992, 1993) において、フィードバックが説明文の分かりやすさを向上させることを示していることから、教師からのフィードバックを受ける授業の経験がある場合、他者によるチェックが行われることが有効な方略であることを経験しているために、積極的にそれらの方略を使うものであると考えられる。また、教師からのフィードバック頻度の高群は専門的表現の確認の評定値が高いことから、専門領域の論文やレポートの作成を指導されていることが示唆される。ピアレビューの頻度においても教師からのフィードバック頻度と同様に他者によるチェックで高群の評定値が低群よりも高いことに有意傾向がみられ、専門的表現の確認では高群の評定が低群よりも有意に高かった。このことから、教師からのフィードバック頻度と同様に、他者からチェックを受けることが有効であった経験をしていると考えられる。また、専門的表現の確認の有意差についても、専門領域においての論文やレポートの作成の指導を受けていることが示唆される。他者によるチェックについて、教師からのフィードバック頻度の高群と比べるとピアレビューの頻度の高群は「どちらでもない」の評定値3を超えていないことを考慮すると、ピアレビューの頻度の高群では授業で必ず他者によるチェックを受けるために、能動的には他者によるチェックを求めていると推測される。このように、本尺度では教師からのフィードバック頻度やピアレビューの頻度の高低で方略の差が見られたことから、フィードバックの頻度の差異による方略使用の違いを記述できる尺度であるといえるだろう。

また、教師からのフィードバック頻度とピアレビューの頻度の群間比較において、どちらでも論理・文章の構成と関心を引く配慮において、執筆段階と推敲段階の差が見られている。この結果は、参加者特性による文章作成方略の違いの比較について共通していることから、この2つの方略は文章作成において重要な要素であるといえるだろう。

まとめと今後の課題 本研究ではレポート作成における、文章作成方略の尺度について7因子構造の尺度を開発し、この尺度が書き手の特性や授業におけるフィードバックの頻度の差異による方略使用の違いを記述できることを示した。そのため、今後この尺度を用いて、レポート作成指導方法や授業における効果的なレポート活用法などの開発研究や、レポート作成に関する介入指導効果等の実践研究が可能となるだろう。

本研究では、方略収集の対象者が心理学を専攻する学生であり、尺度作成については教育学部の学生を対象としていた。このことについて、専攻する学問が異なる参加者とはレポートの作成の際の方略とが異なっている可能性がある。そこで今後は、異なる領域の学生における、文章作成方略の構造を検討する必要があると考えられる。

引用文献

- Bereiter, C., & Scardamalia, M. (1987). *The psychology of written composition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). Active Learning: Creating Excitement in the Classroom. *ASHE-ERIC Higher Education Reports*, 1-121.
- 中條 和光 (1999). コミュニケーションの認知心理学 深田 博己 (編著) コミュニケーション心理学 (pp. 36-50) 北大路書房
- 畠岡 優・中條 和光 (2013). 手続き的説明文の読解方略の使用と作動記憶の関係 日本教育工学会論文誌 36, 339-350.
- 堀 啓造 (2004). 因子分析における因子数決定法——MAP と平行分析 (PA-SMC95) による挟み込み法—— 日本心理学会第 68 回大会発表論文集 391.
- 岸 学・辻 義人・榎山 香奈子 (2014). 説明文産出における「読み手意識尺度」の作成と妥当性の検討 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 65, 109-111.
- 桑田 てるみ・江竜 珠緒・押木 和子・勝亦 あき子・松田 ユリ子 (2013). 学生のレポート・論文作成トレーニング——スキルを学ぶ 21 のワーク—— 実教出版
- 文部科学省 (2017). 平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要) Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/12/13/1398426_1.pdf (2019 年 2 月 23 日)
- 文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編 東洋館出版社
- 文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編 東山書房
- 文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 国語編 東洋館出版社
- 文部科学省 (2018). 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 国語編 東洋館出版社
- 大濱 望美・佐藤 浩一 (2016). 推敲の形態が手続き的説明文の産出に及ぼす影響——相互推敲を取

- り入れた検討—— 群馬大学教育実践研究 33, 149-159.
- Roen, D. H. & Willey, R. J. (1988). The effects of audience awareness on drafting and revising. *Research in the Teaching of English*, 22, 75-88.
- 崎濱 秀行 (2002). 文章産出活動方略と書き手の自己効力感との関連についての検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 49, 191-196.
- Sato, K. & Matsushima, K. (2006) Effects of audience awareness on procedural text writing. *Psychological Reports*, 99, 51-73.
- 白井 利明・高橋 一郎 (2008). よくわかる卒論の書き方 ミネルヴァ書房
- 田中 光・山根 嵩史・有馬 比呂志・中條 和光 (2017). レポート作成における読み手意識に関する尺度の開発 広島大学心理学研究 16, 69-79.
- Traxler, M. J. & Gernsbacher, M. A. (1992). Improving written communication through minimal feedback. *Language and Cognitive Processes*, 7, 1-22.
- Traxler, M. J. & Gernsbacher, M. A. (1993). Improving written communication through Perspective-taking. *Language and Cognitive Processes*, 8, 311-334.
- Winograd, T. (1981). What does it mean to understand language? In D.A. Norman (Ed), *Perspectives on cognitive science* (pp. 231-263). Norwood, N.J.: Ablex..
- 山田 恭子・近藤 綾・畠岡 優・篠崎 祐介・中條 和光 (2010). 説明文産出におけるメタ認知的知識の構造 広島大学心理学研究 10, 13-26.

付録1 予備調査によって収集された文章作成方略に対するKJ法での分類結果

	執筆段階		推敲段階	
	カテゴリ	頻度* 回答例	カテゴリ	頻度* 回答例
読み手への配慮	文章構成に注意する	17 文章構成がしっかりしている	校閲を行う	18 誤字、脱字がないか
	論理性に気をつける	11 論理の一貫性	論理性に気をつける	12 論理の一貫性
	簡潔にする	9 一文が長くなりすぎない	正しい文法をつかう	9 主語ははっきりしているか
	わかりやすい表現をする	8 平易な言葉で表現すること	簡潔にする	9 文字が冗長でないか
	正しい文法をつかう	7 主述が対応しているか	わかりやすい表現をする	7 平易な言葉で表現すること
	丁寧に説明する	5 言葉のていねいさ	正確に伝わるか注意する	6 自分のいいたいことが伝わるか
	用語を一貫させる	4 定義の明確さ、一貫性	用語を一貫性させる	5 同じ単語を使っているか
	主張と引用の区別する	4 引用なのか自分の考えなのかわかるように書く	文章構成に注意する	4 段落どうしのつながり
	テーマに沿うよう注意する	4 レポート課題の問い(目的)に、答えられる内容か	テーマに沿うよう注意する	3 レポート課題の問い(目的)に、答えられる内容か
	校閲を行う	3 うち間違えない	丁寧に説明する	3 必要な説明がすべて含まれているか
			正しい様式にする	2 レポートとして適切な形をとっているか
		読み手の視点で読む	2 初めて読む人が、読み進めなくなるとしたらどこか	
読み手のための工夫	文章構成に注意する	17 構成に気を付ける	読み直す	15 読み直す
	わかりやすい表現をする	7 わかりやすい表現にすること	文章構成に注意する	8 内容のまとまりごとに段落をつける
	簡潔にする	6 1文を長くしないこと 簡潔に書く	校閲を行う	6 誤字脱字がないようにチェックする
	読み直す	6 読み直す	論理性に気をつける	5 論の流れは通っているか
	校閲を行う	6 うち間違えない	簡潔にする	5 簡潔に述べる
	論理性に気をつける	6 論が飛ばないようにする	テーマに沿うよう注意する	3 読み手が求めている解に最も焦点が当たるように書く
	テーマに沿うよう注意する	5 テーマから外れない	図表にまとめる	3 統計部分等、表にまとめてしまう
	用語を一貫させる	3 用語の統一に注意する	わかりやすい表現をする	3 一文の意味が通るか
	主張と引用の区別	2 事実や学んだことと、自分の考えを明確に分ける	用語を一貫させる	2 用語に気を付ける
	似た文献を参考にする	2 似たようなレポートを参考に する	読んでもらう	2 他者に見てもらってコメントを もらう
	丁寧に説明する	2 説明を端折らないでていねいに説明する	正しい文法を使う	2 主語ははっきりしているか
	正しい文法をつかう	2 「示唆された」「述べられた」「主張された」等を使い分ける	正確に伝わるか注意する	1 いいたいことを受けとってくれ そうか、伝わりそうか
	読んでもらう	1 友人・先生に読んでもらう		

注) 頻度*は該当カテゴリに含まれる方略の回答総数。

付録2 質問項目に利用した文章作成方略

文章構成に注意する

結論を先に書く。
段落ごとで伝えたいことを意識する。
文章構成に注意する。

論理性に気を付ける

論理を一貫させる。
論の展開をわかりやすくする。
全体の論理の展開に注意する。

簡潔にする

一文が長くなりすぎないようにする。

簡潔に書く。
文を冗長にしない。

分かりやすい表現をする

曖昧な表現を避ける。
難しい言葉がないか確認する。
分かりやすい表現にする。

正しい文法を使う

主語と述語を対応させる。
主語をはっきりさせる。
文法的に不適切な表現を避ける。

丁寧に説明する

必要なことについてきちんと説明しているか確認する。
重要な情報が省略されていないか確認する。
説明不足にならないように丁寧に説明する。

用語を一貫させる

同じ意味を表す言葉はなるべく統一する。
専門用語の定義を明確にする。
意味やつじつまが合わなくなっているところを修正する。

校閲を行う

誤字脱字を見つける。
誤変換をしないようにする。
句読点の位置が適切か確認する。

注) 太字はカテゴリ名

正確に伝わるか注意する

自分の言いたいことが伝わるか確認する。
言葉のニュアンスが伝えたい内容とずれないようにする。
できるだけ具体的に書く。

読み直す

時間を空けて読み返す。
数回読み返す。
プリントアウトして声に出して読む。

読み手の視点で読む

自分が読み手だったらどう評価するかを考えながら読み、書き直す。
読み進めなくなるところがないか確認する。
読み手の視点に立って文章を読み返す。

テーマに沿うように注意する

レポートの命題やテーマを明確に述べる。
読み手が求めている答えに最も焦点が当たるように書く。
テーマから外れない。

図表にまとめる

図表と文章の対応を確認する。
図表を見やすくする。
図表でまとめられるところは、図表にする。

他者を参考にする

友人や先生に読んでもらう。
他者に見てもらってコメントをもらう。
他の人に読んでもらい、違和感がないかチェックしてもらう。

興味・関心を引く

読み手が興味を持つように心がける。
読み手の関心をひくような文章を書く。
レポートの独自性をアピールする。

レポートの形式を整える

その分野のレポートのマニュアルを参照する。
レポートの種類と形式が対応しているか確認する。
似たようなレポートを参考にする。

大学生の困難課題解決のための努力維持要因の検討

廣瀬春香・服巻 豊・尾形明子

Effort for solving difficult problems among university students:
Why can they keep making efforts?

Hirose Haruka, Haramaki Yutaka, & Ogata Akiko

University students experience many difficult problems that can lead to mental illness. However, many students can solve these problems by making efforts to confront them. Previous research has showed that social support, generalized self-efficacy, future time perspective, task motivation, and difficulty of the problem are related to solving difficult problems; moreover, some of these factors are connected to each other. In this research, the primary aim was to identify the process of making an effort to confront problems, for which I have developed a hypothetical model. Additionally, students grow up in the four years of their university life. The second aim was to identify the difference between grades in the hypothesized process model. The questionnaire was completed by 399 students (96 freshmen, 95 sophomores, 89 juniors, 69 seniors, and 50 graduates). Covariance structure analysis was performed for the entire sample. The result supported the hypothetical model of making efforts, but some new connections were found. In other words, all psychological factors were complexly connected to each other. Then, I performed covariance structure analysis for my hypothetical model for each grade and compared the models. The results of this comparison showed that the strength of correlation of all factors were different across the grades. Although the factor of future time perspective had no effect on the model for the 1st grade, the effect increased with subsequent grades. Additionally, the effect of the factor of generalized self-efficacy increased with each grade.

キーワード : effort, problem, difficulty, students

問題

近年、大学への進学率は高まり続けており、高等学校卒業者の大学進学率は、平成 27 年には、54.6%に上った (文部科学省, 2015)。そして進学によって社会へ出る時期が遅くなる分、大学時代

は社会に出る準備期間として注目されている(畑野, 2010; 磯谷・岡林, 2012 ほか)。一方で, 大学生の不適応が問題となっている。日本学生支援機構の平成 26 年度学生生活調査(2016)によると, 大学生活についての不安や悩みを持っている学生の存在が明らかとなっており, 内容は『卒業後にやりたいことが見つからない』(『大いにある』・『少しある』の回答率 40.8%), 『授業の内容についていけない』(『大いにある』・『少しある』の回答率 35.2%), 『学内の友人関係の悩みがある』(『大いにある』・『少しある』の回答率 17.9%) が挙げられる。大学生活に適応するためには, これらの不安や悩みの原因となっている課題に取り組み, 解決させる必要があると考えられる。さらに, 学校への不適応について, 日本学生支援機構(2007)は, “大学生には入学から卒業にいたるサイクルの中で, 学年進行に伴った個別の課題とニーズがある”としている。以上を踏まえると, 学年ごとの悩みや不安といった課題の解決のために物事の取り組みを維持する要因を明らかにすることは, 大学生の大学への適応を維持・促進することにつながると考えられる。

物事への取り組みに影響する要因として動機づけがある。動機づけとは一般的に, 目標に向かってその行動を維持・調整する過程・機能をさす。また, Loche & Latheman(2002)は, 課題がどれほど困難かという認知が動機づけの高さに影響を及ぼすことを明らかにした。そこで市村・上田・楠見(2016)は, 実験者が事前に与える課題の困難度に関する情報が課題努力に及ぼす影響を, 課題に対する課題価値や結果期待, 内発的動機付け, 有能感といった動機づけとの関連から検討した。その結果, 課題努力には課題に対する動機づけの高さと困難度情報の交互作用があることを示し, 動機づけが低い場合であっても, 困難度が低いという情報があれば, 課題努力は促されるということを明らかにした。市村ら(2016)の研究は, 認知課題を用い, 外的に困難度情報を与えた研究であったが, 日常場面における様々な解決困難な課題についての動機づけや困難度認知が, 同様に解決努力を促す要因になると考えられる。

また, 課題への取り組みには自己効力感の強さも影響していると考えられる。自己効力感とは, Bandura(1977)によって提唱された概念で, 「行為に対する努力の持続性, 困難な経験に対してどれほど耐えられるかということに対する個人の確信」のと定義されており, 行為を始め, 維持し, 完了させる意思に影響するもの, とされている。そして坂野・東條(1986)は, 自己効力感を二つの水準に分けた。第1水準は, 「特定の課題や場面における行動に影響を及ぼすもの」で, Gist & Mitchell(1992)は『特異的自己効力感』と呼んだ。第2水準は, 「具体的な個々の課題や状況に依存せず, より一般化した日常生活における行動に影響するもの」で, 成田・下中・中里・河合・佐藤・長田(1995)は「ある種の特性的な認知傾向とみなせる」ことから, 『特性的自己効力感』と呼んだ。自己効力感が高いということは, 様々な物事に対しても, 解決のための行為を始め完了することができるといえる。また, 特性的自己効力感是新規場面に対しても適応的な対処が期待できることから, 学校生活の中で様々な新規場面に直面することが多い大学生にとっては, 解決困難な課題に対処する際に重要な要因と考えられる。そして, 課題が未解決であることによって, 将来的により大きな問題が生じることが予想されることは, 解決の必要性の程度に影響を与えると考えられる。このように, 過去から将来への時間的つながりの中で, 現在の自己の行動を捉えることを時間的展望という。Lewin(1951: 猪股訳, 1979)によると時間的展望とは, 「ある一定の時点における個人の心理的

過去および未来についての見解の総体」とされている。この時間的展望には、時間軸に照らし合わせて、過去展望・現在展望・未来展望の3つが存在し(勝俣, 1995), ひとつの時間軸の中で過去と現在と未来を関連付け、将来を展望した自己認識を行うことで、希望する人生への具体的な取り組みができるという(佐藤・志村・深谷, 2004)。特に、「青年期において時間的展望は急速に発達し、リアリティも高まる(都筑, 1993)」と同時に、今後の人生を決定するような重要な決断を迫られるため、肯定的な未来展望を築くことの重要性も明らかとなっている(比嘉・岡本, 2007)。つまり、未来展望を、自己の過去と現在に根ざした具体的で現実的なものとするのが、青年期に重要であり、そのような時間的展望を持つことで、困難な課題に対しても解決のために適応的な努力の維持ができるといえる。

以上に述べた、動機づけ、自己効力感、未来展望の要因の関連についての研究も多く行われている。自己効力感は動機づけに影響すること(金・嶋田・坂野, 1998)や、未来展望が動機づけに影響すること(富山, 2010)、さらに自己効力感が高ければ未来展望が高くなること(富安, 1997)や、自己効力感の高さが困難な課題に対する取り組みに影響を与えること(Loche & Latheman, 2002)が明らかとなっており、内的要因は複雑に影響しあっていると見える。

また、大学生活における不安に対して、ソーシャルサポートの有効性(服部・木村・首藤・馬場・坂井, 2010)や、課題の解決のためにソーシャルサポートを求めること(山本・近藤, 2015)が示されている。ソーシャルサポートとは、「特定個人が、特定の時点で、彼/彼女と関係を有している他者から得ている、有形/無形の諸種の援助(南・稲葉・浦, 1988)」と定義されていることから、ソーシャルサポートは大学生活で生じる様々な不安や悩みといった課題を解決するための、外的な要因といえる。また、福岡(2008)によると、ソーシャルサポートによって自己効力感が高まると、動機づけが高まり、適応的な対処を生起させることを明らかにした。また、ソーシャルサポートは時間的展望を高めることが明らかとなっている(白井, 2006)。以上より、外的に与えられるソーシャルサポートが、内的な心理的要因に影響を与え、解決行動の生起・維持につながるといえる。

以上より、困難な課題に対する解決努力の維持には、複数の内的要因や外的要因であるソーシャルサポートが複雑に影響しあっていると考えられる。しかし、複数の概念を統合した包括的な努力維持プロセスについての研究は行われていない。課題に対する努力維持について、外的に得られるソーシャルサポートと、それによって高められる内的要因である、動機づけ、自己効力感、未来展望と、動機づけとの交互作用のある困難度認知を、一つの研究の枠組みの中で検討することで、実生活により近い努力維持プロセスを明らかにすることにつながる。そこで本研究では、大学生活の中で生じる解決の困難な課題を『困難課題』、困難課題を解決するために行われる適応的な対処努力を『努力』とし、困難課題解決のための努力維持の統合的な心理的プロセスを明らかにすることを目的1とする。先述した先行研究より、ソーシャルサポートは自己効力感と未来展望を介して動機づけを高め、努力維持を促進すること、自己効力感と未来展望を高めて動機づけを高めることと、努力行為に直接影響すること、困難度は動機づけとの交互作用によって努力に影響すること、を踏まえ仮説モデルとして Figure 1 を設定する。

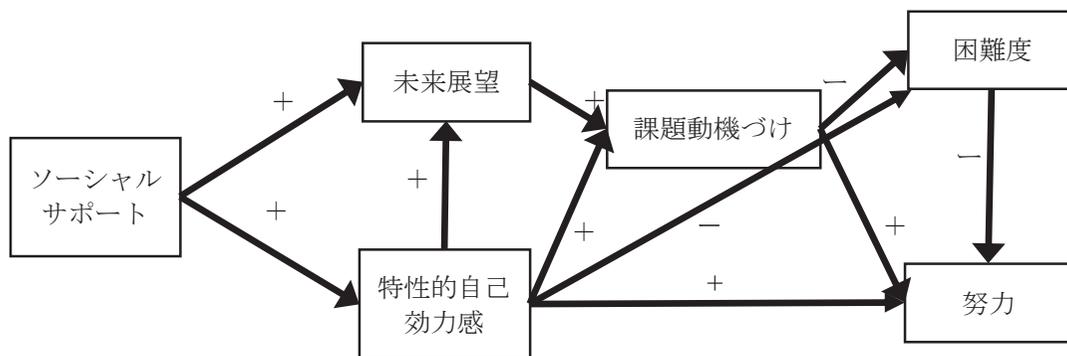


Figure 1. 困難課題に対する解決努力維持の心理プロセス (仮説モデル)

また、日本学生支援機構 (2007) より、大学院生を含む大学生には学年進行に伴った個別の課題とニーズがあることが明らかとなっている。そして、直面している課題の質が異なることは、それに対処する心理的プロセスも異なると考えられる。そこで、学年ごとの努力維持モデルを作成することを目的2とする。

方法

対象 A大学に通う、大学生・大学院生 474名を対象とした。このうち、回答に欠損のあった75名を除く、399名を分析対象とした (年齢範囲 18歳～43歳、平均年齢 20.78歳、標準偏差=3.874)。学年の内訳は、1年生 96名、2年生 95名、3年生 89名、4年生 69名、大学院生 50名であった。

調査方法 無記名の質問紙調査を縁故法で行った。

調査時期 2016年11月から12月にかけて実施した。

質問紙

フェイスシート 性別、学校区分、学年、年齢、所属を回答項目とした。

ソーシャルサポート 片受・大貫 (2014) が作成した大学生用ソーシャルサポート尺度を用いた。和田 (1989) によると、ソーシャルサポートは機能によって5つに分類でき、片受・大貫 (2014) が作成した尺度は、大学生の知覚されたソーシャルサポートについて、『評価的サポート』10項目、『情報・道具的サポート』7項目、『情緒・所属的サポート』6項目の合計23項目を用いて、5つの機能を3因子で測定できる。各質問項目について、「1: 全く当てはまらない」～「4: よくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

特性的自己効力感 成田ほか (1995) が作成した特性的自己効力感尺度を用いた。1因子、23項目で構成されている。それぞれの項目について、「1: そう思わない」～「5: そう思う」の5件法で回答を求めた。

未来展望 白井 (1994; 1997) が作成した時間的展望体験尺度のうち、大石・岡本 (2009) より抽出された未来志向性因子の8項目を用いた。それぞれの項目について、「1: あてはまらない」～「5:

あてはまる」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど未来に関する時間的展望が肯定的に持っていることを指す。

困難課題の想起 直面した困難課題をどのようにとらえているかを明らかにするために、困難課題を想起させ、より具体的にするためにその内容の回答を求めた。教示は、「あなたが最近経験した、解決に多大な努力がいたと感じた悩み又は課題の中で、何とか解決できたものを一つ書いて下さい。もしくは、現在経験している、解決に多大な努力がいたと感じる悩みもしくは課題の中で、大変ではあるものの解決のために取り組み続けているものを一つ書いて下さい。」とした。また、その経験時期を「過去／現在」の選択肢から、その内容分類を「学業／人間関係／将来／家庭／その他」の選択肢の中からの回答を求めた。さらに、主観的困難度について、10段階での回答を求めた。得点が高いほど、課題に対する主観的な困難度が高いことを指す。

課題動機づけ 市村ほか(2016)が使用した課題動機づけ尺度を本研究に合う形で修正して使用した。課題に対する動機づけを測定するもので、『課題価値』4項目、『結果期待』6項目、『内発的動機づけ』5項目、『有能感』3項目の、4因子18項目であった。それぞれの項目について、「1：そう思わない」～「5：そう思う」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど課題に対する動機づけが高いことを指す。

努力度 困難課題について、参加者自身がどれほど努力できたと感じているかを明らかにするために、主観的な努力度を10段階で回答を求めた。得点が高いほど、困難課題に対する主観的な努力度が高いことを指す。

倫理的配慮

調査への回答は任意であり回答の途中で回答をやめてもよいこと、調査で得られたデータについては統計的に処理をし、個人が特定できないようにすること、データの管理は厳重に行われること、回答をもって調査協力への同意とみなすこと、を質問紙表紙に明記した。また、情報処理については、情報の暗号化を施し、パスワードを設定し、情報処理を行うコンピュータは、OSのアップデートを行いウイルス対策の施されたものを使用した。記録媒体を接続する際は、コンピュータのLANケーブルを抜く、無線LAN機能を停止する、機内モードに設定するなどにより、意図しないインターネット接続を防止した。収集した情報、およびその処理結果を保存するUSBメモリについては、万一の紛失や盗難に備えて、鍵付きロッカーのある管理部屋(A821：責任教員；服巻豊)にて慎重に管理し、極力学外には持ち出さないようにした。本調査の実施については、広島大学教育学研究科倫理審査委員会の承認を受けた。

結果

相関分析

各尺度の α 係数を算出したところ、ソーシャルサポート尺度は $\alpha=.946$ 、特性的自己効力感尺度は $\alpha=.827$ 、未来展望尺度は $\alpha=.850$ 、課題動機づけ尺度は $\alpha=.915$ であった。また、各項目について検討を行ったところ、 α 係数を大きく下げている項目は見られなかった。そのため、全ての項目を採

用し、各尺度の尺度得点を算出した。

ソーシャルサポート、特性的自己効力感、未来展望、課題動機づけが、課題の認知である困難度と、その課題に対する取り組みである努力度に対してどのように影響を及ぼすかを明らかにするために相関分析を行った (Table 1)。ソーシャルサポートは、特性的自己効力感と未来展望、課題動機づけとの間に弱い正の相関があった。特性的自己効力感は、未来展望との間に中程度の正の相関があり、課題動機づけとの間に弱い正の相関があった。未来展望は、課題動機づけとの間に弱い正の相関があった。課題動機づけは困難度との間に弱い負の相関があった。困難度は努力との間に弱い正の相関があった。

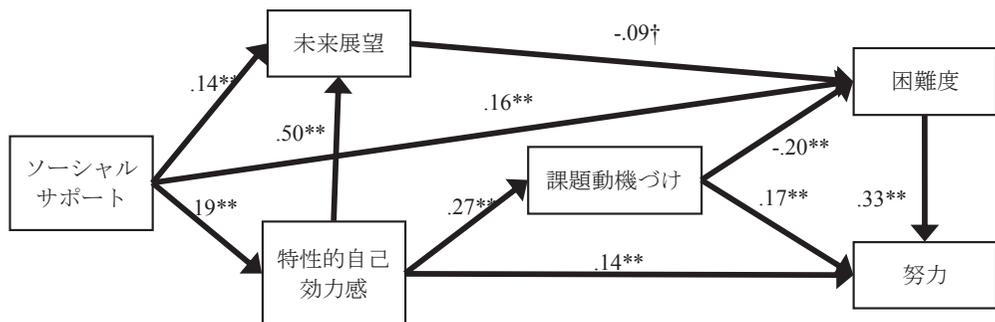
Table 1
各学年の尺度の記述統計と相関分析の結果

	M	SD	1	2	3	4	5	6
1 ソーシャルサポート	78.013	10.725	1.000					
2 特性的自己効力感	69.940	11.026	.194 **	1.000				
3 未来展望	25.419	6.402	.238 **	.525 **	1.000			
4 課題動機づけ	65.674	12.415	.181 **	.267 **	.249 **	1.000		
5 困難度	6.960	2.108	.098 *	-.125 *	-.108 *	-.200 **	1.000	
6 努力	6.466	2.279	.045	.147 **	.104 *	.143 **	.275 **	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

努力維持モデルの検討

想定していたモデルについて最尤法を用いた共分散構造分析を行った (Figure 2)。モデルの適合度は $N=399$, $CFI=.960$, $RMSEA=.074$ であり、適合度は十分であるといえる。得られた努力維持モデルの結果について、パス係数の有意確立が 10%未満のものについて述べる。ソーシャルサポートは、特性的自己効力感、困難度、未来展望へ正の影響を与えていた (すべて $p < .01$)。特性的自己効力感は、未来展望、課題動機づけ、努力へ正の影響を与えていた (すべて $p < .01$)。未来展望は、困難度に負の影響を与えていた ($p < .10$)。課題動機づけは、困難度に負の影響を、努力に正の影響を与えていた (すべて $p < .01$)。困難度は努力に正の影響を与えていた ($p < .01$)。



** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

$CFI=.960$, $RMSEA=.074$

Figure 2. 全体を対象とした努力維持モデル

複数の要因間で、有意な直接のパスと他の要因を介した有意なパスが両方認められたため、媒介分析を行ない、各要因が媒介要因として機能しているかを検討した。本研究においては、サンプル数が399であったため、Aroian法を採用した。結果をTable 2に示す。

まず、ソーシャルサポートを独立変数、特性的自己効力感を媒介変数、未来展望を従属変数とした媒介分析を行った。その結果、標準化直接効果は $\beta=.238$ ($p<.01$) で標準化間接効果は $\beta=.141$ ($p<.01$) であり、有意だった ($z=3.719, p<.01$)。直接効果も間接効果も共に見られたため、特性的自己効力感とはソーシャルサポートと未来展望を部分媒介しているといえる。ソーシャルサポートを独立変数、未来展望を媒介変数、困難度を従属変数とした媒介分析を行った結果、標準化直接効果は $\beta=.098$ ($p<.05$) で標準化間接効果は $\beta=.132$ ($p<.01$) であり、有意だった ($z=-2.350, p<.05$)。直接効果も間接効果も共に見られたため、未来展望は特性的自己効力感と課題動機づけを部分媒介しているといえる。特性的自己効力感を独立変数、課題動機づけを媒介変数、努力を従属変数とした媒介分析を行った結果、標準化直接効果は $\beta=.147$ ($p<.01$) で標準化間接効果は $\beta=.117$, ($p<.05$) であり、有意だった ($z=1.995, p<.05$)。直接効果も間接効果も共に見られたため、課題動機づけは特性的自己効力感と努力を部分媒介しているといえる。最後に、課題動機づけを独立変数、困難度を媒介変数、努力を従属変数とした媒介分析を行った。その結果、標準化直接効果は $\beta=.143$ ($p<.01$) で標準化間接効果は $\beta=.206$ ($p<.01$) であり、有意だった ($z=-3.428, p<.01$)。直接効果も間接効果も共に見られたため、困難度は課題動機づけと努力を部分媒介しているといえる。

Table 2
全体モデル媒介分析結果

独立変数	媒介変数	従属変数	直接効果	間接効果	Z値
ソーシャルサポート	特性的自己効力感	未来展望	.238**	.141**	3.719**
ソーシャルサポート	未来展望	困難度	.098*	.132**	-2.350*
特性的自己効力感	課題動機づけ	努力	.147**	.117*	1.995*
課題動機づけ	困難度	努力	.143**	.206**	-3.428**

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

学年ごとの検討

学年分類は、1年、2年、3年、4年、大学院生とし、学年ごとの努力維持の要因を検討するために、ソーシャルサポート、特性的自己効力感、未来展望、課題動機づけの尺度得点を使用して相関分析を行った (Table 3)。

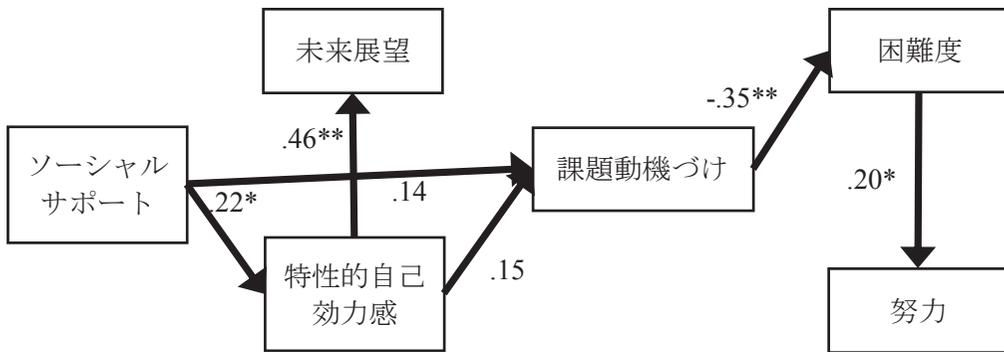
Table 3
各学年の尺度の記述統計と相関分析の結果

	M	SD	1	2	3	4	5	6
1年生 (N=96)								
1 ソーシャルサポート	77.292	11.684	1.000					
2 特性的自己効力感	68.771	11.498	.219 *	1.000				
3 未来展望	25.458	7.161	.211 *	.455 **	1.000			
4 課題動機づけ	65.667	11.946	.171 †	.179 †	.112	1.000		
5 困難度	6.958	2.181	.142	-.093	.016	-.353 **	1.000	
6 努力	6.188	2.296	.019	.207 *	.092	.118	.203 *	1.000
2年生 (N=95)								
1 ソーシャルサポート	79.358	11.020	1.000					
2 特性的自己効力感	70.347	11.412	.335 **	1.000				
3 未来展望	26.200	6.231	.269 **	.569 **	1.000			
4 課題動機づけ	66.368	13.991	.234 *	.310 **	.289 **	1.000		
5 困難度	6.968	1.992	.013	-.189 †	-.081	-.092	1.000	
6 努力	6.263	2.237	.132	.101	.168	.174 †	.315 **	1.000
3年生 (N=89)								
1 ソーシャルサポート	78.483	11.195	1.000					
2 特性的自己効力感	69.629	10.238	.084	1.000				
3 未来展望	24.247	6.113	.184 †	.468 **	1.000			
4 課題動機づけ	66.022	12.530	.155	.166	.345 **	1.000		
5 困難度	6.697	2.288	.095	-.205 †	-.305 **	-.218 *	1.000	
6 努力	6.236	2.426	-.013	.063	.060	.179 †	.187 †	1.000
4年生 (N=69)								
1 ソーシャルサポート	76.145	9.452	1.000					
2 特性的自己効力感	69.275	10.015	.088	1.000				
3 未来展望	24.942	5.831	.130	.657 **	1.000			
4 課題動機づけ	64.232	10.065	.151	.249 *	.284 *	1.000		
5 困難度	7.275	1.932	.044	.027	-.177	-.223 †	1.000	
6 努力	6.826	2.183	.077	.094	.049	.006	.318 **	1.000
大学院生 (N=50)								
1 ソーシャルサポート	78.580	8.800	1.000					
2 特性的自己効力感	72.880	11.883	.132	1.000				
3 未来展望	26.600	6.266	.495 **	.531 **	1.000			
4 課題動機づけ	65.740	13.158	.137	.509 **	.268 †	1.000		
5 困難度	6.980	2.104	.325 *	-.111	-.030	-.063	1.000	
6 努力	7.300	1.992	.057	.252 †	.124	.275 †	.493 **	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

学年ごとの相関分析により明らかとなった相関関係を参考に、共分散構造分析を行った。

1年生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 3)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(9) = 16.847$; $p > .05$; CFI=.846; RMSEA=.095)。

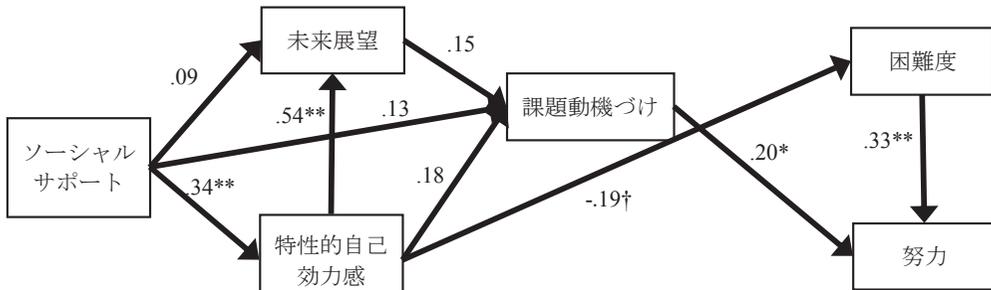


** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=.846, RMSEA=.095

Figure 3. 1年生努力維持モデル

2年生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 4)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(6) = 3.612$; $p > .10$; CFI=1.000; RMSEA=.000)。

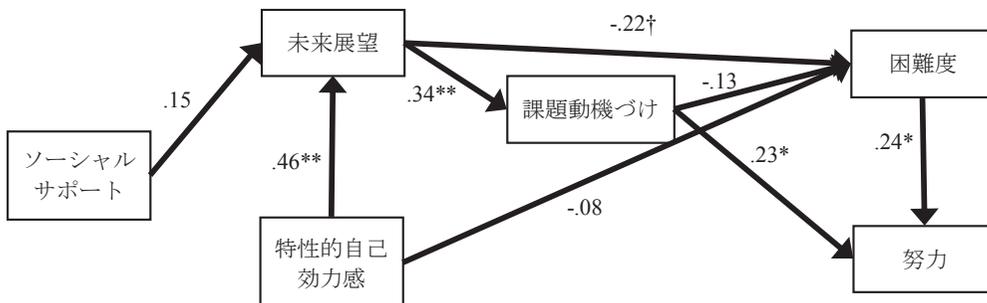


** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=1.000, RMSEA=.000

Figure 4. 2年生努力維持モデル

3年生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 5)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(6) = 5.094$; $p > .10$; CFI=1.000; RMSEA=.000)。

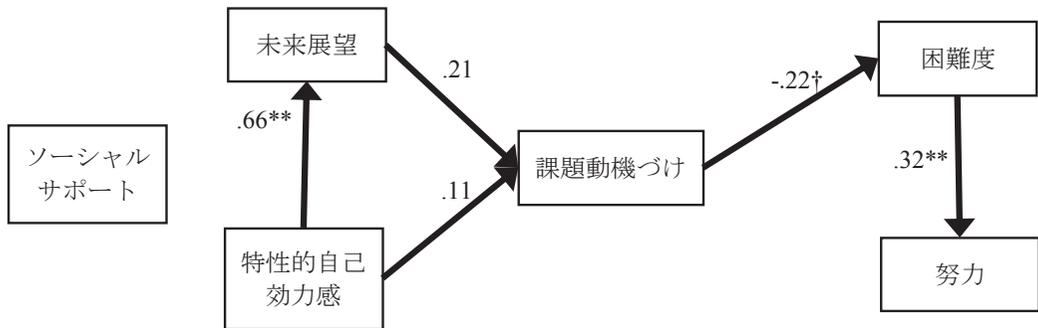


** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=1.000, RMSEA=.000

Figure 5. 3年生努力維持モデル

4年生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 6)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(9) = 7.800$; $p > .10$; CFI=1.000; RMSEA=.000)。

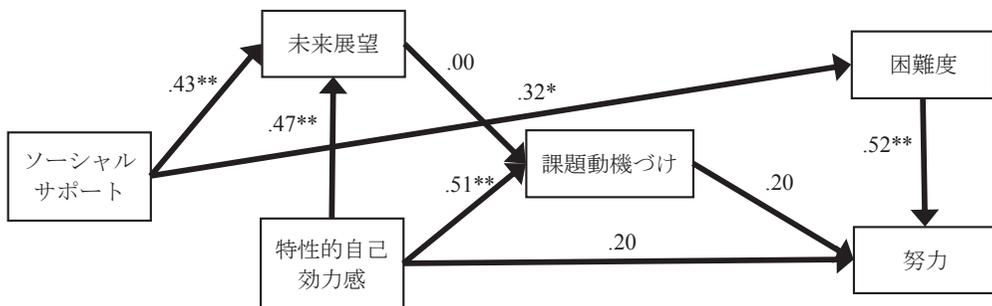


** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=1.000, RMSEA=.000

Figure 6. 4年生努力維持モデル

大学院生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 7)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(6) = 6.730$; $p > .10$; CFI=.991; RMSEA=.049)。



** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=.991, RMSEA=.049

Figure 7. 大学院生努力維持モデル

考察

本研究の目的は、大学生活の中で生じる困難課題に対する努力維持の統合的な心理的プロセスについて、仮説モデルに基づいて検討を行うことと、学年ごとの努力維持モデルを作成することであった。

困難課題に対する努力維持のプロセス

困難課題に対する努力維持のプロセスについて、想定していたモデルと相関分析の結果を参考に作成されたモデルについて、良好な適合度が得られた。モデルより、直接努力に影響を与える要因は、パス係数の強さの順に困難度、課題動機づけ、特性的自己効力感であることが明らかとなった。また、媒介分析の結果から、ソーシャルサポートは特性的自己効力感、未来展望を少なくとも媒介し、課題動機づけや困難度へと影響し、そして困難度が努力へと影響していることも明らかとなった。この結果は、ソーシャルサポートが自己効力感を媒介して動機づけに影響するとした先行研究 (福岡, 2008) や、ソーシャルサポートが時間的展望に影響し (白井, 2006)、未来展望は動機づけを高める (當山, 2010) という先行研究の結果に一致する。また、動機づけが高いことが努力の維持

に影響することは、動機づけの定義に従うものと考えられる。さらに、特性的自己効力感は動機づけを介して努力に影響するという結果は、山田・堀・國田・中條 (2009) の研究に一致している。また、直接努力に影響するという結果は、特性的自己効力感の定義に一致する。一方、仮説とは異なり、ソーシャルサポートから困難度に有意な正のパスが引かれた。この結果については、ソーシャルサポートによって困難度が高まったのではなく、周囲のサポートがあることが、困難と感じることに對しても積極的に直面することにつながり、結果的に認知した困難度が高まったと考えられる。

以上より、大学生の困難課題に対する努力維持には、ソーシャルサポート、特性的自己効力感、未来展望、課題動機づけ、困難度すべての要因が関連し、またこれらの要因同士が複雑に影響しあっていることが確認された。つまり、要因のうちのどれかが低くとも、他の要因が高まることで補うことができると考えられる。特に、ソーシャルサポートは、特性的自己効力感、困難度、未来展望に正のパスがあることが確認できた。よって、努力維持につながる内的要因の中で、足りない部分を補えるようなソーシャルサポートが得られると、内的要因が高まり課題解決への努力が維持されるということが示唆された。

学年ごとの検討

大学1年生から大学院生までの努力維持プロセスを比較すると、困難度が努力に与える正の影響は、学年が上がるにつれて大きくなっていった。これは、日本学生支援機構 (2007) より、学年進行に伴って大学生が直面する課題が、社会進出の準備や卒業の準備という、より長期間でより労力の必要なものへと変化していき、より解決困難な課題へと変化していくためと考えられる。

また、大学1年生から3年生の努力維持モデルを比較すると、大学在学中に時間的展望が努力プロセスに及ぼす影響が徐々に大きくなっていく可能性が示唆された。これは、大学在学中に、未来展望が発達することで、未来がより現実的で現在と関連のあるものになっていき、現在の困難課題に対する努力に影響を与えるようになるということを示唆しており、“同じ大学生でも1年生と4年生では時間的展望が大きく異なる”という都筑 (1993) の予想を支持するものである。しかし、4年生のモデルでは未来展望の影響は有意ではなかった。時間的展望とは、Lewin (1951: 猪股訳, 1979) によると「ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体」と定義されており、今回使用した尺度は、未来についてのポジティブな見解が持っているかというものを測定するものであった。4年生という時期は、“卒業に向けた活動が行われる時期”あり (日本学生支援機構, 2007)、就職活動を行うことで自己の将来について深く考え、卒業論文を執筆することで自己と向き合う時期と考えられる。またそれらの課題は同時に解決が困難な課題でもあり、明るい未来の展望を持ちにくい課題とも考えられる。そのため、課題に直面しているときには、取り組んでいる課題についてポジティブな未来展望を持つことができなかつたことが、有意な影響がなかつた要因と考えられる。

大学1年生から4年生のモデルを比較すると、1・2年生では外的要因であるソーシャルサポートが内的要因である特性的自己効力感を高めていたが、3・4年生ではその影響がなかつた。その理由として、今回調査を行った時期は、11月であり大学3年生では就職活動が本格化し、大学4年生で

は卒業研究の活動が本格化する時期であることが考えられる。いずれの活動も将来が決まる重要なイベントであり、困難度も高いと考えられる。さらに、個人での活動が求められるものでもあり、他人とのかかわりが減りやすいと考えられる。そのため、個人での活動による関りの少なさによって、ソーシャルサポート受容感に他の学年との違いがあったと考えられる。

一方で大学院生の努力維持モデルは学年進行の流れとは大きく異なり、ソーシャルサポートと特性的自己効力感の努力維持プロセスへの影響が大きくなるという結果となった。大学院生は、進学によって大学時代とは異なる環境に移るため、研究者として研鑽を積み社会との関連の模索していく必要がある時期であり、様々な研究や対話を通して自己の研究を完成させていくことが求められる時期といえる。そのため、周囲の人々のサポートを必要とすると考えられる。また、特性的自己効力感は動機づけに強く影響していた。これは、これまでの経験によって自分の能力をポジティブに評価できるようになり、自信から課題の意味づけがポジティブになり、努力ができるようになるためと考えられる。

本研究の課題と展望

本研究では、困難課題に対する努力維持の統合的な心理的プロセスを明らかにすることと、学年ごとの努力維持プロセスを明らかとすることを目的とした。結果、ソーシャルサポート、特性的自己効力感、未来展望、動機づけ、困難度の各要因が努力維持に複雑に影響し合っていることが明らかとなった。また、学年ごとのプロセスの特徴を明らかにすることもできた。しかし、本研究の限界として、大学生が直面する困難課題の内容が、努力維持のプロセスにどのように影響するのかということを、明らかにすることはできなかったことが挙げられる。大学生の日常生活で直面する困難課題は複数考えられ、直面する課題が自己の学業に関する事か、他者が存在することで生じる人間関係に関する事かという違いだけでも、解決に必要な心理的要因は異なると考えられる。したがって今後の研究の課題は、困難課題をどのジャンルに分類したかによる、別の視点からの努力維持のプロセスを検討していくこととする。

引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Gist, M. E., & Mitchell, T. R. (1992). Self-efficacy: A theoretical analysis of its determinants and malleability. *Academy of Management Review*, 17, 183-211.
- 畑野 快 (2010). 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性. *教育心理学研究* 58, 404-413.
- 服部正嗣・木村諭史・首藤祐介・馬場史津・坂井 誠 (2010). 大学生活不安とソーシャル・サポートの関連. *日本行動療法学会大会発表論文集*, 63, 372-373.
- 比嘉麻美子・岡本祐子 (2007). 信頼感を基盤とした未来展望形成プロセス. *広島大学心理学研究* 7, 227-243.

- 福岡欣治 (2008). 大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応：自己充實的達成動機の媒介的影響 静岡分化芸術大学研究紀要 8, 69-77.
- 市山賢士郎・上田祥行・楠見 孝 (2016). 課題動機づけにおける困難度情報が課題努力に及ぼす影響 心理学研究, 87 (3), 262-272.
- 磯谷俊二・岡林秀樹 (2012). 大学生の友人関係におけるソーシャルサポートの授受と自我同一性の関連 明星大学心理学年報 30, 7-16.
- 片受 靖・大貫尚子 (2014). 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討－評価的サポートを含む多因子構造の観点から－ 立正大学心理学研究年報, 5, 37-46.
- 勝俣暎史 (1995). 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要 (人文学科) 44, 307-318.
- 金 外叙・嶋田洋徳・坂野雄二 (1998). 慢性疾患患者におけるソーシャルサポートとセルフ・エフィカシーの心理的ストレス軽減効果 心身医学, 38, 317-323.
- Loche, E. A., & Latheman, G. P. (2002). Building a practically useful theory of goal setting motivation: A 35-year odyssey. *American Psychologist*, 57, 705-717.
- Lewin, K. (1951). *Field theory and social science*. New York: HarperCollins Publishers.
- (レヴィン, K. 猪股佐登留 (訳) (1979). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 南 隆男・稲葉昭英・浦 光博 (1988). ソーシャルサポート研究の活性化に向けて－若干の資料－ 哲学, 85, 151-184.
- 文部科学省 (2015). 平成 27 年度学校基本調査 (確定値) の公表について 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/01/18/1365622_1_1.pdf (2015 年 12 月 25 日)
- 成田健一・下中順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討－生涯発達の利用の可能性を探る－ 教育心理学研究, 43 (3), 306-314.
- 日本学生支援機構 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について－「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・共同」－ 日本学生支援機構 Retrieved from <http://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/jyujitsuhosaku.html> (2016 年 10 月 25 日)
- 日本学生支援機構 (2015). 平成 26 年度学生生活調査 日本学生支援機構 Retrieved from https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/2014.html (2016 年 10 月 27 日)
- 大石郁美・岡本祐子 (2009). 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連 広島大学大学院心理臨床研究教育センター紀要, 8, 43-53.
- 坂野雄二・東條光彦 (1986). 一般性セルフエフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, 12, 73-82.
- 佐藤文子・志村結美・深谷純子 (2004). 時間的展望における自己認識と生活実践 千葉大学教育学部研究紀要 52, 103-108.
- 白井利明 (2006). 現代社会における青年期の不安と自己－進学競争のもとでの時間的展望－ 心理科学 26 (1), 13-25.

- 都筑 学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究 41, 40-48.
- 富安浩樹 (1997). 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, 45, 329-336.
- 當山明華 (2010). 高校生の学習動機づけと将来展望に関する研究 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58 (2), 329-340.
- 山田恭子・堀 匡・國田祥子・中條和光 (2009). 大学生の学習方略使用と達成動機, 自己効力感の関係 広島大学心理学研究 9, 37-51.
- 山本純子・近藤純子 (2015). 看護系大学の新生が求めるソーシャル・サポートの特徴ー社会的スキルとの関連からー 千里金蘭大学紀要 12, 81-88.
- 和田 実 (1989) . ソーシャル・サポート (Social Support) に関する一研究 東京学芸大学紀要1部門 40, 23-38

ポジティブ・ステレオタイプのもたらすネガティブな効果

—Siy & Cheryan (2016) の追試—

森永康子・船田紗緒里・小川 葵・野中りょう・矢吹 圭・董 星宇

Negative effects of positive stereotypes:
Reconsidering the experiments by Siy and Cheryan (2016)

Yasuko Morinaga, Saori Funada, Aoi Ogawa, Ryo Nonaka, Kei Yabuki, and XingYu Dong

In study 1, based on the findings of Siy and Cheryan (2016), we investigated whether female targets who heard a positive stereotype of women would perceive the stereotype holder as a prejudiced person and whether two factors, a sense of depersonalization and belief of being negatively stereotyped, would mediate the process. In Study 2, we investigated the moderating effect of benevolent sexism on participant attitudes. Using a sample of female university students in Japan, we found that hearing a positive stereotype induced a sense of depersonalization as well as the perception of being a target of prejudice. However, we did not find any well-explained mediating or moderating effects. Further research should investigate the negative effects of positive stereotypes specifying the gender of a stereotype holder (i.e., a member of out-group or in-group) and measuring the perceived traits (e.g. warmth) of the stereotype holder.

キーワード : positive stereotypes, prejudice, depersonalization, negative stereotypes

問 題

偏見や差別に結びつくものとして、集団に対するネガティブ・ステレオタイプが取り上げられやすい。しかしながら、近年、ポジティブ・ステレオタイプのもたらすネガティブな効果が指摘されるようになった (Czopp, Kay, & Cheryan, 2015 参照)。例えば、アジア系女性が「アジア系は数学ができる」というポジティブ・ステレオタイプに接触することで、その後の数学の試験の成績が低下したり (Cheryan & Bodenhausen, 2000)、女性に当てはまるとされるポジティブ・ステレオタイプに接触することで、男女格差を肯定するような態度が女性参加者の中で強くなったり (Jost & Kay, 2005) することが報告されている。また、ステレオタイプを向けられたターゲットが、ポジティブ・ステ

レオタイプを表出する人物をそれほど好意的に見なさないことも報告されている。例えば、女性に対して好意的性差別態度 (Benevolent sexism; Glick & Fiske, 1996) を持っている男性は、そうした態度を持っていない男性に比べ、女性から好ましく評価されないこと (Kilianski & Rudman, 1998) や、自分の所属する集団に関するポジティブ・ステレオタイプを表出したヨーロッパ系アメリカ人に対して、アフリカ系アメリカ人がネガティブな評価を行うこと (Czopp, 2008) などが示されている。

なぜポジティブ・ステレオタイプはターゲットから好意的に受け取られないのだろうか。Siy & Cheryan (2013; 2016) は、ポジティブ・ステレオタイプの表出が、そのステレオタイプを向けられた個人にとって、自分の所属する集団に対するネガティブなもの (negativity) の存在を示すシグナルになると主張した。それは、ポジティブ・ステレオタイプがそのターゲットに、独自性を持った個人ではなく集団の成員としてみられているという感覚つまり脱個人化の感覚 (depersonalization) を生じさせるためであるという (Siy & Cheryan, 2013)。Siy & Cheryan (2016) は、この仮説について、女性やアジア系アメリカ人のポジティブ・ステレオタイプを用いて検討を行った。その結果、ポジティブ・ステレオタイプの表出がターゲットの脱個人化の感覚を媒介して、表出者がネガティブ・ステレオタイプ信念も持っていることを知覚させること、さらに、ポジティブ・ステレオタイプがネガティブ・ステレオタイプを喚起させることで、表出者が差別的であるという知覚を生じさせることを示した。

本研究では、この Siy & Cheryan (2016) の追試を行うことを目的とする。研究 1 では、女性をターゲットとし、ポジティブ・ステレオタイプの表出者を差別的と見なすかどうか、そして、そのプロセスに脱個人化の感覚やネガティブ・ステレオタイプの知覚が関わっているどうかについて検討する。

ポジティブ・ステレオタイプがターゲットに悪影響を与えることを先に述べたが、好意的性差別もそのターゲットである女性に悪影響を与えることが報告されている (e.g., Becker & Wright, 2011; 森永・坂田・古川・福留, 2017)。しかし、女性自身の持っている好意的性差別態度によって、その影響が異なることも報告されており、女性自身が同じような態度を持っている場合には、他者から受ける好意的性差別の影響を受けにくい (Moya, Glick, Expósito, De Lemus, & Hart, 2007)。このことから好意的性差別態度を強く持っている女性はそうでない女性に比べ、ポジティブ・ステレオタイプのターゲットとなっても表出者を差別的な人物と見なしにくいのではないだろうか。研究 2 では参加者の持っている好意的性差別態度のもたらす影響を検討する。

研究 1

方法

参加者 女子大学生 81 名¹。SNS を利用して、第 2 著者から第 5 著者の知人に協力を求めた。

実験計画 ポジティブ・ステレオタイプの有無の 2 条件を参加者間で設定した。シナリオ固有の反応を防ぐために 2 つのシナリオを作成し、参加者にはいずれかのシナリオを提示した。

¹ 男性を対象にした実験も行ったが、本稿では女性を対象にした結果のみ報告する。

手続き シナリオの提示や従属変数の測定は Google Form を利用し、すべて web 上で行った。画面上でシナリオを提示したあと、ネガティブ・ステレオタイプ知覚、脱個人化の感覚、差別知覚を測定し、最後にポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別の判断を求めた。シナリオのひとつは、大学構内を歩いている女性に対して、ボランティア活動への参加を呼びかけるチラシを配布している人がポジティブ・ステレオタイプを表出するというもの（以下、チラシ・シナリオ）であり、もうひとつは、女性が出席している大学の授業で教授がグループ活動のため学生をグループ分けし、その際に教授がポジティブ・ステレオタイプを表出するというもの（以下、グループ・シナリオ）である。参加者には登場人物の女性になったつもりでシナリオを読むように教示した。ポジティブ・ステレオタイプ有条件には、チラシ・シナリオで「女性は、人の世話が得意なので」、グループ・シナリオで「女性は協調性があるから」という発言が含まれていた。ポジティブ・ステレオタイプ無条件ではこれらの言葉がなかった（シナリオは付録 A 参照）。

質問項目 ネガティブ・ステレオタイプ知覚は、ポジティブ・ステレオタイプの表出者（チラシ配布者あるいは教授）が登場人物の女性（参加者）のことをどのように思っているかについて、女性のステレオタイプである「おせっかい」「意見のない」「依存的な」「弱々しい」の 4 項目によって測定した（沼崎・小野・高林・石井, 2006; $\alpha = .639$ ）²。また、ダミーとして MHF スケール（伊藤, 1978）の人間性項目である「誠実な」「想像的な」「明るい」「健康的な」「幸せ」を用い、これらの項目をランダムに提示した。回答は 5 件法で求めた（1 = 全く思っていない, 5 = とても思っている）。脱個人化の感覚は、Siy & Cheryan (2013) を参考に、「自分の性別だけで判断された気がした」「他の女性と一緒にという気がした」「個性を無視されたような気がした」の 3 項目を作成した（ $\alpha = .827$ ）。差別の知覚は「チラシを配っている人／グループ分けをした教授は差別的な気がした」の 1 項目を作成した。以上の 4 項目の回答は 5 件法で求めた（1 = 全く当てはまらない, 5 = とても当てはまる）。次に、ポジティブ・ステレオタイプを表出した人物の性別（1. 男性, 2. 女性, 3. わからない）を尋ねた。

結 果³

ネガティブ・ステレオタイプ知覚を測定する 4 項目、脱個人化の感覚を測定する 3 項目の平均値を算出し、それぞれポジティブ・ステレオタイプ得点、脱個人化得点とした。各変数についての条件ごとの記述統計を Table 1 に示した。

シナリオの差異 シナリオによる差異を検討するために、性別判断以外の 3 つの従属変数のそれぞれについて、2（ポジティブ・ステレオタイプの有無）× 2（シナリオ）の分散分析を行ったところ、ネガティブ・ステレオタイプ得点において交互作用（ $F(1,77) = 6.271, p = .014, \eta_p^2 = .075$ ）、脱個人化得点と差別知覚得点においてシナリオの主効果（それぞれ、 $F(1,77) = 8.855, p = .004, \eta_p^2 = .103$; $F(1,77) = 7.232, p = .009, \eta_p^2 = .086$ ）が有意であったため、シナリオごとに分析を行った。

² ポジティブ・ステレオタイプを測定する項目として、「おしゃべりな」も用いたが、信頼性係数を算出する過程で、想定していた方向と逆であることが示されたため、分析には用いなかった。

³ 本研究の分析は、HAD16_0056（清水, 2016）を用いて行なった。

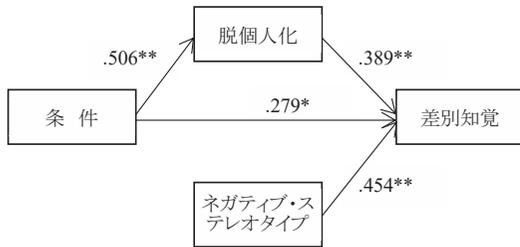


Figure 1a. 構造方程式モデリングによる分析結果 (研究1 チラシ・シナリオ)

注) 条件は0= ポジティブ・ステレオタイプ無, 1= 有。飽和モデル。有意なパスのみ示した。** $p < .01$ * $p < .05$

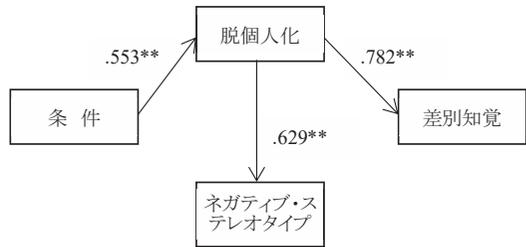


Figure 1b. 構造方程式モデリングによる分析結果 (研究1 グループ・シナリオ)

注) 条件は0= ポジティブ・ステレオタイプ無, 1= 有。飽和モデル。有意なパスのみ示した。** $p < .01$

性別の知覚 チラシ・シナリオでは半数弱の参加者がポジティブ・ステレオタイプ表出者を女性と判断していたが、グループ・シナリオではほとんどの参加者がポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性と判断していた (Table 1)。

ネガティブ・ステレオタイプ知覚 それぞれのシナリオについて、ポジティブ・ステレオタイプの有無による平均値の差の検定を行ったところ、チラシ・シナリオでは有意な差は見られなかった ($p = .540, d = .190$) が、グループ・シナリオではポジティブ・ステレオタイプ有条件の方が無条件よりもネガティブ・ステレオタイプが高く知覚されていた ($t(38) = 2.820, p = .008, d = .879$)。

脱個人化の感覚 それぞれのシナリオについて、ポジティブ・ステレオタイプの有無による平均値の差の検定を行ったところ、いずれのシナリオでも有意な差が見られ (チラシ・シナリオ $t(39) = 3.661, p = .001, d = 1.124$; グループ・シナリオ $t(38) = 4.089, p < .001, d = 1.274$)、ポジティブ・ステレオタイプ有条件の方が無条件よりも脱個人化の感覚が高かった。

差別の知覚 それぞれのシナリオについて、ポジティブ・ステレオタイプの有無による平均値の差の検定を行ったところ、チラシ・シナリオでは有意な差 ($t(39) = 2.918, p = .005, d = .915$)、グル

Table 1
各変数の記述統計

	研究 1				研究 2	
	チラシ・シナリオ		グループ・シナリオ		グループ・シナリオ	
	ポジティブ・ステレオタイプ 有条件 ($n = 19$)	無条件 ($n = 22$)	ポジティブ・ステレオタイプ 有条件 ($n = 18$)	無条件 ($n = 22$)	ポジティブ・ステレオタイプ 有条件 ($n = 18$)	無条件 ($n = 17$)
ネガティブ・ ステレオタイプ知覚	2.398 (0.653)	2.526 (0.676)	2.792 (0.884)	2.148 (0.549)	2.542 (0.632)	2.397 (0.650)
脱個人化の感覚	2.788 (0.929)	1.825 (0.723)	3.556 (1.226)	2.273 (0.739)	3.815 (0.551)	1.863 (0.613)
差別知覚	2.909 (1.411)	1.737 (1.046)	3.389 (1.335)	2.682 (0.894)	3.944 (0.873)	1.706 (0.849)
表出者の性別	45.5/45.5	21.1/42.1	100/0	86.4/9.1	55.6/27.8	64.7/11.8

注) ()は標準偏差。表出者の性別は、/の左がポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性と判断した参加者の割合であり、/の右が女性と判断した参加者の割合。わからないという回答を加えていないため、合計が100にならない。

ープ・シナリオでは有意な傾向 ($t(38)=1.999, p=.053, d=.623$) が見られ、ポジティブ・ステレオタイプ有条件の方が無条件よりも差別知覚が高かった。

構造方程式モデリングによるプロセスの分析⁴ Siy & Cheryan (2016) は、ポジティブ・ステレオタイプの有無が脱個人化の感覚を介してネガティブ・ステレオタイプ知覚を生じさせるという媒介過程と、ポジティブ・ステレオタイプの有無がネガティブ・ステレオタイプ知覚を介して差別知覚を生じさせるという媒介過程を2つに分けて、それぞれ分析し仮説を検討した。しかし、本研究では、構造方程式モデリングを用いて、ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件に比べ、脱個人化の感覚が高くなり、そのことでネガティブ・ステレオタイプが高く知覚され、最終的に差別の知覚が生じるという一連のプロセスについて検討を行った (Figure 1a, 1b)。その結果、両シナリオとも、ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件に比べ、脱個人化の感覚が高く、そのことで差別知覚が高まることが示された。しかし、脱個人化の感覚がネガティブ・ステレオタイプ知覚を生じさせるというプロセスは、グループ・シナリオにおいてのみ確認された。また、ネガティブ・ステレオタイプが差別知覚をもたらすというプロセスについては、チラシ・シナリオのみで確認された。

考 察

研究1はSiy & Cheryan (2016) の追試を行ったが、構造方程式モデリングによる分析では彼らの結果の再現はできなかった。しかしながら、2つのシナリオともに、ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件よりも脱個人化の感覚が高く喚起されており、それが差別知覚につながっていることが示された。これは、ポジティブ・ステレオタイプのターゲットになることで、自分が個人としてではなく集団として見なされているという感覚が高まること、また、そのことで差別されているという知覚を生じさせることを示すものである。ポジティブ・ステレオタイプ表出者を差別的だと見なすのは、ポジティブ・ステレオタイプを持っている人はネガティブ・ステレオタイプも持っていると思なされるためだというSiy & Cheryan (2016) の主張は支持されなかったが、ポジティブ・ステレオタイプの表出者の評価が低くなるという点については、従来の研究 (e.g. Czopp, 2008) と一致する結果であった。

研 究 2

目 的

ポジティブ・ステレオタイプのターゲットとなっても、ターゲット自身の持っている好意的性差別態度によって、相手を差別的と見なすかどうかは異なると思われる。研究2では、参加者の好意的性差別態度の調整効果を検討する。

方 法

⁴ なお、Siy & Cheryan (2016) と同様の分析を行ったところ、グループ・シナリオでは彼らの結果と一致する方向での結果が得られた (付録B参照)。

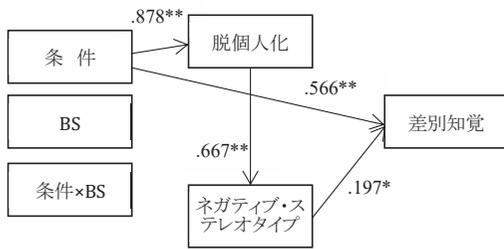


Figure 2a. 好意的性差別態度の調整効果の分析結果 (研究2 全参加者対象)

注) 条件は0= ポジティブ・ステレオタイプ無, 1= 有。BS は好意的性差別態度。飽和モデル。有意なパスのみ示した。 ** $p < .01$ * $p < .05$

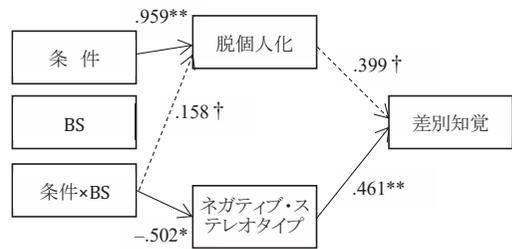


Figure 2b. 好意的性差別態度の調整効果の分析結果 (研究2 表出者を男性と判断した参加者対象)

注) 条件は0= ポジティブ・ステレオタイプ無, 1= 有。BS は好意的性差別態度。飽和モデル。有意なパスのみ示した。 ** $p < .01$ * $p < .05$

参加者 女子大学生 35 名。ポジティブ・ステレオタイプ有条件は 18 名, 無条件は 17 名。

手続き 実験は第一著者が担当する社会心理学の講義時間中に授業の一環として行った。シナリオの提示や従属変数の測定は Google Form を利用し, すべて web 上で行った。シナリオの提示後, 研究1と同様の項目でネガティブ・ステレオタイプ ($\alpha = .546$), 脱個人化の感覚 ($\alpha = .750$), 差別の知覚を尋ねた。その後, フィラー項目 (5 項目) を挟んで, 好意的性差別態度を測定した (「弱い立場の人々に対する思いやりは, 男性よりも女性の方が優れている」など 8 項目 ($\alpha = .750$, 森永・坂田・北梶・大池・福留, 2018)。最後に発言者の性別を尋ねた。なお, 研究2では, 研究1で用いた2つのシナリオのうち, 脱個人化の感覚とネガティブ・ステレオタイプ知覚にポジティブ・ステレオタイプの有無による有意な差が見られたグループ・シナリオのみを用いた。

結果

平均値の比較 脱個人化得点 ($t(33) = 9.919, p < .001, d = 3.278$) と差別知覚得点 ($t(33) = 7.686, p < .001, d = 2.540$) にはポジティブ・ステレオタイプ有条件と無条件で有意な差が見られたが, ネガティブ・ステレオタイプ知覚得点には有意な差が見られなかった ($p = .509, d = .221$; 各変数の記述統計は Table 1)。また, 好意的性差別得点には条件間で有意な差が見られなかった (ポジティブ・ステレオタイプ有条件 $M = 2.396, SD = .594$; 無条件 $M = 2.243, SD = .667; p = .478, d = .237$)。なお, ポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性だと判断した参加者は 5~6 割であった。

好意的性差別態度の調整効果 ネガティブ・ステレオタイプ知覚に条件間で差異が見られなかったが, 好意的性差別態度の調整効果を構造方程式モデリングにより検討した (Figure 2a)。その結果, ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件よりも脱個人化の感覚が高く, それを介してネガティブ・ステレオタイプ知覚が高まり, さらに差別の知覚が高まったことが示された。これは, 研究1の結果とは異なるものの, Siy & Cheryan (2016) の主張にほぼ沿った結果となった。しかしながら, 参加者の持っている好意的性差別態度の効果は見られなかった。

そこで, 補足的ではあるが, 参加者の中で発言者を男性と知覚した者 (21 名; ポジティブ・ステレオタイプ有条件 11 名, 無条件 10 名) を対象に同様の分析を行った (Figure 2b)。その結果, ポジ

ティブ・ステレオタイプの有無と好意的性差別態度の交互作用項からネガティブ・ステレオタイプ知覚へのパスが有意であった。また、ネガティブ・ステレオタイプを高く知覚することによって差別知覚も喚起されていた。しかしながら、脱個人化の感覚からネガティブ・ステレオタイプへのパスは有意ではなかった。

ポジティブ・ステレオタイプ有無と好意的性差別の交互作用の下位検定を行うために、まず、ネガティブ・ステレオタイプ得点を従属変数、ポジティブ・ステレオタイプの有無と好意的性差別態度及びその交互作用を独立変数とした重回帰分析を行なった。有意な交互作用効果が得られた ($b = -1.130, z = -4.424, p < .001$) ため、単純傾斜検定を行なった。その結果、好意的性差別態度低群 ($-1SD$) において、ポジティブ・ステレオタイプ有条件は無条件よりもネガティブ・ステレオタイプを高く知覚していた ($b = 1.028, z = 3.880, p < .001$) が、好意的性差別態度高群 ($+1SD$) においてはそうした効果が見られなかった ($b = -.142, z = -.969, p = .333$)。

考 察

研究2の目的は、参加者の持っている好意的性差別態度の調整効果を検討することであった。参加者全員を対象とした分析では調整効果は見られなかったが、構造方程式モデリングによる分析結果は、研究1とは異なり、ポジティブ・ステレオタイプが脱個人化を引き起こし、そのことでネガティブ・ステレオタイプ知覚が高まり、差別知覚へとつながるという *Siy & Cheryan (2016)* の主張にほぼ沿った形となった。

補足的にポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性と判断した参加者のみを抽出し、好意的性差別態度の強さによるポジティブ・ステレオタイプの効果の差異について検討したところ、好意的性差別態度の弱い参加者はポジティブ・ステレオタイプのターゲットになると、その表出者がネガティブ・ステレオタイプも持っていると感じ、そのことで差別的だと見なす傾向があることが示された。一方、好意的性差別態度の強い参加者においてはポジティブ・ステレオタイプ有無によるネガティブ・ステレオタイプ知覚に差異がなかった。これは、好意的性差別態度を強く持つ女性は、ポジティブ・ステレオタイプのターゲットになっても、表出者を差別的だと思わないという本研究の予測を支持する傾向にあると言える。

なお、研究1では、同じシナリオのポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別を参加者の9割以上が男性だと判断していたのに対して、研究2では5~6割であった。これは、研究2を実施した講義の担当者（第一著者）が女性であったことによるものと考えられる。

総 合 考 察

本研究は、ポジティブ・ステレオタイプの表出によりターゲットから差別的だと知覚されるプロセスを検討した *Siy & Cheryan (2016)* の追試を行なった。研究1と2を通して、ポジティブ・ステレオタイプを表出した個人が、ターゲットとなった女性から差別的だと知覚されることは確かめられた。また、ポジティブ・ステレオタイプのターゲットになることによって脱個人化の感覚が生じることも確認された。しかしながら、ポジティブ・ステレオタイプを表出することがなぜ差別的と

見なされるのか、つまり、ポジティブ・ステレオタイプを持っている人はネガティブ・ステレオタイプも持っている」と知覚されるために、差別的と見なされるというプロセス、さらに、ネガティブ・ステレオタイプの知覚は、個人ではなく集団として見なされるという脱個人化の感覚によって引き起こされるという一連のプロセスについては、Siy & Cheryan (2016) の主張を明確に確認することはできなかった。本研究の結果から示唆されるのは、ポジティブ・ステレオタイプを当てはめられることで差別されているという感覚が生じるのには複数のプロセスがあるという可能性であろう。例えば、本研究では、脱個人化の感覚が直接に差別知覚に結びつく場合とネガティブ・ステレオタイプを介して差別知覚が生じる場合が見られた。また、Hopkins-Doyle, Sutton, Douglas, & Calogero (2019) は、好意的な性差別行為が差別として知覚されにくいのは、行為者がターゲットである女性から温かい特性を持っていると知覚されるためであることを報告している。ポジティブ・ステレオタイプ表出が温かい特性を持った人物によると知覚されれば、差別的であると知覚されにくくなるであろう。今後、ポジティブ・ステレオタイプの効果を検討する際には、このような差別知覚を生起させにくくさせる要因についても考慮する必要があるだろう。

また、本研究では、ポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別をシナリオ中に明記していなかったため、参加者による性別判断を統制できなかった。例えば、グループ・シナリオは研究1と研究2で用いたが、ポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別判断が、両研究で異なっていた。また、研究2ではポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別によって好意的性差別態度の調整効果が異なる可能性が示唆されている。こうしたことから、今後はポジティブ・ステレオタイプ表出者の性別つまり参加者にとって外集団に所属する人物かどうかによる差異についても考慮する必要があるだろう。

また、研究2では好意的差別態度の調整効果を検討したが、ポジティブ・ステレオタイプ表出者を男性と知覚した参加者のみにおいて調整効果が見られる傾向があった。過去の研究では、男性から好意的性差別態度を含む発言を聞いても、女性自身が好意的性差別態度を持っていると、好意的性差別の影響を受けにくいという結果が示されており (Moya et al., 2007), 今後は、差別知覚に影響を与える参加者の個人差要因についても検討する必要があるだろう。

引用文献

- Becker, J. C., & Wright, S. C. (2011). Yet another dark side of chivalry: Benevolent sexism undermines and hostile sexism motivates collective action for social change. *Journal of Personality and Social Psychology, 101*(1), 62-77.
- Cheryan, S., & Bodenhausen, G. V. (2000). When positive stereotypes threaten intellectual performance: The psychological hazards of “model minority” status. *Psychological Science, 11*(5), 399-402.
- Czopp, A. M. (2008). When is a compliment not a compliment? Evaluating expressions of positive stereotypes. *Journal of Experimental Social Psychology, 44*(2), 413-420.
- Czopp, A. M., Kay, A. C., & Cheryan, S. (2015). Positive stereotypes are pervasive and powerful. *Perspectives on Psychological Science, 10*(4), 451-463.

- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70(3), 491-512.
- Hopkins-Doyle, A., Sutton, R. M., Douglas, K. M., & Calogero, R. M. (2019). Flattering to deceive: Why people misunderstand benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 116(2), 167-192.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26(1), 1-11.
- Kilianski, S. E., & Rudman, L. A. (1998). Wanting it both ways: Do women approve of benevolent sexism?. *Sex Roles*, 39(5-6), 333-352.
- 森永康子・坂田桐子・古川善也・福留広大 (2017). 女子中高生の数学に対する意欲とステレオタイプ 教育心理学研究, 65(3), 375-387.
- 森永康子・坂田桐子・北梶陽子・大池真知子・福留広大 (2018). 好意的性差別尺度日本語短縮版の作成—働く女性にする好意的差別を考える— 日本心理学会第 82 回大会
- Moya, M., Glick, P., Expósito, F., De Lemus, S., & Hart, J. (2007). It's for your own good: Benevolent sexism and women's reactions to protectively justified restrictions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33(10), 1421-1434.
- 沼崎 誠・小野 滋・高林久美子・石井国雄 (2006). Sequential priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の予備的検討 首都大学東京・東京都立大学人文学報, 369, 21-52.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Siy, J. O., & Cheryan, S. (2013). When compliments fail to flatter: American individualism and responses to positive stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 104(1), 87-102.
- Siy, J. O., & Cheryan, S. (2016). Prejudice masquerading as praise: The negative echo of positive stereotypes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 42(7), 941-954.

付 記

本論文は、2018 年度に広島大学教育学部で開講された心理学課題演習において、第 1 著者の指導により第 2 著者から第 6 著者が実施した研究をもとに執筆したものである。研究の一部は第 2 著者から第 5 著者により中国四国心理学会第 74 回大会学部生研究発表会において報告された。また、本研究は JSPS 科研費 JP18K03007 の助成を受けた。

付録 A

本研究で用いたシナリオ (ポジティブ・ステレオタイプ無条件では、下線部を削除した)

チラシ・シナリオ: 大学の中を歩いているところを想像してください。あなたが歩いていると、チラシを配っている人がいました。あなたが近くを通りかかると、その人はあなたの方を向いて、チラシを手渡ししながら言いました。「子ども病院のボランティア活動に参加してくれる学生を募集しています。女性は人の世話が得意なので、あなたに是非参加してほしいです」。

グループ・シナリオ：大学の授業でグループ活動をするために、少人数のグループに振り分けられるところを想像してください。教授がグループに振り分けた結果、あなたとあなたのグループのメンバーは全員、初対面でした。グループ編成を伝えた後に、教授があなたに言いました。「女性は協調性がありますから、初対面の人たちでも大丈夫でしょう」。

付録 B

研究 1 のグループ・シナリオについて、Siy & Cheryan (2016) と同様の媒介分析を行った結果。

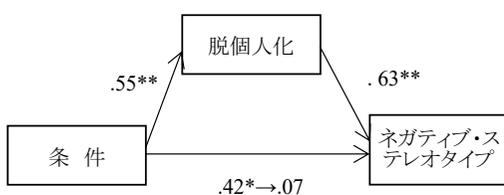


Figure 3a. 脱個人化の感覚の媒介効果 (研究 1 グループ・シナリオ)

注) 条件は 0 = ポジティブ・ステレオタイプ無, 1 = 有。間接効果は Sobel $Z = 2.773, p = .006, 95\%CI = [0.20, 1.31]$ ** $p < .01$ * $p < .05$

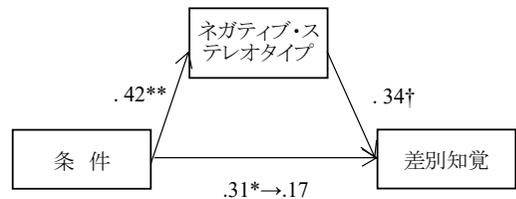


Figure 3b. ネガティブ・ステレオタイプの媒介効果 (研究 1 グループ・シナリオ)

注) 条件は 0 = ポジティブ・ステレオタイプ無, 1 = 有。間接効果は Sobel $Z = 1.566, p = .117, 90\%CI = [0.02, 0.82]$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

広島大学心理学研究 第18号

平成 31 年 3 月 21 日 印刷

平成 31 年 3 月 31 日 発行

編集 広島大学心理学研究編集委員会

編集委員長 湯澤正通

編集委員 森永康子 尾形明子 清水寿代

発行 広島大学大学院教育学研究科心理学講座

印刷所 (株)ニシキプリント

〒733-3833 広島市西区商工センター 7 丁目 5 番 33 号

発行所 広島大学大学院教育学研究科心理学講座

〒739-8524 東広島市鏡山 1 丁目 1 番 1 号

